

Dies irae —credo
quia absurdum—

柳之助

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これより語るのは始まりの恐怖劇。

英雄譚に対する前日譚だ。

このふざけたお伽噺を終わらせるために物語を紡ごう。

その筋書きはありきたりだが役者がいい。

彼らが燃焼する魂は真実愛すべき輝きだ。

ゆえに、おもしろくなると思うよ。

本作品はDies キャラのはのはキャラへの転生です。故に前世的に見ればあり

得ないカップリングがあります。ご了承ください。

ユーノ君至上主義です。ぶっっちゃけこれが最優先（

目次

プロローグ 1

プロローグ2 兆し 8

第一章 不明な最悪 22

第二章 模擬の死闘 35

第三章 変えられぬモノ 57

第四章 かみ合わない二人 70

第五章 先見えぬ葛藤 82

第六章 求められる選択 97

第七章 先駆者たるもの 123

第八章 貫く祈り 142

第九章 癒えぬ傷 170

第十章 知らねばならぬこと 185

第十一章 悔い恥じること 197

第十二章 開幕の囁し 211

第十三章 並び立つこと 223

第十四章 道化と自死 242

第十五章 闇に咲く血染華 252

第十六章 既知の疾走 271

第十七章 交わる祝福 292

第十八章 相対への名乗り 303

第十九章 届かぬ不甲斐なさ 313

第二十章 癒しのための時間 324

第二十一章 安らぎは唐突に 336

第二十二章 伸ばしたその腕は 349

第二十三章 知らないの？ 363

第二十四章	認められないから	377
第二十五章	照らし輝く光	391
第二十六章	愛されているから	407
第二十七章	相對するのは？	420
第二十八章	死獸の遭遇	433
第二十九章	安らかな闇	449
第三十章	多くの不理解	462
第三十一章	騎士たちの省み	475
第三十二章	見上げた先	487
第三十三章	迷いのそれから	500
第三十四章	開幕の宣言	511
第三十五章	忌避すべき穢れ	522
第三十六章	守護の鉄槌	533

第三十七章	始まりは密やかに	546
第三十八章	過ちは繰り返さぬからこそ	557
第三十九章	開き至る門	570
第四十章	消えぬ絆	583
第四十一章	曇りの中の誓い	597

プロローグ

ここに何冊かの書物がある。

手にとってみてほしい、装飾も装丁も美しいだろうか？

そう、この桃や金や白ほかにも何冊もあるだろう。読んでもらえればわかるがこれらはどれもが素晴らしい物語だ。起承転結、序破急終そのどれもが完璧であり、どこに出しても恥ずかしくないものだ。ぜひ手にとってほしい。きつと退屈はさせない。時を忘れ、物語に没頭するであろう。それは保証するよ。事実、私でさえ美しいと感じたらね。

例えば、

この桃の書は幼い孤独からの強迫観念より、よりよい子供であろうとし、実際に幾人もの友を救い、そして世界の英雄になった不屈の少女の物語だ。

この金の書は代替として生まれ道具として使われながらも、友と出会い、心を得て、母を失いながらも、母となった閃光の少女の物語だ。

この白の書はなにもなかったからこそ得ることができた家族を愛し、そして失いながらもその身が背負った罪を償い続けようとする王の物語だ。

これらのどれも美しく、綺麗で、完璧な物語だ。

彼女達は己の傷痕を、罪を糧にしながらもその物語を綴り、より華やかなものにしていくのだ。

ああ、なんて美しくしいのだろう。

逆境とそれを乗り越えての挑戦と成功。

古今東西、ありとあらゆる物語の題材に使われているね。

英雄譚、なんて言えば風流だろうか。

実に、美しいよ。

美しく、美しく、美しすぎて――――――吐き気がする。

確かに彼女たちの物語は何度も繰り返すが美しいものだ。それは否定できない。もとより美しくあれと創られた物語だからね。

苦痛と苦難を乗り越え、過去の軋みを胸に抱えながらも前に進むことは素晴らしいとも。

だがもし、その苦痛もその苦難も、胸の軋みもなにかもが他人に用意されていたものだとしたら？

そしてもし、与えた理由がその方が美しいから、面白いからだというふざけた理由だつたらどうかね？

それを、素晴らしいものだと言えませんか？

何かが決定的に欠けていたほうがより美しく、素晴らしいなどという理を認められるかね？

絵画ならば一ヶ所だけの誤色を、音楽ならば聞き取れるかどうかという雑音を、文学ならば一度徹底的な焚書を、ありとあらゆる事象に覆せない欠落を是とできるかね？

否、断じて否だ。

他人から与えられた傷に、過去に、後悔に、悔恨になんの意味があるというのだ。

わかるかね？ それではダメだ。

一体誰が、心の傷を望むのかね？ 一体どうして、親兄弟の死別を求めるのかね？

一体なぜ、死と隣り合わせの非日常を欲するというのだ。

無論、ことには例外というものもあるゆえ一概には言えまいが基本はそうであろう。

未知を望むにしても、既知を望むにしても誰が他人から傷を与えられて喜ぶのだ。

有り得ない。

生まれながらにして、必ず傷を負うことを定められている生など誰が喜ぶ。確かに、外から観賞するならば美しいだろうね。観客ならばそう望むのは当然だ。

だがね、その物語において生きている彼女たちはどうなのだろう。

孤独に追いやられた、母を失った、必要のない罪を背負った。他にも、他にも、他にも――。

誰もがその魂に傷痕を残している。例え、外見上では乗り越えても決して魂はその傷を忘れられないのだ。

そんな人生を歩みたいと思うかね？

まあ、生きていれば大なり小なり心の傷を持つのは当然だが、それが持たされているというのがいけないのだ。

そんな世界が赦されると思うか？

私は赦せない。

かつて、あつたのだよ。

今の世界のように鳥かこの鳥を愛でているような世界ではなく、真に総てを抱き締めてくれる世界が。

巡り来る全ての魂を抱き締めてくれる世界があつたのだ。

那由多の数を繰り返しても飽くことのない既知が。

なによりも優しい黄昏があつたのだよ。

永久不変の水底の輝きが。

だが、もうなくなってしまうた。

巡り来る全てを抱き締める黄昏の女神は消えた。

そして、今。

怒りの日を超え、総てを愛そうとする黄金の獣もない。

新世界へ己の物語を捧げた永遠の刹那もない。

そして————唯一の結末を求めた水銀の蛇もまたいない。

だがしかし。

彼らの魂を受け継いだものたちもまたいるはずだ。

私はそう信じている。

全てを失っても、あの優しい黄昏を忘れてはいないと信じているのだよ。

彼らの絆

はその程度なはずがない。

事実、見てほしい。この不気味なまでに美しい本を包む翡翠の光を。

それに伴い自ら輝こうとする宝石たちを。

この世界に憤りを持ち、黄昏を魂に遺している者もいるのだ。

ゆえに、私は再び物語を紡ごう。

このただ綺麗なだけの満天の新月に、輝く銀月を浮かべられるように。

あの優しい黄昏に負けない世界を創るために。

舞台上に上がろう。

これより語るのは前日譚だ。英雄譚へと続くプロローグ。

これを語るの必要はないかもしれない。だからこそ、この物語を語る意味を知ってほしい。

彼らが——特にこの前日譚において主役となる彼と彼女は現実で生きようとしていることを忘れないでほしいのだ。

彼らの魂は決して幻想ではない。

その燃焼させた魂も、疾走した生も。それだけは永劫繰り返しても色褪せることない輝きであると思うよ。

では、これにて私の独白は終わりとしよう。

以て、この言葉で閉めさせてもらう。

それでは我が歌劇をご覧あれ、その筋書きはありきたりだが役者がいい。

至高と信ずる。

ゆえ、おもしろくなると思うよ。

では始めよう。

この救いようのない世界でお伽噺を終え、新世界へと疾走するために。
さあ、始まりの恐怖劇《グランギニョル》の幕を上げよう。

プロローグ2 兆し

そこは鉄と火と血が全てを支配する世界だった。荒れた荒野の上には即席で作られた塹壕やコンテナで作られた防壁がいくつもある。それらのどれもが炎に焦がされ、銃弾に穿たれた痕がある。それらを現在進行形で作っている銃弾の雨霰。至るところに武装した死体や傷を負って動くことのできない怪我人、それらを踏み潰して進む戦車がいる。

無念と怨念と慟哭に染まる世界。

すなわち戦場だ。

「次の物陰まで走れ！」

「は、はいっ！」

両手に機関銃を抱えた少年と少女が戦場を走る。見に纏うのは防護の機能など欠片もないただの服だ。肩から銃弾を大量に込めたポーチと腰のナイフと手榴弾のみが装備だ。少女は十代前半であり少女にいたっては十になるかどうか。そんな彼らが傷だらけになりながら戦場を駆ける。

異常な光景だ。だがこんな光景がこの世界、地域に限っては普通だった。

この地域は昔から民族間での紛争が絶えない地域だった。雨は滅多に降らず、大地の恵みは少ない。水は基本的に地面の掘ることによって井戸を作ることではしか得られず、動植物も数は少ない。そんな地域で暮らす以上は当然ながら少ない資源は貴重だ。それらは分けあうこともあるが基本は、奪い合いだった。

そして、戦争というものに最も被害を受けるのは何時でも、どの世界でも幼い子供たちだ。時に被害者として、時に加害者として。

そして今、物影に跳び込んだ彼らは銃を手に取り、戦場に身を置いている。

「弾はあとどのくらいある？」

「ま、まだそれなりに余裕はあります……すいません、庇ってもらってばかりで……」
「気にするな」

少年の申し訳なさそうな少女の頭を乱暴になでる。小さな悲鳴を上げた少女の視界が揺らぐがそれでも少年は構わずに続ける。

「お前は今日が初陣だろ？　そして俺はもう何度もこうやって戦っている。つまりは先輩だ。先輩ならば後輩を守るのは当然だろう」

そう言ってニヤリと笑う少年を見て少女の胸が僅かに高鳴る。少年の言う通り少女は今日始めてこうして戦場にでているのだ。父と母は数年前に死んでおり、唯一の肉親であった兄も三日前に死んでいる。だから、家族を失った少女に戦場に出るしか選択肢

はなかった。やたら重い銃と弾丸の使い方を教えてもらったのはつい昨日のこと。一度、誰の手も借りずに撃てたらそのままこうして戦場に送り込まれた。そして、比較的歳の近い少年と組んでいるのだ。

そして、少年はもうなんども戦っている所謂ベテランだった。

「その……ありがとう、ごさいます」

胸の高鳴りを抑えるように静かに礼を言う。

「おう。……よし、行くぞ」

「は、はい」

物影から外を伺った少年が少女を促す。そう、立ち止まっている時間はない。グズグズしていたら、何時戦車の砲撃に撃たれるかわからないのだ。

先に飛び出した少年の後を追う少女の口元は僅かに緩んでいた。どうしようもない絶望的な状況に落とされたと思っていたが、存外良い出会いに巡り合えた。こんな地獄でも彼のような人といられるのは悪くないと思いつつながら、

「え———？」

全身を衝撃と爆風が叩きつけた。

視界が白と染まる。感覚がシエイクされたようにグチャグチャになりなにも理解できなない。頭の中にあるのはただ理解不能の一言。感覚器が十全に働かない。

「あ……ぐ、はあっ……い！」

ようやく聞こえたのは自分自身の荒い息と全身を苛む激痛と熱だ。頭の片隅、僅かに残った冷静な部分が攻撃を受けたと判断していた。そして同時に、

「先っ輩……い！」

喋るだけでも全身に激痛が響く。それでも彼女は彼のことを呼び、探す。そしてすぐに見つかった。

「ひっ……い！」

彼女の目の前にいた。それだけならばよかつただろう。彼が悲鳴を上げたのは少年の状況だ。

下半身がない。

腰から下まで吹き飛んでいて、断面図から内臓が零れていた。先ほどまで見せてくれていた笑顔は無く、死んだような目で——死んだ何も写さない目で少女を見ていた。

「い、い……やあ……」

口から嗚咽が漏れる。

目の前の現実を認識出来ない。つい一瞬前まで少年は少女へと笑いかけていたのにもう死んでいる。どうして、と問いかけたくなるがそんなことに意味はない。彼女の父

も母も兄も、なんの前触れもなく塵のように死んでいった。それは彼女の傷であり、そして今僅かな恋心の喪失の痛みがそれを抉る。

理性が今すぐ動いて逃げろと言う。

だが感情はそれを押し込めた。

もし、生き残つてどうするのか。彼女の心には決定的な傷が刻まれ、そしてそれは癒される事はない。例え永劫を生きても消えることは無いのだ。だから彼女は生きることを諦める。心を殺す。

こんなはずじゃなかったと思いつつながら迫る死を受け入れるのだ。

そしてすぐに死は訪れる。まるで諦めたの少女を見限るかのように、先ほど少女たちが砲撃した戦車の砲身が彼女へと照準を合わせる。その動きが少女が知っているのよりも格段に速い。だから少年も出るタイミングを見誤つたのだろうか。

だが、そんなことも最早どうでもいい。

そして、砲身から砲弾が放たれ――

「なに諦めてるんだよ、くそつたれ」

――

苛立つような声と共に、砲弾が横から放たれた銃弾に撃ち落とされた。

それは弾丸というよりも閃光だ。少女の知る既存の銃火器には当てはまらない現象だった。

同時に少女の耳に足音。見慣れない服装の少年がこちらへと歩いてくる。

歳の頃は死んだ少年よりも幾らか上だろう。

赤いジャケットにダメージに入ったジーンズで腰にはシルバーチェーン、首にはネックレスとあり、大凡戦場にでる格好ではない。

髪は一体どういう風に染めたのか黒髪と白髪が半々に混じっていて、体は針金を束ねたかのように細い。筋肉の類が無駄なく絞り込まれているのだろうか。

気だるげな黒い瞳は、確かに少女を見ていて少女の方へと足を進めていた。

あと数歩というところで、戦車の方が再び動いた。相も変わらず忌々しい速度で今度は少年へと照準を定める。当然ながら生身の人間が砲弾を喰らえばタダでは済まない。

だがしかし、あるいはだからこそ。

「うるせえ」

その一言と共に少年は手に握っていた拳銃の引き金を戦車に向けて引いた。

閃光。

放たれたそれは飛翔しまるで猛獣の牙のように砲身を破壊し、同時に砲弾も爆発させ

た。

やはり、唯の銃と銃弾ではない。自ら光る弾丸なんて知らない。

そしてまたこの少年もまた普通ではないのだろう。砲身を破壊するような銃撃は、砲身に狙いが付けられたように見えなかった。勘で撃ったようにしか見えない、基本もなにもない撃ち方。

なにより少年から感じる威圧感。

そこにいるのは一人きりだというのにまるで何人もの気配を感じる。いや、何十、何百だろうか。少女には感じきれなかった。

「お前、生きざる気ないのかよ」

戦車を破壊した行為になんの歯牙にも掛けず少年は少女へと語りかける。いや、吐き捨てるのか。

「……………」

それに少女は答えない。すでに心は死んでいるから。

「んだよ、だんまりかよ。くそつたれ。いいのか、そのままだと俺が殺すぜ？」

道を聞くように少年は少女へと殺すと言った。驚くべきまでの気軽さだった。

「……………殺せば、いいじゃないですか」

ようやく少女からこぼれた言葉はそんなものだった。いや、最早それしか出てこない

のか。どうせ死ぬんだから、彼に殺される方が手つとり早そうだと感じただけかもしれない。

「あつそ」

つまらなさそうに少年は頷きながら、手にしていた拳銃を少女へと向ける。

「ま、ことなくそつたれの世界ならそんな気持ちも……ああ、やつぱわかんねえや。真面目に生きようとしないうつめの気持ちなんかわかりっこねえよ、俺には」

銃口は物言わぬ少女の頭。

そして、やはりつまらなさげに、

「Auf よWidなerseらhenだ」 ま、もしまた生きる気になつたら新世界でまた会

おうや」

引き金を引いた。



「は、まったく嫌になる……」

口にタバコを咥えて火をつける。一度煙を思い切り吸い、不快感と共に吐き出した。戦場こがどういふところかは嫌になるほどわかつていたが、不愉快なものとは不愉快だ。

こういう介錯紛いのことをするのは初めてではない。この世界のような時空管理局の目の届きにくい管理外世界、それも戦争をしている地域に来ればわりかしよくやる。生きることを諦めた連中は見ていて腹が立つから殺す。どのみち彼は殺すためにわざわざこんなところまで来ているのだ。

ただ思わずにはいられないのだ。

ここで自分に殺されるのと、これからまた生きてくそつたれな物語を作つて腐れ神を喜ばせるのとどちらがマシンなのかを。

「ん……？」

少年の聴覚が新たな存在を捕えた。彼の超人的の感覚が捕えたのは自分の右と左数十メートル離れたところにいる戦車や歩兵たち。会話を拾つてみるに、挟み打ちで少年を殺そうとしている。人一人に過剰な戦力と馬鹿にはできない。先に少女がそうであつたように彼らも少年の異常性は感じていたのだから。

「お勤め御苦労さまなことだ」

にも関わらず少年は動揺の欠片も見せない。むしろ笑っている。まるでそんなものは脅威にならないというように。

事実、たかだか銃弾だとか砲弾が彼を傷つけることはできない。

それら二つに対して、どうするかを僅かに迷い、何かに気付いて、

「ご愁傷さまとしか言えねえな、おい」

やれやれと笑うのと同時に、左右の兵と戦車が吹き飛んだ。

右は突然現れた炎に全て燃やされ、左は生物、無機物関係無くまるで何かを吸いとられたのかのように干からびていく。

「ウチのお姉さま方は怖いんだよねえ、コレが」

言葉が終わった時にも全てが終わっていた。この次元世界の価値感ならばかなりの戦力であるにも関わらず一瞬で蹴散らされていた。

それを為したのは二人の女性。

右、炎を纏う金の短髪の女性。

左、闇を纏う紺の長髪の女性。

対照的な二人だった。炎の女性からは活発さを、闇の女性からはしとやかさをそれぞれ感じる。

炎の方は両手に二本の大太刀を持ち、闇の方は無手。

二人とも揃いの黒緑の軍服を着ていた。

無論―――傷一つない。

『カイト』

「ん」

頭に直接響いた声に軽く声を返す。念話だ。口に出す必要はないがそこは気分だ。

『もうそろそろ帰るから二人を連れてきて、この戦場もそろそろ終わりだ。もう僕たちは必要ないよ』

聞こえてきたのは若い男の声。その声に少年——カイト・スクライア・クオルトリーズは驚くように応えた。

「早いな、おい。いつもなら残党片してこさせるのにどうしたんだよ、兄貴？」

その問いにカイトの兄——正確には義兄であるユーノ・スクライアは応える。

『明日、二人が大学の始業式なんだよ。いくらなんでも始業式に休むのは不味いだろう？』

「始業式前日に異世界で戦場駆け巡ってるのもどうかと思うがね……わかったよ、お姉さま二人連れてそっちいくから、今何処だ？」

『君のいるところから南東に大体十キロくらい。………というかだね、早く来てほしいね。あれなんだけど。今僕凄い囲まれてる、なんでこんなに来るわけ？』

「知るかよ、自分でどうにかしてくれよ。大体兄貴がちよつとくらい囲まれたからってどうにかなるもんかよ。俺はゆっくり行くから」

『あ、ちよつと待った』

念話を切ろうとして止められる。その声に僅か真剣みがあったから。しかし、囲まれ

ているとか言っていたが全く焦る様子がない。

『カイト、機動六課って覚えてるよね?』

「忘れようがないだろ、兄貴の大事な大事な宝石箱だ。あの人たちに迷惑かからないようにこんな辺境世界まで来てるんだらうが」

『まあ、そういうことなだけと。実はさーカイト君にその宝石箱に行ってもらいたい』

「はあ!? 待て待て待て! どういうことだよ」

『そのまんまの意味、君無限書庫の司書資格もってるだろ? だから無限書庫からのアドバイザーとして出向してくれ。……本当は僕が行きたいんだけど立场上どうしてもね』

「……………ギンガは。あいつはどうなんだよ、今日はいねえけどよ」

『ギンガは他でやることあるからね。じゃ、そういうわけだから。来週から君は機動六課所属だ。……ちなみに、使っていいのは基本活動、緊急時のみ形成だから。創造は使ったらだめだよ』

「おい待て、なんだその縛りプレ……………切りやがった」

あまりの扱いにビックリした。

その上で今ユーノに言われたことを反芻する。

基本活動、緊急時のみ形成、創造使用禁止。

「なんとかなるな、ユューユヨー」

正直、普通の魔導師と戦うなら活動位階で十分であり、高ランク魔導師相手でも形成でなんとかなるだろう。もとより通常の攻撃では傷一つ付かない体だ。自分のような類いにダメージを与えるには最低でもSランクの攻撃は必要であるし。必殺技といえる創造を使うまでもない。

「まあ、レアスキルとでも言ったらなんとかなるか。あーでも武器がな、魔力式の銃買っとくか。金は兄貴につけといてやろう」

先程の仕返しとばかりに酷い事を言う。因みに管理内世界で質量兵器は法外に高い。安物の大量生産品ならともかく、カイト言うそれは半質量、半魔導兵器と言うもの。非常に高い。最もそこは一応高給取りであるユーノに任せるとしよう。

「それにしても……六課ねえ」

ユーノ・スクライアー……翡翠の盾の宝石たち。

その大体の面子は知っていし、面識もある。

不屈、閃光、夜天、烈火、鉄槌、癒し手、そして守護獣。主だったのはそれくらいか。それでも彼の宝石のほとんどがそこにいる。

翡翠に守護され、同時に世界からなによりも愛されている主人公たちだ。

最もカイトからすればそれもどうでもいいのだが。というよりも、どうせユーノがどうにかする。それを楽観でもなくカイトは義兄のことを信頼している。あれを心配する必要はない。

カイトにはカイトの渴望が、カイトにはカイトの欲しいものがあるのだから。こちらに歩いてくる二人を横目にしながら、煙を吸い込み再び大きく吐き出す。

「見つかるといいよなあ……………」

眩きは紫煙と共に戦場へと消えた。

第一章 不明な最悪

時空管理局本局遺失物管理部機動六課。

前線メンバーから後衛メンバーまでが若手のエリート候補、あるいはエリートで固められた試験的に設立された一年間限定の部隊。隊長格三人がオーバースランク、副隊長ランクもそれぞれニアSという破格の戦力を保有した部隊で、目的は古代遺失物、通称ロストロギア関連事件への機動性を重視した部隊であるらしい。最も異常な戦力保有と主要メンバーがほぼ全員若手と言う事で一部からは良く思われていないとか。

そしてそのトップ、古代ベルカ式総合魔導師ランクSSである『夜天の主』八神はやて二等陸佐。若干19歳にして一部隊の長であり、歩くロストロギアとさえ称される戦略級の魔導師。

彼女こそが、今カイトの目の前にいる人物だ。

「久しぶりやなあ、カイト」

「ええ、まあ。そうっすね。はやてさん」

「この前あったのはいつやったけ？」

「正月で地球に集まった時以来じゃないか？ どっかのだれかがウチの兄貴に酒飲ま

せて逆レイプ狙った人とかいましたけど」

「あれは主犯はさすがちやんや。ウチはさすがちやんをアリサちゃんに止めようとしてただけや。……まあ、いろいろあつてフェイトちゃんとかに止められた訳やけど」

「そのいろいろが問題ありませんでしょうよ……」

茶の短髪を揺らしながらにつこりとほほ笑み、カイトは息を吐き出す。相も変わらずこの女性は腹黒い。素の表情でとんでもないことをやり出すのだ。知り合つたのは大体五年前だがどうにも掴めない。

「んで、カイトも今日から機動六課の一員なわけやけど……まずはその格好どうにからんか？」

「は？」

言われ、カイトは自分の格好を見直す。先週いきなり言われ、超特急で寸法し仕上げた陸士部隊の制服だ。茶色というかクリーム色のこれは正直ダサイと思う。まあ、それでも着ないわけにはいかないので一応着ているが、少し着崩している。

「まあ、チェーンとかネックレスはまあウチらからしたらトレードマークみたいなどこはあるからええけど、ネクタイくらいして第二ボタンもちゃんと止めえ」

「パス、うつつとうしい」

「……まあ、ええわ。言つてどうにかあるとは思わんしな。じゃあ、真面目な話しや」

「はいはい」

「カイトの立場はロストロギア——レリックに関してのアドバイザーとしてここに来てもらった訳やけど……大丈夫か？ アドバイスとかできるん？」

「まあ、なんとかかなりですよ。第一レリックなんて魔力の塊なわけなんだから大してアドバイストとかいらないうすよ」

「またぶつちやけたことを……、まあ、カイトが来るって聞いた時点でそうだろうと思っただからええけど。んじゃ、次。カイトの武装の話しや」

「魔力式の拳銃二丁手配しときましたけど、なにか？」

「なにかやないやろ。なんでこんな半分質量兵器みたいな使うんや、デバイスじゃあかんのか？」

「まあ、正直使い難いので。弾でりや十分すよ。あと一応手榴弾とかも持ってますし」

「なあ、非殺傷指定って知ってるか？」

「あのどれだけ痛めつけても相手は死なない素敵使用すか」

「ものは言いようやなあ」

はやてが遠い目をしていた。

正直な話し、カイトも通常の魔導が使えないわけではない。カイトやユーノを含め、僅か数人がある術式を宿しているが、それと魔導の使用とはあまり関係ない。むしろ使

い方によっては通常の魔導の威力をはね上げることもできる。
だが。

カイトの性質上の問題として魔導と相性が悪いのだ。魔力の単純な操作ならともかく術式として使うとなると話しは別だ。

「ま、とにかく。俺は武器変える気ないんでよろしく」

「あ、そ。じゃあ次や」

「まだあるんすか……」

「もうこれで最後やから。カイトの六課内の立ち位置やけど、とりあえず出撃時は遊撃でええな？ それ以外は……そーういや書類整理とかできるん？」

「教えてもらえれば大体できますよ」

「ならそれで。んーならもうええか」

「さいですか。なら、俺は」

「まあ、待ち」

話が終わったようなのでカイトが部屋をでようとしたら止められる。

あまり良い予感はない。

「こっからが本題や」

「今の話しはなんだったんすか」

「だからさっきのは真面目な話や。ええか？——ユーノくんは最近どうや？」

「ああ、やっぱその話しかよ……………」

これで本人が本気だから困る。間違いなくこの人はカイトの知り合いの中でもトチ狂ってる。

まあ単純に言つてこの八神はやてはカイトの義兄であるユーノ・スクライアに惚れている。もつともそれは彼女だけでなく他の彼女の幼馴染たちもそうなのだが。その中でもはやてはかなりオープンだった。

さらに言えば、

「バレンタインデーの時はチョコにこっさりウチの髪とか混ぜた訳やけど結局あれはど
うなつたん？ ホワイトデーには普通にクッキー返されて反応確認できんかったし」

「そりやあ俺とギンガで棄てましたから。なんか嫌なオーラ漂つてたし」

「なんてことを。ウチの愛をなんだと思ってるんや」

「はやてさんこそ常識なんだと思ってるんすか」

「正直、チョコに髪とか血とか普通やと思うんやけど」

「そんな常識ドブにでも棄てちまえ」

「やれやれ、相変わらずあの電波タヌキは……」

ようやく部隊長室から出たカイトはタバコを口に咥えながら嘆息する。あれの相手はかなり疲れる。火を点けながら時計を見ればすでに昼時だ。食堂に迎えば誰かいるはずだ。知り合いも少なくないので退屈はしないだろう。

「てか、知り合いばっかだな」

隊長3人が幼馴染で副隊長は部隊長の私兵扱いでさらにはフォワードの新人二人も隊長の一人の子供のようなものだ。仲良し部隊と言われてもしょうがないだろう。いろいろ不安事項が多い部隊だ。というより多すぎる。

よくもまあこんな部隊が設立できたものだ。

はやての頑張りも勿論あるのだろう。彼女の情熱もある。

それはなんとも素晴らしいことだと思う。

だが、思わずにはいられないのだ。

一・体・ど・こ・か　ど・こ・ま・で・が・そ・う・な・の・だ・ら・う・か。

「……くそつたれ」

自分の思考に吐き捨てる。気持ち悪い、吐き気がする。

その思考そのものにも、それを考えた自分にも。

タバコの煙を肺に送り込む。体質上、ニコチン等の有害物質は彼には効かない。それでも自分に毒を入れるように吸う。

「食堂に酒はあるのか……？」

アルコールの類も体に影響はないがそれでも気晴らしにはなる。無かった時はどうしようか考えていたら食堂に到着。

結構広い。

少し見渡せば見知った顔が何人かいた。

「よ、ひさしぶり。エリキヤロ、お姉さまがた」

突然現れた男にティアナは目を見開く。

彼女か機動六課に配属されてもう二週間ほどたち、ある程度のメンバーとは顔見知りになったつもりだったがその男を見たのは初めてだった。自分より一つか二つは上だろうか。針金を束ねたような痩せて引き絞られた体。ノーネクタイで第二ボタンまで開けられて着崩された陸士制服。なにより目立つのは、染色方法が皆目見当つかない白と黒の斑の髪形。気だるげな、それでいて鋭い瞳。

まず間違いなく初対面だった。こんな柄の悪い奴一度見たら中々忘れられないだろう。

だが、他は違ったらしい。

「カイトくん！」

「あれ、そうか。今日だったね、カイトが来るの」

「なつかしいな、おい」

「カイトさん！」

「う……カイトさん」

なのはいきなりの登場に驚き、フェイトはなにやら納得し、ヴィータは懐かしそうに笑い、エリオは思わず立ち上がるほど喜び、キャロは僅かに身を引いた。

「よお、俺も混ぜてくんね？」

「あ、こつちどうぞ！」

「おお、悪いなエリオ」

何時にないハイテンションでエリオがカイトとかいう男に席を促す。自分とスバル、エリオ、キャロと座っていたのだが。隣の机にはなのはやフェイト、ヴィータだ。

「もうはやてちゃんには会ってきたの？」

「ええ、まあ。相も変わらず訳のわからん話をしてくれましたよ、兄貴絡みの」

「ああ……それはなんというか」

彼の部隊長への物言いに隊長たちは怒るでもなく苦笑していた。かなりの仲がいいようだった。

「あ、エリオ。この馬鹿デカイパスタ……って分け合ってるのか。えっと、俺ももらってもいいか？」

「え、ええ。構わないけど……」

戸惑いながらもティアナは答えスバルも小さく頷く。

「悪いね。ああ、俺、カイト・S・クオルトリーズな。今日からここに配属になったからよろしく頼むぜ」

「ティアナ・ランスターよ、ヨロシク」

「……スバル・ナカジマです」

「ああ、そうか。お前らがね、ギンガから聞いてるぜ。将来有望な妹と妹の親友がいるって」

「別に親友ってわけじゃ……ってギンガさんと知り合いなの？」

「ああ、まあな。ついでに言えば、お前ら以外の大体の六課の面子とは知り合いだよ、な？」

「はい！ カイトさんとは結構小さい時から遊んでもらったり、色々教えてもらったりしてました」

「私も……その、少し遊んでもらったり……」

エリオとキャロの反応が実に対照的だった。エリオは今までに見たことが無いくら

い輝き、キャロはカイトから距離を置こうとしている。嫌悪などではなくて純粹に苦手の様子だ。確かにこのチンピラまがいのオーラは女の子には近づきにくいだろう。

「カイトは実際に出撃したら遊撃になるからね、次の出撃までにちゃんと仲良くしてね」

「あ、はい。……あんだ、戦えるんだ」

「おうよ。ま、結構強いぜ？」

「ふうん……ランクもさぞかし高いんでしょね」

言ってからしまったと思つた。完全に嫌味と嫉妬の言葉でしかない。自分でも情けなくなるような言葉だ。

だが、

「いや、俺魔導師ランク持ってないから。魔法も基本的なのしか使えねえよ、念話とか」

「はあ？ それ、まじ？」

「ホントだよ。カイト魔導師ランク試験受けてないからね」

「ついでに、魔法もほとんど使わないしよ」

「ま、どうも性に合わなくてな。それに魔法使えなくてもほかにもやりようなんていくらでもあるしよ」

その言葉は少なからずティアナにとっては衝撃だった。魔導師というものにとって

魔導師ランクはもつとも解りやすい強さの目安だ。いや、それ以上に管理局は魔導師ランクを最も重視している。二十歳にもなっていないはやてが部隊長をやっているのがその証拠だ。なのに目の前の男はそれがなんでもないことのように言う。

その言葉を、意味はティアナの胸に意外なほど沈んでいった。
だから。

だから、気付かなかった。

隣にいたスバルが、それまで普通に喋っていたスバルが黙ったことに。いつもの活発な雰囲気ななりを成りをひそめていたことに。

その瞳に映ったのは決して正の感情は無く、負のベクトルだった。

そのことには一人を除いて気付かなかった。

唯一人、向けられた張本人であるカイトだけはその視線に気付いていて、しかし、まったく頓着しなかった。

『ああ、俺こいつ嫌いだよ』

『うん、私この人ダメだ』

それが——カイト・S・クォルトリーズとスバル・ナカジマのお互いのどうしよ

うもない、しかしある意味においては当然の第一印象だった。

第二章 模擬の死闘

日の昇り、僅か数時間。未だ空気が澄み、冷たい。機動六課の特別訓練スペースの都市群の一角にてティアナたち前線フォワードメンバー四人は軽い準備運動をしていた。身に纏うのはそれぞれのバリアジャケットだ。先日の初出勤にてお披露目となったそれらは驚くほど性能がいい。自分たちの自前のは全く違う。やはり専門の仕事は違った。

「ん……」

ティアナは軽く伸びをして、

「じゃ、ミーティング始めるわよ」

他の三人へと言い渡した。

戦う相手は昨日から機動六課に所属したカイト・S・クオルトリーズ。白と黒の斑髪のが彼が相手だ。理由は簡単でお互いの戦力把握。これから共に出撃するというなら必要なことだろう。最初は一緒のある程度訓練してからということだったが、カイト自身面倒臭いと言いきって、エリオや自分、スバルも納得したから今の形だ。唯一キャロの

みは渋っていたが。

「あいつを知ってるのはエリオとキャロだけだから、とりあえず、なにか知ってること教えて」

「知ってることですか……」

「えっと……」

エリオとキャロが考え込む。

昨日の様子からは結構な実力者だとティアナは考えていた。何せ戦略兵器級、悪い言い方をすればバケモノのと言える超高ランク魔導師である隊長陣に物怖じせず会話している。それだけでもティアナからすれば驚くべきことだ。本人は魔法は基本なのしか使えないと言っていたが、つまり魔法以外のなにかがあるのだろう。まず考えられるのはレアスキルの類。そういう先天的な強力なスキルを保有しているならばあの自身も納得できる。ならばこそ、先に情報が必要だろう。

「レアスキルとかの話はない？」

「え、レアスキルですか？」

「そうそう。なんか持っていたりしない？」

「えっと」

二人は顔を見合わせ、同時に首を振った。

「カイトさん、レアスキルもってないはずですよ？」

「はい、そんな話は聞いたことないです」

「え、まじ？」

目が点になっているのを自覚した。まず間違いないかと思っただが。

「レアスキルの話は聞いたことないですけど……カイトさんはとりあえず、えつと、その」

「……？」

エリオが少し、言い淀み、

「とにかくたちが悪いんです！」

「キ、キャロ？」

「昔から、もうずーっとへんな罫とか仕掛けてきて、フリードにへんなもの食べさせるし！ 男の子にはへんな事ばつか教えて、いろいろ迷惑な事ばかりして！」

「えつと、その……カイトさん、僕やキャロがいた所にたまに遊びに来てくれて……いろいろ教えてくれたんですけど。僕とかはいつも追いかけてたんですけど……その、女の子にはあんまり受けてなくて」

「……あ、そう」

つまり、孤児院でガキ大将をやっていたということか。なにをやっているのかあの

男。たしかにやんちゃやそんな雰囲気はあったけど。というか、二人は同じ所で育つていたのは知らなかった。六課が始まったときから仲良かったのはそういうことか。

「えっと、じゃあ、戦力的なことは？」

「知りません！」

「あ、ああ、そう。エリオは……？」

「昔は喧嘩の仕方とかで拳の作り方とか教えてもらってましたけどちゃんと組手みたいなのをしたことはないんでなんと……」

かなりの鬱憤が溜まっていたのか何時になく興奮しているキャラは置いて、エリオもあまり情報が無かった。

「そう、まあしょうがないわね」

それなら、とりあずいつも通りに対応するしかないだろう。

「フォーメーションは何時も通り。キャラは後ろ、私が真ん中、エリオとスバルでツートップね。臨機応変に行きましょう」

時計を見る。模擬戦開始までもう僅かだ。

その旨を伝え、いつでも動けるように準備しておく。

「……………」

ふと、疑問があった。それは自分の相棒のこと。いつもならうるさいくらいに騒いで

いるのに今日は静かだ。というより、今思えば昨日からカイトが現れてからずっと静かだった。だから少し気になって彼女を見てみた。

「
」
なんだろう、なにかがおかしかったわけではない。だがなにかがいつもと違った。自分でも理解できない感覚。でもなんだろう。確かに違和感があった。いや、違和感ではない。どこかで見たことがあるような、どこかで知っていたような感覚。今までずっと、腐れ縁といえるほど一緒にいたのに、何故かその時既知感とでも言える感覚が胸に湧き、

『start』

模擬戦が始まった。



最初の動き。それは誰もが予想していないことだった。いや、近くのビルの屋上から見ていたのはたちは苦笑していたし、その場にいたスバルのみはなんとなくそうなる

であろうと思っていたから、驚いたのは二人。ティアナとエリオ。

起こったこととは開始と同時の狙撃。

その対象は——キヤロだ。

「あ」

正面から放たれた、魔力で固められた銃弾。それが彼女の額に直撃した。

「！」

驚く暇もない。一瞬にして彼女の意識が刈り取られる。その小さな体が弾かれるように宙に浮いた。

「散開！ エリオ、キヤロ運んで！」

ティアナの叫びに残された三人が跳び、それぞれ物影に隠れる。エリオはキヤロを抱えて。

狙撃だ。

「やってくれるわね……」

苦虫を噛むようにティアナは顔をしかめた。まさか初撃からこんな風に責めてくるとは予想外だった。貴重なバックス要因を潰されたのだ。そうなる戦略の幅が一気に狭まる。

ティアナは頭の中で急いで戦術を組み立てる。なんにせよ、まずは相手の居場所を見

極めなければならぬだろう。

とりあえず、他の二人の場所を確認し。

「は？」

目を疑った。視界の中、物影にキャロを横たわらせたエリオがいる。それはいい。だがそれだけだ。もう一人がいない。そう、腐れ縁とも言える彼女がいなかったのだ。つまりは、指揮官であるティアナの指示を聞かないで独断専行。

「あの……バカスバルっ！」



「おいおい、エリオ。喧嘩するときは女とダチは護れって教えただろうが」

タバコを啜えたまま、口元を歪めてカイトは呟いた。場所は都市群のビルの五階の窓際。そこからカイトは魔力式の狙撃銃でキャロを狙撃したのだ。魔力式とはいえ、非殺傷指定は出来ない。だからこそ、込める魔力を薄めて撃った。それでも当たれば大変な事になるが、予めなのはたち側に頼んでおいて、バリアジャケットのフィールドタイプのバリアの出力を最大にしてもらっておいた。それならば、急所にあたって昏倒程度

で済む。

「ま、ぶつちやけ不安だったけど大丈夫だったな。」

本人が聞けば激怒しそうな事を呟きながら、状況を把握するために感覚野を広げている。

「……ふうん、ランスターとエリオはゆっくり策敵しながら先行中か。ま、それくらいしかできんだろうなあ。んで……ギンガの妹はつと……」

カイトの目が細まる。

今現在、カイトは訓練スペースの全域を素の感覚のみで完全に把握していた。状況に感想を述べているなのはたちの会話の中身も聞こえるし、ティアナたちが周囲を警戒しながら進んでいるのも解る。

カイトの感覚能力は仲間内でもかなり広い。特殊な術式により身体能力や感覚能力は通常の人間に比べ跳ね上がっているが、カイトのそれは群を抜いている。その上で察知し、いぶかしむのは、

「こりや……話に聞いてたのとはちと違うな」

紫煙を吐き出す。

スバルはまっすぐにカイトへと向かっていたのだ。

何故。と思う、いや、あのタイミングでこちらの位置を割り出す方法は一つしかない。

狙撃の射線をたどったのだ。

そんなことは高位のベルカの騎士でも難しいはずだ。話に聞いていたスバルは近代ベルカ式だがランク的にはBだったはずだ。ランクがすべてだとは思わないが、目安として役に立つことは確か。ならば、スバルにはそんなことは出来ないはずだ。いやギンガと同じ彼女の体質を考えれば出来ないことではないだろうが、スバル自身はそれを忌避している所があるらしいのでそれもない。

「ふうん……」

口元が釣り上がるのを自覚する。

「どうやら思っていたよりも面白そうだ。それにアレは少し気になっていた。昨日始めて会った時に感じたどうしようもない嫌悪感。どうやっても相容れないんじゃないかとすら感じた。まるで魂が拒否するかのよう。だが、同時に。」

「デジャブるんだよなあ」

既知感。

「いつかどこかで見たことがあるという感覚。それを初対面であるはずのスバルに感じたのだ。気のせいとかいうレベルではない。確実に、明確に魂が反応した。」

ならば。

ならば、カイト・S・クオルトリーズは確かめなければならない。それが何故起こる

のか。

「あー、いやそうじゃねか」

正確に言うならば、既知感云々はどうでもいい。それ自体が感じるトリガーをすでにカイトは理解しているから。

だから、既知であろうと未知であろうとどうでもよくて、大事なものは。

「お前さんが俺の探しているものなのか、ってことだ」

窓際から振りかえると同時に、部屋の入り口の扉が開いた。

そこ立つのは青髪の少女。右手にガンナックル、両足にはローラーブレード。

普段の快活さはなく、ただ静かにカイトへと視線を向ける。

やはり、違う。ギンガから聞いていた話では元気が取り得の少女だったはずだ。だが、今の彼女は違う。冷たい、錆びた機械のような感覚。彼女の身体のことを考えれば的確な表現だろう。

「……………」

変わらず、無言。その様子にカイトは斑の髪をくしゃくしゃとかいた。

「まあ、なんだ。黙ってないでなんかいったらどうだ？」

狙撃銃を足元におろし、腰の後ろから自動拳銃を取り出す。地球でいえばデザートイーグルと呼ばれる大口径の大型自動拳銃。口から紫煙を吐き出す。

カイトに言われて始めて、スバルが口を開いた。これが二人の始めての会話だ。

「私は」

ぼつりと、呟く声は小さい。

「私は自分で言うのもなんだけど、あんまり人を嫌いにならない。周りの人に恵まれるからだろうし、私自身が馬鹿だからってこともあるんだらうけど。なんでだろう、ホントに不思議なんだけど」

自問する言葉はどこか戸惑っていた。それでも、彼女は断言した。

「貴方のことはどうしても嫌いだ」

「はっ、そりゃあお互い様だろ」

二人の間にある気配が充満していく。それはカイトからすれば慣れ親しんだものだし、スバルはまったく意識したことにならないものだった。

すなわち殺気。

まったくの無意識でスバルはカイトに対して殺気をぶつけていたのだ。

この時点でカイトの頭から模擬戦とかティアナやエリオのことは消えていた。それほどまでに彼女のことを気がかりになっている。

確かに魂レベルでカイトはスバルのことが嫌いだ。だが、同時にもしかしたらと思

もしかしたら、もしかしたらこいつは俺の探しているモノなのかもしれないと思うのだ。

だから、

「来いよ、ヴァルハラ送ってやる」

「あなたと行くのはごめんだよ」

灰色の狼と空色の機人。互い以外のなにもかも忘れてぶつかりあった。



彼我の距離は約十歩分。距離を詰めるのにカイトなら一秒要らないし、スバルでも数秒で十分だ。

動きは同時。カイトが右手に持った自動拳銃の引き金を引き、スバルが前に出る。

カイトの撃ち方は出鱈目の一言。銃身を地面と水平に横にして、対して狙いも付けない曲芸撃ち。だが、しかし吐き出された弾丸、マガジン一本分の七発は正確にスバルの急所を狙っていた。

「ほら、歯あ食いしばれよ！」

それは先ほどキャロを狙ったそれとは込められた魔力の質が違う。いくらフィール

ドタイプノバリアがオートでフル出力で発動しているとはいえ、まともに当たれば大怪我だ。

だが、

「
スバルは全てに対応した。放たれた弾丸を両手両足を使って弾く。スバル自身何故そんな事が出来るのか不思議なくらいの精度だった。飛来した弾丸の側面を弾き。軌道を急所からズラす。それにより、いくつかは体を掠つたが傷と言えるものではない。」

「はっ！ やるねえ」

皮肉めいた賞賛と共に再び七発同時に放たれ、またもや全て軌道が逸らされる。

一本分放たれると共にスバルは一步ずつ足を踏み出していた。ゆっくりとしかし確実に歩みを進めていた。

「
っ」

無論、本来のスバルの実力以上の動きは彼女に想像以上の負担を強いていた。例えるならばハードがソフトについていけないようなもの。本来できないはずの動きをすれば肉体が悲鳴を上げる。確かにスバルの肉体は強靱だが、それでも付いていけない程の技術を今のスバルは体現していた。

「おらおらっ！」

それにカイトも当然ながら気が付いていた。だから動きを変える。それまで一度に放っていた七発を越え、一度に十発を放つ。

「！」

カイトの銃は確かに装弾数は七だ。だが、それは実弾の話であり、今弾丸を形成しているのはカイト自身の魔力。それならば可能な限り連射可能だ。さらに、射出数をただ増やすだけではなく、同時に弾丸同士を軌道上ぶつからせて跳弾を狙う。

「シッ……！」

それでもスバルは全てを殴った。全身への激痛と引き換えにした自分ですら驚く身体駆動。無茶な動きをした上でそれまでよりも深く、一步余分に踏み込む。それによりお互いの距離は半分になり、

「おいおい、こつちが木偶みたいに突っ立ってるとでも思ってたのか？」

カイトが半秒で距離を零にしていた。

「！」

「ま、正直俺のは反則気味だけど悪く思うなよ」

拳銃の銃床を右肩へと振り下ろす。迅速のそれはまさしく狼が得物を喰らう動きだ。

「ぐっ……！」

肩に銃床が食い込んだ。だが、

「つかまえ、た……！」

「へえ」

右に食い込んだ狼の牙をスバルは抑え込む事で動きを制限させていた。単純なら脅力ならばスバルとてかなりのものだ。カイトでも簡単な動きでは逃れられない。

「はあっ……！」

裂帛の叫びと共に放たれた一撃はまっすぐにカイトの腹部へと放たれた。まず間違はなく、それまでのスバルの限界を超えていた。先日エリオとキャロが倒したガジエツト三型だろうと一撃で破壊できるだろう。

だが、

「なっ……！」

「言つたら、反則気味だつて」

その一撃を受けて、カイトは顔色一つ変えなかった。まったく意に介していない。あり得ない。確かに反則としか言いようが無い。

「だったら……！」

もう一発。効くまで撃てばいいと言わんばかりに再び拳を強く握る。

「いやいや、勘弁してくれ」

何かが自分とカイトの間に放り投げ込まれた。ほぼ密接体勢の二人の間に現れたそ

れは。

「ボンボヤーージュってな」

軽口と共にそれ——魔力式手榴弾は二人の中央で爆発した。



「！」

スバルの後を追っていたティアナたち。その正面のビルが五階程度の高さで爆発した。どこかの窓際の一室で爆発させたのか、壁面に爆煙が大きく上がっていた。

「ちよ、あれ大丈夫でしょうね！」

『魔力による爆発ですので、命に及ぶことはないはず。また、生命反応が二つ』

クロスミラーージュからの報告に少しだけ安心する。二つは十中八九カイトとスバルだろう。まだ始まってから数分程度しか立ってないのになにをしているのかあの二人。やはり相性が悪いようだ。

「あ！、いきましたよ、ティアナさん！ スバルさんです！」

キャラ口を背負うエリオが前方を指して叫ぶ。そこには確かにスバルがいた。一体

どれだけ勝手に動いたことに対して文句を言つてやろうかと思つたが、

その姿を見て、それらは全て吹き飛んだ。

「ちよ、スバル！ どうしたのよ、その怪我！」

ボロボロだった。頭から血を流し、ハチマキや、ジャケットはなくインナーのみ。全身煤だらけで至るところに傷がある。デバイスは壊れていないようだが、

「スバル！」

ティアナの叫びに、

「……………」

しかし、スバルはまったく反応を示さなかった。ただ、拳を構える。構えた先には、「おいおい頑丈だな、腕の一本でも吹き飛んでるかと思つただけだよ」

スバルとは対照的に無傷のカイトだ。大型の自動拳銃を握りながら、服についた埃や煤を払っていた。

彼に思わず叫んだ、

「ちよつとアンタ！ なにしたのよ！」

「別に？ ちよつと零距离で手榴弾爆発させたただけだよ」

「んなっ……………！」

思わず変な声を出した。さしものエリオも目を丸くしていた。それはそうだ、いきな

り榴弾爆発させたと言われて、理解しろというほうが無茶だ。いや、それよりもそのままではなせカイトは無傷なのだ？レアスキルとかは持ってなかったはずなのに。

その視線を知ってか知らずがカイトはティアナたちに苦笑してから、スバルへ向ける。

「それで？ お仲間来たけどよ、まだやるかい？」

「当然」

「上等」

そのまま制止も間に合わず二人は駆け出し、

「……………そこまで」

中央になのはが現れ二人を止めた。

「！」

「！」

「二人とも、これは模擬戦だよ？ 命の取り合いじゃない。そこらへんわかってるの

？」

声は静かで、しかし冷たい。有無を言わせない強さがあつた。

瞬間的に空気が張り詰め、

「はいはい、わかりましたよ。あんたに言われちゃ勝てない」

先に矛を引いたのはカイトだった。指で銃をクルクル回しながら腰にしまい、タバコをくわえて火をつける。それに伴ってスバルも構えを解いた。

その二人になのはは安堵するように息を吐き、スバルが膝から崩れ落ちた。

「スバル！ ティアナ、急いで医務室連れてって！」

「は、はい！」

言われ、すぐさまスバルにかけよって肩を貸しながら立ち上がる。意識はなかった。

「カイト………少しやり過ぎじゃないかな？」

「いいや？ 俺とこいつならこれくらいでちょうどいいんすよ」

言いつつ、背中を向けて立ち去ろうとした。

「どこ行くの？」

「そりゃ、怪我の治療に。こう見えても身体中痛いんすよ」

煙草をふかしながら去っていかうとして、

「ああ、あと俺はもう上がりで。なんかあつたら携帯に連絡してくださいね」

何事もなかったように、それだけ言って立ち去った。



さて、どうだっただろう。

この邂逅、この出会い。剣呑すぎると引いているかね？ まあ、確かにいささか穏やかではない。

だが、これで当然なのだよ。むしろ、この程度で済んでよかったとすら思える。

それほどまでにこの二人は対極なのだ。いや、相刻しているといつていい。お互いがお互い完全に平行線なのだよ。

だから、この程度。

私からすればほほえましいと言える。彼らがかつてのままならば、その場でどちらかが死んでいてもおかしくなかったから。

だが、この出会いこそが後の世を決めるといつてもいい。この二人が彼に続くのだから。

ああ、だからと言って余計なことはいらないよ。我が友の弟というならば我が弟も同然。そして、我が友の宝石の弟子ならば我が弟子も同然だ。

故に余計な手出しはしない。

この身はもはや舞台装置ではなく一人の演者であるが故。では、諸君これよりしばしの別離である。

実に口惜しいが私にもやらねばならぬことがあるから。

Auf Wiedersehen.

未だ遠い銀月の輝きに祈りを。

第三章 変えられぬモノ

「おい」

「ん」

訓練スペースから出て六課隊舎へと戻ろうとしていたカイトは声を掛けられる。未だに消えていないビル上空から飛行魔法で降りて来たのは訓練服姿の赤髪の少女、機動六課スターズ分隊副隊長のヴィータだ。

「おおつ、ヴィータ姐さんじゃないすか」

「なんででめえはあたしとシグナムは姐さんつけるんだよ」

「んー、キャラ的に?」

「なんだそれ」

鉄槌型のデバイスグラーフアイゼンを肩に担ぐ彼女は言葉とは裏腹に纏う空気は鋭い。それでもカイトは相好を崩さず、笑みを浮かべたまま煙草を蒸かす。

「お前さ」

「なんすか」

「スバルのこと……………殺す気だったろ」

「……………」

薄く笑み浮かべたカイトにヴィータから叩きつけられたのは確かに殺気だった。先ほどカイトとスバルがぶつけ合ったのにも劣らない濃度。

「やだやだ信用ないねえ、そんなわけないじゃないすか。いくらなんでもあんなタイミングではやらないし、それにあの程度で死ぬようなタマじゃないっすよ」

「あたしは」

カイトの笑い混じりの言葉には取り合わず、ヴィータは言葉を紡ぐ

「あたしはお前のことを信用してるし信頼してる。それに六課の面子の中じゃ、お前こととは一番解ってるつもりだ」

「んな、俺にデレられても。そういうのは兄貴に…………」

「だけどな、アイツらはあたしやなのはたちの生徒だ。まだまだひよっただけどそれは私たちが強くする。だからいいか、カイト。アイツらの邪魔して見やがれ、——潰すぞ」

グラーフアイゼンがカイトに突きつけられる。彼我の距離は五メートル近くあるがそれでもカイトは自分が叩き潰されるイメージを一瞬思い浮かべさせられた。それは

どまでに彼女の言葉には凄みがあったのだ。

カイトは笑みを消し、髪をくしゃくしゃと髪をかく。

「……大丈夫つすよ、なんでそう考えるかね。兄貴の大事な大事な宝石のヴィータ姐さんたちに手はださないし、あいつらだって同じだ」

「うそこけ。言つたら、私は結構お前のことわかつてるんだよ。確かにお前はユーノの手前、あいつらには手はださないだろうな。でも、もし」

「……」

「もし、いつかその時が来たらお前は」

「——」だから心配し過ぎですって。んなことにはならない。もうちよつと信用してくださいよ」

「信頼してるからこそだ。こういうことはあたしの役目だからな。言つとかずにはいられないんだよ」

ようやくヴィータから発せられる気配が緩む。グラーフアイゼンを肩に担ぎ直した。

「性分だ、許せ」

「はいはい。わかってますよ。……ほんと姐御気質というかなんというか」

「うっせ。じゃあ、あたしは行くからな。訓練にはなにも言わねえけど、呼び出しくらつたらちゃんと来いよ」

「はいはい」

手を振りながら、跳び上がるヴィータを見送る。宙を飛んでいく背中を見送りながらも、

「——性分でも役割でも、自分だって兄貴の宝石だってことを忘れないでほしいんだけどなあ」

眩きは紫煙と共に空に溶けて消えた。



「ありがとう、ごさいます、シャマル先生」

「はい、どういたしまして」

機動六課医務室。模擬戦の後に運ばれたスバルはすぐに目を覚まし、今は医務官であるシャマルから治療を受けていた。スバルはベットに腰かけてシャマルは彼女と向かい合うように回転椅子に座っていた。

「傷そのものは大したことないけど、一応今日は安静にしててね」

「はい」

「よろしい」

人さし指を立てながら注意するシャマルに唯唯諾諾とスバルは頷く。やはりいつもの元氣っぷりが無い。スバルを運んできたティアナが様子がおかしいと気にしていたのは頷ける。普段ならば全身傷だらけにしても笑顔で我慢するような子なのだ。

「スバル、どうしたの？　なんだか元氣ないみたいだけど。なにか悩みがあつたらシャマル先生に質問してくれてもいいのよ？　メンタルケアも私の役目なんだから」

無論それだけではない。仕事とか関係なく少女たちの力になりたいと思うのだ。

「えっと……あの」

少し困ったようにスバルは視線を泳がす。

「その、あの人のことなんですけど」

「あの入って、カイトのことかしら？」

「はい」

「……カイトがどうかしたのかしら？　随分派手に模擬戦したらしいけど……」

零距离で手榴弾を爆発させたのだ。魔力式であつたとはいえスバルじゃなかつたら大けがだつたらう。

「その、どういう人なんですか？」

「どういふ人つて言われても……」

言われて、カイトのことを思い出す。

「そうねえ、無限書庫のユーノ・スクライア司書長つてわかる？」

「はい、名前と顔くらいなら」

「そう。まあ、そのユーノくんの弟なのよ。義理のね。私たちとはそれ繋がりで知り合つて。大体五年くらい前かしら、いきなりユーノ君が連れて来てね。最初は戸惑つたけどすぐに打ち解けて、今では皆の弟分みたいな感じかしら」

といつても傍からみて姉弟に見えるのは、シグナムやヴィータくらいなのだが。なのはやフェイトたち相手だと友達といふか先輩感覚に近い。カイトがいじつてる時のほうが多いくらいだ。特にフェイトなんかは生来の気性からカイトの冗談によく騙されるし。

「んー、あとはそうね。普段なにしてるかは私もよく知らないのよ。二年くらい前から地球の高校に通つてただけど、去年いきなり中退しちゃつたし」

「中退ですか？」

「そ、つまんないの一言でね。それから私は私もあんまり良く知らないわね。たまにひよっこりご飯食べに来たりしてたわね」

一年前からは八神家がミッドの自宅に揃つた時はほぼ必ず顔を出していた。ついで

にユーノも引つ張り出してくれたりするからいろいろ嬉しかったけど。いろいろひっかきまわしてくれたものだ。はやてがユーノを誘惑して、それにシグナムタがやきもちやいて、カイトがからかう。リインはその時によって変わるけどだれかの肩やひざの上。そんな皆を自分やザフィーラが見守っている。そんな風景。かけがえのない刹那。穏やかな、失くしたくない陽だまりだ。そこになのはやフェイトたちがいればもつと素晴らしいものになるだろう。

そんな光景を思い出すたびに笑みが止まらなくなる。それでもスバルの手前、苦笑に留めながらも、

「ああ、ごめんさい。あとは……そうね、真面目なのよ」

「真面目、ですか」

「ええ、そう」

目に見えてスバルが怪訝な顔した。確かに普段の様子を見れば考えられないことだろう。まだあつてすぐのスバルなら納得できないのも無理は無い。

「多分、私たちの中では一番真面目ね。確かに普段の様子からはわからないと思うけど……きつとスバルにもわかるわ。ああ、見えてほんとは優しい子なのよ」

「……」

やはりスバルの顔は晴れない。どうやら思ったよりも深い溝があるようだ。どうし

てそんな深い溝があるかはわからないけどやっぱり仲良くしてほしいものだ。カイトもスバルも、シャマルからしたら子供みたいなものなのだから。

「まあ、無理に仲良くしろなんて言わないわ。でもきつとあなたたちはなんだか仲良くなれる気がするのよ、だから大丈夫」

「……なんでそう思えるんですか？」

「ん？ そうね……」

人さし指を顎に当てて考える。なんでといわれてもホントになんとなくそんな気がするのだ。でも、あえて言うなら、

「女の、母の勘かな？」



「ええ、そうよ。三日後からでいいわ。……ええ、まあ危険性は無いようだから。そんなに急がなくても大丈夫よ。こちらでももう少し盗まれたロストログア自体のことも調べておくから。そうしたらお願いね」

ミットチルダ、ベルカ自治区聖王教会の自室にてカリム・グラシアは八神はやてとの通信を切った。

「ふう」

機動六課に聖王教会からロストロギアの回収を依頼していたのだ。数日前に盗まれたロストロギア、それをロストロギア専門部隊ともいえる六課に頼むのはカリムとはやてが個人的な友人だとしても妥当なところだ。

だが、今回に限っては少し事情が異なる。

「話をつけといたわよ、ユーノ？」

「悪いね、助かるよ」

彼女が自分の執務机から顔を上げ、見据えた先。来客用のソファに数人の男女がいた。

カリムの声に答えたのはただ一人の男、ユーノ・スクライア。蜂蜜色の長髪、翡翠の瞳。見方によっては女性としか見えない彼。それでも、まるで巨大な大樹のような年齢に似合わぬ落ち着きと底知れぬ深さを醸し出している青年だった。

「ごめんね、カリム。無理言っちゃって」

「いいのよ、どうせ私も六課に頼もうと思ってたし。それに」

カリムは執務机の上のアタッシユケースに手を添え、

「……こうしてそのロストロギアを持ってきてくれてるもの。私としては大助かりよ」

カリムの言葉ユーノは苦笑しながらも、

「お礼ならこつちの二人に。実際に犯人締め上げて回収したのはこの二人だからね」

ユーノが示したのは同じように座っていた二人の女性。金の短髪と紺の長髪の女性だ。揃いの黒緑の軍服姿。

「そうね、ありがとう。アリサさん、すずかさん」

「いいんですよ、別に」

「そうそう、気にしなくていいんですよ」

カリムのにこやかな笑みにアリサ・バニングスと月村すずかは気安い様子で答えた。

「ま、正直対した相手でもなかったし」

「そりや、二人からしたら大体の相手はそうだろうね」

ユーノの苦笑も無理はない。通常の犯罪者がこの二人に敵うわけがないのだ。

「でも一体どうするの、ユーノ。六課にありもしないロストロギアの回収を依頼させるだなんて」

「まあ、いろいろとね。そのうちわかると思うけど」

カリムの問いにユーノははぐらかすだけだ。それに横槍を入れたのはアリサだった。

「言つとくけど、私はまだ納得してないわよユーノ。あなたのやろうとしてることは」

「博打以外のなにものでもない、でしょ？ わかつてるさ。でも」

「必要なことなんだよね」

「そういうこと」

笑みを濃くしてユーノは立ち上がる。カリムの後ろ、窓の外の町並みを眺めながら言葉が続ける。

「確かに荒唐治みたいものだ。だけど必要なことなんだよ。このままじゃなにも変わらない。次のステージに進む必要がある、アリサのように」

燃える炎のような彼女は気に食わなさそうに鼻を鳴らしていた。

「かつてを継承するのか。それともすずかのように」

闇に咲く花のような彼女は仕方なさそうに笑っていた。

「かつてから解脱するのか、どちらだっがいい」

継承か解脱か。かつてを受け継ぐのか、かつてから解き放たれるのか。

既知も黄昏が消えた以上かつての役者は舞台上に上がれない。だからこそ新たな役が必要なのだ。

あるいはカリムのように全く新しい役割を担うのか。

なのもフェイトもはやてもシグナムもヴィータもシャルもザフィーラもスバル

もティアナもエリオもキャロも。

選んで進まなければならぬのだ。これから先を迎えるためには今のままでは足りないのだから。

「そして、だからこそ僕たちがいる」

そう、だからこそユーノ・スクライアがいるのだ。この新月の世界で輝く宝石たちを護るために。

「僕は総てを愛してるなんていえない。でもだからこそ僕は自らの宝石の総てを護りきろう。僕の愛は守護の慕情。愛しているから我が宝石の総てを護ろう」

この思いは誰にも汚させやしない。

黄金はもういない。だからこそユーノ・スクライアは自らの愛を貫くのだ。

「聖槍十三騎士団黒円卓第一位『与え知る者』ダンタリオンユーノ・スクライアが告げる。開戦の時は近い

。この愛の欠片もない世界の悉くを破壊しつくそう。こんな世界よりも彼女たちのほうが、僕の宝石たちのほうが……君たちのほうが美しいに決まってる」

なんの躊躇もなく言い切るユーノに思わずアリサたちは赤面した。それでもユーノの言葉は止まらない。

「望むことは勝利のみだよ。このまま負けたまま置いてたまるもんか。———

「勝利万歳」
ジークハイル

「勝利万歳」
ジークハイル

「勝利万歳」
ジークハイル

「勝利万歳」
ジークハイル

「我らに勝利を」
ジークハイル・ヴィクトリア

第四章 かみ合わない二人

第97管理外世界、地球。文化レベルB、魔法文化なし、次元移動手段なし。もつとも、魔法文化はなくともミッド郊外程度の科学力はあるが。魔法がないだけで、ミッドとそう変わらない。殆どの人間は魔力資質を持っていないが、たまに馬鹿げた資質を持つていたりする。……さらにいえば、魔法よりも特殊なスキル持ちもいるのだが。そんな世界に聖王教会から要請されて、機動六課が出張することになった世界である。

転送ポートから地球に降り立ち、スバルたちが目にしたのは一面に広がり煌めく湖に緑生い茂る森。その向こうにはログハウス。

「へえ……」

「ここが、なのはさん達の、故郷……」

「ああ、ミッドと変わらんだろ？」

「基本、文明レベルも魔法ないってだけでミッドと変わらないんですよ？」

「むしろ、サブカルに関してはこちらのほうが進んでるわな」

「と言うか、ここは具体的にはどこ？　なんか、湖畔のコテージって感じだけどさ」

「現地の人の別荘だよ。なのはさんたちの幼なじみで魔法とかも知ってる人でな、捜査員待機場として貸し出してくれたりするんだよ。本人たちもけっこう使ってるし」

「なのはさんたちの幼なじみ……」

「いや、それはいいんだけどさ……あれ、どういうことな……？」

ティアナが恐る恐る口にしなが指を指したのは、

「ね、ねえ、フェイトちゃん。髪おかしくないよね？」

「う、うん。大丈夫だよ？　それより私は？　寝癖残ってたりしない……？」

「大丈夫だよ……。ていうか、私肌荒れてないかな？　なんかカサカサしているような」

「そんなことないよ……？　あ、でも私も……」

なんだか、浮き足立ってお互いの姿を確認しあっていた。ちなみにリインは普通の子供サイズである。

「ああ、そりゃあ、夜にウチの兄貴が来るからだよ。恋する乙女としては、そこらへん気になってしょうがないんだろ。多分、はやてさんのほうも同じような光景が出てるぜ？」

「……あんたの兄ってなにもんよ」

「さてね。俺も知りたいよ」

カイト自身義理の兄であるユーノのことを全て把握していない。そんなの無理だろうし、したいとも思わない。

「なにそれ」

ティアナから半目を送られていたら、湖の向こうから車のエンジン音。此方に向かってくる。

「自動車？ こっちの世界にもあるんだ」

「そりゃあるだろ、飛行機も船も電車だってあるさ。どんな田舎だと思ってたんだよ。つか、俺やエリオ、キャロにお姉さま方も一時期住んでたんだぜ？」

「え？ あ、あはは……」

なんてティアナが笑っていたら、車が止まった。

降りてきたの金髪のショートカットの女性。快活そうな、炎のような女性だった。彼女は一度なのはたちの方へ行こうとし、彼女が自分の世界に入っていることに気づいたのかカイトたちの方へ来た。

「はあい！ 久しぶり、元気がしら？ エリオ、キャロ!?」

「久しぶりです、アリサさん！」

「はい、元気です」

「そう、いい子ね」

順番にエリオとキャロの頭を撫でて、視線をずらし

「んで……あなたたちがなのはたちの教え子？ アリサ・バニングスよ。よろしく！」

「ティアナ・ランスターです、よろしくお願ひします」

「スバル・ナカジマです、よろしくお願ひしますっ！」

「うん、元気でよろしい……んで」

視線はさらにズレてカイトに当たる。

「アンタは、久しぶりってほどでもないかしら？ というかホントに局員やってたのね。

アンタみたいな不良の大将がやれるとは意外ね」

「なにを。ほら俺って、万能だから？ やろうと思えばできちゃうんすよ」

「言つてなさい」

「てか、不良の大將……?」

「ああ、こいつ。高校中退してからは不良集めてチーム作ってたのよ。毎日何するのでもなくね」

「だーかーら。あれは勝手アホどもが集まってきただけだつて。作ろうと思つて出来たもんじゃねえつすよ」

カイトからすればあまり思い出したくないことだ。高校中退してからしばらくは地球にいたりミッドにいたりと不安定な暮らしたが、地球にいる間はこういうわけが不良によく絡まれた。まあ、元々目つきは悪いし、斑の髪も結構目立つ。よく絡まれて撃退してたらいつまにか頭になってたのだ。まあ、パシリには困らなくなつて便利といえれば便利だったが。

「……でも、ほんとに高校中退だったんだ」

挽回めいた事を言うカイトにスバルがぼそりと呟いた。

「あ? なんかあんのか?」

「別に」

「……けつ」

「……ふん」

「ちよ、ちよつとあんたたち、やめさいよつ。人前で」

「ああ、いいのよ。気にしないから………ふうん、なるほどね。納得と言えば納得かしら」

最後のほうはティアナたちには聞こえなかった。それでもカイトには聞こえたよう
で、

「……」

気にくわなさそうに煙草を啜えた。

「じゃあ私はアイツら起動させに行くから、あつちのコテージで着替えておきなさい。
案内はカイトに任せるわ」

「……はいはい」

よし、と彼女は一つ頷き颯爽となのはたちに喝を入れに行った。

「なんか……カッコイイ人ね」

「ま、あの人はちよくちよく無限書庫来てるしな。なのはさんたちみたいに直に兄貴と
会えるのが数ヶ月置きってわけでもないからその分余裕あんだろ」

「ふうん……なのはさんたちも普通の女の子の人みたいね。……あ、今アリサさんにハリセ
ンで叩かれた。どっから出したのよ」

「ツツコミスキルだな。お前も持ってないのか？」

「あるわけないでしょうが」



その後、リカバリーを果たしたなのはたちから任務の説明を受け、スターズは市街地の探索、ライトニングはサーチャーの設置。

はやてや副隊長たちは後から合流するらしい。カイトも探索だ。

海鳴主街区。銀髪のリインや青髪のスバル、オレンジ髪のティアナ。普通なら目立つが、日本人以外も多く住む町ゆえに割りかし珍しくない。それでも黒と白の斑模様の髪は目立つらしく、道行く人の視線をカイトに集まっていく。

「アンタ、目立ってるわね」

「そりゃあ、まあ俺人気者だったし」

「悪目立ちの間違いじゃないの？」

「はあ？ んなわけねえだろ。人気投票したら間違いなくトップよ、俺」

「どうだか……」

僅かの会話でも、二人の空気は険悪だ。目も合わせない。おまけにどういふ對抗意識かお互いに前に出ようとしているのかやたら早歩きだ。

「ちよ、ちよつとティアナ？ あの二人どうしたの？ なんであんなに仲悪いのかな？」
「それが……私にも分んないですよ。どうも初対面から険悪で。そんな人を嫌うような奴じゃないんですけど……」

「カイトもそうなんだけど……」

「おかしいですよねえー」

二人の背後で怪訝そうなティアナ、なのは、リイン。ティアナからすればスバルが、なのはとリインからすればカイトの態度は不可解だった。二人ともどちらかといえれば人づきあいはいまほうだ。

天真爛漫なスバルならいろいろ構わずに仲良くなれるし、カイトならうまい具合で線引きが出来るだろう。実際ティアナたちもそうやって仲良くなった。にも関わらず、あの二人はぶつかり合う。犬猿の仲という言葉がふさわしいだろう。

「どうにかならないかなあ……。出動とかあつてなにかあると困るしね」
「ですよねえ」

そんな思いとは裏腹に、

「んだよ、アホ女。言いたいことあるならはつきり言ったらどうだ？」

「ふん、別にないよ。……ていうかアホ女とやめてくれない?」

「はあ? アホにアホって言ってるのが悪いんだよ。見たぜ? あのランク昇格試験の映像。思わず腹抱えて笑っちゃったよ、あれ。狙ってたのか」

「……別に関係ないでしょ」

「ああ、ないね。だからとりあえず、また後で笑っておくことにするわ」

「……………」

「なんだよ、だから言いたいことあるなら言えって」

「……うるさいよ。ほんとよくしゃべるね。少しは黙ってられないの?」

「性分なんだね。むつつりはからかいたくなるんだよ」

「……………ふん」

「……………かつ」

「……………あれだもんなあ」

どうしてあんなにも仲が悪いのだろうか。いくらなんでも不自然だろう。まさか相性なんて言葉で片づけるわけにもいかない。曲がりなりにも管理局員としては感情よりも理性を優先しなければならぬ時がある。むしろそういうときの方が多だろう。そういう時に相性がどうか言っている余裕はない。カイトは正式な管理局員では無いとはいえ、有事の際は問題だろう。

「どうにかしないとなあ」

やはり部隊長としてはどうにかする必要がある。だが、どうすればいいのかが思いつかないのだ。スバルはともかくカイトに口で勝てるとは思えないし。どうすればいいのかなと悩む。

「……やっぱユーノくんに相談かなあ」

脳裏に浮かぶのは幼馴染の顔。カイトの義兄だ。カイトを止めるのは彼しかいないだろう。それに最近あまりあつていなかったから、なるべく早く会いたいなあと思う。この前あつたのはもうホワイトデーだったか。やたらおいしいビスケットケーキを貰って女心が傷ついた。

「たしか夜はバーベキュー……」

そこで挽回しなければならぬだろう。曲がりなりに喫茶店の娘だ。食後のデザートでも作るべきか。普通の料理でははやてに敵わない事は明確だ。やはり勝負するならデザートだ。

「うん、頑張るの！」

拳を握りしめ、ガッツポーズ。

高町なのは。不屈のエースオブエースと言われているにも十九歳の恋する乙女には変わりないのだ。そして、そんな彼女の横で、

「なんか……大丈夫かしら」
「あはは……大丈夫ですよ、多分」

第五章 先見えぬ葛藤

日は沈みかけ、機動六課によるバーベキューが始まった。

後から来たはやてで主導で鉄板焼きがふるまわれる。さらには海鳴在住の知己も集まって、かなりにぎやかな宴会となっている。

鉄板の上肉や野菜が焼かれていく。耳に心地よい焼ける音に、香ばしい匂いは素晴らしい。

これらの鉄板焼きは部隊長である八神はやて自ら作られたものであり、最近なにかと忙しい彼女の身を考えると実に貴重な食事だ。

鉄板ごとにグループで別れ、エリキヤロにザファイラにフェイトの使い魔であるアルフに義姉であるエイミイ、なのはの姉である高町美由紀。それから、はやてと同じタイミングで来たカイトの義兄であるユーノとなのは、フェイト、はやて、アリサにはやて達を迎えた月村すずかに守護騎士の三人。

そして、少し小さな鉄板にいたのは、

「……」

「……」

カイトとスバルだ。先ほどまではティアナやリインもいたがその二人もその場の空気に耐えられず別の鉄板に行ってしまった。

だから、二人は同じ鉄板に向かい合い。

「おい、それ俺が育てた肉だ。返せ」

「やだね、こういうのは早い者勝ちって相場が決まってるでしょ」

「どこの野蛮人の常識だ？」

「……って、とか言いつつ私のキープしてたお肉取らないですよ！」

「早いモノ勝ち、なんだろ？」

「……くう」

「け」

本当にイライラすると、目の前にいる少女を見てカイトは思う。やること一つ一つがやたら感に触ってしょうがない。自分でもよくわからないが胸から湧き上がる感情は制御が難しい。

「ていうか、なんでお前俺の前で食ってんだよ。他行けよ他」

「私の勝手でしょ、そっちこそどっか行ってよね」

「いやだね、俺がどこに座ろうと俺の勝手だろ」

「私だって私の勝手にしよう」

「……………」

「……………」

視線がぶつかり合い火花を散らす。

ああ、ホントに意味が解らない。どうしてこんなにも腹立たしいのだろうか。自分自身わりと社交的とは言わなくても、大概の人間を自分が面白いように接することができると、大体の相手はからかいの対象だ。例外といえども相性が悪いというか、扱にくいのはやてとかやたら生真面目で面倒臭いギンガだ。

それでも。

それでもこうやってガキみたいにガン飛ばしまくっているなんて、あまりにもらしくない。

「んー」

「な、なに」

目の前の少女を見直してみる。

空を思わせる青い髪に青い目。活発そうな雰囲気。ニツコリ笑えば実に快活な笑みを浮かべるだろう。もつともカイトは見たこと無いのだが。肉体だって近接の格闘少女だけあって引き締められていて、出るところは出て引つ込む所は引つ込んでいる。体だ

「見れば悪くない。

それなのに、どうしてむかつく。

「ああ……なんだっ」

「どうにも言い難い感情に思わず髪をかきむしる。スバルが変な目で見るが気にしない。

「なあ……」

「な、なに？」

「なんや、また喧嘩か？ あかんで仲好くせな」

「……」

「……」

いきなりはやてが現れた。カイトは見慣れているがスバルからは珍しい私服姿だ。

「なんや？ なんで二人して半目で見えるん？」

「……なんでこつち来たんすか。兄貴の所にいなくていいんすか？」

「部下の人間関係のフォローも部長の役目や」

「……本音は」

「あえて少し離れることでユーノ君の気を引く作戦」

「なあ、こんなのが俺らの上司って正直どうよ」

「……正直、ちよつと」

「だよなあ」

「なんでそこだけ仲好くなるんや」

別に仲いいつもりはない。というかよくよく周囲に意識を向けてみれば周りの連中がチラチラこつちのことを気にしている。ユーノやアリサ、すずかは笑いをこらえてるようだし。

「まあ、あれや。肉の取り合いとかで喧嘩しちやあかん。まだいろいろあるんやからな。なんやつたなはやてちゃんがなんか作ってやるか？」

そういつて得意げに腕まくりするはやて。まあ、人間性はともかくとして、料理はうまいのだ。

「じゃあ……焼うどん大盛りニンニクピタピタで」

「私も、それで」

「りよーかいや」

鼻歌交じりに鉄板にむかって料理をしだす。というか、よくうどんとかあつたな。

「……」

「……」

目が合う。またなにか文句の一つでも言つてやろうかと思つたが、周りがチラチラ見

てくるので止める。

嫌味以外でなにを言うか迷って、なにも出てこなくて髪をくしやくしやくとかいて。

「……」

「……」

何もでてこなくて、黙ったままだった。



湯船に顔を突つ伏して顔をぬらす。パーベキューも終わり一、二時間程度はたった。所代わつて海鳴のスーパー銭湯だ。二十人近くの大人数での入浴はこういうところではないとできない。その上で男はカイト、エリオ、ユーノしかいないし、他の客も少ないから男湯はほとんど貸し切りだ。女湯は知らんが。

とりあえず、エリオはユーノに押しつけて、カイトは一人露天風呂だ。ここが一番色々しい。

「……」

肩までを少し熱めの湯に浸か、思考するのはやっぱり、スバルのことだ。

正直言うならば、どうして自分がスバルのことを気に食わないのかはある程度理由は解っている。

つまり、いつか、かつて、ずっと昔のことの残滓。

もうすでに消え去ったはず物語の欠片。

それが今も自分たちに残り続けていて、自分のそれと、スバルのそれが互いに毛嫌いしているということだろう。

かつての世界のことでカイトが知っていることはそれほど多くない。記憶とも言えないような事ばかりだ。完全に覚えているのは仲間内でも兄のユーノにあのクソうざい、かつてと何一つ変わっていない変質者くらい。かつてを結構多めに継承しているアリサでも自分と繋がりが深かったことしか覚えてないらしい。すずかは大分乖離してゐるから本当に最低限の知識のみ。

そして、自分は。

「何とも言えないんだよなあ」

どうやらかつての自分はかなりのひねくれ者だったらしい。今までに数回だけ、その意識に触れたことがあるがひねくれ者というか頭イカレていた。あんなのが自分のかつてだとか頭が痛い。ただのチンピラだろ。

結局、今は継承でも解脱でもなく宙ぶらりんな状態でいるのが現状だ。ユーノも腐れ変質者もなにも言っていないし。

だから、気になっているのは一つ。

「あいつの事を嫌ってるのは、俺自身かあの野郎かってことだ」

そうカイト・S・クォルトリーズがスバル・ナカジマを嫌っているのか———それ

とも■■■■■が■■■■■・■■■■■を嫌っているのか。どちらなのか。

他人（いやこの場合他人というのは違うが）から感情を植え付けられているのは腹が立つ。

今ここで生きているのは■■■■■ではなくカイト・S・クオルトリーズなのだから。いくら思想とか受け継いだり、能力をある程度受け取っていてもそれは譲らないことだ。

今を生きているのはあくまで自分だという矜持はある。

「……………カーツ」

濡れた髪をかく。頭がこんがらがった時の自分の癖だ。

本当にそこらへんどうなっているのだろうか。正直、魂とかそこらへんの仕組みは漠然としか解っていない。他人のことなら解る事もあるが、自分のこととなるとまた別だ。そして同時にあの野郎ならそこらへんうまくやれるだろうからムカつくのだ。

スバルとどう向き合うべきか。

わからない。

カイト自身、ここまで腹が立つというか、ムカつくというか、ある意味で気になる存在はいなかった。

だから、思うのだ。

「もしかしたら」

もしかしたらと。淡い期待にも似た感情。アレは自分の求めていた存在かもしれないと思うのだ。これまで会ってきたのはどいつも違った。ユーノもあの腐れ変質者も別だ。

だから、もしかしたら。

何度も思い、そして

「……………」

「……………」

湯船のすぐ近く、胸をタオルで隠し顔を引きつらせたスバルがいた。

「……………」

「……………」

湯気で在る程度隠れている——わけではない。ある法術により魔人として存在するカイトの感覚ならばあつてないようなものだ。

すでに髪は洗ったのか青い髪はしつとりと濡れていてところどころに肌に張り付いていて、艶めかしい。普段から体のラインが出るバリアジャケットを着ていたが、結構着やせる体型らしく胸は何気に大きい。はやてよりは間違いなく大きいだろう。

タオルで乳首そのものは隠されているとはいへ、体に張り付いているからうつすらと形は解る。15歳という平均よりも恐らくは大きく上回る胸に対し、腰はキュツとくびれている。なにより目を引くのが引き締まったカモシカの如き脚。遠目に見てもうっすら脂肪もあつて、肉感的で美しいとすら言える。

少女と女性の間地点の限定された美しさがあつた。
それにさすがのカイトも一瞬言葉を失つた。

「……………」

「……………」

「……………スウ」

スバルが大きく息を吸つた。

「んなっ!」

どう見ても叫ぶモーションだ。それを見て、カイトは湯船から飛び出す。人外染みた身体能力にものを言わせて叫ばれる前にスバルの口を塞ぐ。

「ん——! ん——!」

「だあ——! あんま暴れんなっ! つうか、あれだここは混浴だっ! てめえに叫ぶ権利はないんだよ!」

「!!」

混浴、という言葉にスバルの動きが止まり、目が見開かれる。どうやら知らなかったらしい。

「ここは子供風呂と露店風呂だけ混浴だ。叫ぶのはお角違いだぜ? わかるよな」
「……………」

納得はできたのか、叫ぶのは止めてくれた。

内心、息をつく。いくら混浴とはいえこの状況で叫ばれたら間違はなくカイトが悪者にされる。特にアリサ辺りは強烈な打撃をしてくるだろう。それは避けたい。

とりあえず、叫ぶ様子もないのでスバルの口から手を離れた。

「はあ、まったくなんでこうなるのやら……」

離しながら距離を取る。さすがにいつまでも至近距離というのは拙いだろう。

嘆息し、スバルの顔を見れば、

「……………」

顔が真っ赤だった。そういえば、湯船から飛び出したから今カイトは掛け値なしに全裸だ。どうやら刺激が強かったらしい。案外真っ赤に頬を染めた顔は可愛かった。

「んだよ？ どうしたあ？」

あえて、局部を隠さずに普通に答える。

それに対し、スバルはさらに顔を赤くし、右腕で自分の胸を、左手で腰回りを隠すように自分を抱きしめる。

「べ、別に……………なにも」

恥ずかしいならば戻ればいいのだろうに。羞恥心よりもここでカイトに対して引くと言うのが許せなかったのか、動きは無い。

「ま、あれだ。安心しろよ。なにもしねえからよ」

まあ、なにかできるようなタイミングでもないし。それにやっぱいくら体は良くても、なんかダメだ。

「ていうか、あれだ。まずそんな気になんねえし」

「……………」

どうやら意味が理解できなかったらしい。未だに赤い顔で首を傾げたから、

「だから、勃たねえんだよ。お前じゃ無理」

半分本気で半分冗談。そのくらい割合で言った言葉にやはり最初は理解できなかったようで。首を傾げたままだった。

それでも一拍開けてから気付いたようで、

「……………んなつー！」

なんとも言えない表情と声を上げていた。それが存外おもしろかったから、

「ま、あれだよな。フェイトさんとかシグナム姐さんくらいのワガママボディじゃないとな。あーでもどうだろうな、お前存外いい体してるし、フェイトさんか……………すずかさんの声真似とかしてくれよ。あれならすげー燃えると思うからよ」

「…っ……………！」

したり顔で呟くカイトに対し、スバルが思っていたことは一つだ。

ちよつとだれかアルカンシエル持ってこい。

スバルだってどういう意味か理解できる。元々ミッドチルダではそこらへんの知識を得るのはわりと早い。結婚自体も男女共に15から可能だ。だから、知識としてはスバルだって持っている。

つまり、自分が果てしなく馬鹿にされているのはわかった。

「……………」

もはや、体を隠すことはせずに——跳んだ。

「まあ、そんなことには……………って、んがっあ!？」

なにやら勝手に領いていたカイトへと跳躍し、同時にそのにやけ面に拳を叩き込んで湯船の中に叩き落としながら人生で初ともいえる口汚い叫びを放っていた。

「ぶっ殺すよこのふにやちんがああああああああつ!!」

第六章 求められる選択

「さてと、ここらへんね。魔力反応があった場所の一つは」

「はい、この辺りに間違いないですね」

「そう」

ティアナはホロウインドウに浮かぶ地図とキャロからの確認を受けて、周囲のビル街を見回す。

銭湯から上がった後、海鳴市の三か所に魔力反応が三つ発生した。海鳴の主街区、海鳴公園、神社だ。聖王教会から受け取ったロストログアの情報ではダミーを作るとの事だったので、主街区にティアナたち新人メンバー、公園にライトニング二人、神社にスターズの二人が配置された。はやてやシャマルは臨時拠点のアリサの別荘だ。

「……特になにもありませんけど」

「気を抜かないでよ、エリオ。ていうか、カイトはどこいったのよ。アイツ銭湯から見えないんだけど」

「……わ、わわわ私はなにも知らないよっ!?!」

「なんでそんなにアンタがどもるのよ」

顔を赤くしたスバルが高速で首を振っているがなにかあったのだろうか。銭湯の時はなにか凄い叫びと水音がしていたけど。

「……でも、ホントに何にもない気がするけどねえ」

周囲を見回しても、何も無い。シャマルが張ってくれた結界は海鳴全域に展開されており、視界は僅かに黄緑色だ。視界の中にはなにか特別な事はないし、クロスミラージユからの検索でも特に反応はない。ロングアーチからも同じだ。

これではただの都市観光だ。

「どうしましょうね……間違いつてことはないでしょうし」

「一度戻りますか？」

「うーん、そうね。それよりも他の場所の隊長たちに連絡しましょうか。私たちに何もなくても隊長たちにならなにかあるかもしれないし」

「あ、じゃあ、なのは隊長たちには私がするね」

「おーけい、じゃあフェイト隊長には」

「あ、僕がします」

「お願いね、エリオ」

スバルとエリオが同時にホロウインドウを展開し、各隊長陣へコール。それを見て自

体が進めばいいいなあ、と思い、

「あーそれはだめだよ、うんだめだ」

「……………!!」

暴力的なまで魔力と重圧が四人を襲った。

「……………んな……………!」

体が動かない、全身を鎖かなにかで雁字搦めにされたかのように動作不可能だ。指先一本ですら動けず、僅かに動いたのは口と目だけだ。

理解ができない、なにが起きてるかわからない。今自分の胸の内に占める感情が何な

のか理解不能だ。

それでもなんとか視線を動かす。向けたのは、自分たちの正面のビル。可能な限り視線を上げて、見た。

「あ、あれー、なんか反応してくれないのー?」

目算で五、六階程度のビルの屋上の縁ギリギリに彼女は立っていた。

黒緑の軍服の少女。無手で困ったように頭をかいている。

それが今自分たちを縛りつけている重圧の正体。

「……………!!」

二度目の驚愕はエリオとキャロに大ききかった。なぜならばその少女があまりにも似ていたからだ。彼女たちの養母であるフェイト・T・ハラオウンに。

年の頃がティアナとスバルと同じで十五、六程度だろう。髪の色金はなく青でありツインテールであり、言葉使いも若干幼い。

だがそれだけ。

言葉にすればその程度の違いしかない。それほどまでに酷似しているのだ。

まるで生き写しにしか見えないほどに。

「えっと……困ったな、どうすればいいんだっけ。たしか……」

驚愕している四人とは反対に困ったように頭をかいている少女は懐からなにかメモ書きを取り出し眺め、数度頷く。

ビルから飛び降りた。かなりの高さからあったにも関わらず、着地の音は限りなく小さく、彼女自身なんの痛みもないように見えた。

そして、そのまま四人に向かって歩いてくる。一歩ずつ近づいてくるたびに彼女から発せられる重圧は増してくる。外見上はただの少女にしか見えない。だが、なぜか。まるでその少女に何十人、何百人、あるいはそれ以上にも及ぶ存在感を感じる。

「はじめて、でいいよね」

身から発せられる重圧には似つかわしい可憐な笑みを浮かべ、そして。

「***** ** *****」

もはや消え去った世界の音と言葉でだれかの呪を発した。

「ぐあっ！」

「ヴィータ副隊長っ！」

鉄槌を振りかぶったヴィータに赤紫の炎弾がぶつかり、階段から転げ落ちる。大きさとしては小さい。速度もそれほどなかったはずだ。なにも関わらず、彼女が展開した障壁は一瞬で燃やし尽くされ消える。

そう、燃やされるのだ。破壊されるのではなく、炎弾が触れたところから燃やされて消えるのだ。

それは障壁だけでなくこちらの攻撃も変わらない、魔力弾も砲撃も同じように燃え尽くされる。

障壁を燃やされ、弾き飛ばされるように階段を転げ落ちるヴィータに一瞬意識が向けられ、

「よそ見している暇がありますか？」

「く……い！」

頭上からの声と共になのはにも滅却の炎弾が落ちる。誘導弾ではない直線弾だから、階段を飛びおける事で回避する。同時に自分は誘

導弾を生みだし、

「アクセル……シュートッ！」

『accelle shoot』

桃色の誘導弾の数は十六。なのは自身にリミッターが掛けられているとはいえ、その威力や誘導性能はピカイチ。空中を疾走し、階段の頂上、神社の社に仁王立ちする少女へと向かう。

その少女は驚くほど顔立ちがなのはに似ていた。年はいくつか下、恐らくスバルたちと変わらないであろう。髪は濃い茶色でショートカット、瞳は凍えるようなアイスブルーではあるがそれ以外は酷似している。

あとは身につけているのが無傷の軍服か、とどこどころ燃え落ちたバリアジャケットの差しかない。

そして、迫りくる誘導弾に対し

「ふむ」

なにもせずを受けた。防御の仕草も障壁を張る事すらなくそのまま受けたのだ。爆発により土煙が上がり、

「ヴィータ副隊長！」

「おう！」

復帰していたヴィータが階段を駆け上がりながら鉄槌を振りかぶる。いや、駆けるといふよりも、超低空の飛行魔法か。それにグラーフアイゼンの後部ジェットによる加速も追加。未だ残る土煙に飛びこみ、

「ラーケンハンマーアーー！」

大気を打撃しながら、ぶち込み、

「ぬるい」

「なっ……！！」

「そんなっ！」

土煙が晴れる。

そこで見たのは、無傷でグラーフアイゼンの一撃を手のひらで受け止める少女の姿。

「ぬるいです。その程度ですか」

言葉と共に放たれたのは音速を軽く超えた右の蹴りだ。

「がっ—」

それはヴィータの腹に突き刺さり、彼女は血の塊を吐き出しながら階段を転がり落ちる。

「ヴィータちゃん—」

「……………すまねえ、なのは」

なんとか途中で受け止める。もはや二人ともバリジャケットはボロボロであり、いたるところにも火傷がある。特にヴィータは今の蹴りにより腹にかなり酷い火傷を受けた。

「やれやれその程度ですか」

頭上から失望したような声が落ちてくる。アイスブルーの瞳は言っていた。この程度かと。

「あなた……………何ものなの？」

神社に到着したなのはとヴィータに突然襲い掛かって来た軍服の少女。魔導師かも不明だ。なにせ、エース級魔導師であるなのはとヴィータ二人でも傷一つ付けられないのはいくらなんでもおかしい。なにせこの少女はデバイスすら使っていないのに。それに滅却の炎もだ。通常の魔力変換資質の類ではない。

「なにものか……ですか、それはこちらが聞きたいのですがね」

「どういう、意味だ！」

「さあ、どうでしょうか。ただ」

少女は高みからなのはたちを見降ろして言う。

「あなたたちが彼の愛にふさわしいかどうか。彼の守護の慕情に包まれる価値があるのか見極めたいのですよ」

「え……？」

彼の愛。守護の慕情。

その言葉がどうしようもなく、なぜだかわからないけど二人の心を、魂を揺さぶる。

「だから、早く起きなさい。いつまで遊んでいるのですか？」

僅かに気を緩ませれば動けなくなりそうな重圧を発し、さらには巨大な炎弾を二人に放ちつつ、

「*****」

もはや消え去った世界の音と言葉でだれかの呪を発した。

銀の短髪に緑の双眼。他の二か所にいる少女と同じ黒翠の軍服。

そして、彼女も他の二人と同じように、年と色は違っても八神はやと酷似している。「ホラホラ、どうした。貴様ら！ 閃光と烈火の名が泣いておるぞ！」

些か古めかしい言葉を向けられたのは、

「くっ……！」

「貴様あ……！」

怒りを滲ませた声をあげるのはフェイトとシグナムの二人。神社のなのはたちと同じようにすでに満身創痍に近い。だが、それでも、

「ハアッ！」

「ゼアッ！」

裂帛の叫びと共に、戦斧と長剣を振り少女へと走る。

雷撃と炎撃を纏った一閃。どちらも魔力変換資質という稀有なレアスキル持ちの二人。

だが、それらに少女は顔色一つ変えず、むしろ笑みを濃くし、

「やれやれ、そう焦るでない」

手の平から闇色の球体が生まれる。一つ生まれたそれは二つに分かれ、フェイトとシグナムの斬撃の軌道上に割り込むように飛ぶ。

「っー」

闇球は斬れる。だが、斬れた瞬間に拡大するのだ。それぞれの刃が触れた瞬間に直径数メートルにまで拡大し、二人を飲み込む。彼女

たちの足場でされ球体に削り取ってだ。

「む……ちとやりすぎたか？」

同時に、球体が雷柱と炎柱を上げて弾き飛ばされた。

「バルディッシュユ！」

「レヴァンティン！」

『load cart ridge』

バルディッシュユとレヴァンティンから空のカートリッジが三つずつ排出され、バルディッシュユはサイスフォームに移行、レヴァンティ

ンは鞆に納められる。同時に、二人の魔力が劇的高まり、

「ハーケン——スラツシユツ!!」

「紫電——一閃！」

雷光と炎熱の双閃。大気を震わし、焦がしながら迫る。どちらもただ単に変換した魔力で刀身、一閃を強化して放つという基本にして奥義。フェイトやシグナムの技量であれば十分に必殺になりうる。

だが、

「ハッ」

必殺になりうるはずの双閃は、少女の指のみで受け止められていた。

「そん、な……」

「ばか、な……」

「残念ながら、今の貴様たちでは我は傷つけられぬよ」

言葉と共に彼女の身体から魔力が放たれ、二人の身体が弾き飛ばされる。数メートル転がり、起き上がるが追撃はない。

あきらかに舐められている。当然だ、これまでの攻防でこちらは傷一つ与えていないのだから。デバイスすら使っていない相手にも関

わらず。

「あり得ない……なにか、あるはず」

「応とも。ちゃんとタネも仕掛けもある。もつとも例えそれを解いたとしても貴様らにはどうしようもないがな」

「くっ……!」

「貴様は一体なにものだ。なぜ……主はやてと同じ姿をしている」

「さあ? それは我が聞きたいくらいだよ」

「ふざつ………！」

「ふざけてなどおらん。実際我とて望んでこのような容姿になつたわけではない。それに貴様の主と我は別人だ。顔と声が似ているだけにすぎん」

僅かに嘆息しながら少女は言う。確かに、目の前の少女は似ているがはやてとは違うようだ。

だが、しかし。ならば余計に理解ができない。

「理解できぬか？　そうであるうな。できぬはずだ。だがしてもらわないと困る。なあ、いい加減思いだしたらどうだ？」

「え……？」

「何を……？」

僅かに重圧を緩ませながら、それでも凄惨と言える笑みを浮かべ、さらなる闇球を生みだしながら、

「*****」

もはや消え去つた世界の音と言葉でどれかの呪を発した。

クライアはいた。その身に纏うのは白の軍服の上からさらに黒緑の軍服を袖を通さずに羽織っている。

彼が呟いたのはこの世界の言葉ではなかった。

それはすでに消え去った世界の残滓。もう使われなくなり、今となっては理解できるのも数人のみとなつてしまつた旧世界の言語だ。

その言語で呟かれたのは名前、だろうか。

悼むように、慈しむように、溢れる愛と共にその名は紡がれていた。

「ああ……」

今の彼の気配は驚くほど薄い。本来の魂の質から考えれば、その場所にあつたとしても誰も気が付いてもおかしくはない。いや、弱い魂なら彼の余波で押しつぶされ消えることさえありえるだろう。

だから、今の彼は極限までに弱体化している。

例えば、それでも眼下の部下とも言える少女たち三人を楽にねじ伏せられるとしてもだ。

彼の目は今劣勢に立たされ、あるいは何もできずに固まつた彼女たちへ。

かつての咒を呼ばれ、回歸しかけている彼女たちへ向けられており、

「そう。思い出してくれ、その魂の輝きを。それは潰えてはならぬ、砕けてはならない閃

光だ」

かつて、共に駆け抜けた何よりも輝かしい世界。ぶつかり合い、戦い、魂を燃焼させた疾走。

それは今もまだ彼女たちの内に眠っている。

「だから思いだし、その上で選んでくれ。かつてを継承か解脱かどちらかを」

かつての魂を継承しろ。

かつての魂から解脱しろ。

どちらでもいい。

どちらかを選べ。

「今この瞬間を生きている矜持があるのならば」

決してかつてにそのまま塗りつぶされるな。

確かに回帰と黄昏の魂は素晴らしい。誰にも穢させはしない。

だが、

「君たち自身の輝きもまた、負けず劣らぬと信じているから」

そうだ。君たちは僕の宝石だ。この新月の世界での輝きとて本物なのだ。

「その輝きを僕が必ず守るから。我が愛は守護の慕情。このくそつたれの世界でその輝きを守りきろう。君たちのその生を弄ばせたりなどしない」

そして、緩やかに右手を上げる。

「頼むよ。先駆者として、魅せるものを見せてくれ。ディオスクロイ、ファタル、ガウス」
振り下ろし。

『ヤヴオール・マインヘル
了解しました、我が主』

無限の物語の中、最も翡翠の加護を受けた三つの物語が紐解かれた。



青髪の少女が四人に近づいていく。別段なにかしらの攻撃行動をとっているわけではない。

ただ近づいているだけ。それだけでティアナたちの動きは封じられている。

いや、それ以上にかつて失ったはずの咒を呼ばれて、動けない。だから、彼女たちには何もできなかった。

それには少女はなにもしない。もとより回帰を促すのが少女たちの役目だ。

だから動きを見せたのは新たな介入者。

「ん？」

少女がティアナたちか目を離し、道路の先を見る。よく見れば、こちらへとかなりの速度で走る単車が迫ってきて。

「……………ん？」

「ハッハー！」

おもいきり引かれた。

「へぶうっ!!」

およそ少女にあるまじき呻き声を上げながらぶっ飛ぶ、地面を転がって大根おろしの気分を味わった。それでもすぐに復帰し、

「な、なんだあー！」

「通りすがりのイケメンだよ」

数メートルドリフトして降り立った彼は事も何気に言い放った。

赤いジャケットにダメージに入ったジーンズで腰にはシルバーチェーン、首にはネツクスレス。

髪は一体どういう風に染めたのか黒髪と白髪が半々に混じっていて、体は針金を束ねたかのように細い。筋肉の類が無駄なく絞り込まれている。

言うまでもなく、カイト・S・クオルトリーズだ。

「よう、レヴィ。相変わらずアホ面晒してんな」

「なにすんだコラー！」

「いやだって、お前がコイツらに手出してるかと思っただからよ」

「まだなにもしてないよーだっ！ それにしたって普通轢く!?!」

「まー、いいだろ？ そんなくらいじゃあ傷1つつかないんだからよ」
「そういう問題じゃない！」

顔を真っ赤にして叫ぶレヴィと呼ばれた少女とケラケラ笑うカイト。

レヴィはともかくカイトはあまりにもいつも通りだ。

「……………カイト」

ぼつりと、ティアナもエリオもキャロも名前を呼ぶが反応はなく。スバルはなにも言わなかった。

「それにほら、他の連中がいい空気吸ってたからな。こつちも盛り上げようと思ってよ」
「余計なお世話だあ！ もう怒ったもんねー！」

「はっ！ そうそう。最初からそうしろよ。元々やる事はそれしかないだろ」

二人からさらなる魔力が溢れだす。

その余波で再びティアナたちは動けなくなるほどの魔力。少なくともティアナたちのデバイスでは計測不能なほどだ。

『……………形成』

Y e t z i r a h

二つの幻想が形を成す。

レヴィのはフェイトの持つバルディッシュの色違いであるがそこに込められた神秘は桁が違う。

カイトのそれは二丁の大型の自動拳銃。それぞれの銃身に分厚い刃を備えた短剣。灰色の双銃剣だ。同時にカイトの手から鎖が生み出され腕に巻きつく。

刃は即ち狼の爪であり、銃口という名の顎から吐き出させるであう弾丸は牙。鎖は狼の尾だ。

主の命を受けた雷光が大気を轟かし、灰色狼が牙をむく。

そして、幻想を形成させたのはこの二人だけではない。

全く同時に神社と海鳴公園の二か所でもそれは起きた。

神社では巨大な炎弾を軽い手の払いのみでかき消したアリサ・バニングス。

海鳴公園では闇玉を己の身で吸い消した月村すずか。

なのはとヴィータ、フェイトとシグナムを守るように現れた少女たちと同じ軍服姿のアリサとすずかだ。

そして彼女二人に相對する少女もまた同じだ。

二人の少女は前に手を突き出し、アリサは右手を頭上に左手を腹の前に構え、すずかは右腕を掲げる。

そして、四者四様に、

『———形成』

Y e t z i r a h

それぞれの幻想を形成す。

滅却の劫火と共にレイジングハートとの色違いの魔杖が。

深淵の闇と共にシユベルトクロイツとの色違いの十字杖が。

灼熱の双焰と共に二振りの大太刀が。

夜への咲き誇りと共に爪刃と鋭牙、赤眼が。

彼女たちがそれぞれその身に宿す幻想が形成されそして。



「聖槍十三騎士団黒円卓第七位、カイト・クオルトリーズⅡガウス」

「同じく第十位、レヴィ・ザ・スラツシャー」



「聖槍十三騎士団黒円卓第五位、アリサ・ローウエル・バニングスⅡデュオスクロイ」
「同じく第九位、シュテル・ザ・デストラクター」



「聖槍十三騎士団黒円卓第四位、月村すずかⅡファム・ファタル」
「同じく第八位、ロード・ディアーチエ」



それぞれお互いに己の名と魔名を誇らしげに、謳うように名乗り合い、

「!!」

第七章 先駆者たるもの

掲げられた十字杖の周囲から闇色の短剣が生まれる。数は二十五。

「エニシアルダガー！」

叫びと共に短剣は中空を疾走する。一本一本が音速と同程度の速度。真つ直ぐに進むのではなく鋭角的な軌道を描き、さらには自ら淡く発光することで軌道を読ませない。

「よいつしよつとつ！」

予測困難だからこそ月村すずかは小手先ではなく、膂力任せの力技にて対処した。右腕を大きく振りあげ、掬いあげるように振り下ろす。大ぶりの一撃だ。無論それは唯の一撃ではない。形成位階に移行し、鋭く尖った犬歯、赤く染まった瞳。そして数センチは伸びた爪がその腕の振りを尋常ならざるものにする。

それにより生じたのは爪撃による衝撃波、そして掬いあげの余波で捲りあげられた地面だ。

それらが壁となつた飛来する短剣からすずかの身を守る。

「チッ！」

ディアーチェの舌打ちが聞こえそれにすずかは笑みを浮かべた。防御として使った土壁はそれだけのためではない。目くらましとしても意味を持つ。土の壁を作った瞬間に弾けるように走りだす。自分から見て左に、ディアーチェからして右にだ。

飛び出した瞬間に、

「破壊の剣！」

土壁を突き破って闇色の剣が突き刺される。

「おっとと」

即座に避けたはずだが、破壊の剣の速度が僅かに上回りすずかの軍服の二の腕を焦がす。肌には傷はないとはいえ避けきったと思ったので少しショック。

「腕上げたね、ディアーチェちゃん」

「無論。お主らと違ってピチピチであるからな！ 成長の余地も大きいというものよ！」

「むか」

カッチーン、とすずかの頭の中で音がした。

「ピチピチって、幼いだけでしょうが！」

ディアーチェに対して、大きく弧を描くように疾走する。一步踏みしめるごとに彼女の筋細胞がギリギリと音を立てて強化されていく。素の身体能力ならば黒円卓において

ユーノを除けばトップクラスなのが彼女だ。だからこそディアーチエは動くことなく砲撃や射撃に徹底しているのだ。彼女とて近接戦闘の心得はあるが、すずかに対抗できる練度ではない。

一步ごとに地面を砕きながら疾走するすずかにディアーチエも短剣を放つことで阻害するがもはや止められるものではない。

互いの距離が数メートルまで近づいた所で、膝を深く沈め超加速。

距離を一瞬で零にし、

「はああっっ!」

先ほどと同程度の爪撃を放つ。それも一撃ではなく両手による双撃だ。大気を割碎しながらディアーチエへと叩き込まれる。

「くっ……い!」

それに対してとっさにディアーチエは障壁を展開させた。無論彼女とてコレが悪手だというのはわかっていた。だがディアーチエの機動力では下手に回避すればその隙を突かれるのみ

だ。だからこそ彼女は防御を選び、

「それはダメだよね? 私に対してはさ!」

障壁は爪撃の衝撃波は受け止めきつたが、彼女の爪に触れた瞬間に消えた。まるで

ずかに吸収されたかのようにだ。同時に彼女から感じる魔導の気配が跳ね上がる。

それが月村すずかⅡファム・ファタルの形成位階における能力だ。

触れたものから魔力、生命力、精力、気力といった諸々を吸収し己のものとする。触れなければならないという制約があるもの、彼女の戦闘スタイルとは相性がいい。すずか**は**基本的インファイトタイプだ。五体を駆使した力技メインの動き。触れた勢いや触り方でも吸収量は変わるが、力任せに叩きつけるというのでもかなり効率がいい。

そして彼女の聖遺物こそが彼女自身に流れるその血。

『夜の血』。

エイウイヒカイト

『永劫破壊』はその身に宿した時に自身の魂と深くリンクする。既知世界のソレとは若干の変更点はあるもの基本的な事は変わらない。だからこそ生まれた時から、あるいはそれ以上前、母の胎内に眠る内から全身を駆け廻っていた彼女の血は高度にリンクしている。聖遺物との相性においても、黒円卓においてトップクラスだ。

「分っているとも……!」

その彼女の特性はわかっていた。もとよりお互いの手の内はある程度読めているのだ。防御という悪手を選んだ以上、それを挽回するために手段も用意してある。

障壁が消えた瞬間に十字杖から魔力の塊を生み出す。先ほどフェイトたちに放ったのと同質のソレだが威力は桁違い。

闇球は即座に、

「ディアーチエとすずかの間を割り込む。

「なっ……い！」

「ハッ！」

すずかは目を見開き、ディアーチエはすずかを笑い飛ばしながら、同時に闇に呑まれた。

それは彼女達二人を中心にした半径五メートルもあるほど巨大な球体だ。地面と大気を大きく抉り取る。

そして、

「ぐ、ああっ！」

ディアーチエが顔を歪ませながら弾き出た。肩に無惨な爪痕が刻まれ、血が流れている。

闇が晴れてたそこには額から一筋の血を流したすずかだ。

基本的に通常の魔導も吸収できるが、ディアーチエの形成は聖遺物である『エルニシアクロイツ』の出現と魔導の強化。魔力ダメージ、物理ダメージだけでなく魂にもダメージを与えることができるようになる。だから、威力は半分以下に落ちるもすずかにダメージを与えることはできた。

「ふう、さすがやるね」

「当然、だとも」

僅かにディアーチェはふらつきながらも口元を歪め笑う。

「なんのために我らが死合っていると思うのだ」

「まあ……私たちは目的違うわけだけどね」

「それが気に食わん。なぜ……いや、この役目に当てられた理由はわかる。わかるが

……あの変質者の言いなりというのは……！」

「……………それは、まあ、確かにね」

ディアーチェからなにかものすごく言い難そうな怒りと屈辱を滲みだし、すずかもらしくなく顔をしかめている。あの変質者に対していい思いなど一つもない。すずかもディアーチェも自ら望んでこの場にいるのが、それでもどうしてもあの男は気に食わない。

「まあ……だからこそ」

「そうだね」

互いに頷きつつ、十字杖を構え、爪と牙、赤眼をさらに輝かせる。

「*****」

「ちゃんと見ていてね」

それは、二人の戦いを呆然と見るだけの二人に向けられていて。
そして、

「じゃあ、第二回戦」

「始めるとしよう」

△

「はああああああ!!」

闇夜の中、アリサ・バニングスは天へと紅蓮の二刀が炎の花を咲かせる。それは頭上、神社の階段頂上へと放たれる超高速の二刀斬撃。迫りくる滅却の炎弾をすべて斬り落

とすために刀身から炎が噴出し、花を咲かせるのだ。

「パイロシューター」

小さく、静かに、厳かに告げるのは階段頂上にいるシュテルだ。手にしているのはなのは愛機であるレイジングハートに酷似した魔杖、彼女の聖遺物『ルシフェリオン』。形成位階によりもたらされる効果は、ディアーテエと同じで通常魔導の超強化だ。

それにより、周囲に展開した炎弾の数は三十二。

普通の魔導師ならば全て真つ直ぐの飛ばせるかどうかの数だが、彼女はそのどれをも完全に完全に操作できる。

そしてその一つ一つが活動位階と変わらず、滅却の性質を持っている。

燃えろ、燃えろ、燃え尽きろ。万象尽く燃え尽きろ。

その念が込められた炎に対し、

「はっ！」

笑い飛ばすように滅却の炎を焦がしていく。

シュテルの炎がなにもかも燃やし尽くす炎ならばアリサの炎はなによりも激しく燃え上がる炎だ。

言うなればプラスとマイナスの炎。相反する性質の炎がぶつかりあい、相殺される。

「どうしたのよ、シュテル。らしくもなく熱くなってるじゃない。そんなにお冠かしら

？」

「ええ、あの変質者の言いなりというのも腹が煮えくりかえりそうですが、それ以上に」
言葉は続きながらも、二つの炎のぶつかりあいは止まらない。シユテルが飛ばした炎をアリサの炎が斬る。

「なにかしら？」

「私のオリジナルがどうにも不甲斐ないので、失望していました。ええ、まさかあの程度とは」

「あのねえ……あの子はあるや私と違って聖遺物無しでしょうが。それなのに私たちと同じことを求めるのは無理があるでしょうが」

聖遺物と『永劫破壊』^{エイツイヒカイト}。人間を魔人へと押し上げる埒外の術法。それによる恩恵（あるいは呪いか）の一つとして聖遺物の用途は聖遺物を使った攻撃でしか殺せないというのだ。単純な物理的破壊力や魔力ダメージではなく霊的な攻撃が必要なのだ。

そして六課の面子には聖遺物も『永劫破壊』^{エイツイヒカイト}を保有しているのはカイトを覗いていない。いや、彼女たちに限っていうならばそれらを介さずに霊的な攻撃をすることもできるが、未だその境地には達していない。

「だとしても、少しはなんとかできるかと思っただですよ」

「無茶苦茶よアンタ……」

「まあ、私だつて自覚してますよ。ですが感情とは別ものですよ」
「……そうね」

苦笑を浮かべる。どうにもシユテルは普段冷静にみえてかなりの激情家だ。沸点が低い、とでもいうのか。

まあ、それは人のことは言えないのだけれど。

苦笑しながら、二刀を握る手を強くする。

彼女の聖遺物は黒田卓内でもかなり特殊な部類だ。すずかのような自身の血、シユテル、デアアーチェレヴィのように彼女達専用に作られたわけでもなく、カイトやギンガのように親から受け継いだわけでもない。

掛け値なしの五年前、彼女たちの黎明期においてアリスだけはただの少女だったのだ。

だからこそ、当時彼女には聖遺物にできるものがなく、かわりに、
「かつてから引き出すことにしたのよね」

アリス・バニングスとしてではなく■■■としての記憶。彼女から受け継いだ中から抽出し自身の魂と、そして、

「あの子の魂で形成具現したのがこの二刀。『緋緋色金』」

かつてから受け継いだ不滅の誓いの炎に他ならない。

「さあ行くわよ」

「望むところですよ」

魔杖の周囲に炎弾が浮遊し、紅蓮に二刀が熱量を上げる。

「*****」

「さあ、思いだしなさい」

それは、二人の戦いを呆然と見るだけの二人に向けられていて。

そして、

「燃え上がりなさい」

「燃え尽きなさい」

□

「ほらあ、歯食いしばれよっ」と！」

笑い混じりに銃口から狼の牙が放たれる。射撃の基本とかそういうのを全て無視した曲芸撃ち。しかし正確に、疾走するレヴィイへと向けられていて、

「当たらないもんねー！」

雷光を宿したレヴィイは尽くを避けきる。異常なまでに早い。二人の戦闘が始まってから十数分経つが実に一度も被弾していないほどだ。弾丸を回避しながらカイトに接近する。

だが、

「んで？ 当たらなくて、その次はないのかよ」

鎖の音を立てて空中を疾走する。五、六本が広がるよう伸び、レヴィイを絡め取ろうとする。

それに対し、レヴィイは地面スレスレになるまで身を低くし、さらに加速する。四本は

避け、二本は戦斧で打撃することでさらに加速する。そして、

「いいねえ、また早くなつたな」

「くっ！」

戦斧と銃剣が鏝競り合う。レヴィは顔を歪め、カイトは、煙草を啜えたまま笑つたままだ。

なぜなら、銃剣に触れた瞬間にレヴィの雷が弱まったからだ。

「おいおい、そんな顔すんなよ。わかってるだろう？ おめえじやダメなんだよ」

「こ、こんな美少女を捕まえて何を言うか。まあカイトみたいな不感症に好かれても嬉しくないからいいけどねっ」

「別に俺不感症じゃねえつての。ただ、ちと理想が高いだけだ。ほら、俺ってロマンチストだし？」

「言つてろ、この馬鹿！」

叫びながら無理矢理レヴィが捻りだした雷撃が迸る。再び二人の距離が離れ、

「雷神衝！」

レヴィの掌から雷槍が五本放たれる。超音速で放たれるそれはあまりにも早い。だからこそ、

「よっつと」

カイトは勘のみで引き金を絞った。大体こんな感じか、その程度の考えしかなく、しかしそれらは正確に雷槍に突き刺さる。

カイトの弾丸が雷槍に触れた瞬間に雷槍が消えた。かき消されるように、押しのかられるようにだ。それでも、かなり威力と速度は削がれレヴィへと向かい、彼女それでも回避した。

「おいおい、そんなチキるなよ。ろくに威力込めてないんだからよ」

「そう勧められて当たると思う？」

「いんや？　むしろ避けきつてみせろよ」

再びの曲芸撃ち。だがそれまでよりも銃弾の数は遥かに多く、また銃弾同士がぶつかり合い跳ねまわる。跳弾による面攻撃。

「あああああ!!」

叫び、駆け抜ける。全身に雷光を宿して疾走する。鋭角的になんども屈折し、時に雷槍を放つ事で進路をこじ開ける。

「はっはー！　やるねえ！」

レヴィの超高速軌道にもカイトの笑みは揺らぐが、

「じゃ、こういうのはどうだ？」

再び、鎖がジャララと音を立てる。いや、今度はそれだけではなく、アスファルト、す

なわち地面と擦り合う音も伴っていた。見れば、地面にカイトの鎖がレヴィを中心の円を描くように敷き詰められて、

「つつ!!」

すぐさま飛びあがるが、

「残念、遅いな」

レヴィの右足首に鎖が絡まる。その瞬間に雷光が一気に弱まった。

「ぐっ……!」

「ほらよつと!」

そしてからめとられて動けなくなったレヴィにカイトは再び発砲する。

動きが止められ、レヴィはとっさに障壁を展開するが、

「が、つああ!!」

紙きれのごとく突破され、レヴィの身体に突き刺さる。確かにレヴィは高速機動型であり、防御よりも回避に重視している。だから防御力はかなり低いが、それでもこれほどまでに簡単に破られるほどでもない。

だから特殊性はカイトにある。

「分つてるよなあ。お前じゃな足りない」

そう嘯き、再び発砲する。無論、レヴィも黙っている訳ではない。

「足りなくて……結構！ ていうか、さ」

全身から雷光を可能な限り捻りだす。すぐに鎖により減衰するがそれでもさらに放出し僅かに緩んだ隙に抜け出す。

空中で戒めから解き放たれたものの、かなりの速度で地面に激突し転がる。それでも、なにごとともなかったように起き上がり、

「……誰なら、足りるんだよ」

その言葉に始めてカイトは笑みを消した。かわりにしてゆったりという笑みをレヴィは浮かべる。

そうだ、彼にとつてレヴィが足りずシユテルも、ディアーチェもアリサもすずかも足りない。ならば誰が足りうるのか。

一体誰が孤独に喘ぐ灰色狼と共にあるとこののか。

「うるせえ、余計なお世話だ」

「ま、いいけどね。だからこそ、こうしてるわけでしょ」

「別に？ あれはアレだ。なんとなく楽しそうだからやってるだけだつたの。ま、てなわけで」

戦斧にさらなる雷光が迸り、灰色狼の牙が剥く。

「いい加減目覚ませよ、屍野郎にイカレ犬……それにむつつりさんよ」

「***** ** ** ** **」

カイトの言葉は二人の戦いを呆然と見てるだけの四人に向けられ、レヴィはそれを訂正するように叫び、

「んじやまあ、第二ラウンドだ」

「次は当たらないもんね！」



そして。今日の前で行われる戦いに対し、より強く回帰を促されたのは、三人。魂が自己のより深いところまで沈んでいき、そこにあるかつての魂と触れあっている。

それは旧世界の残滓でしかないが、強き輝きを放つもの。彼女たちはそれに触れ、同時に。

▼

『喜んで、学べ』

Discel libens

▼

かつて、どこかで聞いたことがあるような詐欺師の声を聞き。

「あ、ああ……ああっ………！」

「ぬ、ぐ、うああっ………！」

内二つは塗りつぶされようとされたがそれに抗い、

「*****」

内一つは。

「*****

*****」

かつてに魂のほとんどを塗りつぶされ回帰していく。

「これ……は」

目の前に立ちふさがった朱色の少女にシユテルは目を見開く。

今、彼女たちが放った殲滅の熱線と紅蓮の十文字は聖遺物の使途ではない人間、いや、Sランク魔導師でさえ一瞬で燃やし尽くすはずであり、アリサやシユテルに対してでも致命傷にはならずともある程度の負傷を与えたであろう炎。まして唯の人間であるウィータが受けければ魂すら残らず消え去るのは道理なのだ。

だが、

「あたしが……守るんだ」

眼前に鉄槌を構える彼女は健在だった。火傷の一つすらない。

殲滅の熱線と紅蓮の十文字は彼女に触れた瞬間に消え去った。いや、消え去ったというよりもひしゃげて潰れた。

「なるほど……穢れを引きうけようとするのではなく、穢れを潰し消し去ろうという願いですか」

かつて、ある男がいた。

愛する人の救済と守護を願った男が。大切なモノのために己がありとあらゆる穢れを引き受け、護りたいと言う願いを持った男が。

それをシユテルは知っていた。かつてを持たず、蛇に予備として作成されたシユテル

にかつての魂は無いが故にそれに触れたわけではない。

だが既知感。あくま知っているだけだが、確かに知っていた。

その男はもういない。それはあくまで旧世界の事象だ。

だが、だからといってその愛が、願いが跡形もなく、虫けらのように消え去った訳ではないのだ。

彼の——■■■■の魂は生易しいものではないのだ。世界を、時を、座を超えて今八神ヴィータの魂としてここにある。

だから、

「あたしは……屑だ」

ああ、そうだ。八神ヴィータは屑だ。どうあつても叩き潰すことしかできない。醜い存在。

シグナムは気高い。シャマルは優しい。ザフィーラは頼もしい。なのはやフェイトは綺麗で、教え子たちは可愛い。そして——ユーノは馬鹿ではやては好きだ。

だからこそ、ヴィータは彼らを、彼女らを守りたい。自分にはそれしかできないから。だからこそ、それをするのだ。

「あたしの大切なものを穢すなんて赦さねえ」

その願いがヴィータに触れることごとくを殴殺し、塵芥と化す。砕き、潰し、消す。

己の半身である『鋼鉄の伯爵』^{グラールファイゼン}と共に、己のかつての魂を糧として、八神ヴィータはその刹那、シユテルと同等の高みへと存在していた。それは限定的な創造位階。かつての魂がそこにあつたからという理由のみで使えるからにすぎない。だから時間がないと、己うちに眠る魂が教えてくれる。

護れ、護れ、護れ。

その真摯な願いがヴィータを後押しするのだ。同時にかつての魂に限りなく高水準で同期、同調している。その上で尚、

「だから———ぶっ潰れろお———！」

己の意思を以って鉄槌を振りあげ段殺の一撃を放つ。本来なら彼女のかつての魂は闘争を欲したのではない。求めたのはあくまで救済。故に、の魂と同調して段殺の意思と魔導を宿すのはヴィータ自身の魂に他ならない。

それは翡翠に笑みをもたらし、水銀に苦笑を与える。

地面へと振り下ろされた鉄槌は段殺の波動となつてシユテルと向かう。階段を押しつぶすながら迫る波動に、

「プロテクション!!」

シユテルの身体よりも大きい茜色の障壁を展開する。両手で掲げたそれで段殺の波動を受け止め、

「ぬ、ぐつ、うあ、あああああああ!!」

障壁にも滅却の性質はある。だから、例えそれが形のない波動であってもその性質は発動しているはずだ。攻防一体の性質を誇るはずだが、

「くつ、あ……あ、あああ……!」

障壁の所々が砕けて、ほころびが生じる。両手に激痛が走り血飛沫が上がり、爪も砕ける。

両足では堪え切れずに神社の中に押し込まれていた。十数メートルは押し負け、そこでようやく止まる。

受け止めきった、が、両腕は軍服が肩まで破け血に塗れ、爪は砕かれ、指は所々おかしな方向を向いて曲がっている。

それはただ攻撃が通ったというだけではない。

彼女がその魂を回帰させた上で己の祈りを貫いたのだ。

そして、それを成したのは彼女だけではない。

ウィータが目覚めたのとまったく同時に海鳴公園において、デИАーチエの闇球とすずかの爪撃による衝撃波がぶつかりあう瞬間、

大気へと振り抜かれた魔剣は激痛の焦熱となってディアーチエと向かう。大気を焼き焦がしながら迫る焦熱に、

「インフェルノ!!」

より濃い闇球が出現した。その正体は超高密度の重力の塊だ。触れたものを超圧縮する闇だが、

「な、にい……!?!」

焼き斬れる。全てを沈めようとする闇が気高く燃え上がる不死鳥に断ち切られる。

「っ……ぐっ、ああ……!?!」

とっさに障壁を張ったが対して効果もなく焼き斬れる。魔力と魂を燃料として形成される障壁が焦げされるのだ。

障壁が両断され、体に触れる寸前に全身からありつたけの魔力を放出して防御した。それでもシグナムの炎は一瞬だけとはいえに6000度、すなわち太陽の表面温度に近づいていた。

かなりの魔力を保有するディアーチエだがそれでも防ぎきれものではない。軍服は融解し、ディアーチエの肌を焦がす。彼女の白い肌が見るも無残に重度の火傷に犯されていた。

「ぬ、ぐっ……!」



ヴィータとシグナムがそれぞれの眼前の戦いに割り込んだと同時にだった。

「*****」

それは戦斧と銃剣で鏖競り合いをするレイヴィとカイト。二人の中央に出現した。

「ーっ!？」

「なあっ!？」

「*****

*****」

何もかも砕けろという念が込められた、破壊の鉄拳が落ちてきた。

とつさにカイトがレヴィの腹を全力で蹴り飛ばしていた。レヴィの肋骨が何本か折れて、口から血が吐き出されたが文句はない。

アレに比べたら万倍マシだ。だからレヴィは蹴り飛ばされた勢いを利用し全速力で距離をとり、カイトも鎖を少し離れた電柱に巻きつけて引き寄せて距離を開けていた。

「おいおい……」

「くっ……っ！」

二人の中央、十数メートルに彼女はいた。

「スバ、ル……？？」

「スバルさん……？？」

「でも……え？」

ティアナもエリオもキャロも彼女の名前を呼んだ、だが反応はなく。

「ありや、ちげえよ」

つまらなそうに、腹立たしそうに、吐き捨てながらカイトはいった。

それは、

「くそつたれ、簡単に塗りつぶされやがって」

カイトとレヴィの中央に落ちてきたスバル・ナカジマ——その姿をした

なにかに向けられていた。

「……………」

彼女は静かに、ぞつとするほどなにも言わずに立っていた。構えもなく棒立ちといつていいほどだった。だが、

「ちよーと、まずいんじゃない？　これ。ここまでとか聞いてないんだけど」

「どーせあれだろ？　またあの腐れ変質者の野郎が何かしたってことだろうが。たくつ、余計な事してくれやがるぜ」

スバルを間にしながら行われるやりとりにも彼女はまったく反応せず佇んだままだ。

「まあ、これがあの腐れ野郎の狙い通りなんだろうな。そこらへんどうよ」

「どうもこうもないじゃん。第一こつちに回されたからやつてるだけで、ほんと嫌だつての」

「ま、だろーうな」

スバルでなく、その前。かつての存在が回帰し、魂を塗りつぶしている今この状況こそがあの変質者の狙いなのだ。

なんとなくだが、他の二か所からは一瞬だけ懐かしい気配を感じたがすぐに消えて、

なじみのものに変わっている。

だからうまくいかなかったのはここだけ。

「やっべ、兄貴に怒られるかもな」

「それはいやだなあ……」

まあ、怒られるのはカイトだけでレヴィはそう怒られはしないだろうが、カイトはあえてなにも言わなかった。

「んじゃ、まあ」

「とりあえず」

レヴィとカイト二人の魔力の質が上がっていき、より高度の強化していく。

そして、それに当てられたように。

「……………」

スバルが無言で拳を構えた。ただ両の拳を握りしめているだけというのにも関わらず、馬鹿げた圧力を感じる。

だが、むしろそれこそ上等だというように、カイトとレヴィは笑い、

「ぶん殴って叩き起こしてやるよ!」

「ぶっ飛ばして戻してあげるね!」

カイトは引き金を引き、レヴィは疾走を開始する
そして、

「……………来い」

漏れた声は到底いつものスバルからはかけ離れた声。動きすらも普段とは違う。錆びた鉄塊のような、すでに壊れたような声。

疾走し、超高速で接近するレヴィと、カイトから放たれた銃弾。雷光と灰色狼の牙。それに対し、

「――」

動きそのものは決して早くなかった。むしろ緩慢とすら言える動作だった。だがにも関わらず、

「くっっ！」

「ちっっ！」

振り下ろされた戦斧は手の甲で受け止められ、弾かれ、その動きのままカイトの銃弾を殴る。本来ならカイトの弾丸は相手の動き阻害することができるが、しかしスバルはまったくその動きを損なうことなく弾丸を打撃した。飛来した二十にも及ぶ全てを殴りつけ、消失する。そして再び鉄拳はレヴィを狙い、

「避ける馬鹿っ！」

レヴィの腹に巻き付いた鎖が彼女を引つ張る事で救った。空振りした拳はアスファルトの地面に落され、

爆砕した。

その思わず舌打ちする。背後でもテイアナたちが息をのむのがわかった。当然だろう、いくらなんでもスバルにはあんなことできなかったのだから。

「けっ……夜のティーガーってか？ 大して面白くもねえ。おいレヴィ！ あれ、絶対喰らうんじゃないぞ。さつきみたいにちよーつとあたつたてならともかくまともに喰らえば死ぬぜ？」

「わかつてる。でも、これが……」

「ああ、幕引きつてやつだ」

幕引きの拳。デウス・エクス・マキナご都合主義。破滅の鉄拳。言い方は幾通りもあれ、示すことは一つだ。

「触れたらジ・エンド。まあ、さすがに問答無用つてほどまで戻つてるわけじゃねえが、やばいつてことには変わりないよな」

そう、本来ならばほんの一瞬でも触れたならばそれだけで消滅されるはずだ。先ほどのように手の甲に弾かれただけでもレヴィのバルニフィカスは滅ぼされ、レヴィ自身も死んでいたはずだ。だが彼女は生きているということは幕引きも完全に回帰していいという事。

「ほら……いくぜえ！」

「言われなくても！」

再びカイトが発砲する。二丁拳銃をフルに使い、放った弾丸は三十を超える。その上で尚跳弾させる。

「光翼斬!!」

バルニフィカスが形状を斧から鎌へと変化し、その上で光輪を放つ。銃弾らを追いつき超高速で回転する雷のリング。ビル一つ分くらいなら容易く両断するそれに対して

も、
「甘ん」

僅か一言と共に幕引きの拳を振うことで打ち砕く。やはり、不完全とはいえやはりその性質は確かだ。本来、雷撃系の攻撃はオートで麻痺付与だ。だから、仮に殴って消したならば、ある程度は動きが鈍るはずだが、

「――」

欠片も鈍ることなく、カイトの銃弾を正確に幕を引いていく。ただ、殴ると言う行為だが極限域まで高められ、見惚れるようなキレを以って打撃する。

そしてそれは当然スバルの動きではなく、

「デジャブリやがる……」

「俺が探してたものかもしれないってなあ」

ずっと昔から探していた。ずっと独りで、孤独で。それでも探していたのだ。

五年前、ユーノたちと出遭い黎明を迎えるその前から。変わらず、孤独な灰色狼は求め続けてきたのだ。

ユーノは違った。アリサは違った。すぐかも違った。シユテルもレヴィもディアーチエもギンガも。なのはもフェイトもはやてもシグナムもヴィータもシャマルもザフィーラもエリオもキャロもティアアナも違った。他にこれまでであった人たちも違った。大体がすぐ見ればわかるのに、スバルだけはよくわからなくて。

かつての既知感からの不快感によるものなのか、それとも自分自身の感情なのかはつきりしなかった。

だから、今だって確証があるわけでもない。

それでも、

「むかつくんだよ……!」

ああ、この感情がなんなのか。まったく見当はつかない。ガキみたいな癩癩なのかもしれない。

それでも。それでも。

「てめえ、みたいな」

お前みたいなやつ相手にしてもなにも楽しくは無いです。

確かに俺はかつて■■■■だったことがあるかもしれないが、今の俺は違う。

■■■■ではなくてカイト・S・クオルトリーズだ。

そして、俺がいつもケンカしてるのはお前じゃねえんだよ。

「てめえ、みたいな、わけわからねえ死に損ないが！ ソイツの口で！ 面で！ 声で！
ふざけたこと言ってるんじゃないやねえええつつつ！！」

そして、灰色狼の雄たけびと共に、彼の魂が、渴望が具現する。

レイヴが制止の声を上げるが、最早そんなものは聞こえていない。

『餓えていた 飽いていた 孤独に喘ぐ灰色狼 辿り着いたのは妖精住まう湖』



『呪いの笛に誘われて 虚ろな戦士に導かれて

人おらぬ街から 赤い目の魔法使いの言うように

辿り着いたのは妖精郷 巡り逢ったのは孤高の妖精姫

近寄るなど叫び咆える この牙はお前を喰い破る この爪はお前を斬り裂くのだから

ああ なのに 触れたいと願う 美しいたった一人のあなたに

終わりを告げる鐘が鳴る 夜明けを教える鐘が鳴る ひびき とどき きこえてくる

繋いで繋いで繋がって あなただけには別れを言いたくないから

孤独な灰色狼は孤高の妖精姫と 共に夜明けを迎えよう 『

それは他の誰でもないカイト・S・クオルトリーズだけの渴望。

唯一無二がほしい。

その願いが、祈りが、内向きを集い、彼という異界を創りだしている。

それは『永劫破壊《エイヴィヒカイト》』、活動、形成のその先、第三位階。歌い上げられた唱は彼の魂の唱だ。

『創造』

B r i a h

紡がれるのは彼だけの物語。

『妖精郷の餓え飽く灰色狼』

外見上はなにも変わらない。変わったのはカイトの内面。

求道型として発動したことによって彼というのは一時的に存在する一つに異界だ。

そして、

「おおおおおおおおおっつ!!」

疾走する。

すでにレヴィもティアナたちのことも頭になかった。見据えているのは——唯
一人。

「」
当然ながらそれとてカイトの変化は感じていた。これまで迎撃のみだった彼女が始めて前が出る。やはり速度としては早くはない。だが、遅いというわけではないのだ。

むしろ、ローラーブレードを使わずに走っていることを考えればかなり早い。
灰色狼の疾走と戦車の前進。

距離は瞬く間に零になり、

「おらっあー！」

「ハアアッ！」

カイトの拳とスバルの拳が激突する。

本来ならば、ここで勝負は終わっていた。幕引きの一撃が不完全とはいえ、このように全力で触れた以上は破滅は逆らえない。

デウス・エクス・マキナ
「都合主義は伊達ではないのだ。発揮されたそれから逃れるには同種の力によって相殺するか、発生した瞬間からその存在を止めるかしかない。

そして、カイトはそのどちらでもない。

故に彼は必滅の運命を辿るしかない。

だが、

「――！」

幕引きの拳を受けたにも関わらず、カイトは笑みを浮かべていた。

「だーかーら、お前じゃねえんだよ。お前じゃあ、な」

目を見開き、絶対のはずの鉄拳が塞がれたことにより、彼女の身体僅かに硬直した。

その僅か一種、その内に懐に潜り込み、拳をぶつけ合ったのとは逆の手で、スバルのバリアジャケットの襟を掴む。

「いい加減、よ」

掴み、そして思い切り体をのけ反らせて、

「目え覚ませやあ——スバルッ!!」

額をスバルの額に叩きつけた。

「……………ッ……………!?!」

額同士が衝突し、周囲一体に轟音が響く。

レヴィやティアナたちが呆然として口を開けていた。

あの幕引きがカイトに効かなかったこともそうだし、なによりまさかあんな喧嘩殺法を行うとは予想外だった。

「……………」

「……………」

額を突き合わせたまま、数秒固まっていた。

そして、声を上げたのは、

「痛つったああああー！ー！ー！ー！ な、なにしてんのさつ、カイトツッ!!」

「あ……」

テイアナたちから驚きと安心が混ざった吐息が零れる。

今痛みに叫びを上げたのは間違いない、見慣れた、いつものスバル・ナカジマだったから。

「痛った！ 痛った！ ほんといつもいつも、なにしてくれるのさ、カイトはさー!」

「あーうるせえ。お前、助けてやったんだから感謝しろよな」

「はあ!? なんのことさつ!」

「おまつ! まさか憶えてねえのかよ! 今間違はなく俺のファン増えたぞ!」

「またわけのわからない事を……ていうかホントに痛い……」

「そりゃ俺だつていっしょだつての……」

二人が同時に額を押さえながらその場に座り込む。

「……はっ!」

カイトは右手を当てた額から少しだけドロツとした感触を感じた。

第九章 癒えぬ傷

「つと、つと……か……」

八神はやては手にしたメモを見ながら、辿りついた場所に照らし合わせる。少し迷ったがなんとか昼前には着けた。

そこは街外れの教会だった。記憶の限りでは見た事はないし、ざっと見た限りではそこそこ新しそうなのでここ数年の間に創られたのだろう。

「孤児院……やつたか」

事前に聞いた話によれば教会というよりも孤児院らしい。事実、塀の向こう側では何人かの子供も笑い声が聞こえてくる。

それを聞くと少しだけだが、感傷的な気分になってしまう。

「ウチが子供の時にもあればなあ……ていうのは、意味無いことやな」

小さなころ広い家でたった一人で暮らしていたことを思い出す。幼い頃に両親を失い、仕送りだけは十分だったから独り。今思えば年が二桁に届かない子供が独り暮らしといういろまずかったのではないだろうか。ミッドならともかく最近の地球ではいろ

いろと問題になるだろう。

あの孤独感はどうにも忘れられない。気温が低い訳では無かった、空調や家具の類はむしろ一般家庭よりも充実していただろう。お金だった十分にあつた。

でもそれでも。

ずっと寒かったのだ。ずっとさみしかった。

なにしている時でもずっと。

九歳の時に守護騎士と出遭つて家族を得て、すずかと知り合つて、闇の書事件の後はなのはやフェイトという友達にも出逢つて。ユーノに恋をして、今もしていて。管理局で機動六課を立ち上げた。

だから、今は寂しくないけど、あの時の孤独は忘れられないし。

なによりも、

「……リインフォース」

祝福の風、幸いのエール。はやてが名前を上げた子。彼女の欠片で、彼女の妹といえるリインフォースツヴァイが生まれた。そのことはなによりも祝福できることで、あの時はユーノにはかなりの迷惑をかけてしまった。体でお礼をしようとしたら断られたというか、邪魔されたのだが。

まあ、それはいつかするのでいいとして。

やっぱり、彼女のことは忘れられない。

「あかんなあ……」

いつまでもくよくよしている自分が情けない。どれだけ思いつめても彼女は帰ってこないのだから。

失くしたものは帰ってこない。だからこそ、この刹那を大事にしよう。

そう言ったのは誰だっただろうか。

なぜかとても大切な言葉のような気がする。なによりも美しい祈りだと思うのに誰の言葉だったかが思い出せない。

思いたいたいののに、思い出せない、もどかしさ。

その祈りが何よりも美しいのに。ああ、どうしても思い出せない。

そう、ずっと昔。在りし日のいつか。

かけがえのない刹那の日々があつたはずなのに——

「いつまで突っ立っているのですか？」

「……え」

唐突に声をかけられた。見れば、教会の扉の前に一人の少女がいた。見れば、既視感。十五歳程度の聖祥中学校の制服姿の少女だ。今日は平日だから、サボリということになるのだろうか。数年前までは自分も着ていた制服だ。が、既視感はそれに対してではなく。

「お初にお目にかかります。聖槍十三騎士団黒円卓第九位、シユテル・ザ・デストラクター。普段はシユテル・スクライアを名乗っています。以後お見知りおきを」

昨夜の映像を見ていてわかってたとはいえ、やはりなのはにそっくりだったの少女だ。中学時代のなのは髪形を変えてカラーコンタクトを入れれば、この通りになるだろう。雰囲気はかなり違うがそれでもそっくりだ。

この少女が昨夜、なのはとヴィータ二人を圧倒したのだ。途中アリサに横やりを入れられて、重傷を負っていたが見た感じでは大丈夫そうだ。

「……八神、はやてや。それで」

「話しは中でどうぞ。彼がお待ちです」

「……」

シユテルが扉を開け、中に促される。彼が、ということだけで僅かに眉がひそまったのを自覚した。それに自分ではまだまだだなどか思いつつ、彼女に従う。

教会の中は、普通の教会だった。数列の長椅子に正面の十字架にパイプオルガン。大きいとはいえないが見た限りではよく手入れされているし、高級品のようだ。無人だったが教会には用は無いようでそのまま突っ切り、奥の扉へ進む。

「(ちんちん)」

中に入れば、小さな部屋だ。談話室、とでもいいのか上品な家具に中央に机とテーブルがあり、そこには、

「やあ、はやて。昨日ぶりだね」

「……昨日ぶりやな、ユーノくん」

にこやかに笑うユーノ・スクライアがいた。

「それでユーノくん、いろいろ聞きたいんやけど」

「うん、構わないよ。ああ、でもシユテル？ 自己紹介はした？」

「無論です。ですので私のことはお構いなく。ではお茶でも持ってきてますね」

ペコリと小さくお辞儀し、別の部屋に去っていく。

「なあ、ユーノくん。あの子シユテルって言うたか？ さつきスクライア名乗つとたけど……」

「ああ、戸籍上は僕の妹でね。つまりはカイトの妹でもあるわけだけど……」

「ユーノくん！」

「はい？」

「なのはちゃんそつくりの女の子に義妹プレイというのはどういう事や……！ やつてほしかったらうちだつてやったのに……！」

「あれ？ 最初に出てくるのがそれ？」

机を強く叩いて指を指されたユーノが僅かにたじろぐ。

「まあええ。この話は置いといて。真面目な話しの方をしようや」

「相変わらずだね……ホント。いいよ、なんでも聞いて」

「ならまず、あのシユテルつて子。それにフェイトちゃんにクリソツなレヴィに、うちにそつくりなディアーチエは」

「プロジェクトFATE、人造魔導師計画によって生み出された君たちのクローンだ」

「……やっぱりかいな」

「予想してたかい？」

「まあ、な」

プロジェクトFATE、人造魔導師計画。

優秀な魔導師を作る為に胎児の時から魔法的処置をするという計画だ。先天技能を埋め込んだり、優秀な魔導師の遺伝子を使ったりするのがまあある。倫理的に問題があるとされる犯罪だ。

そして、フェイト、エリオ、そして少し毛色は違うがスバルもそれで生み出された存在だ。フェイトやエリオはそれでかなりのトラウマはあるし、スバルだってある意味二人よりも直

接的な問題で他人に負い目を負っている所がある。

「五年くらい前にまあ、いろいろあって三人まとめて保護して。ああ、カイトも一緒だったんだけど。それでこっちの世界連れて来てね。それで三人育てるのと一緒に孤児院

設立してね。まさか、エリオたちと同じ所にはできなかつたし」

「ちよいまち、ここユーノくんが設立したんか?」

「そうだよ? と言つても出資したただけであんま顔ださないけどね。普段はちゃんとした人がやつてくれてる」

「そうやつたんか……、知らんかったなあ。はやてちゃんシヨックや……」

「はは……、まあ、ずっと隠してたしね。他には?」

「……………聖槍、騎士団つてのは?」

「聖槍十三騎士団黒円卓。Longinus Dreizehn Orden。L.:D
∴O。元々はこの世界の組織の名前から取つただけだけど知らないかい? ドイツ軍のオカルト組織」

「知らんがな。なんでユーノくん知ってるんや」

「僕を誰だと思ってるのさ」

「思わず納得する。」

無限書庫。次元世界のありとあらゆる情報を収めるあそこならばそれぐらいすぐに知る事ができるだろう。

「ま、簡単に言えば僕、そして無限書庫の私兵かな。ほら、あそこつてなにかと物騒じゃん?」

「そうやなあ」

書庫、といつてもあそこは危険極まりない。はやてもユーノ個人の手伝いにしろ、研修にしろ何度かあそこの仕事をしたことがあるが、書庫などという生易しいものではない。ダンジョンとか迷宮とか戦場だろう。通常の仕事、所謂情報整理などでまずは常人は音を上げる。

検索魔法に読書魔法。

この二つは通常の魔法以上に脳を酷使するのだ。はやては数時間使用し続けただけでリタイアしたし、なのはやフェイトもそう変わらなかつた。シャマルはかなり続いたけれど、数日間ぶっ続けで使用を続けるユーノには及ばない。

そして、それですらまだ序の口だ。

本当に危険なのは未踏破地区だ。全次元世界に存在する情報の全てが詰まっているというのは伊達ではないらしく、未だに開発されていない区域が大量にある。というよりもそちらのほうが多いだろう。未踏破地区には文字通りの迷宮だ。トラップなんかは当たり前で、即死級なものや、危険度Sランク以上の魔獣も良く出現する。

未踏破地区にて良い所を見せようと意気揚々として、思い切り罠に掛りまくったなんてこともあったし。

「まあ、それはええ。ユーノくんやて結構な地位やさかい、私兵どうこうはうちもなんも

いわんけどな」

空気が僅かに張り詰められる。はやての目が細まり、ユーノは薄い笑みを浮かべる。そう、ここからが本題だ。

「アリサちゃんとすずかちゃんが戦つてるといふのはどういふことや？ それにあの子たちはどうしてウチらと戦つたんや？」

それこそがわざわざこんなところまで来て聞きたかつたことだ。昨日の戦闘のあと、シユテルたちもアリサもすぐに姿を消した。追跡するもすぐにロストしてしまった。だから、昨日は全員を回収して、治療に専念。唯一なにかを知つていそうなカイトに聞いても口を割らず、この場所を教えてくれただけだった。シグナムやヴィータは付いていこうとしたが、体の様子が未だに不鮮明だったから検査に専念。他のフォワードメンバーも傷と原因不明の激痛により動けないままだ。だからこそこうして一人で来ているのだ。ザフィーラとリインは拠点の防衛にあたっている。

「まあ順番に話そう。まず、アリサとすずかに関しては、彼女たち二人が望んだからとしか言いようがない」

「……………どういふことやっ？」

「いや、僕としても。あの二人には戦ってほしくないんだけど……やめてって言っても聞いてくれないんだよ」

「待ちや。あの二人には魔力は無いはずやんか！　なんで、あんなことができるん!?!」
映像で見た限りでは、なのはやフェイトを圧倒したシユテルたちと互角に戦っていた。

昔、あの二人を調べた時は大した魔力はなかったはずなのに。

言うまでもなく、アリサもすずかも家族に等しい。守護騎士やなのはたちと同じくらい大切な存在だ。確かにミッドに移住してからは会える機会は減ったが、メールは頻繁にしていたし、季節の節目やイベントごとには地球にも帰っていた。

その折りに彼女たちには特に異変はなかったはずなのだ。

少なくとも、魔導の気配は無かった。

そんなはやての思考を断ちきるように、

「はやて。魔法だけが全てじゃないんだよ」

「……!」

愕然と息をのむはやてに対し、ユーノは表情を緩め、

「まあ、あの二人のことは心配しないでよ。今も疲れたから家で寝てるだけだろうし、多分後で行くだろうから本人たちに聞けばいい」

「……わかったわ。それで昨日のことは」

「それは——」

「知りたかったんですよ。私たちのオリジナルがどんなものなのか」

声のしたほうを見れば、お盆にカップとポットを乗せたシユテルだ。机に近寄り、ユーノとはやてにお茶を出す。紅茶の優しい香りがして、高ぶった精神が少し落ち着きた。

お茶を並び終えたシユテルはユーノの斜め後ろで座らずに立ったままで、

「自分の元となった存在がどの程度なのか、気になって当然でしょう？ 昼間の間にうろちよろしくくれたから地球に来ているのはわかってましたから。奇襲させてもらいました。結果は……まあわかるとは思います」

「まあ……そういうことだね。大目に見ては……くれないかい？」

「無理やな」

「バツサリと言いきる。」

「昨日のあれは立派な公務執行妨害や。まだ、ロストロギアも見つかつたらん。なにかあつたらどうするつもりや」

「ロストロギア……ね」

「それ、これのことですか？」

何度目の驚愕か。シユテルが取り出したのは小さなアタツシユケース。差し出されたソレを軽く魔力を走らせて検査すれば、

「これ、ウチらが探していたはずのロストログア……!?!」

「何日か前におかしな魔力を感じて、言ってみればそれがありませんでしたね。扱いに困ってましたがどうかしてくれませすよね、管理局員殿？」

「っ……!」

「シユテル」

「失敬」

言いつぎたことを自覚したのか、彼女は下がり目を伏せる、どうやらもう発言する気はないようだ。だが、なにを言いたいのかはわかる。

つまり、

ロストログアは見つけてやったのだから見逃せ。

そういうことだ。

舐められているし、昨日のことを考えれば舐められていてもおかしくはない。

それに、もう公務執行妨害というのは通じない。なにせ、公務が発生することはなかったのだから。

それに管理外世界での魔法行使も通じないだろう。ユーノが魔法以外の力といった

からには、間違いないのだろうから。現地由来のものならば取り締まる事はできない。
「……………」

ありていに言つて詰みだった。完全にこちらの意見が封殺され、あたえられたこの口ストロギアを持つて帰るしかないだろう。

それ以外にできることはない。

だから、最後。

最後に一つだけ聞いたことは、

「ユ一ノくん、は」

それは機動六課部隊長八神はやて二等陸佐に言葉ではなく、ただの少女としての言葉で、

「うちの、味方で、いてくれんか……?」

その言葉は、自分でも情けなくなるほどか細い声で視線も下に向いていて。

そして、返事はすぐに帰つて来た。

「あたり前だよ」

机越しから伸ばされた彼の手のはやての頬に添えられる。一見女性に見間違えそうなのに、手の平はゴツゴツとしていた。

「僕は君の、君たちの味方だ。何があっても絶対にそれだけは変わらないよ。君たちのことは何があっても守るから」

手から伝わる温度は温かくてやさしい。

ああ、自分でも単純だと思う。いくらなんでも攻略難易度低すぎだろう。

これだけで全部納得してしまい、いいかと思ってしまう。

まあ、でもこんなこと言われたらしようがないだろう。普段頼りなさげなくせにこういう時は卑怯だと思う。

惚れた弱み、なんていうのはありきたりすぎるか。

「じゃあないな……、はやてちゃんは懐に広い女やで納得してあげるで」

第十章 知らねばならぬこと

機動六課が海鳴から帰還したその日に深夜。

六課の誰もかもが疑問と驚きを残し、釈然とせぬまま、それでも疲労により誰もが自室に倒れこんだ夜だった。

ミッドチルダの主街区、その少し外れ。そのさらなる路地裏の地下に一つの店がある。

店、というよりもクラブと言った方が正確だろう。碌に魔力を扱えずに魔法学校をドロップアウトした連中やそもそも魔力を使えず、魔導師を妬み、憎み、マトモに職に付く事がなかった不良やゴロツキたちだ。年は様々だが、性別は男のほうが多い。

どういふわけか基本的に強力な魔力持ちは女性が多いのだ。おまけに言えば見目麗しい美女、美少女ばかり。そういう理由もあつた女性がいけない訳でもないのだが。

その店は二、三年前にとある少年がそれまでの店名から改名し、ミッドチルダでの拠点として使っている。

そこに二人の女性が訪れていた。

紅色の三つ編みの、女性と言うよりも少女、あるいは幼女と言ってもいいほど小さい

少女だ。

もう一人はピンク色の長身の女性。出るところは出て引つ込む所は引つ込んでいる抜群のプロポーションだ。

どちらもその外見故に周囲の男たちから下卑た視線を向けられるが、二人がその鋭い眼光でにらみ返すとすぐに目を逸らす。それでも、またすぐに視線を戻すのできりが無い。

店に入り少しした所で、店の男から声を掛けられ案内されたのは店の奥にあるVIPルームだ。

中に入れば廊下で、シャワールームがあつたり他の部屋らしき扉があるがそれらは無視し、気配のある正面の扉に手を掛けた。

部屋の中には一人の少年がいた。

黒と白の斑の髪の少年。彼は煙草を啜えながら笑みを浮かべ。

「ようこそ、姐さん方。クラブ『ボトムレスピッド』へ」

「お前、こつちでもお山の大将やってたのかよ」

開口一番、ヴィータはカイトの正面のソファにドカッと座り込みながら言った。

「こつちでもつうかあつちでも同じで、あいつらが勝手に持ち上げてくるんすよ。俺はくれる物を使つてるだけっすよ」

「相も変わらず、ひねくれているな。お前は」

シグナムがヴィータの隣に、しかし静かに座る。

その端正な眉は僅かに歪んでいた。生真面目というか、真っ直ぐな彼女としてはあまり印象にいい物言いではないのだろう。

それでもカイトは肩を竦め、

「ま、性分なんで。変えようもないすね。あ、なにか飲みます?」

言いながら指したのは目の前の机の上に散乱する酒瓶だ。開いているのもあれば未開封のものもあるが共通するのは酒の度数が高いことだ。

「飲むか。お前一応明日も仕事だぞ」

「大丈夫つすよ。どうせ酔わない体なんすから」

言いながら、飲みかけのボトルに口を付け一気に煽る。かなりのアルコール度数だが構わず一気飲み。酒に弱かったら一発で卒倒してもおかしくないが、カイトは顔色一つ変えずに飲みきる。

「あーくそまつじい」

そして、二人に視線を戻せば、

「おいおい、そんな睨まないでほしいんすけど」

「体質といったな？」

軽口につき合わず、目を鋭く細めたシグナムが低く呟く。

「さっさと本題に入れ。わざわざこんな時間に、こんな場所に呼び出したのだ。その体質の話しだらう？」

「あー」

言葉も視線も気配すらも低く鋭くさせるシグナムやヴィータヴィータに対して、カイトは視線を泳がせて髪をくしゃくしゃとかく。どう説明するか困ったという様子だ。実際困っている。

確かに今夜この場に呼んだのは彼女たちの新たな体質について話さなければならぬ。カイトとしてもこういうことはあまり得意ではないがなにも説明しないままでは

危険すぎる。だから、最低限説明が必要だが、どこから説明したものか。

「単純な感じ？ 複雑な感じかどっちで？」

「単純な感じ」

「単純な感じ」

「さいですか」

単純な感じの返答に顎に手を当てて考える。絶対に伝えなければならぬことは四つ、だろうか。

聖遺物と位階と霊的装甲と魂の関して。これらをどうにかして都合よく伝えなければならぬ。

「あーそうだな。簡単にいえば。俺たちは人間やめてるって話しつつすよ。……ああ、元がプログラム体とか関係無くて。第一、十年前はともかく今はほとんど人間でしょう？」

そういうレベルの話しじゃない」

人間をやめるの辺りで顔色を変えた二人に軽く手を振る事で押さえ、ネガティブ入ろうとしたのを止める。そんなんでは困るし、この先の話しについていけない。プログラム体どうこうではすまない。

「事実だけをいうならば、俺もそれから姐さん方もこれから先は普通の物理的攻撃も魔法攻撃もなにかも通用しないし、酔わないし、煙草で肺を壊さない。基本的に不老不

死で戦えば戦うほど強くなる……後、なんだ？ まあそんな感じ」

言いながら酒瓶を煽る。今度の飲酒用というよりは消毒用といった方が正しいほどの度数を誇る火酒だ。よっぽど酒に強くてもコップ一杯でぶっ倒れる代物。それを一気飲みしても体は熱くならないし、顔色も変わらない。わかるのは酒が糞不味いということだけだ。

「んで。ああ、質問は後にお問い合わせしますよ？ こつちもわかりやすく話すの大変なんすから。えっと、昨日、ていうか一昨日に地球で姐さん方がゲットしたのは『永劫破壊』^{エイワイヒカイト}っていう、レアスキルみたいなもんす。確固とした習得条件は曖昧なんで、どうして持つてるのとかは無しにしてくださいよ？」

いろいろ言いたそうだった二人はとりあえず押さえしておく。

習得条件が曖昧というのはもちろん嘘だ。カイトたち自身はユーノと腐れ水銀から与えられたし、目の前のシグナムやヴィータやかつてから引き出した上で自分のデバイスを聖遺物としてその身を変革した。さらに言えばシグナムたちのデバイスには元々ユーノが細工していて自分のとシグナムのはまた少し違うのだが。

「で、これが一番大事な話なんすけど、この『永劫破壊』^{エイワイヒカイト}には位階があるんすよ。四段階。活動、形成、創造、流出っていうのが。まあ、レベル1とかレベル2とか思ってた貰えればいいっす。これが一番大事な話し。ちなみに姐さん方はレベル1の活動。はい、

質問は？」

「具体的な効果はなんだ？ そんなわけのわからんこと言われてもな」

「簡単に言やあ、活動ていうのは所謂超能力かね。聖遺物……ああ、つまりデバイスとかのことすけど、その特性とか機能を使える感じすつかね。つまりはデバイス無しでの魔力行使みたいな能力すね。これがレベル1。ま、パンピー相手にはこれでも十分すけど、『永劫破壊』^{エイヴィビキイト}持ち同士では使えないすね」

「それがアタシらだつてか？」

「ええ、そうすよ。このレベルだと聖遺物に振り回されてて、暴走もし易いから気をつけてくださいね？ 目下お二人には、レベル1からレベル2に上がってもらうのが目標つてことで」

「上がれないとどうなるんだよ」

「良くて廃人、悪くて死ぬから気を付けてくださいね。んで、その次レベル2が形成。ここに上がつてようやく使いものになる段階すね。主に聖遺物の武装として具現化。それに怪力やら肉体が頑丈になって、第六感の強化。ここらへんから人間を超えて超人の域になる。んで、その上のレベル3が創造で所謂必殺技。一番上は俺もよく知らないんでなんとも」

一息ついてまた酒を煽る。とりあえず位階に説明はこれでいいだろうか。創造と流

出に関しては元々説明する気はない。まあ、知らないのは嘘なのだが。身近に魂だけとはいえ、そこに至っている者もいる。

「なあ」

「はい?」

「じゃあ、あの連中は」

「……ああ、シユテルたちつすか? 全員レベル3つすよ。俺も含めてアリサさんやずかさんもね。つまり位階が違おうとそれだけの差があるんすよ。レベル1とか2とかいいましたけど、もっと極端な話し普通のSランク魔導師がレベル1なら活動位階でレベル25、創造位階なら75とかそんくらい差があるんすよ。ほら、昔やったゲームみたいな感じで」

自分で言っただけでかなり上手い説明なのではないかと思った。レベル制のゲームならレベル1がレベル25にダメージを与えることなんてできないし、50とか75ならなおさらだ。それにレベル75のやつが低レベルの技使えば、それに応じて威力は上がるだろうし。自ら納得しながら二人の顔を見れば、

「……………」

かなり顔をしかめていた。なにせ今のままでは、シユテルたちや目の前のカイトにも絶対に勝てないと言われたのに等しい。特にプライドの高いシグナムにはキツイだろ

う。それでも、現実から目を背けたりはしないからいいんだが。

「話し進めますよ？　まあ、そんな感じで、俺らは通常の攻撃は通じない……霊的装甲っていうんですけど……通じるのは同じ聖遺物を介した攻撃のみです。んで基本的に不死だけど具現化した聖遺物を壊されたら死ぬので気を付けてくださいね」

「その、聖遺物の使い手とやらはどれくらいいるんだよ」

「俺が知る限りじゃあ十数人つすけどね。もしかしたらもつとたくさんいるかも……まあわかんないすけどね。今覚えたい欲しいのはとりあえず、普通の魔導やら物理攻撃は通じないってこと。だからまあ、あんま訓練とかで調子のらないほうがいいすつよ？」

「だからおめえ普段出てなかったのか……」

「ま、そういうことすかね」

ぶっちゃけこの術法はチート以外のなにものでもない。無論簡単に習得できるものではないし、メリットだけではないがそれにしても霊的装甲や形成位階以上の超感覚は反則すぎる。真面目な話し、創造位階の聖遺物の使途が一人いれば管理局を落とせるだろう。地上本部だろうが本局だろうが関係無い。Sランク魔導師からようやくダメーシが通りだすというのだから自分の事ながらふざける。

「ああ、あと最後。基本的に戦えば戦うほど強くなる。戦闘したあとに聖遺物が勝手に

周囲の魔力吸いにとって本人に還元してくれるんす。まあもちろん勝たないだめつすけどね」

コレが一番の相違点。既知世界で使用され、現黒円卓が保有するものとの最大の違いだ。

本来ならば聖遺物と『永劫破壊《エイヴィヒカイト》』は魂を燃料として駆動するものだ。魂を糧として発動、使用し、魂を喰らえば喰らうほど、つまり

人を殺せば殺すほど強くなるのだ。

それゆえに魂を回収するために慢性的な殺人衝動に犯される。六課に入る前に管理外の辺境世界の紛争地域に行ったのは魂の回収の為だ。魂を多く持てばそれだけ強くなるし、その上で魂を使つて傷を治すことも出来る。

だが、それは裏を返せば人を殺さなければ強くなることが出来ないのだ。

それを彼は、ユーノ・スクライアはよしとしなかった。自分の宝石たちの手を穢すことをよしとしなかった。

自己満足と言われてもおかしくないだろう。それでもユーノは自らの宝石を汚したくはなかった。もつといえ、本当ならば彼はこの世界で再び黒円卓を作ることさえそ

の気ではなかったのだ。

戦い、傷つくのは自分だけでいいと、唯我ならぬ唯他の域まで彼は思っている。

だからこそ今の黒円卓はあるのだが。

とにかくユーノ・スクライアはその唯他を以って『永劫破壊』エイウイヒカイトを改変し、シグナムやヴァイタたちはもちろん機

動六課のほとんどの面子のデバイスに仕込んである。もはや、呆れるほかない。カイトとしては何時の間に仕込んだか不思議でしようがないし。

まあ、義兄の頭がおかしいのは置いといて。

改変されたことよって魂を魔力に置き換えて使用できるようになったのだ。

「ま、そんなところっすかね。とりあえず、次の位階目指して頑張ってくださいな」
一息付きながら、煙草を啜える。

とりあえず、必要なことはこれでいい。かなり突拍子もない話だったが、今は知識として飲み込んでくれればそれでいい。

紫煙を吐き出しながら、ふんぞり返っていたら、

「位階とやらはどうしたらあがるのだ？」

「ん、ああ。そうっすね。それを忘れてた。単純すよ」

そう簡単なことだ。だれもが無意識で行うことなのだから。

ヴィータとシグナムを眺め、その上で額にある真新しい小さな傷痕をなぞり、

「願えばいい」

「なに………?」

「あ………?」

「祈ればいいんですよ。心から、魂から、餓えて、飽いて、望む事をやめなければいいんだ」

第十一章 悔い恥じること

「いいか？ エリオ。男なら女とダチは護れよ。これ絶対な？」

いつだったかカイト・S・クオルトリーズはエリオ・モンディアルは言った。数年前、地球の、エリオやキャロがいた孤児院で彼はそう言った。いつも、彼はエリオを含め孤児院の男の子たちに喧嘩の仕方やら即席毘とか訳のわからない、周りの大人たちが聞いたら激怒しそうなことを教えていた。

そしてその言葉は、たまたまだったのか故意だったのか、エリオ一人に向けられて放たれた言葉だった。

いつものように半笑いで煙草を啜えたまま、煙の臭いを漂わせたまま、

「喧嘩つてのは男の華だぜ。キンタマついてんなら根性見せなきゃダメだ」

キンタマって言葉にエリオは顔を赤くした気がする。そんなエリオにカイトはまた笑った。

「そりゃあ、ウチのお姉さま方はぶつちやけ悪魔とかそんな感じにめちやくちや強いけどな？ でも、ま。そういう話しじゃねえよ」

確かに、エリオの保護者であるフェイトやその親友であるのはやはやては魔導士と

しては異常なまでに強い。それぞれが速度、砲撃、空間攻撃においては管理局では五指に入るであろうレベル、らしい。そこらへんはカイトから聞いた話なのでよく知らないが。それでも最近魔法を少しは覚え出したから、とにかく凄いなあとは思っていた。

「あれだ、女の影でバトル解説してる男とか死んでいいだろ」
バツサリと言いつ切る。

あつさりとした言いように思わず苦笑してしまった。

「確かにお姉さま方は強いぜ。魔導師で、騎士で、戦士、兵士でもあるんだろうさ。けど、なあ、エリオ。わかるだろう？」

男の戦場に――――

「おら、起きろ男の子」

「……………はっあー！」

なにか懐かし夢を見たような気がしたが、しかし鼻や口の中に大量の液体が入りこみ、咽ながらエリオの意識が覚醒した。

ぼやけた視界の中で前髪が額に張り付き、顔や体も濡れていた。起き上がりながら、回りを見渡せば、スバルやティアナそしてキャロが心配そうに自分のことを見ていて、上を向けば、

「よお、大丈夫か？」

「……………ええ、まあ」

バケツ片手にしたカイトだ。

中身が空つぽで、自分とその回りが濡れているということとは、

「……………どのくらい気絶してました？」

「十分つてとこだな。動かなくなったからとりあえず運んで水ぶっかけたわけだ」

少しの頭痛と共に記憶を掘り起こす。

そう、確かいつもどおりの午後の訓練で、めずらしくカイトが模擬戦の相手をしてくれて。

それから、いつかのようにキャロが最初に落とされ、順に、自分、ティアナ、スバルとやられていったのだ。

そのおり、エリオは思い切り顔殴られて気絶したのだった。

「……………」

思い出したところで頬に痛みを感じる。触れてみると少し晴れているだろうか。傷としてはそれほど酷いものではない。

それでも、驚くほどの痛みを感じる。

なぜか、デバイスで常時フィールドタイプ of 防御魔法を張っているにも関わらず、カイトの拳は痛い。自分でも痛みには強いほうだと思っけれどそれでも思わず顔を顰め、歯を食いしばるほどの痛さだ。

まるで魂まで響いているかのように。

そんな様子にカイトはエリオの頭に手をのせ、

「おいおい、これくらい大丈夫だよな。男の子」

「……………ええ、はい」

半ば痩せ我慢で立ち上がる。正直言えば、まだ少しふらつくがそんなことを言われてうずくまつてることなんてできない。

「大丈夫？ エリオくん」

「うん、大丈夫だよ」

キヤロが覗き込みながら聞いてくる。それにエリオなりに笑顔で返したがそのままキヤロは手をかざし治癒魔法を使う。特定の傷を治すものではなく、疲労回復や沈痛効果の魔法だ。全身に桃色の光が広がり気だるさや痛みが引いていく。頬の痛みも少しずつ引いていく。

やはり長い付き合いだから、痩せ我慢でもばれるらしい。

「……ありがとう」

「うん」

そんな二人にカイトは口笛を吹き、

「おうおう、熱いねえ」

「もう！ ちやかささないの、カイト！」

「うっせあほスバル。乳揉むぞ」

「んなあつ！」

スバルが注意するが、カイトの切り返しに顔を赤くして胸を抑える。

く、と声を少し抑えめに笑い、スバルが自分がからかわれてることに気付き、さらに怒りで顔を歪めかけて、

「はいはい、エリオ起きたならなのはさんたちの所行くわよ。エリオ、行けるわね」

「はい」

「ん、ほらスバル、カイト。じゃれてないでとつとと行くわよ」

「じゃれてない！」

「あいよ」

テイアナに引きつられ、それでもまだ口げんかを止めないカイトを見て思う。

カイトとスバルの仲が変わったなあと。

出逢つてからしばらくは仲は険悪というか最悪だった。目が合えば射殺さんばかりに睨みあい、口を開けば互いののしり合っていた。常に空気が殺意で満ちていたというか恐ろしいまでギスギスしていた。

正直、そんなカイトの様子は意外だった。

エリオの知るカイトはいつも瓢々として、余裕をもっている人だった。

昔からいろんな事を教えてくれて（キャラ口たちは難色示していたが）、兄という相手だった。もつとも兄というならユーノもいたけれど

、彼は兄と言うよりは父みたいな雰囲気なので、エリオにとっての兄といえばやつぱ

りカイトだ。

隣にいるキャロもそれは同じだろう。

彼女はカイトに苦手意識持っているだけで嫌ってはない。こつちだって長い付き合いだ。それくらいわかる。

まあ、たしかにあのノリは女の子にはついていくのは難しいだろう。

それでもやはり、キャロだって、そして自分だってカイトことを実の兄のように慕っているし、カイトだって弟や妹として接してくれていた。

スバルにしても短い付き合いとはいえ、仲好くできていた。

だからこそ、カイトとスバルの確執は意外だった。

二人とも方向性は違っても社交的というか人づきあいは上手い人だと思っていた。

カイトは上手く距離感掴むし、スバルはそんなこと気にせずに笑顔で近づくだらう。なのにも関わらず、二人の間柄は最悪だった。

まるで魂から反発しているように。

でも。

「んだよ。無駄にデカイんだから少しぐらい触らせてくれないだろうか？」

「セクハラ！セクハラだよこれ！ ティア！ 訴えたら勝てるよねこれ！ てか無駄とか言うなあ！」

「知らないわよ……まったく」

自分の前で会話を交わす二人のはもう、そんな險悪さは感じられない。仲がいい、とは言わなくても悪い、という感じではないだろう。

変わったのはやはりこの前の出張任務でだろう。

スバルの様子が豹変して、それをカイトが止めた。

その後カイトが自分の額の傷を見て爆笑したという謎の行為の後からだろう。あの時は遂に異常に気が狂ったかと思っただが、どうやら今まで通り、通常に気が狂ったままだ。

それでもなにかしらも心境の変化はあったらしい。

その証拠に彼の額には頭突きの時の小さな傷跡が残ったままだ。

カイトの身体にはまったく傷跡はない。喧嘩もよくしてるし、戦闘だってエリオよりも多くの場数を踏んでいるはずなのにも関わらずだ。よく付き合いでシャワーやら風呂に入るがまったくなかった。無論エリオだって同性の身体をジロジロ見る趣味はないからあくまで大体だが。

そんなカイトにエリオが知る限り始めての傷跡だった。普段は前髪で隠れていて見

えないとしても、傷跡なのは変わりない。

だから、それはなにか大事なことなのではないのかと、エリオは思う。

どうして、とかなにが、と言われると困るのだがとりあえずなんとなくそう思う。

言うならば弟分としての勘だった。

「エリオっ！」

考え事をしながら歩いていたエリオは自分の名前が呼ばれたことに気付き、声の方を見る。

それは、視線の先になのは、カイト、スバル、ティアナがいて、

「大丈夫、エリオ？ カイトに凄い殴られて気絶してたって聞いたんだけど……」

「だ、大丈夫ですよフェイトさん。それに訓練なんですしそれくらい……」

隊舎から走ってくるエリオとキャ代わりでもあるフェイトだった。彼女はその艶やかな金髪を揺らしながらエリオと視線を合わせる為に両膝を曲げる。

「それでも心配はするよ。ホントに大丈夫？」

「はい、大丈夫ですから」

「そっか、よかったよ。お疲れ様、エリオ、それにキャロも」

「はい、フェイトさん」

言いながら、それでもフェイトは心配そうな瞳でエリオやキャロのことを見ている。

基本的の過保護なのだ、彼女は。

そして、そんな彼女の視線を受けるたびエリオは思う。

温かくて、くすぐつたいと。

そして同時に情けなくて、恥ずかしいと。

愛されている自覚はある。

プロジェクトFATEによって生まれ、管理局で手がつけられなかった自分を引き取ってくれて地球の孤児院に入れてくれた。そこにはキャロや他の魔法とは関係の無い友達がたくさんいたし、高町家や月村家、バニングス家といったいろいろな人が来てくれて寂しくは無かった。

たまにだけでもフェイトやユーノが来てくれて、少しずつ魔法を覚えてくれた。カイトも喧嘩の仕方とかを覚えてくれた。だから自分が不幸だと思つたことはエリオは一度もない。むしろ恵まれていとすら思う。

でも、だからこそ。

こうして守られているだけと言うのが情けないし恥ずかしい。

勿論、フェイトはSランクの歴戦エース魔導士で自分の保護者で、十近くも年上の女性だ。それに引き換え自分はCランクのペーパーの新米でまだ十歳だ。ならばこそ守られているのはしょうがない、

とはエリオは思えないのだ。

そんなのいくらなんでも情けないだろう。

十歳とはいえエリオだって男の子だ。女性に守られているばかりなんていうのは嫌だ。

こればかりはキャロにだってわからないだろう。というか今この場ではカイトくらしいか共感が得られないと思う。

我ながら古臭いとは思いつつも変えようのないものだ。

それにキャロだって守れていない。いつもカイトは模擬戦すると真つ先にキャロを狙う。それは戦略的なこともあり同時に、

自分に守りきれと言っているような気がするのだ。

その思いに応えきれていない。

そしてもう一つ。

こういう時に思うことある。

フェイトだけでなく、ユーノやカイト、それになのはやフェイトに対してでもそれは同じだ。

それは――

「おーい！ みんなあー！」

「……っ！」

今日何度目かで思考が断ち切られる。その場にいた全員の目が声の下に集まる。

それはシグナムが運転するオープンカーから手を振るはやてだった。確か、朝からどこかに出ていたはずだったが戻って来たようだ。

帰還した部隊長にカイトを覗く全員が敬礼をし、すぐにはやてが軽く手を振ったから手を下げる。

「さて、皆。次の任務が決まったで」

車から降りながらはやては開口一番そういった。手に数枚の書類を持っていた。

「内容を聞いても？ 部隊長」

代表し、なのはが問い、

「ええで、なのは隊長。……ああ、でもんな堅苦しくせんでええで？ もつとりラックス

しいや。ああ。カイトだけは直立な」

「いやですよ、んなもん」

理不尽なモノ言いに当然ながらカイトは取り合わず、話しを促す。

「ま、ええか。んで肝心の任務内容やが……」

僅かに溜めて、

「ホテルアグスタでウチとユーノくんが挙式するから、皆はその護衛や」

にんまりとして言いきった。

「真面目にやるの」

「真面目にやって」

「真面目にやってください」

殺意はないにしても引くくらいの黒いオーラ纏った三人にデバイスを突きつけられた。

「じよ、じよーだんや」

冷や汗を流しながら、引きつった笑みを浮かべ書類で顔を隠し、

「まったく胸が大きいと冗談が通じんのかいな……。やつぱおつぱいはひかえめに限るで」

よくわからないことを呟き、そして、今度こそ真面目に言ったことは。

「ホテルアグスタで行われる骨董品オークションの警備護衛や」

第十二章 開幕の囃し

広い森の囲まれた要人、金持ち向けの高級ホテルだ。格調高い客室はもちろん多目的ホールをいくつも有し、地下には格納庫や倉庫も充実しており、主にパーティーなどのイベント事に使われる事が多い。

さらに言えば、ミッド主街区に多い高層ビルなどではなく、十階程度で、円形と正方形がくつついたような形だ。それほど目立つ場所を考えなければそれほど目立たない。だからこそパーティーなどのイベント事が多いのだが。

そして、今日行われるのは、骨董品のオークションだ。

いわゆる過去の遺産というものは遺失物すなわちロストロギアという危険物を指す場合が多い。そしてそれは危険物の代名詞であるが、当り前のこととして過去の遺産全てが危険というわけではないのだ。

歴史的、美術的等の危険性はないが実用性もまた皆無という物もまた存在するのだ。だからこそ、学者の研究や金持ちの道楽として危険性のない過去の遺産、あるいは言うほど古くはないが、それなりの価値がある物がオークションに掛けられているのだ。無論参加するのは学者か金持ち。いや道楽のつもりの後者が圧倒的に多いだろう。

金に余裕がある者たちが観賞用に買っていくのだ。あるいは学者のスポンサーとしているのかも知れないが。

そんなわけで、今ホテルに来ている人間は身なりのいい金持ちばかりで、男女比率では男のほうがかなり多い。

その上で、その比率大目の男たちの視線を引き受ける女性がいた。

一人は金の短髪の女性だ。燃え上がる火のような快活さを漂わせる勝気な瞳と引き締まった体。身に纏うのは赤地に金の龍の刺繍がされた、所謂チャイナドレスだ。コスプレ用の丈が短いものではなく、足首まである本格的なものだ。太ももまでスリットが見えるか見えないという長さで艶めかしい。

もう一人は紫色の長髪の女性。隣の彼女とは正反対のようにお淑やかな雰囲気を持ち、彼女以上に豊満な肉体。それを包むのは黒のイブニングドレスだ。胸元や肩、背中を露出させているスタイルが視線を集める。

アリサ・バニングスと月村すずかだ。

「あーうつつとうしいわね、燃やしてもいいかしら」

言葉通りにうつつとうしそうに、手にした扇子で扇ぐアリサ。確かに今のドレスには自信があるし、見てもらいたい人はいるが、それはこんな金持ちなだけの有象無象のお坊ちゃんではない。

「まあまあそんなの気にしないでいいじゃん。それよりも早く会場に行こうよ。なのはちやんたちが来ちやうよ」

「あー、そうね。急ぎましうか」

少しだけたじろぐアリサにすずかは苦笑する。

自分たちの十年来の幼馴染である高町なのはを始めとした機動六課の面子がこのオークションを護衛すると言う話は当然ながら知っている。確か、オークションにかけるものに危険度の低いロストロギアが混じっていて、それをガジェットが襲撃に来る危険性がある——とか、そんな名目上で招集されているはずだ。

まあそこらへんは自分やアリサのの管轄外なので置いておく。謀が得意なのは一番、三番とか七番、十二番だ。あとついでに腐れ十三番も。

切り込み隊というか実働が一番多い自分たちは自分たちの主である首領閣下の命通りに動けばいいのだ。

まあそれはそれとして、どうにもなのはたちとは顔を合わせづらい。勿論、先日 of 海鳴での一件のせいだ。

なのはたちはきつと自分たちは普通の人間だと思っていただろう。

まあ、本当の所すずかはそれこそ生まれた時から普通ではなかったけど、基本的には普通の少女だったし、事実五年前まではそうだった。なのはたちがミッドチルダに移住

してからしばらくしてからだから、気付かないのも無理はないだろう。

なのに、あんなにがつつり目の前で戦って、意味深なことたくさん言ってたのだから顔も合わしづらい。

翌日は余裕な振りして、結構焦りながら、なのはたちの質問を受け流したものだ。

「ほら、さすが。置いてくわよ」

「あ、待つてよアリサちゃん」

何時の間に数歩先に行っていたアリサへと少し小走りで追い掛ける。それなりに高めのヒールだが、今さらそんなことでバランスを崩すほど人間のままじゃない。

オークションが始まるまでにはまだ時間があるが、それでも少し早めにオークション会場、そのVIP席に。

席に関しては予め貰っていた。普通の席ではなく、別のボックス席だ。基本的にはかなりの金持ちか、

「関係者側の恋人とか、家族……奥さんとかなんだっけ」

そのことに少し優越感。彼の護衛は渋々譲ったけれど、こういう役得があつたのだから譲つてよかった。

こういうのは案外外堀から埋めていくのが重要なのだし。見ればアリサも口元がにやけていた。

ボックス席にはまだ誰もいなくて、とりあえず、一番前に。ここからならばステージが一望できる。

もう少し経てば——あの場所にユーノ・スクライアが立つのだ。

「なんか……昔を思い出すねえ」

「……そう、ね。あの日もユーノから招待されてたわね」

記憶が戻っていくのは五年前。黒円卓が黎明を迎え、この世界そのものに反旗を翻した運命の日。

翡翠の光に包まれ、水銀に祝福呪され、魂が回帰した。

言葉にすればたつたそれだけ。だが、それですずかもアリサも人生が変わった。生きる世界が変わったのだ。

陽の当たる所から影に潜む所へ。それは自分の意思と魂の選択故なのだから後悔してないのだけだ。

なにも知らないで、どこかの■■■を愉しませるなんてまっぴらごめんのだし。

それはともかくとして。

五年前も今日と同じように次元世界のちよつとしたオークション兼展覧会みたいなものだった。他にスケジュールが開いている人がいなくて、特別にこつそりという理由でユーノに招待されていた。

その帰りの、その世界で、カイトとシユテルたちと出遭い、たまたまいたギンガやカリムも混ざって。ユーノとそしてあの詐欺師めいた男の九人で自分たちは黎明を迎えた。未だに空席があるだろうとはいえ埋まるのも時間の問題だろう。

空席を埋める人物を導くのもすずかたちの役目なわけだし。
まあ今日に関しては、それほど重要な役目ではなくて、

「やっぱ、あの子たちだよねえ……」

思い、苦笑したのは、色々な意味で後輩といえる子供たちだった。

「……………あん？」

ホテルアグスタの外部。なのはやフェイト、はやての隊長陣三人がドレスアップして中に入り他のメンバーは外部警備となったのだ。その最中にタバコをふかしていたカイトが突然声を上げた。

なにかに気付いたかのような動きだった。ホテル屋上の外壁に腰かけて片膝立てて、もう片方の足を空中に泳がせていた。

カイトからすればある程度気を張っていれば、このホテル周辺くらいなら楽に把握できる。

それに事が起きるのはオークションが始まってからということは知っている。

だからかなり気を楽にしていた。それは間違いない。

この場には機動六課だけではなく黒円卓が何人か出張っているから、想定外のことを起きてもどうにでもなるだろう。カイトとしてはその想定外のことこそが欲しいのだが。ともかく、かなり気が楽だった、所謂自然体、普段の軽薄な雰囲気のまままでこれらのことを愉しみにさえしていたのだ。

だが、ふと感じた気配。それにカイトは僅かに目の色を変えた。

「デジャブリやがる……けど、こいつは……」
既知感。

真つ先にそれを感じた。

カイトの感覚が捕えたのは周囲に広がる森の中だ。かなり遠いが、しかし確実の感じる。

カイトの感覚器官は黒円卓内でも随一の範囲を誇る。視力、聴力、嗅覚そのどれもが飛びぬけていた。灰色狼《ガウス》の名は伊達ではない。永劫破壊による身体能力強化そのものはすずかには劣るが、大きな差は開けられてないし、昼夜によって強弱の差が激しい彼女に比べれば安定している。例えすずかでもこの気配には気付かなかっただろう。

そして、なによりカイトが特化しているのは第六感だ。ただ、なんとなく。そういう感覚とか勘が飛びぬけているのだ。

それは既知感という呪いのこともあるし、彼自身の持つ戦闘経験に基づくものでもある。

その上で、感じているこれには既知感と共に、違和感を感じた。

「……おい、スバル、ティアナ」

『なにかあったの?』

『なに』

違和感に突き動かされたまま、念話でスバルとティアナに連絡を取る。僅かな懸念の下に二人からは確かな返答は帰ってくる。スバルはかなり素っ気ない感じだが、気にせず、

「お前ら、今どこだ」

『はあ？ 持ち場にいるけど……』

『私もよ。なに、なにかあったならちゃんと報告しなさい』

煙草の煙を大きく吸い込む。確かにカイトの感覚からはスバルとティアナの存在は事前に配置された持ち場の通りだ。無論二人だけではなく、他の面子も確かに存在を感じる。魂レベルで判別しているから間違いない。

ならば、だ。

「こいつは……ちと面白そうなことになりそうだなおい」

『は？』

スバルの怪訝そうな声は最早無視。感じる魂は知らない者ではあるが既知感が生じている。

ならばつまり、そういうことだ。

「あーでも、いやだなあおい。あれか、今日はあのボロ外套も来るんだったか。うわっそ

れすげーやだわ。うざいしなあアイツ。まあどうせ兄貴のところにしかいかねえだろうけど……ウザいよなあ。いるだけで面倒なことになるしよお」

そういう意味では、海鳴ではやり易かったと言える。あの日の海鳴全域は翡翠の守護に包まれていて、彼の領域下であり一つの宇宙^{ヴェルトル}を内抱しているが故に彼の加護にあることである程度、この天^{世界}の法から抗うことはできる。

だから、それはまた別の宇宙^{ヴェルトル}を内抱しているアレの領域下に置かれるのならば、同様に抗えるだろう。

「けど、そりゃあ困るわな」

水銀はかつてと変わらぬ。少なくともカイトにはわからない。

だからこそ、アレの領域下に身を置くと言うのは、通常よりも回帰が早い。それだけかつてに塗りつぶされる可能性が高くなるのだ。

それは、ユーノを始めとした黒円卓の望むことではない。それくらい越えてもらわなければならぬのだ。

だから、

「まあ、ひっかきまわすかね」

武道でも魔道でもない外道の歩み手だ。パワーファイターでもスピードスターでもないトリックスター。黒円卓の天秤。円卓を左右しうる存在であるが故に、黒円卓の首

領の寵愛を受ける者たちのことも揺るがす。

揺らして、選ばせるのだ。

それこそがなにより肝要なのだから。

「……」

煙を吐き出しながら、時計を見る。時刻はもうあと僅かでオークションが始まる時間だ。

つまりそれこそがこの場における開戦の時刻。

時計の針が動くのを眺め、その針が開始時刻となるのを見て、

「さあ、派手にやろうぜ。やっぱ喧嘩は男の華だよなあ！」

その言葉に答えるかのように、



「よかろう。加減はせん、全力だ」



黒い槍を携えた、鋼のごとき男が応えた。

第十三章 並び立つこと

ガジエットの襲撃はオークシヨンの開始と共に始まった。

周囲の森の中から小型機のⅠ型を中心としたガジエットの大群が押し寄せてきた。その数実に百以上。Ⅰ型だけでも二桁は優に超えていて、大型のⅢ型や空戦型のⅡ型もかなりの数がある。これまでの襲撃にくらべてもかなりの多さだった。AMFという魔力拡散力場を生じさせるフィールド魔法を搭載しているそれは通常の魔導士にとつてはかなりの脅威だ。それ、専用の訓練を受けていないと厳しい。

正直、今のティアナたちでは処理しきれないだろう。ホロウインドウから見る外見はコミカルというかシニールではあるがそれほどまでの脅威なのだ、ガジエットという相手は。

にも関わらず、

「……………」

ティアナの足元が揺れた。同時に視界の中、森の一部が爆砕された。木がなぎ倒され、宙を舞う。そしてそれはただの二次効果でしかない。超膂力によって振り下ろされ

たであろう鉄槌が大地を打撃したのだ。それによる本命は周囲のガジェットの破壊。インパクトの瞬間による衝撃波。それゆえに魔力を必要としない純粹物理攻撃だ。

そして、それは一度では終わらない。

一度、二度、三度。連続する爆砕音は連続して鳴動し、大地を震わし、ガジェットは押しつぶす。

そしてそれは地上だけではない。

「ひゃっ……！」

近くにいたキャラコが小さく悲鳴を上げる。

原因は空に咲いた爆炎の花だ。対象は空中戦型の飛行機型のガジェットたちだ。ホロウインドウを見るまでもなく、肉眼で確認できた。ガジェットたちの合間を飛び抜ける、赤い騎士。赤紫の炎を纏った長剣を振る。

AMFなど関係無いと言わんばかりに超高熱の炎剣がガジェットを断ち切る。刀身の温度は実に数百度。それに、騎士の実力が伴えば、ガジェットの機体などバターのごとく焼き斬れる。

尽くを一刀の下に。

時に魔法で、時に両断した爆砕寸前の機体を足場としてさらなる得物を追う。

鉄槌の騎士八神ヴィータと剣の騎士八神シグナム。

その二人の無双ぶりに対し、

「ありえねー」

死んだような目で、思わずティアナは呟いた。もうなんか嫉妬とか劣等感とか下らなく感じるほどだった。

現場指揮のシャマルから周囲の地図とか貰ったけどいららないだろう、これ。あの二人だけで十分だ。まだ襲撃から数分しか経ってないのに。というか若干シャマルも引いているのはどういふことだろうか。

「おーおー派手にやってんなあ姐さん方。まああの程度なら苦戦するわけもねえか」
「む」

カイトだ。ホテルの屋上からここに跳び下りてきたらしい。靴が数センチ埋まっているから、衝撃吸収等の術式を介さずにそのまま飛び下りてきたのだろうか。相変わらず、アホみたいな身体能力だ。

呆れ気味の半目を向けていれば、

「おいおい、そんな呆けてんじやねよ。……お客さんだ？」

「え……う？」

お客さん、という単語。カイトがそれと言ったのと同時に、キャロが声を上げた。悲鳴に近いそれは、

「！ ティアナさん！」

周囲に薄紫色の魔法陣が浮かぶ。四角いソレはキャロと同じ召喚用の魔法陣だ。召喚陣がホテルの玄関付近から少し距離が開いた周囲に大量に展開され、

「遠隔召喚、来ます！」

来た。

ガジェットI型からIII型までいて、数も結構多い。つまりそれはAMFの効果も強まるということだ。

予測できる苦戦に手に汗が滲む。鼓動が早まる。

だが、そんな余裕はない。今日の前にこそ戦うべき敵がいるのだから。

息を一度吐き、大きく吸う。正直言えば、嫉妬とか劣等感とか、そういう嫌な感覚が無くなったわけではない。だがそれでも今ここは戦場であり、戦場でそんなことを考えているのは命取りだ。それをたび重なるカイトとの模擬戦でティアナは学んでいた。

だからこそ、今この場で指揮官である自分がすべきことはこの面子での最良の指示を出すことだ。

そのためのシュミレーションはなんども行っており、だからこそ、今ここで必要な指示を出す。

今回は通常の殲滅戦ではなく防衛戦だ。隊長陣は今ホテル内で安全な場所での避

難誘導をしているはずだ。森の広範囲ではシグナムとヴィータが出ていて、どちらもまだ少しは手が空かないだろう。空くとしたら、隊長陣は警護があるから、森にいるシグナムやヴィータ。彼女たちの到着まで凌げば、それでいい。

だったら、スバルを前に。自分はその援護で、エリオとキャロに防衛を任せるべきだ。カイトは遊撃、というか自分が指示を出すまでもないだろう。

思い、指示を出すため声を張り上げようとし、

「おっし、行くぞエリオ。男の子の時間だぜ」

「えっ、え？ ……あ、はい！」

エリオの首根っこ掴んだカイトがガジェットの大群へと突っ込んでいた。

「……って、ちよつと待てえー!?」

「あーもう！ 後で覚えてなさい！ スバル、キャロ！ アンタたちはホテルの防衛に専念して！ 私は二人の援護の回るから！ わかった!？」

「は、はい！」

「りよ、了解！」

後ろで、ブチ切れたティアナの指示が聞こえる。思い切り勝手な行動をしたカイトに合わせてすぐに指示が出せるのは流石という他ない。だが、カイトに真面目に付き合っていることに意味なんてないのだ。真面目に相手するなんて疲れるだけだし。結構真面目なティアナもいい加減なれないと何時か爆発しそうで怖い。

まあ、それはともかく。

「……どういふつもりですか？」

とりあえず、聞いてみる。とりあえず。いや意味が無いとは解ってるが、聞かないと始まらないだろう。

「あ？ そりやお前……わかつてるだろ？」

「……………」

解つてる。当然解つてる。つい最近思い出してばかりで、すぐに忘れるほど呆けてもいない。それが大事なことなら尚更だ。でもカイトがそれを自分に言ったのはずつと昔のことだ、でも、カイトはそれを昨日のこのように言う。エリオが忘れていることなんて想像すらしてない様子で、

「……………ええ、わかつてますよ」

首に掴まれた手をほどき、自分の足で立つ。横目に見れば、愉快そうに口元を歪めたカイトが立っている。

いや、立つてくれている、というほうが正確か。海鳴で見たカイトの本気的一端。それに比べれば自分は虫けらと変わらないうら。それほふおの実力差があるはずだ。いや、その差はきつと自分が思っている以上に大きいだろう。

でもカイトはエリオと肩を並べてくれる。

それが嬉しいのと同時に少しだけ恥ずかしい、それに誇らしい。

そして、同時に僅かに悔しい。こうやって自分のことを弟のように接してくれて、肩を並べていてくれるのに、

——僕はなにも返していない。なにもできない。

そんな、どうしようもないことを思うのだ。

「……………」

だが今はそんなことを長々考えている時間はない。今はただ、自分に出来ることをするだけなのだから。

手に握っていたストラダーをより強く握りしめる。やることは一つだ。

「——スウーハーアー——」

息を吸い、吐く。周囲のガジェットが迫ってくるのに応じて魔力を上手く使えなくなる。だからこそ、築き上げる魔法を体の中に留め、身体能力や反射神経を高め、全身に薄く雷を纏う。魔力変換資質による雷ならばガジェットにも有効なのはすで解っている。そして派手に撒き散らすのは魔力の無駄使いだからこそ、体の強化をメインにするのだ。

これならば、なんとか戦える。

「ようし、じゃあ行くか」

「はっ」

強化が終わったのを見計らったようにカイトが声を掛けてくる。彼自身もすでに魔方式に拳銃を片手にしていた。先日見た銃剣ではないが、それでも伝わる魔力はエリオと桁が違う。

だが、確かに肩を並べ、

「ほんじゃ、まあ……」

「行きます……！」

行った。



「ストラーダ！」

『Explosion!』

飛び出し、ガジェットとの距離を半分にしたところで愛機の名を叫ぶ。同時にストラーダからカートリッジを排出。瞬間的に魔力が爆発的に上昇した。

それによって得られるのは加速だ。

身に纏う雷光が輝きを増し、速度も増す。それまでの倍近い速さだ。

基本的にガジェット、特にI型のアルゴリズムは単純だ。だからこそ、こういう急加速によってガジェットの反応を遅らせる。

I型に比べて処理速度の高いであろうIII型には通用しにくいのが、I型相手ならこの程度で十分だ。反応するIII型が多腕型アームを伸ばすが、カイトの銃弾が撃ち落とす。

それに感謝しつつ、

「はあっ!」

槍を振う。電熱と加速に任せた斬り払い。シグナムのように真つ二つはできなくとも破壊は容易い。

僅か一秒の間に駆け抜けたのと同時に破壊したのはI型を三体。一秒間にできるエリオの限界と言ってもいいだろう。

だからこそ止まらない。

反撃は考えない。たまに多腕型アームが迫り来るがそれらは全てカイトが落として

くれるし、時折、オレンジ色のティアナのソレも来る。

だからこそ、エリオが行う事は一つしかない。

「シッ……！」

疾走する。斬撃の勢いも加速に繋げ、身体能力強化の魔法を重ね掛けし速度を上げる。元より速度のみに特化した身だ。

早く、速く、疾く。疾走するだけだ。

ジグザグに駆け抜け、とりあえず一瞬で移動できる範囲のI型はあらかた破壊した。

だから狙うのはIII型だ。

管制機とも言えるそれを破壊する意味は大きい。前はキャロの支援があつてよう

やく倒した相手だが、

「おお……！」

臆せずに迫る。振りかぶった槍を叩き込む。雷撃を纏ったから、斬撃痕に焼けた痕ができるが破壊には至らない。

「まだだ！」

だから走る。叩き込み、鋼の感触に僅かに押し返されながらも振り抜き、そのまま膝を沈め、跳んだ。

跳躍の行き先はIII型の頭上だ。頭上を取った。そして、

空中を蹴る。

いや、勿論、何もない中空を蹴ったわけではない、そんなことができるほどエリオだつて人間をやめていなかった。だから蹴ったのは空中に展開した魔法陣。宙空に足場を形成するスキルで結構な難易度の魔法だが、

なんとなくできると思つた。

それを以つて、落ちる。

槍の穂先を真下にして落ちる先は、勿論ガジェットⅢ型の頂点だ。

「っおおー！ー！」

咆え、力一杯差し込む。柄まで差し込みきるが、ガジェットの動きは止まらず多腕型アームを伸び、

機内にてストラダーの穂先から雷撃が弾けた。

Ⅲ型の動きが止まり、勢いよく引き抜いて退避。

数メートル離れて、Ⅲ型が中から爆発した。

「ヒューー！ やるなあ、エリオー！」

「……………これくらいは当然ですよ」

突然褒められた事に、少し照れながらも応える。まあ、あながち痩せ我慢というわけでもない。現にカイトが撃つ弾丸は一発ごとにⅢ型すらも撃ち抜いているのだから。

さすがの一言だ。

「ふうん、なら援護とかいらなそうだなおい」

「ええ、大丈夫ですからそつちはそつちでお願いします」

「あつそ、じゃあそういうことで」

言いきり、言葉の通りにエリオに來るカイトの弾丸はなくなり、ティアナののみだ。だが彼女は全体を把握しなければならぬし、指揮もあるからある程度しかできないだろう。

つまりは自分の動きで乗り越えなければならない。

そしてそれはなんとかなる気がする。なんとなくで、大した根拠もないけど。

なんとなく体の調子もいいし、勘も冴えている気がする。

これは絶好調というかなんだかんだでイケルだろう。

そんな、自分でもよくわからない感覚を得ながらも、再びガジェットへと駆ける。

「ああ、というわけでそういうことだよ、友よ。これよりこの場は私に主導権を握らせてもらおう。なに安心したまえ、こういう運びは得意でね。退屈させないと保障しよう。だが言っておくが私は君ほど甘くはない。先日をもって鉄槌と烈火は認めたが、他はどうだろうか。我が歌劇の演者足れるのかどうか、見極めさせてもらおうよ。それに、彼も、甘くはないだろうしね」

△

ガジエツトと戦闘が始まり十数分がたっていた。幾らか傷を得たが、それでも大きなものはないし、まだまだ余裕の範疇だ。

だが、余裕の範疇の外は少し張りきり過ぎて、皆から離れてしまったことだろう。

調子がいいのも困りものだと、苦笑する。周囲にガジエツトがいらないからこそその笑み

だった。というか今、最後の一体を破壊した直後だった。

流石に離れすぎたのかと思ひ、戦闘音の聞こえる所に戻ろうし、

「……………」

視界の隅に何かを捕えた。それは誰かの人影で、

「……………」

認識した瞬間に、人影へストラダを構える。確かな確証があつたわけでもなくやはり、なんとなくそんな気がしたからだ。

だが、その感覚は間違つていなかった。

「……………」

現れたのは一人の男だった。くすんだカーキ色のコートに同色のインナー。整えられていなボサボサの髪や髭。なによりもその鋼のような鉄の如き眼差し。

どこかで見たことがあるような雰囲気を持つ男だった。

だが、顔は知らないが、まさか迷い込んだ一般人という訳ではあるまい。それにしてもいくらなんでも纏う雰囲気は鋭すぎる。

なによりも手にした槍。刃から柄までが漆黒に染まつた槍。

あれはヤバイ。直感とか、勘とか、そういうのを超越して不味いと解る。気持ち悪い、吐き気すら覚える。

なんだ、あれは。

「……お前は」

驚愕と吐き気をおぼるエリオを無視してその男は呟いた。低く、重い声だった。

「自分が今どういうものに手を出しかけているのか解っているのか？」

「——は？」

あまりにも唐突過ぎる言葉。何を言われたのか理解できなかつた。なんだそれはどういうことだ。今エリオが何に手を出したというのだ。確かに調子はいい。今日は絶好調だ。それは間違いない。だけど別に何に頼っているわけでもないだろう。なにか訳のわからないものに手を出した覚えはない。そうだそのはずだ。そうに違いない。一体何に頼るのか。そうだ、そのはずなのだ。なんだこの人は、なにを言っているのだ。勝手な事を言わないでほしい。

思考にノイズが走る。不愉快な雑音が駆け巡る。

「ぐ、あ、あ……」

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い。

頭が割れそうに痛い。

なによりもおかしいのはコレの感覚すら覚えがあるから。

さつき、名も知らぬ男に名前を聞かれて、こうやって不快感に襲われたことにすら覚えがある。

なんだこれは。やめてほしい。

「う、あ、………つあああああああああああああああああああああ
あ—————!!!」

僅か十歳。たったそれだけしかエリオは生きていない。人格形成すら終わりきって
おらず、第二次性徴期すらまだの少年に過ぎない。そんな少年にその既知感は重すぎ
た。脳内を駆け巡る不快感により、防衛機能が発動して、こうなった原因へと槍を振う。
雷撃を纏ったそれは本能のまま、恐怖によって放たれた刺突だ。だからこそ、武力で
はなく暴力にまでなった勢いがあり、

「温いな」

必死の一撃は、槍を使われるまでもなく、唯指の一本で止められていた。

「力がない。意思もなければ覇気もない。なんだこれは、この程度か。まるで木偶の槍

だな」

「で……………く……………？」

なんだそれは。崩壊しかける精神の中でエリオを告げられた言葉を反芻する。

木偶。つまりあれか、自分がただの物だと？ 立っているだけの置物で意味が無いだ
と？ なんだそれは、認められない。認めるわけにはいかない。

だって、つまりそれは――

「うわあああああああああー………ツツ!!」

最早悲鳴に近い絶叫が喉から迸る。

同時に体から、槍から、ありとあらゆるところから雷が迸る。かつてない勢いで放電
された激情の雷は、

「黙れ」

その一言と共に、僅か指の動きでストラダーの穂先が粉碎された。刃が砕け、それに
伴い、亀裂が柄まで伸びて粉碎される。破片が手の中に突き刺さった。

「……………え」

目が見開く。今日の前で起きた事が信じられない。そんな動きを止めたエリオに、

「……………この程度か」

失望した声。

槍ではない、だがしかし確実に必殺を威力が込められた一撃が、エリオの顔面へと振り抜かれた。

第十四章 道化と自死

死を纏う一撃が振られる。それはただの拳であり、特別な性質は欠片も持たない。ただ拳を魔力に込めたというだけだ。だがそれだけでも関わず、その一撃は振われたエリオの頭部を爆砕させる威力を秘めていた。いや、エリオだけでなく常人ならばどうあろうと死を避けられない致命の拳撃。

その一撃にエリオは全く反応出来なかった。

寸前に問いかけられた意味不明の言葉。それによりエリオ・モンディアルに自我は著しく崩壊しかけていた。だからこそ動けなかった。いや、例え意識をしつかりと保つていても反応できなかっただろう。エリオにはなにもできない。

する必要もなかった。

「おいおい、人の弟分に何してんだよ」

「――」

拳撃がエリオの頭部に直撃する寸前。その拳に灰色の弾丸が飛来し、その速度を減衰させる。同時に、地を這うように駆ける鎖がエリオの腹に巻きついて、

「そおーい」

さながら漁のように引き上げる。その直後に、それまでエリオの頭があつた所を通過し、大気を打撃するがそれだけだ。

「……………」

振り抜いた残身から自然体に戻りながら見た先は、

「これはスバルとティアナ連れてこなくてよかつたな。めんどくせえことにしかならねえなあ」

黒と白の斑髪少年、カイトだ。すでに形成された銃剣を手にしながら頭をくしゃくしゃと掻いており、

「ほら起きろエリオ」

「つ、う……………」

足元にまで転がって来たエリオを軽く蹴る。額にかなりの脂汗を流して、呼吸も荒いく、目の焦点も合っていない。その様子に軽く舌打ちしつつ、

「これもアイツ来たせいだよ、まったく本当にめんどくさいことしやがって。……そこんとこどう思う？ 旦那よお」

「……………」

鉄のように無表情を貫くその男と道化の如く軽薄な笑みを浮かべるカイト。正反対、

対極的な二人。見る者は見れば、少し前のカイトとスバルを思い浮かべさせられるであろう空気だ。そしてそれは空気だけではなく、

「……道化が。その少年がアレに汚染されているのはやはり貴様のせいかな」

「おいおい勝手に人のせいにするな。大体お前なんなんだ、俺はお前なんて知らねえ。なのにどうもデジャブるんだよ、アンタとその槍にな。どういうことか教えてくんね？」

「語る事などない」

「名前も言えないのかよ」

「名前などない……そんなものとうの昔に失くした。あの男は、ヴェルテル、などという名前で俺を呼ぶがな」

ヴェルテル、そう名乗った男の言葉に込められた思いはなんだっただろうか。怒りと憎しみと悲嘆。ありつただけの負の感情が込められていた。まるで何かに抗うように。

「ヴェルテル、ヴェルテル、ヴェルテル、ねえ……ふうん。なるほどそういうことか。相も変わらず趣味の悪いことしてくれるぜ。鋼鉄の腕の次は自死の苦悩ってか」

その名に何か得心があったのか、納得したように数度頷く。だが、すぐに忌々しげに吐き捨てる。その嫌悪感はどこではないどこかへ向かっていており、それは多分ヴェルテルの感情と行き先は同じなのだろう。

「ま、いいけどよ。お前が来ていることは、つまりそういうことだろう。」

「ああ、そうだ。業腹なことだが、やるべきことはやらなければならぬ。故に退け、道化。加減はしないし、全力だがそれは貴様相手ではない。……まずはその少年からだ」

視線がズレる。その先は、カイトの足元で未だに転がっているエリオだ。この周辺一体を掌握する蛇の影響を真つ先に受けた彼。ただ回帰しかけているのではなく、既知感という呪いに蝕まれてきているから性質が悪い。なるべく早く手を打たないと不味い。いや、あるいは手遅れか。

ヴェルテルの錆びた鋼のような瞳が、エリオに向けられ、

「ああ、そういうわけにはいかねえんだよ」

「なに……?」

その視線を遮るようにカイトが一步前に出て、銃口をヴェルテルへと向けていた。

「悪いなあ、そういうわけにはいかないんだよ」

「どういうつもりだ」

「はあ? 決まってるんだろそんなの。お前あれだろ? これからエリオぼこって、それから向こうのアイツらんどこ行くんだろう? それはゴメンだぜ」

軽薄な笑みはそのままであり、しかし目は鋭く、ヴェルテルを睨みつける。口に唾えていた煙草を噛んで、

「その槍はティアナには見せられないし、それになによりもお前さんをあのアホ女に会わせるわけにはいかねえんだよ。まためんどくせえことになるだろ」

「女か」

「そんなんじゃないよ」

そう、そんなのじゃない。そんな餓鬼っぽいことじゃないんだ。

ただ、アイツが、スバル・ナカジマがカイト・クオルトリーズにとって唯一の存在であるからというそれだけの理由だ。別に好きでも何でも無いし、むしろ今六課の中では一番嫌いな奴だし。確かに本来ならこの男をスバルたちとぶつけて、回帰を促すべきなのだろう。結果への狙いが水銀とは違うとはいえ、まずそこからでないと始まらない。

だからこれはカイトの我がままだ。

ただ単にあの時のように回帰したスバルなんかみたくない。あとはまあ、一応アイツも女であるわけで、俺はいい男なんだから護つてやるべきだろう。

「ま、とりあえず足止めさせてもらおうぜ。エリオ、お前は下がってろ」

「う、カイト………さん」

「余裕あるんだったら変わってやってもいいんだぜ？」

言いつつ、エリオを足で蹴り飛ばして、後ろに放る。なんか潰れたカエルみたいな声を出していたが、まあ気にしない。

「……ふん、やはり道化だな」

「うるせえよ」

カイトが銃剣を構え、ヴェルテルもまた黒い槍を下段で構えた。二つの魔力が高まり合う。共に形成位階での発現とはいえ、それでも凄まじい。通常の魔導師を大きく上回っている。彼らの渴望、祈りは己の内側に向かう求道のソレだ。それゆえに人間という形に魔人としての存在が集い強化されている。

「……貴様、なにか勘違いしていないか？」

「あ？ なにがだよ」

「ここで貴様が俺を足止めするのはいいだろう。だがな————ここに来ているのは俺だけではない」

「ガッ!？」

首筋を強打され気絶した男が倒れる。青の制服の彼は、ホテル・アグスタの警備員だ。そしてそれは彼だけでなく、

「っ……………」

「ぐ、う……………」

「……………つ、あ……………」

同じように倒れた男が十数人も一様に倒れている。薄暗くも、コンテナ等の多いそこはホテルの地下格納庫だ。今行われているオークションやそれ以外のことで行われる高価な物が複数あるが故に警備も嚴重だった場所だ。

だが、

「……………」

一人の侵入者によって突破されていた。

いや、一人というのは正確ではないかもしれない。確かに姿形は人間のソレだ。だが、それだけであり、間違いなく人間ではなかった。哺乳類ではない、毛のない少し光沢のある甲殻がその肌であり、鋭い爪や角を持つ異形の影。

人ではない。召喚された戦闘蟲というのがその存在の正体だ。首に巻かれた紫のスカートだけが人間味を感じさせている。

ソレは何かを探すように周囲を見渡す。数度、キョロキョロしなにかを見つけたのか、コンテナへと手を伸ばした。

「はいそいまで」

「!？」

伸ばした腕の手首を横合いかから伸びた手が掴んだ。召喚蟲のそれとは違い、白く透き通るような綺麗な肌と白魚のような細い指だ。そしてその手の主は、

「ごめんねー、悪いけど邪魔させてもらうよ」

黒のイブニングドレスに身を包んだ、月村すずかだ。彼女は掴んだ腕はそのまま、

「フッー！」

召喚蟲の胸部に逆の手で掌底を叩き込む。すでに僅かに目の色は紅く、爪や犬歯も長めになっている。形成ではないが、その一步手前の活動位階だ。それでも身体能力に特化されたすずかのソレは並外れている。それまで、警備員たちがキズ一つ付けることができなかった装甲に亀裂を刻みながら叩きまれる。

「!!」

ぶっ飛んだ。

その体が床から離れて、数メートルぶっ飛び、向かいの壁に叩き込まれる。壁が破壊され粉塵が巻きあがる。だが、

「……………」

「ふうん、頑丈だね。というか凄い再生能力」

確かに亀裂は入れたはずだ、にも関わらず既に胸の亀裂は修復していた。紫色の体液らしきものに濡れているから全くダメージが通っていないわけではないのだろう。

召喚蟲は何事もなかったかのように歩いてくる。すずかとの距離を十数メートル詰めた所で一度立ち止まった。

「……………」

「ん？ なにかな？ ああ、私がここにいる理由？ いやそれがさ————ジャンケ

ン負けちゃって」

なんてことをあつけカランと笑みを浮かべて言う。

「あなたが侵入してきてき、誰が行くかつて話になつたんだよね。そうしたら護衛のギンガは護衛だから動かないっていうし、カリムさんはお偉いさんとの挨拶あるから行かないって。そんなんだから私とアリサちゃんやんでジャンケンしたら思いつきり負けちゃつたという話しなんだよね、これが」

はは、と数回笑つて、

「はあ」

ものすごく重い溜息を吐いた。

「……いやこれはないよ。せつかくユーノ君に招待してくれて、晴れ舞台が見れるかと思つたら、私はこんな所でバトル？ なにそれありえない。なにあのアリサちゃんのだや顔。嬉しそうにしちやつて羨ましい」

もれるのは不平不満の言葉。それでも。

ニツコリと、見惚れるような笑顔を浮かべて、

「てな訳で憂さ晴らしに付き合つてもらおうよ？」

第十五章 闇に咲く血染華

灰色の弾丸が飛翔し、黒の槍が轟風を纏って撃ち落とす。

「オラア……行くぜエッ！」

獣染みた叫びと共に放たれるのは減衰の効果を持った狼の牙。いや、彼の能力の本質は減衰などではないが、結果としては黒槍の威力を押さえている。狙いなどまったく付けられておらず、勘にすぎない要領で放たれた弾丸。しかしそれは正確にヴェルテルの急所へと放たれる。

だからこそ、

「おおッ！」

狼の牙に負けぬために、さらなる勢いをもって黒槍を振う。確かに弾丸に触れた瞬間に勢いは落ち、腕から力は抜けていく。だがそれがどうした。それならばさらなる力を以って己の槍を振えばいいだけの話しだ。力が抜けた、ならば短くも鋭く力強い雄たけびを以って力を入れ直し、

「……………」

唐竹割りで振う。

音速を軽く超越した槍が大気をぶち抜きながら、カイトへと叩き込まれる。

「おおっと」

減衰の弾幕を突っ切り、己へと迫る轟風に対してさえも笑みを消さなかった。防御はしない。自身の正中線を真つ二つにせんとする槍にもまったく臆する事はなく、気の抜けた声で回避を選択した。

真横への小さなステップ。

移動はそれだけだ。一歩間違えれば腕が？がれるであろうギリギリの回避。紙一重という言葉すら生易しい。僅かの余裕もない。常人ならばまず発想すら湧いてこないし、発想できてもやれない。黒円卓たちでもその動きが可能な者もいるだろうが、やらないであろう。

だが、カイトはそれを行った。

死の烈風が左肩のジャケットの生地を僅かに持つていく。だがそれだけ。彼の身体にキズはなく、

「ほうら、歯食いしばれよ」

黒槍を振り抜き、隙が僅かに生じたヴェルテルの腹に 刃を指し込みながら引き金を連続で引く。

「ぐっ……！」

僅かに漏れるうめき声。いや、それしかでなかったことこそ驚嘆に値すべきだろう。腹を刃で突かれて、同時に減衰の魔弾をぶち込まれたのだ。まず間違いなく致命の一撃ではあるが、

「……その程度か」

次に聞こえたのは揺らぐことのない不動の声。錆びた鋼のごとき声であり、

「その程度では終わらんよ」

「ああ？」

違和感。叩き込んだ銃剣に違和感を得る。

聖遺物による術法、『永劫破壊《エイヴィヒカイト》』による発現の仕方は原則四つに分かれる。

人器融合型。

武器具現型。

事象展開型。

そして特殊発現型だ。

カイトの聖遺物、『灰色狼の爪牙』一見武器具現型に見えるが人器融合型だ。聖遺物と肉体を融合させ、四種類の中でもトップクラスの攻撃力と爆発力を誇るタイプ。実際、

彼が振るう鎖は彼の手や腕から生えているし、減衰の魔弾もあくまで、己自身の肉体の性質を乗せているに過ぎない。

「ぐ、が、あ……！」

だからこそ、銃剣から得られる違和感の即座に知覚することができた。

『彼らはただ悲しみと不幸を見出すだけであろう』

紡がれた祝詞。それに込められたのは終焉と幕引き。絶望と悔恨の意思だ。万象尽く終わり果てろ。

「自壊するのが好きなのだろう？ ならば疾く消え去れ」

銃剣の刃が錆びていく。劣化し、亀裂が入っていく。

自ら壊れることを望んでいるかのように。

それは形成よりもさらに先。第三位階の欠片にすぎない余波だ。にも関わらずカイトの爪も牙も自壊し、崩壊していく。

「う、お、おおお……ッ！」

無論、カイトも木偶の如く、為すがままだったわけではない。自壊を始めた瞬間にさらに引き金を引き、その勢いを利用して銃剣を引きぬく。おまけとして、蹴りも叩き込

みながら僅かに距離を作った。

「甘ん」

だがそれだけでは足りない。未だに消えぬ自壊の残滓を纏った黒槍が振られる。黒の槍が鳴動する。創造階を欠片とはいえ使用しているおりに注ぎ込まれたヴェルテルの魂を飲み込んで歓喜しているのだ。もとよりそういう槍。使用者の魂を喰らって強化進化していく死の魔槍。■■の贗作のさらに贗作。しかしそれでもその槍の怨念は薄まる事はない。

さらなる魂を求め、カイトという良質の存在を求める。

だが、

「ふざ、けんな……、自壊が好きだあ？ 誰のこと言ってるんだよ、知らねえなあそんな

のよお」△

振り下ろされた黒槍を銃剣を十字で受け止める。その威力は凄まじく、受け止めた瞬間に銃剣への亀裂は増え、カイトのブーツが数センチ地面に埋まるほどだ。それでも、それでも、カイトは笑みを浮かべていた。自身の聖遺物にダメージを入られた故に魂にもダメージが入り、口の端から一筋の血を流しながらも、

「アホか。どつかのイカレ野郎と一緒にすんな、俺はそういうのどうでもいいんだよ。

俺はアイツじゃねえんだから」

カイト・クオルトリーズは■■■■ではない。それは絶対だ。だからこそ、アイツの渴望なんて知らない、そりゃあ、結構賛同できるといふか、諸手をあげて大賛成だし、俺だって同じ事を思っているし、狙っている。

だけど、一番大切なことがカイト自身にはあるんだ。

カイトにとってだけの唯一無二が。額に残した小さな傷がその証だ。脳裏に過る、見た事もないアホ女の笑顔が証明だ。

いや、ほんと好きとかじゃないし、笑顔でなくてもなんでもいいんだけど。

「だから、勝手に人のイメージ押しつけてんじゃねえぞ……ッ！」

歯を食いしばり、渴望を強化していく。創造とまではいかないが、形成としては極限域。すでに創造位階としてもかなりの練度であるからこそその結果。銃剣に刻まれた亀裂が増える。だがそれは自壊によるものではなく、

「ぬ……」

ヴェルテルの眉が険しくなる。

「——だらっしやあ!!」

雄たけびと共に銃剣をカチ上げる。狼の爪牙が魔槍を跳ね上げ、ぶつかり合う魔力と魔力が大気を揺るがし、互いに距離をあげた。そして振り抜いたその爪牙は、

「ほう」

「フツ！」

「……………」

鋭い呼吸と共にすずかがぶち込んだ爪による一撃と召喚蟲の爪とが激突し、大気が鳴動する。魔力だけではなく、それにより超強化された二つの臂力によって生じた物理的な衝撃波だ。召喚蟲の召喚士も尋常ならざる存在なのだろう。すでに形成位階に移行しているすずかの爪撃に拮抗している。

「っ、ああ！」

弾かれ、体勢が崩れるがすぐさま、爪を横に振り衝撃波を発生させる。岩をも砕く威力を秘める彼女の一撃であるが、

「……………」

腕をクロスさせたことで耐える。想像以上の硬さだ。いや、ただ硬いだけではない。供給されている魔力の質や量も高いというのもあるが、

「その羽、だね」

召喚蟲に生えている羽。それが厄介だ。基本的には飛翔の為のものなのだろう。現にとび蹴りや加速の為に使用していた。だが、それだけではなく、

「振動による威力拡散や、強化、ね」

「……………」

肯定するように召喚蟲が小さくうなずいた。

打撃や爪撃のインパクトの瞬間に振動させることで威力を強化し、攻撃を受けた瞬間には全身を振動させて衝撃を受け流しているのだろう。まさかに漫画のような所業だが、『永劫破壊』の使い手は既存の物理法則を超越することが多い。だから、こそでできるし、現に実行している。

「……………むう」

強いなあ、と素直に思う。気晴らしのつもりだったが、中々どうしてキツイ。侮つていたつもりはないけれど、互角か、こちらの方が押されているだろう。こちらも接触時に吸精を発動しているが、向こうの振動による破壊ほうが効果が高い。

「ああ、うんまあそうだよねえ……」

別に力量そのもので劣っているわけではないだろう。ただ、今のすずかでは足りないというだけなのだ。カイトと同じ人器融合型であるすずかはテンションの上げ下げで

力量の幅が広い。爆発力の高い人器融合型の欠点だろう。

そして今のすずかのテンションは過去最低に近い。

アリサとかギンガとかカリムとかが、ユーノの晴れ姿を見ているのに、自分はこんな所で蟲退治だ。

テンション最悪だった。もつと言えば夜に強化される彼女の能力だが、逆に言えば昼ではかなり下がってしまふ。それも相まって、かなり劣勢のすずかだった。

「あー、どうしようかなあ。……うーん、これはなー、いや、でもねえー……つととー！」
なんて、要領の得ないことを呟いていたら、しびれを切らしたのか、召喚蟲が振動を乗せた拳を叩きこんでくる。なんとか避けるが、掠ってドレスが破ける。いや、もう既にボロボロだ。大きく破れている訳ではないが、生地が大分痛んでいて、見れたものではない。

それがまたすずかのテンションを下げる。

どうしようかなとか思っ、そして、

「おーい、すずか。大丈夫？」

「え——!?!」

瞬間、なにもかも忘れて声の方に振りかえった。声の元は地下室の入り口。戦闘途中に蹴り飛ばしたりしてどかした警備員たちの向こうに彼はいた。後ろに溜息を吐くアリサと軍服姿の紺色の髪の少女を従えた青年。

はちみつ色の髪と翡翠の瞳。澄んだそれを隠すような地味な眼鏡に同色のスーツ姿。一見して特に存在感があるわけではない、女顔の柔な青年にしか見えないが、

「ゆ、ゆゆゆのくん!?!」

ユーノ・スクライアがそこにいた。

何故、どうしてという思いが脳裏を駆け巡る。彼は確か未だにオークションの説明と加しているはずなのに。

どうしてこんな所にいるのだ。というか今すっごい格好してるんだから、あまり見ないでほしい。

「あー、えつとね。ガジェットとか来てき、オークション中止になってね。今はなのはたちが避難誘導してるよ。そしたら君が帰って来てないから探しに来たんだよ」

頬を軽く搔きながら、問いかけてくる。目の前の戦闘中なのはまったく意に介さず、ただ本当にすずかを心配していた。微塵も戸惑う様子はない。にこやかな笑みを浮かべながらも、それだけだ。

揺らがない大樹の如く、敵であるはずの召喚蟲はまったく目に入っていない。それを召喚蟲はどう思ったのか。あるいは、召喚蟲を介していた召喚主だろうか。気に障ったのは間違いない。ユーノに気を取られていて、隙だらけのすずかへと一歩踏み出しかけ、

「動くなよ」

「――！」

ただそれだけ、なんの変哲もないそこからへんのチンピラでも言える言葉だ。にも関わ

らず、召喚蟲、そしてその主すらも言葉の通り指先一つ動けなくなつた。呼吸すらままならない重圧。なにかされたわけではないのだ。なんの魔力行使も、『永劫破壊』による効果でもなんでもない。ただ、絶対的な上位者から放たれた命令だ。

この場では召喚蟲のみしか知らないことだがその蟲の主は十にも届かない幼子だ。ヴェルテルと同様にその人生を水銀に弄ばれ魔道を歩んでいるとはいへ、未だただの少女にすぎない。エリオ・モンディアルが既知感に堪えられなかつたように、彼女も同じだ。いや、彼以上に魂に受けた衝撃は大きいだろう。

今この世でただ■人しかいない■■に至つた者からの言葉。

『……………ッ！』

それに唯の少女が耐えきれぬわけがない。彼がただ動くなという不動の命をしたからこそ、彼女の魂が潰えなかつただけだ。

空間ごと凍つたように動きを止めた召喚蟲を一瞥し、視線はさすがへ。

それまでの空気はどこ吹く風であり、再び浮かべられた優しい笑みで、

「あ、助けていい？　　さすがか」

それだけを聞いた。

*

「要らないよ！　そこで見てて！」

彼にそう言葉を掛けられた瞬間にすずかのテンションは最高潮に達していた。それまででかつてない魔力が生まれ、すずかの身体に集まっていく。

「ふ、ふふ、ふふふふ」

口からこぼれるのは歓喜の笑みだ。それまで劣勢のなにかもはいつでもよくなつた。

だって彼が見てくれているから。

後ろにアリサとかギンガがくつついているが、それはまあ気にしない。彼がいるとい

う事実だけでなによりも彼女の魂は高ぶり渴望が強まっていく。

その様子に召喚蟲が後ずさるが、それでも彼女は笑みを消さず、

「ああ、ごめんね。ちよつと上がってるし……つて言わせないでよ。ユーノ君の前だよ？」

頬を赤く染め、恍惚の笑みを浮かべながらその力を解放した。

『かつて何処かで　そしてこれほど幸福だったことがあるだろうか』

あなたは素晴らしい　掛け値なしに素晴らしい　しかしそれは誰も知らず　まだ誰も気付かない

幼い私はまだあなたを知らなかった』

それは『ファム・ファタル』月村すずかの創造位階。

彼女の魂から湧き上がる祝詞が世界を変えていく。自らの渴望、内向きのそれは彼女を一つの位階へと創りあげ行くのだ。

それは人の形をした夜のように。

『いったい私は誰なのだろう　いったいどうして私はあなたの許に来たのだろうか』

もし私が騎士としてあるまじき者ならば、このまま死んでしまいたい

夜に無敵の吸血鬼になりたいわけではない。

愛する人の糧になりたいわけではない。

夜に羽ばたく不死鳥にもならない。

そうだ。そんなものには興味はない。なぜならば、彼女はこう思うから。

『好きな男の子の為に咲き誇れる華になりたい』

それこそが、今を生きる月村すずかの、ユーノ・スクライアに恋した彼女の渴望だ。

『何かが訪れ 何かが起こった 私はあなたにはなにも聞かないであろう

あなたを信じているから あなたがそれでいいというなら 私はそのために咲き誇

ろう

愛しい人よ 誰も見えないあなただけを見 あなただけを感じよう

わたしの愛で輝く あなたを私も知っているから』

彼は実際の所馬鹿だから。自分のこととか全く顧みない困った人だから。忘れないで、あなたを私は見ているから。あなたの為に咲く華だから。あなたは私を守ってくれるんだろうけど、護られてるだけの安い女なんかじゃないから。

誰もかも護ろうとするあなたを私は護りたいの。

創造位階を発動する時には自分の渴望をしつかりと抱かねばならない。つまりそれは己の魂と向き合うということ。その度、この身体を奪おうとしてくる鬼がいる。鬼女

がいる。耳障りな哄笑を上げながら、すずかの魂を蝕みに来る。

だがそれがどうしたと、彼女は彼らから解脱する。

自分の大切な人を吸い殺してでも強くなりたい？

自分のなにもかも差し出して好きな人がカッコ良くなれば私はイイ女？

ありえない、ありえない、ありえない。なんだそれは。元来宿る吸血鬼という性質だけを強化させつつ、彼の、彼女の祈りをすずかは否定する。

好きな人にはカッコ良くいてほしいし、そんな人に見ていてくれるような綺麗な女でいたいから。

『ゆえに愛しき人よ輝け煌け 私はあるあなたの為に咲き誇るのだから』

赤混じりの白髪は色が薄まっていき元の夜色に。しかしそれでいて紅の瞳は血のようで鮮やかで。滴る血が全身をぬらし血のドレスを作っていく。元々来ていたのはポロポロだったから血で補強し、赤と黒の衣装へと。爪もただ伸びるのではなく、血が形を作り、濃縮凝固して、より硬く、鋭い爪になる。

『創造——』

B r i a h ——

それこそが月村すずかだけが望む世界。

『百花繚乱の血染華』

夜の中、愛する人の為に血染華が咲き誇った。

第十六章 既知の疾走

ではここで、一人の少年の話しをしよう。

その少年の人生は決して幸せとは言えなかつただろう。

確かに彼は、物ごころついた時はこれといった不平や不満もなく、ただ当り前の日常を彼の両親と共に謳歌していた。

まだ四つや五つという幼い自分、自我すら曖昧でありながら、それでも彼は幸せだつたはず。

それは起伏もなく起承転結もない物語。ただ子と親が戯れるというそれだけの話だ。そこには停滞した平穏があり、彼はただ笑っていて、ただ一日と次の日のことくらいしか考えていながつたのではないか。

これを是とするか否か個々人の判断に任せよう。私はなにも語らない。少なくとも彼の在りし日の陽だまりには私が言う事はないのだ。

だからこそ、真に語るべきはその幸福が崩壊した時。

少年の出生には秘密があつた。

なんの欠落のない彼の陽だまりに亀裂が入る。ああ、その瞬間は私が今の世に生を受

けてから幾度となく見ているとはいえ、やはり業腹といえよう。掛け値なしに、彼に罪はなかつた。彼は何もしていない。ただ日常を謳歌していたそれだけだ。

だがね、この世界はそういうものに対して、吐き気がするまでに酷だ。変わる事ない、停滞した刹那にも、欠落しない幻想にもこの世は見境なく碎き潰す。

人造魔導師計画。Project. F. A. T. E.

それによつて彼は生み出された存在だった。彼は、彼のオリジナルの代替でしかなく、彼の両親は死んでしまった彼の代替として彼と触れあつていたのだから。だからこそ、彼に罪はない。その技術は確かに管理局内の法においては違法ではあるが、罪を背負うべきは彼の両親であり、彼ではないのだ。他に矛先を向けるならばその技術の開発者、というのは些か飛躍のしすぎであろうか。それは、私が語ることもない。

ともあれ、自らの出生を知つたその瞬間から彼の人生は一変する。その魂に消えない傷を残し。補うこの出来ない疵を刻み込んだのだ。そこからの彼の半生はあまり気持ちのいいものでは無かつただろう。なまじ幸福な瞬間を知っているからこそ、それから突き落とされた絶望ははかりしれない。

ああ、彼の絶望を芥と嗤う気はないよ。

それはあくまで彼の抱いた感情なのだから。いや、未だ十に届かぬ少年が味わつたものとしては、最悪の部類であつたらう。父と母の温もりから遠ざけられること以上の苦

私が何度味わつても、しかし至高の輝きだと信じる閃光に。
 我が世界にて、なによりも早かつた最速の狂獣、狂乱の白騎士^{アルペド}。

さあ、己の魂を回帰させるのだ。誰よりも、何よりも早く疾走するために。

『——一つ、だけ』

ほう？

『一つだけ、違います』

なんにかね？

『回帰とか、魂とかはわからない。でも、でも』

.....

『僕は不幸なんか、じゃ、ないです』

.....

『確かに、僕は両親から棄てられて、一人ぼっちの、野良犬みたいなのでしょうもない奴
 でした。でも』

.....

『抱きしめてくれる人はいました。温もりをくれる人も、愛してくれる人も。僕には、い
 てくれましたよ』

『フエイトさんにユーノさんは僕にとって新しい両親でした。なのはさんやはやてさんやアリサさんやすずかさん、それにシグナムさんにヴィータさん、シヤマルさん、ザフィーラさん、クロノさんやエイミーさん方だってそうです。スバルさんとティアナさんもそうですし、キャロだって。カイトさんも兄弟です』

『だから、不幸じゃありません。愛を感じています。抱きしめてもらっています』

ならば。

ならば聞こう。少年よ。

君は愛を感じ、抱擁を得ながら何を願う。何を祈る。いかなる渴望^イを抱くのかね？

『抱きしめてもらえました。愛してもらえました。だから、だからこそ、返したい。ありがとうって言いたいです』

『それが……僕の願いです』

……ふ。

『……ふ。』

ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。ふ。

ああ、そうか、よかろうよかろう。なるほど。

そう、繋がってくるといふわけか。然り然り、ふふふ。

『……………』

よかろう。君は及第点としよう。君のその渴望はアレから根づいているのは間違いない。ならば安易に塗り替えるのも無粋と言えよう。だが、案ずることなかれ。まだ、君に我が歌劇の演者であることを認めたくはない。あくまで暫定だ。白騎士アルペドは消えるかも知れぬが、既に赤騎士《ルベド》は継承され、黒騎士《ニグレド》もまた不安定だ。それはまあよい。だからこそ代替はすでに用意してあるが故。

ああ、君には英雄の素質がある。故にまずはその男を打倒したまえ。自死の苦悩を終わらせた暁には君を英雄として認め、我が歌劇の演者足る事を認めよう。喜んで学んでくれ、少年よ。

餞別として、我が祝福祝を授けよう——。

「エリオ……!?!」

「ほう……」

転がっていたはずのエリオにカイトとヴェルテルは驚愕する。それはただ立ったか
らというわけではなく、彼ら二人だったからこそ、エリオの変化に気付いたのだろう。
カイトもヴェルテルもどちらも形は違えど既知感という呪いに汚染された者同士。片
や■■■■として、片や水銀に植え付けられて。また前世の残滓としても植え付けられ
たり、元々持っているのだ。だからこそ、感じた。エリオ・モンディアルが同等の祝福^{呪い}
を与えられたことに。

「……行き、ますッ!」

先ほどヴェルテルに愛槍であるストラダーを砕かれた故に無手であるが、しかしそれ
は武器となるものが全くないわけではない。全身に薄くだが帯電する、白と黄色の混
じった雷。伝わる魔力自体はそれほど濃いわけではない。しかし通常の魔導師を遙か
に超えるそれは、

「活動か!?!」

応えは言葉ではなく、行動で示された。エリオの足元で雷が弾け、加速したエリオが疾走する。それは雷速や光速には遙か遠く、音速にすら劣るだろう。それでも、それまでに比べたら雲泥の差だ。その速度差が二人の反応を一瞬だが遅らせる。意識の隙間を突いたそれは所見故に成功し、ヴェルテルの腹部にエリオの雷拳が叩き込まれる。カイトを押しつけるように、二人の間に割りこんだそれは軽い一撃だった。速度差により見落とされたのは確かだが、しかしエリオ自身も活動位階の速度を完全に把握しているわけでもない。だからこそ、それは拳撃としては出来損ないの一撃だった。体重も乗っていないし、速度に振り回されていたそれだが、

「ぬっ」

ダメージは確かになかった。痛みはなく、痣の一つもできなかった程度の一撃だ。

だが、確かにヴェルテルは拳を受けた箇所に痺れを感じた。

「ほう」

それはつまり、エリオに体には『永劫破壊《エイヴィヒカイト》』が宿り、活動位階が発動しているということだ。

「おもしろい」

始めて。これまで鉄のごとき無表情だったヴェルテルの顔に僅かな笑みが浮かんだ。その上で、

「はあっ！」

魔槍を振う。それまでカイトに振われていたのよりも早く鋭く激しい。例え活動位階にエリオが上がっていても、活動程度では避けることはできないはずだ。

にもかかわらず、

「――！」

避けた。足元で雷光を弾かせ、右の肩口を掠らせ、バリアジャケットの袖を挽ぎながらも回避した。

あり得ない。そうあり得ないはずなのだ。

ヴェルテルの振った槍はエリオの速度では避けきることができないはずなのだ。振われたそれをエリオが知覚し、回避はできない。

ならば、何故エリオは魔槍の一閃を避けたのか。答えは単純である。

振られる前から回避運動を始めていた、それだけだ。

根拠があつたわけではない。動きを先読み出来たわけでもない。

ただなんとなく、ただ勘で。そうなる気がしたから。そうであつた気がしたから動いたのだ。

既知感。

この景色はどこかで見たことがある。この味はどこかで味わつたことがある。この

女はどこかで抱いたことがある。なにもかもを知っている、なにもかも体験したことがあるという感覚。

つまり、先の瞬間の、ヴェルテルの槍を振われたこともかつてあつたはずだという感覚がエリオを動かしていた。

その感覚に突き動かされて疾走する。振り抜かれた魔槍を回避し、そのままヴェルテルの右側へ。叩き込むのは雷を纏う拳の連撃。一瞬だけの麻痺効果があるからこそ、連続して叩き込む。

「ゼア—ーツ—」

咆え、

「—」

視界にノイズが走る。砂嵐が脳内を犯し、跳躍する。

刹那後に魔槍が振られる。ロングコートを大きく切り裂き、しかしエリオを傷を受けることなく回避し雷拳を叩き込む。直後にノイズが走り、それに任せて回避。ひたすらにそれを繰り返せば、とエリオは思う。

大した根拠はなく、意識が朦朧としてた時から覚醒してから感じる既知感任せだが、これならいける。

そう思い、

「だがそれではいかん」

それまでの速度を遙かに上回る速度で魔槍が放たれ、既知感も間に合わずに喰らった。叩きこんだ槍は腹にモロのあたりエリオはぶつ飛び、ホテルの外壁を破壊しながら突っ込んだ。本来ならば両断できたはずだが、激突の寸前に僅かに反応しようだ。刃の部分ではなく、柄にわざと当たることによつて体が真つ二つになるのを避けたようだ。そこそこ器用なことができるようだが、しかし所詮は活動位階だ。ヴェルテルの實力からすれば相手にはならないのだ。

例え既知感に汚染されていようとそれは変わらないのだ。

「……………」

だからこそ、エリオを意識外に置く。そして向き合うのは、
「あ？ なんだよ、もう俺に来るのか？」

煙草に火を付けるカイトだった。

「貴様、どういいうつもりだ」

目を鋭くさせ、睨むヴェルテルだが、しかしカイトは軽薄な笑みを浮かべていた。先ほどまでの戦闘が無かったように煙草をふかし、

「そりゃ、だつてよ。弟分がやる気だしたんだぜ？　なら、譲つてやるのが兄貴心つてもんだらう？」

「くだらん。その弟分とやらは退場したぞ」

そう、今ヴェルテル自身の一撃によって沈めたのだ。あれから復帰できるのはまず無理なはずだ。

だがそれでも。

「はあ？」

カイトは愉快そうに笑い、

「なに言ってるんだお前。目ん玉付いてんのか？」

言った瞬間だった、

「形成——」

Y e t z i r a h ——

「！」

「ハッ」

ホテルに閃光は迸り、壁を砕き風穴を空ける。昼天をまぶしい黄と白交じりの雷光が駆け巡る。

空気を弾けるような音を立てるそれは、

「——」

先に砕かれたはずのエリオのデバイス、ストラダーだ。先ほどまでよりもより確かな雷を纏っている。アバラの骨はほとんど折れたはずだ。白と赤のバリアジャケットを鮮血で濡らし、袖の無い右腕は血で真っ赤だ。口の端や額からも同様に赤の色を零して

いるが、それでもしかし、破壊した壁の残骸の瓦礫に足を掛けながらもしつかりと立ち、形成させた己の槍を構えている。

「ほう」

血に濡れながらも、エリオの目は凜いであり、それを見てヴェルテルは薄く笑う。

「なるほど、理解が早い。これも奴の仕掛けか？　そうだろうな。いくらなんでもこの

早さでは至れんだろう。貴様はどうだ、ガウス」

「あ？　俺も一瞬だけ一瞬。当り前だろ？」

笑うカイトには最早戦闘の意思を感じられない。銃剣を形成したままだが、槍を構えるエリオを面白そうに眺め、

「やれるか？　エリオ」

「……………はい」

「よし、んじやがんばれ。あー、まああれだ。ソレは便利だから一応使つとけ。けど、飲み込まれるなよ？」

カイトの言葉に小さく頷く。要領を得ない言葉ではあるが、しかしエリオにはそれで伝わったらしい。唇を固く結び、槍を強く握りしめる。それに伴うように、

「……………」

ヴェルテルも槍を構える。

両者の視線がぶつかり合い、そして。



「——エリオ君ツ!!」

「っ!?!」

「うげっ」

「……次から次へと」

エリオは驚愕し、カイトは嫌そうに顔を歪め、ヴェルテルは苛立ったように嘆息する。

その原因は突然現れた少女。いや、それは突然というのは正確ではないだろう。ホテル裏側で戦闘していたカイトたちとは違い、ホテル正面でガジェットたちと闘っていた彼女たちだったが、先ほどエリオがホテルの外壁をぶち抜き、雷撃で爆砕させたから駆け付けたのだ。

「キャロ……」

「エリオ君、大丈夫!?!」

エリオの背後から駆け寄るのは桃色の少女、キャロだ。彼女はエリオの纏う雷にも構わずに彼の下に駆け寄る。一瞬、エリオに触れた瞬間、雷がキャロの指を焼くが、しかし構わずに治癒魔法は使い始める。

そして駆け付けたのは、キャロだけでなく、

「ちよ、これどういふことよ」

「カイト! どうなってるのこれ!」

「……つち、おいおいマジか」

ティアナとスバルも一緒だ。そのことにカイトは思わず舌打ちをし、感覚をホテルの正面に伸ばせば、

「あー、姐さん方戻って来たのか……」

ヴィータとシグナムが正面にてガジェットと闘っているのを感じる、なるほど、だか

らこそ三人を来させたのだろう。判断としては間違っていないだろうが、この場合は最悪だ。

「おい、スバル、ティアナこっち来い！」

「? なによ」

「そんなことよりも、敵は……!」

スバルがヴェルテルを視界に入れる。その瞬間に彼女の目から光が消える。動きから生気が消える。

まるで彼女とは別の存在になりかけて、

「ほれ、しつかりしろ」

「あいたっ」

何時の間にか移動していたカイトがスバルの頭を叩いて引き戻す。

「ティアナ、オメエも。しつかりしろよ」

「え、あ、……え、ええ」

「なんでたたくのさあつ」

「……はあ」

「なにその可哀そうなものを見る目は!」

自分がどういいう状況になって、カイトに助けられたという自覚はないのだろう。まあ

カイトも教えるつもりはない、馬鹿みたいなやりとりだが、こうでもして空気を壊さないと、なにかしら起きかねない。

シリアス担当は、カイトではないのだ。

それは彼の弟分の担当だ。

「……キャロ」

「なにっ？　治癒はもう少し時間掛るから……」

「大丈夫だから、下がってて」

「え……!？」

治癒の為に帯電するエリオの身体に手を押しあてていたキャロの手を優しく払い、押しつける。その手のみは雷は宿っていない。

驚きで眼を見開く、キャロに優しく微笑みながらも。

「ゴメン、キャロ。もう大丈夫だよ。後は僕がやるから」

「そんな、なに言ってる……!」

「エリオ！　五人揃ったんだからちゃんとフォーメンション組んで……!」

「おいおいティアナ、そんな萎えること言うなよ」

ティアナの至極真つ当な言葉に割り込んだのはカイトだ。やはり煙草をふかしながら、笑みを浮かべ、しかしそれはただの軽薄なだけの笑みではない。笑いながら、向か

う視線はエリオとヴェルテルだ。

「なあ、分るよなあエリオ？ 男の喧嘩に」

「——ええ、女性の方はご遠慮願います」

静かに、しっかりと踏み出しながらそう謳うように言った。意地と感じさせる言葉であらう、負けず嫌いがやりすぎたということにしか見えない言動だ。

「え、りお、くん」

その言葉はエリオの背中に届かず、伸ばした手は届かない。宙を泳ぎ、なにも掴む事の出来なくて、瞳に涙を浮かべたキヤロは、

「ほら泣くなよ、キヤロ。お前さんにもやることがあるだろう？」

「え……？」

「馬鹿やる馬鹿に、掛ける言葉なんて一つだけだぜ、な？」

「お待たせしてすみません」

「かまわん、俺としては女子供が増えようと関係ない。俺は俺の目的を果たす。故に、護りたいならば護って見せろ。その忌まわしき毒に汚染された身でな」

「はい」

圧倒的に自分が不利だということはエリオにも解っている。彼我の実力差は天と地の差があるだろう。先ほど一瞬いけると思ったが、すぐにひっくり返されたのだ。未だ、この鋼の男の実力は計り知れない。なまじ近づいたと解るからこそ、さらに差を感じるのだ。

だが、それがどうした。

エリオだつて男なのだ、そういうことを無視してでも戦わねばならない時があるのだ。

「………行きます」

「来い」

膝を沈め、槍を強く握り、雷を全身に帯電させて加速し、

「エリオ君!! —— 頑張つてッ!!」

「……………」
なによりも大切な少女の声援を背に受けながら、

疾走を開始した。

第十七章 交わる祝福

エリオが疾走を開始した瞬間に地面が大きく揺れた。立っているのもままならない局地的な大地震だ。キャロたちがとっさにうづくまるほどだ。無論、このタイミングいきなり地震が自然発生するわけがない。原因はこの場ではカイトとヴェルテルのみしか気付いていが、地下で戦闘するすずかと召喚蟲の余波だ。肌がざわつくほどの高密度の魔力。恐らく超強化された膂力でどっかぶん殴ったりでもしたのか、そのせいでここまでの振動が生じたのだ。ホテルの造形や骨組みが壊れかけるほどの大振動に対し、

「——付いて来い」

ヴェルテルは跳躍した。

行き先はホテルの壁面だ。そもそも振動する壁に着地し、

そのまま駆け昇る。

膂力に任せた疾走だ。体が失速し、落ちる前により速く足を踏み出した加速する事によって昇っていく。姿勢制御魔法や重力緩和魔法を使うのでもなく永劫破壊を宿しているからこそその力技だ。

だからこそ、

「オオオオオー……ッ！」

同じく永劫破壊を宿したエリオにも可能だ。ストラダーの穂先の備え付けられたジェットノズルから噴出し、その勢いに任せてエリオも跳ぶ。壁面に着地しても、さらにストラダーの推進力を使う事によって駆け昇る。無論それは一步一步が危うい疾走だ。自由落下に誓いそれは僅かでも足を踏み外せば失速すればエリオは墜落するだろう。揺れに足を取られても、加速の勢いを緩めても、なにか一つでも間違えればエリオは落ちる。

だが、

「——ッ」

視界にノイズが走る、砂嵐が吹き荒れる、吐き気が止まらない。時間が刹那止まったように色を失う。そして見えるの今いる自分よりも少し先の未来にいる自分。いや、正確に言えばかつてどこかでそういう自分がいたような気がするという感覚だ。

カイトはそれを使えといった。

これがなんなのか、エリオにはわからない。だがしかし使えと言われた以上、そしてこれが活路を切り開くの有用ならば、

利用する。

自らの数メートル先にいるヴェルテルはなにも言わず、ただ駆けのぼる。だがその背

時間にして十秒もない。だがエリオにとってはもつとずっと長い時間を感じていた。ビル十数階分を昇りきり、

「クッー！」

突きだされる黒槍を既知感に従い紙一重で回避する。それでも避けきれずに頬を切り裂かれる。ストラダーの噴出機構を用いビルの縁に沿って走り、距離を取ろうとするが、

「!？」

またもや眼前に槍が。のけ反るのが遅ければ、頭部が爆砕していただろう。

「どうした」

鋼のような声。問いかけるようなヴェルテルの声だ。

「その程度か」

「っ違う！」

体を動かす。だがそれは今までのようにただ疾走するためではなく、逃げるためでもない。槍を振うためだ。基本の突き。槍を強く握り、足を踏みしめ、膝や腰、肩の動きを連動させて肘を伸ばし突く。基本の動きだ。エリオが、かつてフェイトから始めて教えてもらった動きだ。そしてその上で、超高速機動の極限状態で加速された思考で彼我の状態を見極める。自分がどういう状況なのか、相手がどういう状況なのか。それを見

極め、なにをするべきか判断する。これはユーノが教えてくれた。

そして、

「ああああー！」

カイトから教えられた通り、魂から叫びながら、真つ直ぐ相対する相手の目を見ながら槍をぶち込む。ここにきて、音速を超えて水蒸気爆発を生みだし、それすらも纏う雷光で蒸発させながらそれに、

「そう、そうでなくては」

僅かな笑みを浮かべながら、脅威の速度で振り抜いた槍を引きもどし、ぶち込まれたエリオの穂先に合わせる。人間離れた、否、実際に人間を外れた魔人の御業だ。突きだされたエリオの穂先と寸分狂わず揃えられ、

「さあ、見せてみる」

押し負ける。エリオの力よりも僅かに上回る力だ。だからこそ、より力強く、鋭い突きを放った。

それは確かにヴェルテルのそれに比べれば、拙く、下手な刺突だ。当然だろうエリオはまだ若く幼い騎士見習いなのだ。

だが、それこそを己の武器とするのだ。

「言われ、なくても——オッ！」

若いからこそ、情熱と勢いを以つて槍を振う。拙い、ならばそれ補うほどの勢いで振えればいい。下手ならば加速の出力任せでぶち込めばいい。己の弱さをなにもかも抱き、それこそが、と魂を掛けて振うのだ。

●
●
そうだ、それこそがなによりも大事なことだよ／然り、中々見せてくれるではないか

「っあああ!!」

「はあっ!」

またもや、エリオの槍はヴェルテルに押し負ける。だが即座にさらなる一撃を放つ。僅か数十秒の間に交わされる攻防が加速度的にエリオの武威押し上げていた。それは既知感の力もあるが、それだけではない。

「なるほど。水銀だけではないのか」

黒と黄白の二槍が数十回を超え、百回も越える。二種の閃光がはじけ合い、蒼い空に

弾ける。

その中で、ヴェルテルの瞳は凧いでいた。エリオと視線を交叉させながら、その上で、エリオの背後を見つめていた。

「……お前か、相も変わらず過保護のようだ」

それは確かに。エリオへと向けられた言葉ではなかった。誰か、忘れたはずの知己へと苦笑交じりに放たれた言葉だった。その言葉だけは僅かな温かみがあり、

「貴様は、アレの愛に見合う男か……？」

だからこそ、エリオへは厳しい言葉が放たれる。言葉だけではなく、轟風を纏う魔槍も。創造位階ではなくてもそれを押し返したカイトと同じ形成位階の極限域。カイトに繰り出したような自壊の欠片はないが、しかしだからこそヴェルテルの絶技が冴えわたる。無駄のない一閃、大気を爆砕させながら迫る黒槍に、

「そんなこと、知りませんよ……！」

負けぬか、と槍を叩き込む。

「僕は、ただ……大切な人に、ありがとうって返したいだけです……！」

それこそがエリオの渴望だ。そのためにより速く、もつと、もつと、速くと駆け抜ける。それしかできない、それだけしかできないから。それ以外にできることなんてないから、

その瞬間、エリオは完全にヴェルテルの速度を超越した。彼は全力ではないし、本気を出しきっているわけでもない。極限域とはいえ、形成には変わりない。だがしかし、格上であるヴェルテルに速度の一点においては完全に越えていた。いや、今のエリオに速度で勝るものはいないだろう。この場にいる誰も、黒田卓の騎士たちも。例外である翡翠と水銀を除けば、その瞬間エリオは間違いない、ありとあらゆる存在を置き去りにした。

「――」

至った速度は雷速以上、光速未満。未だ悪名高き狼は完全に目覚めたわけではないし、エリオも未だ形成位階であるからまだその程度だった。だがそれで十分だ。屋上の縁で戦っていたが、そこから一瞬でヴェルテルをすり抜け対角線上へ、屋上のコンクリートを融解させながら疾走し、切り返す。

向かう先は彼の背中だ。

絶対的な速度の中、避けられるはずがない。

「……い」

だが、振り向きざまに魔槍を振う。

本来ならば、その身を最速の狂獣へと変生させた白騎士^{アルペド}を捕えることはできない。そ

う本来ならば、だ。今のエリオは違う。既知感にて無理矢理引き出されたかつての魂に塗り潰されかけ、しかし未だエリオの渴望そのものは潰えていない。

だからこそ、今ならば絶対回避の法則を打ち破れるのだと、ヴェルテルは考えた、そしてそれは正しい。中途半端な法則では彼を打倒できない。

疾走するエリオへと真横の魔槍が振られ、

「つあ、あ、あ————！」

跳んだ。

「！」

超速疾走から真上への跳躍。エリオ自身の性質として雷光が天へと奔り、一瞬で数十メートルは昇り、

宙を蹴り、ヴェルテルへと墮ちる。大気を震わし、雷撃の大轟音を鳴らしながら落ちる。それはまさしく落雷だ。白が強いが、しかし黄も微かにしかし確実に残るそれは、ヴェルテルに防御を余儀なくさせ、

「……………」

一瞬にして、ホテル五階分をぶち抜いた。二人の戦闘に対し、ホテルそのものが脆すぎたのだ。第一事前にわずか創造位階を発動したことにより、ホテルの耐久力は著しく落ちてきているのだ。そこに両者の激突。それらに通常の建造物が耐えられるわけがない

のだ。

五階分ぶち抜いた所で、ヴェルテルが一度止めた。それをさらに押し込もうとし、

「落ちろおおーッッッ！」

吠えた。

「ぬううッ！」

耐える。

それゆえに押し込もうとするエリオとストラダからさらなる雷撃が放出され、ホテル内を蹂躪し、骨組みを破壊した。事前になのはたちが中にいた人たちの避難をさせていなければ、一瞬にて絶命していただろう。内部からホテル全体を雷撃が奔り、

「!!」

崩落した。

第十八章 相対への名乗り

「……なん、じゃ、こりゃあ……」

呆然と、ティアナは目の前の惨状に対し眩いた。それはスバルやキャロ、フリードも同じだ。カイトだけは当り前のように煙草を蒸かしていたが。彼女たちが見たのは、

完全に崩落し、残骸となったホテルアグスタだった。

壁を掛け昇っていたエリオとヴェルテル、視界から消え屋上で戦っていたのだろうが、

「一分もせずに崩壊とか……ありえない」

「おいおい、現実見ろよ」

茶々入れてくるカイトが激しく鬱陶しい。だが、確かに現実見ないと始まらない。ほんのわずか前までは綺麗なホテルだったが、完全に瓦礫に変わっている。所どころ焼き焦げた痕や風化したように劣化した所もあった。一体どんな魔法使ったのか見当が付かない、というわけでもないが、エリオにこんなことができたのか謎で仕方がない。

「エリオ君……」

呟くキャロの声色には目の前の崩壊やりも姿の見えないエリオを純粹に心配していた。胸の前で手を組み、周囲を見回している。

「お」

カイトがなにかに気付いたように声を上げた。それに対し、スバルたちがなにか反応する前に、

「！」

瓦礫の一部が吹き飛んだ。

その中から出てきたのは、ヴェルテルだった。だが、それは彼だけではなく、

「……」

「……ッう」

首根っこ掴まれ、上半身のバリアジャケットが吹き飛んでいるエリオだ。ぐったりとしていて意識も虚ろなようだった。それでもストラダーダは握っていたが。全身傷だらけだ。それでも、傷があるのはエリオだけではない。ヴェルテルも頭から一筋の血を流していた。

カイトが感心したように口笛を吹く。

「よお、どうだよ旦那。そいつは」

「……ふん」

鼻を鳴らしながら、エリオを放る。数メートルはぶっ飛んで、

「エリオ君！」

「きゅくるー！」

受け止めるが、止めきれずに少し地面を滑る。それでもすぐに彼を抱きかかえて治療魔法を掛け始める。エリオの傷が癒されていった。

そしてそんな二人を護るようにティアナとスバルがそれぞれのデバイスを構えるが、「なあ、おい。なんか上でいい空気吸ってホテルぶっ壊してくれた訳だけだよ、どうだっただて聞いてんだよ」

カイトは自分の武器を出すこともなく、軽薄な笑みのままヴェルテルに問いかける。

「……足りぬな。まだまだ木偶と変わらん。……だが」

「ん？」

「いいだろう。及第点だ」

その目はカイトではなく、エリオへと向けられていた。鉄のように錆びた厳しい目だった。

「貴様の相手は俺がしよう。他の者は他がすればいい、俺は俺の目的のために貴様と相対しよう。……名を、聞こうか」

言われた言葉にエリオの身が僅かに動く。閉じられていた瞼が開き、指に力が入る。

恐らく先ほどの戦闘で魔力のほとんどを使い果たしたはずだ。かつての己と接触したことで疲労も激しいだろう。それでも、歯を食いしばりながら立ち上がる。

「……………」

キヤロが制止するが、それでも立ち上がる。スバルとティアナも押しのけるように前に出て、フラフラになりながらも、

「…………エリオ…………エリオ・モンディアル、です」

名乗る。今にも崩れ落ちそうでありながらも、自らの足で立つて応えた。体の痛みはあるし、視界だつて霞む。それでも、大切な女の子の前で、相對するといった男の前で、無様な姿を晒せるわけがない。そのくらいの意地はあるのだ。

「そうか…………ではモンディアル。次に戦うときまで精々腕を磨け。出来なければ…………貴様が消えるだけだ」

「……………」

不吉な言葉にしかしエリオは揺らがない、いや、もはや半分近く意識が飛んでいるのだろう。それを意地で無理矢理動かしてただけだ。それを少しだけ眺めてからカイトに視線を移す。

「ん？　なんだよ」

「……………」

だが、何も言わず、続いてティアナとスバルをそれぞれ一瞥するが変わらず無言だった。一度鼻を鳴らし、背中を向けた。

「ま、待ちなさい！」

ティアナが叫ぶが、しかしそんな言葉で止まるはずもない。いや、動き自体はなかった。ヴェルテルの足元に薄紫の四角い魔法陣が浮かんだ。召喚魔法の転移魔法陣だ。ヴェルテルの身体が光に包まれ、

「ちよ……ッ」

制止の声も間に合わずにヴェルテルの姿が消えた。あまりにもあつけない退場だった。残ったのは廃墟となったホテル。事前になのはたちが観客を避難させていたはずだから死傷者はそうはいないはずだが、これは酷いだろう。

なによりも驚きなのはそれを為した一端がエリオだったということ。確かに高ランク魔導師や騎士なら一つの都市を壊滅させることが出来る。だがそれはほんの一握りであり普通ならばこの大きさの建物を破壊するのも無理だ。

だが現実にはエリオはそれを引き起こした。いやむしろ、『エイヴィヒカイト永劫破壊』を宿し、形成に至り、その上で水銀に汚染され既知感の呪いを受け、さらには翡翠の加護すら受けているのだ。この程度、と言えるのだ。

「ま、でも」

カイトが半分意識失ったエリオの頭に手を乗せる。そしてくしゃくしゃとかきながら、

「頑張ったな、兄弟」

その言葉を聞きながら——エリオは完全に意識を失った。



「よいつしよつと……どうやら、行つたようね」

「ええ、召喚士の方も完全に気配がありません。離脱したようです」

ヴェルテルやエリオが出来てた瓦礫から、また少し離れた場所からアリサとギンガは

瓦礫を押しつけながら出てきた。周囲をキョロキョロと警戒しながらだ。

「あー、それにしても。まさかホテル崩壊させるなんて……せつかくのドレスが汚れるじゃない」

「そこですか……」

頬を膨らませて見当違いの文句を言うアリサにギンガは苦笑する。ギンガはドレスなどではなく軍服だからあまり気にしていなかった。精々が髪を整える程度だ。

「んー、どうやら向こうも結構落ちついたみたいですね。エリオ君はぶつ倒れてますけど。シグナムさんやヴィータさんも合流したようですよ」

「そ、なのはたちは森のどつかで避難客の護衛か。もう少ししたら戻ってくるでしょうからさっさとズラかりましょう」

「はい……で」

「……その二人」

すでに瓦礫から出てきた二人は、まだ出てきていない残りの二人——すなわちユーノとすずかへと向けられ、

「えへへー、ユーノくん。頑張ったから、おんぶー」

「あーはいはい。しようがないなあ」

甘えた声を出すすずかとしかたなさそうに苦笑するユーノだった。召喚蟲との戦闘

でボロボロになったドレスの上にユーノの上着を羽織っていて、その上でユーノに赤子のように両手を伸ばしていた。それに大した抵抗も見せずにユーノもおんぶする。

「えへへー」

「……」

「……」

「はは……」

なんかアリサとギンガから発せられる不満のオーラが増していた。正直心臓に悪い。なのにすずかには気にした様子もなく、

「ああ、ユーノくん。あとで血とか吸わせてねー」

「ああ、うん、いいけど……」

「やったあー！ 頑張った甲斐があつたよー！」

冷や汗をかきだしたユーノだが、それでもすずかはおんぶされた状態でうしろから抱きついてくる。ユーノかしたら背中から伝わる感触は好ましいものだが、それ以上に、

「……」

「……」

アリサとギンガのオーラがさらに増していた。実質的な危険の有無はともかくここらへんはもうユーノの性的に心臓に悪いのだ。黒円卓の首領だろうがユーノ・スクラ

イアはそういう存在なのだから。

「はは……まあ、血は後でねすずか。それより、今は退くよ。長いしてホテルの耐久力下げたのがすずかだつてばれると面倒だしね」

ホテルの崩壊はエリオとヴェルテルの激突だけではなかったのだ。それがもつとも解りやすい原因だが、実は事前に、創造を発動しただけだがホテルそのものの耐久力を吸っていたのだ。地下から順に耐久力が吸われていたからこんなにも見事に崩落したのであつた。

「それにしても」

ユーノが向けた先はカイトやエリオたち、それに合流したシグナムやヴィータで、

「流石に、まともな戦力になるのがまだ四人ていうのはなあ」

それもまだ戦力はバラバラだ。六課内で『永劫破壊』エイツイヒカイトを宿したのはまだその四人だけ。おまけにシグナムとヴィータは不安定な活動だ。使いものになるのはカイトと、先ほど形成まで駆けのぼったエリオくらいか。だが、そのエリオにしたって経験不足は否めない。

「ふむ……しかたないかなあ」

「なによ」

「今度はなに考えてるんですか？」

「いや、大したことじゃないけどね。いささか進みが遅い……だから」
笑みを浮かべる。その笑みには優しさと厳しさが並列された笑みで。

「——次は少し派手にやろうか」

眩き、四人はその場から翡翠の光に包まれ姿を消した。

第十九章 届かぬ不甲斐なさ

「はあ……」

溜息。それも長く、疲れがこもった息をはやては吐き出した。

目の前の自分の執務机には大量の始末書。機動六課の部隊長として、彼女自ら署名や確認が必要なものばかりだ。機動六課は試験段階のテスト部隊という立場から当然ながら報告書や始末書、経費等の承認などやる事は多い。元々人員も多くは無いのだ。部隊長というトップの立場だろうと仕事は多い。

だが、今は平時のそのの量ではなく、

「ホテルアグスタの一件……まさかここまで被害が大きくなるとはなあ。さすがにはやてちゃんも予想外や……」

軽口を叩き、再び息を吐く。目の前に始末書の山があればプロマイドにしてユーノに送りつける所だ。

「いや、これ送ったら案外颯爽と駆け付けてくれへんかなあ」

いやいやいやいや。

それはダメだろう、うん。

なかがダメって彼ならば自分が卒倒寸前になりそうな書類の山をなんなく捌きそうな所だ。下手に頼って負担を掛けるわけにはいかないし。

「はあ……」

現実逃避しても目の前の始末書の山と頭痛は消えない。

回転式の椅子を回して、執務机ではなく背後の窓の外を眺める。視界に入るのはクラナガンの郊外と海、そして訓練スペース。視線は動かさず、右腕で頬杖を突き、左手で軽く指を振った。

はやての左側に複数のホロウインドウが展開される。

先日のホテルアグスタにおいての、シグナム、ヴァイタ、エリオ、カイトの戦闘画像と、その後に行った身体検査の結果だ。

異常なまでに異常だった。

ミッド魔導師としてもベルカ騎士としても、常識の範疇から越えていた。

基本的に生まれ持った魔力量を飛躍的に上げることとはできない。ソレ用のロストロギアで無理矢理ブーストするか、代償に命を削るブラスターシステム。または魔力を枯渇するまで使い、超回復を狙っていくなどの方法しかない。それでもそんなロストロギアを容易く使えるわけもないし、後者二つは当然ながら生命に関わる。

実際に高町なのは、それにより一度大怪我を負っている。それはまあ、余り思い出したくないことだから置いておいて。

まず勝手に魔力量が増えるなんてことはあり得ない。
にも関わらず。

「シグナムとヴェイターがリミッターありでSS、エリオに至っては瞬間的にSSS？
あり得ん……！」

さらに言えば、カイトとヴェルテルとかいう騎士らしき男の戦闘時には測定不可能という結果まででている。カイトと敵であるヴェルテルはまあ、いい。元より何考えているかわからない男だし、ヴェルテルとかいうのも同じ匂いがする。

問題はシグナムとヴェイター、エリオ。

カイトは民間協力者、無限書庫からの出向扱いだからまだいいが、三人はそうはいかない。列記とした管理局員なのだ。

万年人出不足の管理局のSSランク以上の騎士なんか現れば、どうなるかは火をみるよりは明らかだ。

この前の戦闘の情報規制が間に合って、なんとか二人の情報が隠せたが、隠しきれたのが不思議なくらいだ。

「……どういふ事や……」

わからないことが多すぎる。

今回の一件だけでなく、このレリック事件そのものが、だ。

まずガジェットドローンの制作者が全く見当がつかない。

管理局のブラックリストに入っている研究者はフェイトや彼女の副官であるシャーリーが全て調べていたが、それらしいのは無かった。

いや、それよりも当面の問題なのは、

「もし、カイトたち以外でああいう連中と戦ったら話にならん」

そう、海鳴でのシユテルたちの時のように。

「っ……」

足りない。圧倒的に力が足りない。

これまでそれなりの努力もしてきたつもりだし、あまり言いたくはないが才能もあったと思う。仲間や友達には最高に恵まれてきたし、ラインという愛娘もいた。

だが、それでも、

「なにが、足りんと、いうんや……!」

歯ぎしりと共に拳を肘かけに叩きつける。

SS—ランクといっても前線に出て、戦えないのでは意味が無い。それどころか、リミッターを付けていていまはAランク相当。いや、仮に全開だとしてまともに戦えると

も思えない。超遠距離からはともかく、ある程度接近されたら即潰されるだろう。それは、まあ昔からの自分の欠点であり、それこそが自分の長所に繋がっているということのだけだ。

目をきつく閉じ、フツと緩める。長く息を吐きながら、机に向き直った。

机の上にあつたマグカップを手に取り、もうすっかり冷めいていたコーヒーを口に含む。

「マズ……」

溜息。

どうにも幸せが遠のいていく気がしてならない。問題は山積みだ。

自分でもどうしようもないことばかりで、無力さを叩きつけられる。

鬱鬱として心持で、手前の書類を手にし、また溜息。

「……ホテルの修理代てウチらが出さなきゃあかんのかなあ」

目の前の請求書のコピー、ゼロがいっぱいである。

いやほんとこんな金額払わされたら六課終わるんだけど。

『じゃ、なのはさんこっちはもう上がらせておきますね』

「うん、お願いシャーリー。ちゃんとクールダウンするように言ってい置いて」
『りよーかいでーす』

ホロウインドウを消し、シャーリーとの通信を着った。

軽く息を吐き、周囲に展開した別のホロウインドウに視線を向ける。

そこに展開されていたのは、スバル、ティアナ、キャロ——三人の訓練プログラムだ。
エリオのは、ない。

「……」

視線を動かす。自分がいるのは再現された都市群のビルの屋上だ。都市群モードで訓練時はほぼ定位置になっている場所だ。

まず、少し離れた所にはスバルたちの三人。遠目に見てもかなり疲弊していることがわかる。訓練直後なのでしようがないだろう。

まあ、まだレベルは上がるけど。

上げるけど。

というけ、上がらせるけど。

それはいいとして。

そこからかなり離れた訓練スペースギリギリの外周当たり。海と接している所。ホロウインドウを操作し、走らせていたサーチャーからの映像を映す。

そして、

『ほら、歯あ食いしばれ!』

『ッ……ク!』

エリオとカイト。

無論唯叫んでいるわけではなくて、交戦中だ。

そう、交戦している。

教導官であるのはからすれば、決して訓練の範囲内ではないし、教導でもない。

ただの喧嘩か——殺し合いだ。一歩間違えればどちらかが死ぬような動きしかして
いない。

いや見る限り、死にそうなのはエリオか。バリアジャケットはボロボロで全身も傷だらけ。かなり血も流れているようだ。

『ッ、ああ!』

なのにも関わらずエリオは疾走していた。白交じりの黄色の閃光を纏いながら、なの
はでも目で追いきれない速度で駆け抜けている。

速い。速すぎる。

自分の最高速度では話にならないし、あるいはフェイトすら越えている速度かもしれ
ない。

にも関わらず、

『全然ダメだぜ。腑抜けてんなよ』

『グ、ア……ッ！』

カイトの放つ弾丸は、無茶苦茶な軌道を描きながらエリオへと突きささる。射撃型、
というか砲撃型の自分としてはありえない曲芸撃ちにも関わらず、正確に着弾してい
る。

ティアナが真似したら嫌だから止めてほしいんだけど聞きそうにない。

全くの無傷のカイトはいつもの軽薄な笑みを浮かべながらも、転がったエリオに近づ
き、

『ほら立ってよ』

さらに引き金を引いた。

「ッ……ッ……！」

思わず息をのまずにはいられなかった。

回避した。脅威の回避速度。

「……」

終わる気配もないので、ホロウインドウを消した。

「……ハア」

溜息。

幸せが逃げるかもしれないが、吐かずにはいられない。

こんな見ていたらいろいろと常識が壊れる。

いや、そうではなくて。

教え子に嫉妬しているという自分を直視したくないだけなのだろう。

「……恥ずかしいなあ、もう」

いや正確に言えば、劣等感だろうか。

自分とは畑違いの高速軌道にすら自分は劣等感を感じるし、カイトの無茶苦茶な射撃にも同じだ。

いや、それだけではなく。

フェイトの雷撃変換にも、はやての広域殲滅にも、アリサの活発さにも、すすかのお

しとやかさにも、ヴィータの破壊力にも、シグナムの剣技にも、シャマルの治癒にも、ザフィーラの護りにも、クロノの器用さにも。

スバルの元気にも、ティアナの向上心にも、キャロの優しさにも。彼らの輝きの何もかもが羨ましい。

届かないと、思う。

そんなことを考える自分が浅ましいとも。

情けない、恥ずかしい。高町なのははそんなことしか考えられない存在だ。

ずっと昔は孤独感。今は劣等感。

どつちにしろマイナスの感情しか持ち得れない。

「あーもう、私も戻ってシャワーでも浴びよう、うん。ついでにユーノ君に連絡しよう、うん！」

そうすればきつと気分もよくなるだろう。彼に対してだけは不思議とそういう情けない感情無しでいられる。恋する乙女でいられるから。

——輝いている皆の足を引きたい、なんて思いをせずにすむのだから。

第二十章 癒しのための時間

「……………ああ」

フェイト・T・ハラオウンは困っていた。形のいい顎に手を添え、金髪を揺らしながらせわしなく六課のロビー内を右往左往する。

「……………ううん」

数メートルごとに右に行ったり、左に行ったりとせわしないことこの上ない。クールビューティーで人気がある彼女の面影は欠片もなかった。

「……………はあ」

思うのは、一日休暇で街に出たエリオとキャロのこと。

訓練も順調に進み、第二段階、つまりはポジション毎の役割をメインにした訓練内容を一通り終えたのは今朝のこと。各デバイスのセカンドモードの訓練は明日からということで、今日一日、新人たち四人は休暇になったのだ。

スバルとティアナは二人でウインドウショッピングとアイス巡り。

エリオとキャロは——デートである。

「……むむむ」

デート、なんて羨ましい言葉か。前にユーノとデートしたのは果たして何時のことだったか。基本彼とは無限書庫での捜査資料の受け渡しの基本で、それ以外だと食堂くらいしか縁がない。まあだからいちいち資料を手渡しで貰いに行ってるわけだけども、手間が掛るとか言われるが、そこは『閃光』の面目躍如、移動速度には自信がある。

いや、それはまた別の話で。

「大丈夫かなあ、二人」

なにせデートだ。二人はまだ幼い。十歳にもなつたばかりだ。なにかやらかしたりしないだろうか。心配せずにはいられない。

「くう、こんなことなら後を着ければ……今なら、間に合う」

二人が出発したのは少し前だし、自分のスピードなら間に合うはず。幸いにして今日の雑務はほとんど終了している。陸士部隊への出向やシグナムが行ってくれたから問題はない。

「ハッ！ いや、待てよ……！ これは……ユーノを連れて来て、家族風味のお出かけと
言う事にすれば……？」

今、その瞬間、フェイトの脳裏には閃光の如くいくつものヴィジョンがよぎっていた。おしやれをした自分、隣で自分と腕を組むユーノ。微笑みあう二人。隣には子供のよ

うなエリオとキャロ。まさしく仲のいい親子にしか見えない。

素晴らしい、自分でもびっくりの頭の冴えだ。

『……ゴクリ』

前、そして左右を見渡す。何人かと目が合い、

「ひいー」

露骨の逸らされたが気にしない。恋する乙女はそんなことに構ってられる余裕はないのだ。

これで勝つる。

苦節十年。恋のライバル多く、さらにはフラグを増やさないように時には共同戦線はったり、出し抜こうしたり、ガチでバトルしたり、わざと負けて彼の看病も狙ったりといういろいろしてきたが。

今日、ここでこの長き戦いに終止符を打つ。

「そうと決まればさっそくユーノに連絡を、つと。バルディッシュ」
『……Y, Yes, sir』

なんだかいつもよりバルディッシュの反応が遅いが気にしない。

意気揚々とユーノのプライベート回線に通信を掛け、聞きたい声を耳にすることを願
い、

『——はい、こちらユーノ・スクライア。現在所要により通信に出られません。御用の方は伝言をどうぞ』

「……」

聞きたかった声は聞けたが、

「録音じゃあ意味ないよお!!!」

春終わりだと言うのに、冷たい風がフェイトに吹き付けた。



「あれ、なんか今フェイトさんの声聞こえなかった?」

「え? なにも聞こえなかったけど」

「そっか……、気のせいだったかなあ」

隣でエリオが首を傾げていたが、キャロには確かになにも聞こえなかった。

六課を出で、まだそれほど時間が立っていないとはいえ、既にモノレールに乗っていて数キロは離れている。いくらなんでも、そんな距離を離れば六課に残るフェイトの声は聞こえないだろう。念のために、ケリユケイオン確認するも、通信はない。

やっぱり気のせいだったのだろう。

「ま、いいや。そうだ」

「？」

「シャーリーさんとカイトさんから今日の行動計画貰ってきてるんだけど、どっち見る？」

「……とりあえず、シャーリーさんので」

「オーケー」

恐る恐る言ったら、苦笑された。

少し、む、と思うも、

「サードアヴェニューの市街地で散歩、ウインドウショッピング、会話を楽しんで。食事は雰囲気良くて、なるべく会話が弾む場所で……」

「……なんだか、難しそうだね？」

「そ、そうだね」

エリオと二人で苦笑する。残念ながら、シャーリーの言う事は難しく、良くわから

ない。

「じゃあ、カイトさんののは、っと……」

ストラーダの待機形態である腕時計を操作していたエリオの動きが止まる。

「どうしたの？」

「あ、いや」

「？」

エリオがいきなり挙動不審になる。またなにか変な事でも書いてあったのかと思い、覗き込めば、

『自分のお姫様のエスコートくらい自分で考えろ』

「……………」

「……………」

いや、これは行動計画どころかアドバイスですらないだろう。

というからお姫様って。

そういうことを素で言うからカイトは苦手なのだ。普通に恥ずかしい。

なのに、

「じゃあ……………」

エリオは頬を赤くし、頬を搔きながらも、

「今日はおよろしくお願いします、お姫様」

差し伸ばされた手を思わず凝視する。

「……………」

カツと、頬が熱くなるのを自覚する。同時、なんだか悔しさも。

ホテルアグスタの一件以降、キャロの相棒の少年は随分変わった。

たくましくなったというか、精悍になったというか。よくわからないけど、なんだか、大きく見える。訓練も連携などを除けば、ほとんどがカイトとの殺し合い寸前の模擬戦だ。毎日血まみれで、何故か勝手に治るとはいえ心配でしかたがない。

止めてほしいのが正直なキャロの気持ち。

最初の方はフェイトたちも止めていたけどカイトのgori押しと、シグナムやヴィータが意外にも任せようという意見だった。

それに、エリオ自身もその気だったし。

本当に心配のし甲斐がない。オマケに腹が立ったのは、そんな自分に対しカイトが、妬くなどか言ってきたことで。とりあえず、渾身のパンチ喰らわせたけどダメージ無さげでさらにムカついた。

だからカイトは嫌いだ。

カイトは嫌いだけど、

「……」

今照れながら、手を差し出して続けているエリオは嫌いじゃない。だから、
「……よろしくおねがいします王子様」

頬の熱さを感じながらも精一杯の言葉を返し、その手を握りしめた。



「あんだ、さ。本当のところどうなのよ」

「ふあ？ ふあにふあ？」

ティアナの問いに、スバルは口の周りにアイスをベタベタに付けて反応した。

「……まあいいから、まず先に食べなさい」

「ん」

溜息を吐きながら、アイスを食べ直し始めたスバルから視線を外す。見渡し、視界に入るのはミツドの繁華街。久々の休暇でウインドウショッピングだ。ここ最近は何も訓練しなかったが、ティアナも十代の女の子。おしゃれとか面白い物は好きだ。なのはの地獄の如きしごきから解放されているのは素晴らしい。

ビバ休日。

ビバ休暇。

ビバ面白い物。

壊れるのと、壊れないのとのギリギリのラインを見極めているから性質が悪い。

だから影で悪魔とか冥王とか言われているんだあの人。

まあ、こんなことを口が裂けても言えないけど。言ったらオハナシ間違いない。砲撃の雨が降る。

「んで、ティア。どうしたの？」

スバルがアイスを食べ終わったようで、こちらの顔を覗き込んでくる。それを押しつけつつも、

「だからさ、ホントのところどう思ってるの？」

「……………？ 誰を？」

本的に社交的なはずなのだけだ。

だから、本当に不思議なのだ。

——まるでカイトに対してだけは別人のようで。

少しだけ、嫌になる。違和感と言うか不快感というかとにかく気持ち悪い。どうしてとか、何故かとか考えると困るのだけだ。ともかく嫌だ。

だからまあ、二人には仲良くしてほしいとか思わなくもないのだけだ、

「……あの様子じゃあ難しそうねえ」

カイトの方はそうでもなさそうなのだけだ。

というか他人から見ればアレの方はべたぼれというか分り屋すぎるのだけだ。海鳴出張からはかなり露骨だ。まあ、部隊長陣は色ボケだし、エリキヤロはピンク空間創り出しているから気付いてないようだけだ。ちよつと距離を取れば一目瞭然だろう。

スバル自身に言ったらまた叫ばれるか、もの凄い嫌な顔するだろうけど。

まあ、今ここで考えても仕方ない。

「つて、アンタまだアイス食べんの!?!」

第二十一章 安らぎは唐突に

何か重いものを引きずる音が響いていた。

ミットチルダ、クラナガンの主街区の下水道。魔導科学が発展したミットとはいえ、生活排水を完全に浄化できるわけではない。黒く濁った汚水が水路を流れていた。

その汚水を横にして、彼女は両の足を前に進めていた。

幼い少女だ。一ケタ半ば、5、6歳程度の幼子。服らしきものは来ておらず、襤褸切れを一枚をその矮躯に纏っているだけだ。汚水まみれの道を進んできたからか、全身かなり汚れていた。本来ならば、輝く黄金であろう髪も見ると影もなく薄汚れている。

手首には痛ましい鎖とそれと繋がる大きな鉄の箱。大の大人でも抱えるのがやつと大きな鉄製の箱を引きずり歩みを進めている。

その状況において、しかし、彼女は輝いていた。

「ハア……ハア……」

実際に光っていたわけでは勿論は無く。幼子の身には過酷すぎる環境において、彼女は絶望に落ちず、呆然とせず、自失もせずに、己の意志を持っていた。

赤と緑の二色の瞳には確かな生への渴望があった。

もつとも、彼女に確固たる目的があつたわけではない。数十分前に意識が覚醒し、機械の追手から逃げているが、行き先は不鮮明だ。

ただ、ただなんとなく。この方向に進めば、誰かが助けてくれるのではないかという希望で動いている。そんな気がしている。自分を助けてくれる人がいるはずだと勝手に考えているだけだ。

根拠も確信もなく、ただ生への渴望だけで足を進めているのだ。

だから、こそ。彼女は輝いている。

幼いが故の純真無垢の輝き。未だ誰にも穢されていないであろう新雪の如き魂。

だからこそ、この先彼女の身に何かが起こる。無垢な魂は欠落の無い物であり、この天はそんなものを許容しない。だから、その歩みが彼女になにをもたらすかは不明であるが、何かが起こるのは明察なのだ。

「ハア……ハア……」

無論、彼女はそんなことは知らない。

ただ、足を進めるだけしかできない。

「……パパあ……ママあ……」

自分を愛し、見てくれる人に出逢うためにも。

「ん？」

「どうしたのエリオ君？」

「いや……」

エリオはふと違和感を感じた。

キャロとウインドウショッピングをしている最中、路地裏への道を通った瞬間だった。

キャロとの会話を突然断ち切り、路地裏へと目を向ける。

「エリオ君？」

「……」

違和感。いや、そうではない。

「……………」

視界に僅かなノイズが混じる。そして、自分とキヤロがこの先に進むヴィジョンも見えた。違和感ではない。既知感だ。

先日のヴェルテルとの戦闘にてエリオが感染した病魔。なにもかもがいつかかつてどこかで見たことあるという不愉快極まりない感覚。自分だけでなく、カイトも宿しているソレが、

この先に何かがあると告げている。

冷や汗が流れ、いつでもこの場所から離脱できるようにキヤロの手を握る。

「キヤロ」

「え、えええエリオくん!? そ、そのいきなりそういうのはどうかというか私的にはいいんだけど段階があるというか私たちまだ十歳だし……………」

「キヤロ、キヤロ、なに言ってるかわかんないけど落ちついて。…………この先になにかある」

「え……………」

怪訝な顔をされるのは仕方ないが、それでも引くことはできないだろう。何かあるのかわからないにしても何かは確実にあるだろう。自分たちはここでもなにか重要なモノを

発見する。それすらも不愉快なノイズとヴィジョンが教えてくれる。正直、全力で去りたいが管理局員としては避けることはできない。

「なんでもか聞かれたら困るけど、どうしてとかもわかんないけどけど、とにかくこの先に何かある。だから、ちゃんと僕と一緒にいて」

我ながら無茶苦茶というかいきなりすぎる。頭がおかしくなったと思われても仕方がない言動だったけど、

「……うん、分った。行こう、エリオ君」

キヤロは確かに頷いてくれた。

その応えにしつかりと彼女の手を握りしめながら、

「離れないでね」

進んだ。

そして、その先に二人が目にしたのは――

『おいおいエリオ、その年の子に手出すとかさすがに犯罪だぜ』

「うるさい黙れ。ていうかどこにいるのさつきと来なよ」

『んだよ、そんなに俺に会いたいのか？』

「死ね……！」

青筋立てながらスバルがカイトへの通信切った。

「コラコラ」

たしかに今のはどうかと思うけれど、カイトらしいといえカイトらしいのだ。ティアナも短い付き合いとはいえそれくらいはわかる。戦力的な理由でこの休暇で所在の掴めないカイトへ連絡したわけだが、結局取れず終了だ。再通信しても通じない。スバルがコールした時はワンコールで出たのに。なにこれ差別か。

溜息を吐きながら、エリオが発見した女の子の容体を見るために現れたシャマルとなのはへ視線を向けた。

「まあ、カイトはいいよ。いつものことだし、元々局員じゃない、無限書庫からの出向だからね、あんまり強制はできないんだよ」

「でもそれアイツサボリ理由にしてるだけじゃないですか」

「で、シヤマル先生。容体は？」

露骨に無視された。

「そうね、命に別条は無いわね。過労と栄養失調。こんな子供が地下水道歩いてきたんだから当然でしょうね。とりあえず詳しい検査と治療のためにも六課に運びましょう」

「了解です、シヤマル先生。ついでにケースも移送しましょう。キャロ、封印は出来てるんだよね？」

「は、はい。一応、ですけど」

「大丈夫よ、ちゃんと封印されてるわ。自信を持って」

「は、はいー！」

キャロがシヤマルの言葉に僅かに照れていたら、その場にいた全員の通信が入った。

ロングアーチ、つまりははやてだ。

『こちらロングアーチ、状況の説明を』

「女の子一名、封印済みレリックらしきケースと共に保護しました。今ヘリで移送しようかと」

『了解や。なら、今すぐになのは隊長をミッド海上へ向かってほしいんや』

「ガジェット、ですか？」

『そう。ついさつき、海上で飛行型の大群を捕捉、I型はまだやけど……』

言いかけた瞬間だった、キャロが声を張り上げる。

「ガジェット、地下に反応でました！」

『……こつちでも今確認したで。ならフォワード四人は女の子が現れた場所から地下水路に潜ってガジェットを迎撃や』

「はい！」

声を揃えて、ティアナたちが応えた。

「じゃあ、私も……」

『頼むで……ああ、フェイト隊長はもう先に向かつてる。……なんか部屋で鬱入ってたかフォローよろしく頼むで』

「……はい」

僅かに苦笑しながらなのはが頷く。

ウインドウ越しのはやてはティアナやスバルたち四人に、なのは、シャマル、そして意識を失ったままの女の子に順番に目をやり、

『人命、安全第一や。よろしく頼むで』

「はい！」

*

「フォーメーションは何時も通りで、訓練通りやるわよ」

「了解！」

「はい」

「わかりました」

「きゅくるー」

ティアナの指示に全員が応えながら地下水路を進む。すでに十数分は立ち、海上ではなのはやフェイトが飛行型と接敵したらしい。多分、自分たちもすぐにガジェットたちと接敵するだろう。

だから、意識はすでに臨戦態勢だ。いつでもガジェットが現れてもいいように意識を研ぎ澄ませる。訓練通りにやれば大丈夫だろう。それだけの修練を続けてきたという自負はある。

「ガジェット、近いです！ この道真っ直ぐ右折した場所に！」

背後のキャロの報告を聞く。

フォーメーションは後ろからキャロ、自分、スバル、エリオ。自分たち四人では一番

オーソドックスでありこれもまた訓練で慣れた陣形だ。

だからこの陣形も信じる。

手にしたクラスミラージュを強く握りこみ、前方を警戒し、

「……………」

ふと違和感。前に行くエリオとスバルに対してだろうか。何かがおかしかった。ま
ずスバルを背後から見る。

うん、別におかしいことはない。バリアジャケットのデイトールが変更されたり、
いつかのように気配が別人のようというわけではない。

次にエリオを見る。これもまたいつも通りだろう。バリアジャケット以外に先ほど
見た時と何も変わらない。おかしい所は——すぐに気が付いた。分りやすすぎて逆に
気付かないと言うか、余りにもひどい理由だから反応が遅れた。

エリオはデバイスを手にしていない。

愛槍であるストラダーダはなく、徒手空拳だ。どういふつもりだあれは。いくらなんでも
もありえないだろう。

だから、注意しようとした瞬間、

「来ました！」

接敵した。

エリオが右折する。遅かった。
あ、という息が漏れ、

『活動』

Assiah』

ティアナだけでなく、スバルとキャロも。三人の視界を白交じりの黄雷が埋め尽くし、轟音が轟いた。



「え……」

三人はそれまでの順番通りに右折し、呆然と息を漏らした。

直前に視界を埋め尽くした雷光はないが、轟音は未だに耳に残っている。つまりは幻

覚や錯覚の類でもなかったのだろう。

三人が、見たのは、

「……………」

完全に破壊されたガジェットだった。数は恐らく十数体いたのだろうが、どれもが中心に穴が開いているか、真つ二つに分裂されている。ついでに言えば、破壊痕が軽く融解していた。かなりの高温で拳やら蹴りでも叩き込まれたように見えるし、その通りなのだろう。

そして、それを行ったのはほかでも無い。

十数メートル先に、両手をぶらりと力を抜きながら立っていた。その全身からは軽く電気が弾けていて、その色と共に彼がこれらの破壊を為したのだと教えていた。

「つ……………」

そしてティアナは悟る。エリオがデバイスを手にしてなかったのは、忘れていたからでも、不注意でもない。

単純に——ガジェット程度には必要なかったのだ。

背筋にゾクリと、何かが奔った。

そんなことに、エリオは気付かなかったようで。振り返りながらも、

「なるべく数を減らしますので。先を急ぎましょう」

余裕を以て言いきった。

第二十二章 伸ばしたその腕は

「スターズ1、ライトニング1、どちらも高ペースでガジェットII型を破壊していきます！ スターズ2も海上にてリインフォース曹長と合流し交戦を開始しました！」

「ただし、ガジェットも次々に増援が！ 発生源を検索中ですが、未だ不明！ 解析急ぎます！」

「ファワードメンバー四名、地下水路からクラナガン廃都市群に移動しながらガジェットを順次破壊、問題ないようです！」

慌ただしい報告が上がるのは、機動六課本部指令室だ。オペレーターのシャーリーやアルト、ルキノを中心として上がる方向は部隊長であるはやてへと伝えられていた。

「今のところは順調やな」

「はい」

はやて、そして彼女の副官であるグリフィスは全体の報告をまとめながら思考を巡らす。はやてが言ったように、今のところは想定外の事態は起きていない。精々ガジェットが多いくらいだ。それでも海上にでたなのは、フェイト、ヴィータ、リインの隊長陣は破竹の勢いでガジェットを落としているし、かなりの距離を移動したが問題は無い。

むしろ周囲の被害を気にしなくていい分好都合だ。

このまま上手く行ってくれればいいと切実に思う。

だが、しかし。

現実とは得てしてそう簡単には行かないもだ。

情報をまとめていたシャーリーから驚愕の息が漏れる。

「っ！ 航空反応増大！ 倍、二倍……いえ、先ほどまでの五倍以上です！」

「なに！」

「これは……！」

はやての目が細まる。

即座に再測定されるが、全てが実機反応があり、現場のなのは達も目視可能だ。

恐らくは、増加した分は幻影、だろう。そしてそれは陽動だろう。本命は地下かへり。

ならば――、

「……グリフィス君」

「……………はい」

「さっすがはやてちゃん、事務仕事で腕は衰えていないわね」

「ははは……俺なんかは笑うしかねえすつけど」

ホロウインドウの映像を見て少女を護送中のヘリの中でのシャマルは得意げに笑い、パイロットのヴァイスは半目で苦笑するしかない。

空中に投影された画面の中に移るのは高空域において、長距離空間攻撃を放つ騎士甲冑姿の八神はやて。

彼女のデバイスであるシュベルトクロイツと足元に複数のベルカ式の三角形魔法陣が浮かび、それらを支点して白の砲撃が放たれる。

ベルカ式広範囲空間攻撃魔法『銀月の尾羽』フレズヴェルグ。

その白の閃光が空域に存在するガジェットを破壊していく。

実機も幻影機もまとめて潰しているのだから関係ない。

長い付き合いのシャマルはともかく、ヴァイスからすれば笑うしかない。

「はは……さっすがはは」

笑える事にSSランクは伊達では無い。

さらに笑えるのはこれでも、リミッター掛けられていてまだ先があるということだ。そして、ヴァイスが乾いた笑いを浮かべた、その瞬間だった。

『Emergency!』

「は?」

へり操作補助のためにナビ機能に特化させていたストームレイダーから叫びのような報告。エマーゲンシー緊急事態。即座に周囲のマップを確認したのと同時に、

「なっ……!」

へりの真横から魔導の極光が突き刺さった。

*

移動中の護送へり。その砲撃に対して反応することは全く出来なかった。当然だ。遠距離から放たれ、砲撃主とその補佐により魔力隠蔽をされていた以上へりパイロットのヴァイスも中にいたシャマルも気付けなかった。

ロングアーチでさえ発射後にしか気付けなかった。

なのにもフェイトも二重の隠蔽により反応が遅れる。

故にその撃墜は必然だった。当たればヴァイスもシャルも命を落とすだろうが砲撃の威力を考えれば無理もない。そしてヴァイスとシャルが落命すること
は機動六課は移動手段と回復役というサポートを失い、さらには大切な友人や家族を失うという現実に向かわされる。しかし、これはそういうものであり。寧ろ、管理局側が善を名乗る以上窮地に陥るのは当然と言えよう。

善とは劣勢においてこそ輝く存在なのだから。

そしてなにより。

この世界はそういう風に出てきているのだ。

“こんなはずじゃなかった”。

そう思わずにはいられないように出てきているのだ。

だからヘリの撃墜は必然だ。

もしかしたら、或いは高町なのはやフェイト・T・ハラオウン達隊長陣が間にあった
という場合や、またもつと別の誰かが間にあったという場合もあっただろう。

それでも。

それでもこの世界ではそれはない。もしここで二人が落命すれば、この先の闘いはよ

り壯絶になる。より凄惨に、より派手に、より劇的に。より華々しい物語となるであらう。

そういう風が物語が進むのがこの世界の法則だ。故に。

それに抗えるのは、この宇宙規模のと同等の魂を持つ存在か、或いはその加護を強く受けたもの以外には為し得ない。

『——星たちは見下ろしている 静かな夜に

Die Sterne schaun in stiller Nacht』

*2

『どうして貴方は孤独に私たちを見上げるのですか？

Was blickst du einsam zu uns auf?

この巡る世界の動きを覗き見でもしようというのですか？

Willst spahn der rollenden Welten La

uf?』

その詩は突如として響いた。

奇襲の砲撃がへりに突き刺さる直前。その刹那より始まり、時間を無視するように続く。

『貴方たち星よ、ああ、貴方たちは分からないのか　この娘の不安な苦しみが？』

Ihr Sternlein, ach! versteht ihr nicht
Der Tochter bangen Kummer?

その誠実な瞳が曇ることのないように　おお、どうか彼女に安らかな眠りを与えてあげて

Das nicht das treue Auge bricht,
O schenk ihm susen Schlummer,』

発生源は——だれにも分らなかつた。直接間接、肉眼ウインドウ越しを問わずに詠い手を教えるようなことはない。決して大きな声ではない、だがしかし何故か耳に届くのだ。

『貴方たち星が私は大好きです　けれど母の愛こそが一番明るい星

なのです　Ihr Sternlein all, hab' euch so
gern! Doch Mutterlieb, ist der schonste

S t e r n .
』

そして――

『――創造

B r i a h

銀河静寂・光輝変生

D i e S t e r n e s c h a u , n i n s t i l l e r N a c h t
』

それは刹那だった。いや、より正確に言えば刹那ですらない。

ヘリへと砲撃が突き刺さる直前。響く詩が始まったのと変わらぬ空白。一メートル程度。砲撃の速度を考えればそれこそ刹那あればヘリへと突きささる。そうすればシヤマルとヴァイス、そして保護した女の子は死ぬであろう。

「――させません」

その空白、一刹那あれば埋まる空間に突如として彼女は現れた。個人の感覚、ヘリ、機動六課、地上部隊のありとあらゆる検索機能でも観測できなかつた。時間を無視した詠唱が完了したのと同時に既に彼女はいた。

「破アアツ!!」

気合裂帛。

空中にて放たれる拳が砲撃と激突し、

「……………」

ぶち抜いた。

背後のヘリには欠片の傷もない。

ヘリを守りきつた彼女は拳撃の反動で機体を蹴り、ヘリ天井へと飛び乗る。

移動中であり強く風が吹き付ける高所でありながら、まったく意に介さず紫の長髪をたなびかせている。

黒緑の地球ドイツ帝国SS軍服、左腕の白のリボルバーナックルと同色のローラープレード。

その緑の双眸で真っ直ぐと砲撃を行った彼女たちを見つめながら、

「我が君より命を受け此処に推参、聖槍十三騎士団黒田卓第十一位『繋がれぬ誓い』ギンガ・ナカジマ」

己の咒をこれ以上ないと誇るように名乗った。

「何も欠けさせはしません」



ギンガはまず、ローラーブレードのつま先でヘリの屋根をコツコツと蹴り、
「シャマル先生、危ないんでとりあえず六課まで送ります」

「え、ぎ、ギンガ!?! な、なんで……」

慌てたシャマルの声が聞こえたが、無視して左手をヘリに押しつけ、
「ブリッツキヤリバー、機動六課ヘリポート」

『All right』

応えた瞬間——周囲の景色は変わっていた。

都市の上空ではなく、機動六課のヘリポートだ。

「え、え、え？」

「はあ!？」

足元からかなり戸惑った声が出したが、構わず即座に跳んだ。

視界は代わり、先ほどの中空だ。足場に使っていたヘリが無くなったから落ちるしかないが、

「見えてるわよ」

永劫破壊の使途としての超感覚。エイワイヒカイト 獣染みたカイトのソレには劣るとはいえ、それでもこの廃都市群一帯が知覚範囲内だ。

故にギンガは跳ぶ。

行き先は――

「え、ちよ」

「マジ!？」

「マジよ」

先ほどの中空より数キロ離れたビルの屋上。

そこにいた二人の少女。メガネとケープをはおった少女と長大狙撃砲を担いだローブ姿の少女。それぞれ首にIVとXの刻印。

タイムラグ無しで現れたギンガはすでに右拳を振りかぶった体勢だ。

「疾ッ!」

叩きこむ。

「が、ハア、あ!」

鳩尾にヒットし、Xの少女の口から血の塊が吐き出され、

「――」

「……え?」

着弾したその瞬間と同時、またもギンガは跳び、左のハイキックを数メートル距離があつたIVの少女にぶち込んだ。

「きゃああああ!」

右の腕どころか肋骨も粉碎した感触を得ながら、そのままXの少女へと蹴り飛ばし、二人が重なつた瞬間に、

再びギンガの姿が時間差無しで飛ぶ。刹那もタイムラグは生じずに現れたのは重なつた二人の正面。腰だめに左の拳を構え、

「破アッ!!」

音速の十数倍の一撃をぶち込む。

最早殴り飛ばされた二人に悲鳴を上げる余裕もない。確実に致命となる一撃を諸に

入れられて途中いくつもビルを突き破りながらそのまま地面へと墜落していく。

「……意外とよく飛ぶわね」

眩きながら、撃墜させた二人の気配を探る。途中で激突したせいで倒壊していくビルや濛々と立ち上る土煙りが邪魔だが、すぐに見つけて、

「と」

跳ぶ。身体自体の動きはないが跳躍を意識したその瞬間には眼下にポロポロになった二人の少女がいた。廃都市故に周囲に人の気配は無く、老朽化が激しい道路を砕きながらめり込んでいる。一キロとは言わずとも数百メートルは飛んだだろうか。

その距離を、ギンガは一瞬ならぬ零舜で移動していた。

『銀河静寂・光輝変生』、その能力は知覚範囲内の零秒空間移動。

彼女の感覚で把握している範囲ならば、移動するのに文字通り時間はいらぬ。零舜を持つて空間を跳ぶ。さらに聖遺物でありデバイスでもあるブリッツキヤリバーに予め所定の箇所や地図を入力しておけば、把握が曖昧でも跳べる。

自分だけでなく触れているものの移動させることも可能だ。

「自分の手が届く範囲を救いたいと思つてたら、予想以上に手が伸びてね」

聞こえているかどうかともわからないが、言う。

この二人もまた、この歌劇の演者なのだろうから。

「まあ、私は前座にすぎないけど、やることはやらせてもらうし、一応管理局員だから捕まえないわけにはいかないのよ、悪く思わないでね」

苦笑し、両手を腰に当てて空を仰ぎ、

「じゃ、こっちは大丈夫だから。そっちもがんばりなさい。本命さんたち？」

第二十三章 知らないの？

「どうして……！」

廃都市群に現れたギンガへのなのはの思いはそれに尽きる。高速飛行中に思考に囚われるのは危険と分つていても驚愕せずにはいられない。

そしてそれはなのはだけではなく、共に飛んでいるフェイトや状況を見ていた全員も同じ思いだろう。

どうして彼女はあの黒衣を纏っているのか。

海鳴で同じ装束の自分そっくりの少女に手も足も出ずに、親友であるアリサに助けられたことは脳裏に焼き付いている。なのはの人生においてあれほどの惨敗はない。幼少期におけるフェイトやヴィータとの初戦闘でもまだマシだ。

文字通り、手も足も出なかったのだから。

「っ……！」

思わず唇をかみしめる。劣等感というならあれ以上のものはない。自分とそっくりであり、自分よりも幼いのにも関わらず存在する絶対的な壁。足を引こうにも、まったく届かないであろうほどの格差。

「なのは、急ごう。嫌な予感どころじゃない。コレは拙いよ」
「フェイトちゃん……うん、そうだね」

フェイトの言葉には同感だ。確実に拙い。

ギンガの名乗った聖槍十三騎士団。聞いた話では地球には実在した組織らしいが中卒のなのは知らない。

問題はその戦力、そして——長が彼であること。彼女たちの襲撃は彼は関わっていないらしいし、むしろ彼女たちを止めるためにカイトやアリサたちが現れたらしかった。それでもあの夜起きた事は尋常では無かった。

有耶無耶なつたとはいえ測定不可能の破格の魔力。それを宿した黒衣の騎士たち。そして彼女たちを負傷を与えたシグナム、ヴィータ、スバル。

彼女たちだけでなく、ホテルアグスタにおけるヴェルテルという騎士やエリオも。ギンガと同種なのだろう。

人間ではなく——もつとそれ以上の存在。

生きている世界が違う。立っている位階が違う。属しているジャンルが違う。届かない。

「……届か、ないん、だよね」

その言葉は意図せず、思わず零れた言葉であり隣のフェイトにも聞こえていなかった

た。

だが、

「——情けない、やはりその程度ですか」



「!?」

「なのツーーー!」

大気を焦がす巨大な炎球が突如としてなのはを墜落させた。一メートル大の赤紫の炎球。それが高速飛行中のなのはへと落ちて来て、そのまま真下の街へと落ちる。咄嗟に伸ばした手は間に合わず、

「どおりやああ!」

真下から蒼雷を纏う蹴りに跳ねあげられた。微かに視界に捕えたのは双尾の青い髪。だが一瞬だけであり、腹に雷撃を纏った一撃をぶち込まれその身をぶちあげられる。

「あ、う、あ……ア!」

雷撃による全身の麻痺。飛行魔法もままならなくなり、為すすべもなく重力を無視して上昇していく。飛行魔法が使えないと言う事は常時展開されている対気流や低温、空気摩擦へのフィールド魔法も失っているのだ。跳ねあげられるというだけでも十分にダメージとなる。

それでも、痺れ、もつれる舌と口を動かし、

「…限、定……っ解……除ッ」

『Limit Release』

フェイト・T・ハラオウンに施された戒めを解放させる。

「はああああー」

取り戻した魔力を全身に通して麻痺を払い、飛行魔法を再使用。纏うバリアジャケットは変わらずともその身から発せられる魔力は先ほどとは段違いだ。

限定解除。

機動六課に所属するにあたってなのやフェイト達隊長陣に施された魔力リミッター。エース級の魔導師であるフェイト達を隊長に据えると言う事はそんな枷が必要だったのだ。

そして今それは解かれている。

海上から廃都市に向かう際に万が一のために部隊長であるはやてから解除許可をも

らっていたのだ。それが無ければ、麻痺をほどく事は出来なかつただろう。
だが――、

「や！ オリジナルの僕！ 始めましてだね！」

はたして目の前の自分そっくりの少女に対して、どれだけ通用するのか。



廃都市群上空にて向かい合ったフェイトとレヴィと時を同じくして。

『Limit Release』

なののもまた限定解除を発動していた。フェイトとは違いバリアジェットも愛機であるレイジングハートもその姿を変えていく。少女時代の名残だったフリルやリボンなどの装飾は破棄されより戦闘に適した装甲服へ。レイジングハートも杖ではなく突撃槍のような形態となっていた。当然ながら変化は外見だけでなく魔力量は跳ねあ

がっている。

換装された新たなバリアジャケットを纏い、限定解除の余波による魔力で叩きつけられた炎球を払い飛ばしながら、魔都市群の道路にしっかりと己の両足で立つ。

「どうして、あなたが」

真つ直ぐ問いかける先は、百メートル程先のビルの屋上。その外縁ギリギリに立つ、

「シユテル！」

「あなたに名乗った覚えはありません」

「っ！」

取り付く島もない。言葉と共にシユテルの周囲に炎弾が展開され、大気を焦がしながらなのはへと迫る。それはかつて海鳴の状況と同じようにデバイスはないが、異常なまでの魔力を有している。

「でも、避けられなくはないよ……！」

数は二十だが、速度はそれほどでもない。十分回避しきれぬ。ましてやこれだけ距離があれば容易い。ビルの隙間を縫うように飛翔する。

「レイジングハート！」

『All right Master』

同時に自分も誘導弾を創り出す。自信の周囲に桜色の球体を、同じく二十。

「アクセルツ、シュート！」

『acceli shoot』

右手に振りと共に射出する。狙いはシュテル本体だ。シュテルの固有スキルかなにかの滅却の性質。魔力だろうが物質だろうが何であろうと燃やし尽くす魔炎。例え限定解除した今の自分でもアレと真つ向から対抗するのは危険だ。だから、自分に迫る炎弾は高速機動で回避し、マルチタスクで誘導弾を操作する。

「ふむ」

ビル群を迂回し、シュテル飛来する光球を値踏みするように眺めるが、顔色を変えずにさらに新たな炎弾を生みだし迎撃させる。これでシュテルの操作している数は四十大だ。並みの魔導師なら生み出すだけで耐えがたい頭痛に倒れてもおかしくないし、エース級のミッド魔導師でも操作は危うい。

だがシュテルはさも当り前のように四十もの滅却の炎弾を操作する。

そのことに背筋を凍らせながら、

『Flash move』

踵にアクセルフィンを展開し、機動力を上げ飛ぶ。

「ああ、なるほど。ビルを影にして攪乱し、ビルごと砲撃でぶち抜こうというわけですか」

「っ！」

「別に驚く事もないでしょう。あなたの戦闘スタイルは有名ですから、『動く固定砲台』……等と言う捻りの無い異名もあることですし」

「言わせておけば……っ！」

ああ、ならばいいだろう。飛行を止め、エクシードモードとなったレイジンググハートの穂先をシユテルへと向ける。間にはいくつものビルがあるが、サーチャーとレイジンググハートのナビゲートで狙いは狂う事はない。自分を追う滅却の魔弾は未だ二十もあり、チャージの時間は僅か五秒程度。

だが、

「カートリッジロード！」

『Load cartridge』

その五秒あれば十分。排出された薬莖は三。同時なのは魔力が跳ねあがり、

「デイバイン——」

穂先に光が集まる。そして、

『Bastar』

桜色の閃光がビルを貫き、シユテルへと迫る。

これこそ高町なのはの真骨頂。凝縮した魔力を砲撃という形で放出するだけ。もは

や固有スキルの域にまで高められた技能。時空管理局にても五指には入るだろう。さらに砲撃を打った瞬間にはアクセルフィンをはためかせ、その場から離脱し炎弾への回避行動を取っていた。

非殺傷指定とはいえ物理的な効果までも消しているわけではない。閃光は次々に間にあつたビルをぶち抜き、

「……」

回避も防御もしようとしないうてシユテルを飲み込んだ。

「……なっ！」

そんな、と思う。今の砲撃は確実に全力であり本気だった。かつての海鳴の際とは比べ物にならず、今のを防げるのは六課内においてさえ誰もいないという自負がある。管理局内でもそうはいないだろう。

そんな砲撃が直撃した。

本来ならばシヨック死を心配する所だろう。

だが、彼女の場合はそれは違う。フラッシュバックされるのは海鳴での惨敗。そして、

「——あなたは自分が神様に愛されているという自覚がありますか？」

*

「なにがっ……！」

「だから言った通りだよ、オリジナル。君がわかっているのかどうか。自分がどれだけこの天に愛されているのか」

高速で飛翔し、フェイトはサイスフォームのバルディッシュを振るが、レヴィには掠りもしない。既に何度も交叉しているが、全て紙一重で避けられる。

もうフェイトも気付いていた。速度を合わされているのだ。それも、フェイトよりホンの少し早い速度で。

「フェイト・T・ハラオウン。若くして執務官であり、義理の兄は提督、母はもう引退したとはいえ管理局に未だ強い影響力がある。実際君たちの機動六課の後見人の内二人は君の家族だ」

顔を歪ませるフェイトとは対照に、レヴィは変わらず自然体だ。

「そして本当の亡き母は、天才的な科学者であり大魔導師。死んだ娘のクローンを作り、拳句の果てにはロストログアを使って伝説の都アルハザードへと向かおうとしたが失

敗。凄いな、家族だけでこんなにも波乱万丈だ」

「貴ツ様……！　だから、どうした！」

レヴィの言葉にフェイトが激昂し、全身からスパークが弾ける。速度もさらに上がっていく。

だが、それでもレヴィには届かない。

「そんな母に人形扱いされて、使い回されて、拳句の果てには棄てられる。いやはや、僕もまともな生まれじゃないにしろ同情せずにはいられないよ」

その言葉は最早フェイトにとって猛毒だ。決して忘れられない過去の傷にしみ込み、抉っていく。

怒りは頂点であり、美しい赤眼も激情に燃えている。

だから、というわけでもないだろう。

「ねえ、そんな生い立ちなのに。どうして今君は幸せなの？」

続くレヴィの言葉に反応することはできなかつた。



「なあ、そうだろう鴉よ。失くした宝石があつただろう。忘れられない苦痛があつただろう。決して癒せぬはずの魂の切創。そんなモノが合つて——どうして貴様らは、心から笑えているのだ？」

そう、デИАーチエははやてに問いかける。

ビルを眼下に置きながら、二人は向かい合い、デИАーチエは自らのオリジナルに言葉を放つ。

「乗り越えた？ 克服した？ もう忘れる事が出来た？ いいや、そんな軽いことではなからう。どれだけ覆い隠そうと、蓋をしようと一度生まれた傷は決してなくならない。——ならばどうして？」

目を伏せながら、耐えがたいと言わんばかりにデИАーチエは拳を握りしめ、その顔を歪め言葉を紡いでいた。

その様子に、はやては口を挟めない。意味が分からないからとかそんなレベルではなく。この先の言葉を聞き逃してはならないと、理由もなく思ったから。

「それを考えなさい。どうしてかつての切創からの痛みから護られているのかを。それを理解できなければ——あなた達はただの神の玩具に過ぎない」

「ツーーー！」

神の玩具。意味がわからない。理解できない。欠片も、これっぽちもわからない。

ダメだ、それはダメだ。その言葉の真相を理解してしまつては、高町なのはという存在の根底が瓦解しかねない。

なのに、シユテルはその意味を理解しろという。

「知りなさい、どれだけあなた達が神に愛されているか」

繰り返すように、シユテルは言う。レヴィも。ディアーチェも。

「そう、でなければ……、誰よりもあなたたちが知らなければ……」

それまで、平静だったシユテルの顔に感情が浮かぶ。

それは怒り。過去の傷を抉られたのはたちとは別次元の激情。理性を持っていなければ、主命が無かつたら、全霊を以つてなのは魂まで消し飛ばしかねないほどの感情。

「彼の、守護の慕情が報われない……！ それだけは何かあっても許されない……！」

シュテルの手に魔導の杖が形成される。怒りに呼応するように魔力は高まり、発せられる滅却の波動は留まる事を知らない。彼女だけではなく、激情と共に形成したのはレヴィもディアーチエも同じだ。

陽炎が揺らめき、雷光が弾け、暗黒が輝く。

「さあ、思いだしなさい」

「お願いだから受け継いでよ」

「あの馬鹿の想いを無為に返すようなことはしないでくれ」

第二十四章 認められないから

滅却の炎弾が形成される。その数は先ほどまでの活動位階の比では無く百にも届いておりながらその性質は薄まる事はない。

「降り注げ——炎星」

それはまさしく流星群。廃都市群を焦がし尽くす星々はシユテルの激情を受け、一つ余さずなのはへと降り注ぐ。

「ッ……!!」

『Protection. E. X』

眼前を埋め尽くす流星群にもはや言葉もでない。全力で防がなければ死ぬ。

排出したカートリッジは四。通常ならば必殺の技以外には使用をためらわせる数だが、なのはも、そしてレイジングハートでさえ迷わずに障壁を展開する。

だが、

「それで？」

滅却の流星群、その一発目から高町なのはの全力の障壁を破壊した。

「きゃあああああああああああああああああッー!!」

『Jack et Burst』

咄嗟にレイジンググハートはバリアジャケットをパージして爆発させ、即席の障壁とするも焼け石に水だ。

蹂躪する。

爆煙が廃都市群を、なのはを。

滅却の炎弾はそれ自体が超高温の炎の塊だ。物理的な現象ではなく魔術的な概念の炎だ。主命を受けているから、死ぬ寸前までに威力を留めるが、

「ああ……これは手加減を誤りましたか」

爆煙と土煙りが晴れる。

そして見えたのは、炭化した建物の残骸と、

「……………ッ、あ、あ……………」

全身の重度の火傷を負ったなのは。バリアジャケットは見るも無残であり、レイジンググハートも半壊状態。コアにも酷い損害を被っている。

「っあ……………」

痙攣し、息を吸い吐くだけでも激痛が彼女にはある。明らかに死ぬ一歩手前だ。

「くっ……………」

それでも、なんとかレイジンググハートの遺された生命維持機能、なのは自身の本能で

魔力を全身に通し、最低限の治癒を行う。

それを確認し、

「ああ、なら、ある程度回復するまで待ちましょうか。この程度で終わられても困ります」

その姿には蹂躪を為したことの疲労らしきものは欠片もなく、事実今の炎の流星群はシユテルにとっては何んの消耗はない。その姿に、なのはは絶望以外覚えれない。全力の砲撃も全開の障壁も、何もかも通じなかった。

「……な、……で……？」

「なんで？ 私があなたを蹂躪している理由ですか？ 言つたでしょう、あなたが何も知らなければ、それは……彼の慕情を無為に返すものであり、その愛を踏みにする行為だ。それは許さない。だから。それ以上の理由は必要ですか？」

「あ、くう……うー！」

「ええ。あなた達にはわかりませんよ。この身は彼のモノ。器も魂も、欠片も断片も例外はない。私たちはそういう風に生み出されたのですから」

「つ……、？」

そういう風に生み出された？

おかしい、はやてがユーノから聞いた話では、自分たちのクローンであるシユテルた

ちが行き場もなく彷徨っていた所を保護したのではなかったのか。

「ああ、だから理屈ではないんですよ。本来ならば、少しずつ痛めつけ、かつての記憶を取り戻しさせ、回帰を促すべきなのでしょう。今のあなたがかつての貴女を継承できるように。ですが——」

掠れた目で、胡乱な視界で、距離があるにも関わらず、何故か彼女の顔を見ることができた。その顔は見憶えがある。

誰かに恋している顔、誰かを求めている瞳、愛している人の為になりたいという祈り。

「あ、あ、あ……」

なんて真摯に、切なく、激しいのか。その思いは。見れば分る。分ってしまうのだ。自分も同じだから。

——いや、自分よりも強い思いを、明確に感じた。

あるいは狂気にすらなってしまうほどの愛。

「それができない、どうしても許せない。例え創られ、仕込まれた感情だとしてもこの胸に宿る想いは真実だと信じているから。彼は優しいから、どうしようもなく馬鹿だから」

そう、彼は馬鹿だ。そして誰よりも優しい。

十年前自分とであったのも彼の責任感故にだ。彼自身に過失はなく、偶然でしかな

かったのに、責任もないのに、彼は地球に來た。そして傷ついて、消耗して、高町なのはと出逢った。

そして——全てが始まったのだ。

「彼も、灰色狼ガウズも、自死の苦悩も、あの狂獣の少年も、皆男は馬鹿です。男の戦場に女はいらぬ、後ろに控えている。影で戦闘解説している男は死ねばいい。どれこれも、口をそろえて言う。馬鹿馬鹿しい。ああ、これが彼らなりの矜持だということとはわかつていますよ。でも、だからこそ、私は思うんですよ」

一度、目を伏せ、言う。それは彼女だけの想いでは無く、黒田卓に所属する彼女たち全員が共有する想い。

「——男の影で護られているだけで、何もしない女だって死んでも構わないでしょう?」
その苛烈すぎる主張は、どうしようもなくなのはの胸に刺さった。

護られているだけ、何もしない。

そうだ、自分は彼に何をした?

魔法の力を貰った。折れた翼を取り戻してもらった。

十年間、自分の背中を支え続けてくれた。職場の都合で離れても、離れた所から力を貸してくれた。

彼がいなければ、今の自分はあり得ない。

なのに――

「そう、あなたは、あなた達は護られているだけだ。包みこむ翡翠の愛のまどろみながら、ただ都合のいい夢を見ているだけ。なにをしているのですか」

だから、

「これが最後です、目を覚ましなさい」

そして、シユテルが呼ぶその咒は、

「*****」

*1

「――あ、あ」

■■■■・■■■■

それはなんだ。今度こそ、本当に理解できない。言語すら自分の知っているモノではない。
だから理解できるはずがない。この世界の言語ではないのだ、高町なのはに理解でき

るはずもない。

だから、そう。

魔女への鉄槌なんていう魔名を知るはずが無いのだ。

「いや、いや、いや……！」

自分の中から何かが湧き上がる。いや、何かが自分の魂を塗りつぶしてくる。いやだ、怖い。自分が消えていく。十九年間積み上げてきた己が塗り替えらる。

「いやだ、だめだよ……！」

言葉では否定しつつも、胸の中から湧き上がる感情がある。

「ツーーーーー！」

それにはどうしようもなく覚えがあり、だからこそ、否定できない。

掘り返されるように過去の記憶がフラッシュバックする。

「あああああああああ——」

かつて高町なのはの父は、生死の境目を彷徨った。ボディーガードという物騒な仕事だったから、大けがは覚悟の上だっただろう。それでも、ちよūdなものはの幼少期、日常生活も危ぶまれるほどの重傷を負い、長期間入院していた。

一家の大黒柱が欠け、高町家に大きな負担が掛ったのいうまでもない。当時、喫茶店の経営が軌道に乗り出し、母は勿論兄と姉もその手伝い、それが無くてもアルバイトや

父の見舞いに追われる日々。

そんな中でなのは何もできなかった。

幼かったから、できることがなかったのだ。できることは、温もりのない家で家族の遅い帰りを待つことと、頑張っている家族に負担を掛けないようないい子でいるだけだった。

そんな幼少期だったから、公園が嫌いだった。

気分転換で公園に行けば、日が沈む頃には迎えに来た母親と駆け寄る子供を見ることになる。寂しきで一人ブランコをこぎながら泣いていたことは一度や二度ではない。

場面は移り変わる。

幼き日のフェイトの落とされた。決闘中に割りこまれフェイトを救えなかった。プレシアが死んでしまった。ヴィータに落とされた。レイジングハートを破壊寸前にまできた。闇の書の闇は壊せても、リインフォースは救えなかった。

何もかも、届かなかった。

また変わる。

それは雪の風景。掠れた視界の中、泣き叫ぶヴィータ。お腹はやたら熱く、身体から力が抜けていく感覚、手のひらにはぬかるんだ感触。

十一歳の時、無理が祟って未確認の敵にまたもや落とされた。

『*****』

*2

『*****』

どこにも行かないで、置いていかないで、私はとても遅いから。駆け抜けるあなたに追いつけない

ああ、だから待つて。一人にしないで。あなたと並べる未来の形を。那由多の果てまで祈っているから。

それが限りなく無であろうとも、可能性だけは捨てたくないから。

『*****』

私は地べたを這いずりまわる。空を見て、空だけを見て、あの高みに届きたいと、恋焦がれて病んでいく。

他の物は何もいらぬ。あれが欲しい、あれが欲しい。ああ、だけど悲しい、届かない。

だから祈ろう。私という存在の全てを賭けて、あの星に届く手が欲しい。

の力の源泉にして核。自ら動きまわり、シユテルへと高速で延びる。それはまさしく多頭竜の鎌首。うごめきながらシユテルを絡め取り、

彼女の動きが停止する。

「私歩くの遅いんだよー!」

その影は不動縛の影。触れたら最後動く事は叶わなずに足を引かれるのみだ。

「追いつけないなら、止めてやろうって、そう思ったんだよ! 文句ある……!?!」

涙交じりの■■■■叫びと共に不動縛の戒めが強まる。常人ならば絞めつけの強さのみでに圧死しているだろうし、影に触れているビルも崩壊寸前だ。

だが、

「——ああ、文句あるに決まっているでしょう!」

言葉と共に、シユテルは滅却の覇道を放ちながら不動縛の尽くを粉碎した。

「え——」

「別に他人の渴望にケチをつけるつもりはありません。そこに善悪の区別はなく、あるのは願いの強度のみ。故、他人が否定できるような祈りはよつぽどの下衆の極みでないかぎりできません!」

ですが、

「勘違いしないでください、それはあなた自身の祈りではない。ええ、もういいですよ、

泣くのが好きなのでしょうか？ ならば永遠にそうしていなさい」

そして、怒りと共に。*3

『貴方は憩い、穏やかな安らぎ、貴方は憧れ、そして憧れを静めるもの』

Du bist die Ruh, der Friede mild, die
Sehnsucht du, und was sie stillt.

シユテル自身の渴望が解放されていく。

『私はすべての喜びと痛みに満ちて、ここ、私の目と心を住処として捧げよう』

Ich weihe dir voll Lust und Schmerz.
zur Wohnung hier mein Aug und Herz.

『私のところにおいでください、貴方の後ろの扉は全て閉めて』

Kehr ein bei mir, und schlie ã du.
still hinter dir die Pforten zu.

『他の痛みをこの胸から締め出してください。この心を貴方の喜びでいっぱいにしてください』

Treib andern Schmerz aus dieser Brust.
Voll sei dies Herz von deiner Lust.

『この目の住処を照らすのは貴方の輝きだけなのだ、おお、住処に輝きを満たしてください』

い』

Dies Augenzelt, von deinem Glanz allei
nerhellt, ofalles ganz.

『あなたが愛ゆえに愛するのなら、お私を愛してください!』

Liebst du um Liebe, O ja mich liebe!

『永劫の愛を、私も貴方を永劫に愛しますから!』

Liebe mich immer, Dich liebe ich immer, i
mmerdar!

『創造』

Briah

『滅却幻想・災厄の杖』

Muspellheimr Lvateinn

ここに聖槍十三騎士団第九位、大隊長紅蓮の赤騎士^{ルベド}『星光の殲滅者』シュテル・ザ・デ
ストラクター、滅却の覇道が完成した。

第二十五章 照らし輝く光

「……!!」

廃都市群上空にて二つの閃光がぶつかり合っていた。

高度は遙か高く、デバイスの補助や魔法無しでは通常の呼吸すらも困難なほど空気が薄い。

それでも、激突は終わらない。

斬馬刀状に変形されたバルディッシュを振うフェイトと鎌状のバルニフィカスを振うレヴィ。互いにディテールの酷似したデバイスを遣い、顔立ちもそっくりでまるで鏡合わせようだ。

互いに高速でぶつかり合い、弾かれ合うが、

「くっ……!!」

「そいやあー!!」

フェイトの顔に余裕はなく、レヴィは顔色は涼しい。

合わされていると、フェイトは理解していた。限定解除をし、加速魔法を全開で使用しており、バルディッシュも最終形態と言つてもいいザンバーフォームだ。フルドライ

ブは未だ調整が不十分で使えない。

つまりは今自分は最高速だ。

にも関わらず、

「はっはー！ 遅いぞオリジナルうー！」

レヴィは高笑いを上げながら、容易くフェイトの速度を超越する。

どれだけ自分が加速魔法や飛行魔法を振りしぼり、効果を上げてても、その次の瞬間に自分の僅か上の速度に至られる。もつと言えば、弾かれ合うのではなく、レヴィが激突に瞬間にフェイトを弾き、自分は追撃せずに離脱しているだけだ。だから弾かれ合っているように見えるし、速度も拮抗しているように見える。

わからない。

「何が……」

「ん？」

「何が、目的だ……！」

弾かれながらも、叫ぶ。悔しさを噛みしめながらも、できることをするしかない。

「目的かあ……うーん、そうだなあ……説明しなきゃだめ？」

「ぶぎ、つけるな！」

「おっと！」

緊張感の無いレヴィにプラズマランサーを一発放つ。高速でぶつかり合う以上、下手に止まって魔法を使えば即座に落とされる。だから、一発が限界だ。それでも、そこそこの魔力の密度や速度はあるが、当り前のように避けられる。

「でもなー、悪いけどボクは難しい話は苦手なんだよ。そういうのはシユテルんや王様の役目だし」

嘘を言っているようには見えない。というか、どう見ても嘘が得意な風には見えなかった。そういう所は自分と同じらしい。

「えつと、そうだな、なんていえば言いか……ん？ いや、これは言ってもいいんだっけ」
あーとかうーとか唸りながらも、速度は緩まないし、常にフェイトの先を行く。だがすぐに、結論に至り、

「うんやっぱ、止めておこう。怒られたら嫌だし。というわけでオリジナルー、ボクの目的は秘密でー！」

「だからっ、ふざけるなど言っている！」

叫びと共に、力任せにバルディッシュを叩きつけるも、結果は変わらずレヴィに弾かれる。

技術そのものでは決して圧倒的に劣っているわけではない、単純に膂力が違いすぎる。

「あはは……ふぎけてないよ。真面目だって、ただ、ボク馬鹿だからさ。言葉では上手く言えないんだ」

だから、

「伝えよう、こつちでね」

瞬間魔力が跳ね上がり、雷光が弾ける。視界を埋めるが、気にしてられない。僅かでも目を逸らせば、即座に斬られると理解させられる。

「ボクはまあ、シュテルンほど君たちに色々感情あるわけじゃないんだ。そりゃあ思うことは色々あるけど、それでも、シュテルンほど怒ってない。だから——手加減頑張るから安心してね」

レヴィの身体から覇気が溢れだす。物理的な圧力すら感じるほどの密度の戦意。殺意でも殺気でもない純粹な覇気がフェイトに叩きつけられ、全身が硬直する。

そして、自分を取り戻したと気は何もかも遅かった。

『その剣は、ぼくの胸の中から現れないのか？　この荒れ狂う心の思いが剣とはならないのか？』

bricht mir hervor aus der Brust, was w
tend das Herz noch hegt?

レヴィの渴望を基にした祝詞が朗々と謳われる。

『剣よ、証人となれ！ひるまずに、お前をこの手にするのはボクだ！』

Bezeug es dies Schwert, das zaglos
ich halte!

『かつてヴェルゼは言った。最大の危機に陥ったとき、お前は剣を手に入れるだろうと。今こそその時だ！』

W·l·s·e·v·e·r·h·i·e·s·s·m·i·r·,·i·n·h·c·h·s·t·e·r·N·o·t·f·
n·d·,·i·c·h·e·s·e·i·n·s·t·:·i·c·h·f·a·s·s·,·e·s·n·u·n·!

『切つ先鋭い刃を見せよ！ 鞘から姿を現すのだ！』

Z·e·i·g·d·e·i·n·e·r·S·c·h·r·f·e·s·c·h·n·e·i·d·e·n·d·e·n·Z·a·h·
n·:·h·e·r·a·u·s·a·u·s·d·e·r·S·c·h·e·i·d·e·z·u·m·i·r·!

『——創造』

Briah

『先駆幻想・迅雷の剣』

Ginnugagap:Notung!

聖槍十三騎士団第十位、大隊長狂乱の白騎士^{アルスト}『雷刃の襲撃者』レヴィ・ザ・スラツシャーの求道がここに完成した。

* 1

「大事ななのは事は渴望なんだ」

詠唱完了の瞬間、決してフェイトはレヴィイから目を逸らしていなかった。爆発的に高まった魔力に謳われた詠唱に警戒しないわけがない。だから、何が起きても、反応できるように身構えていたが、

自分の真後ろにレヴィイはいた。

何時の間に、という疑問は簡単だ。詠唱を完成させた直後。どうやって、飛翔してフェイトの背後に回った。それだけだ。これだけの単純な行為。

ただ、それらをフェイトの認識を遥かに超える速度で行われたに過ぎない。音すら、ない。

真後ろを取られ、下手に動けない。額から流れる冷たい汗が頬を伝い顎へと流れる。

「例えば『大事な人を救いたい』。例えば『唯一無二が欲しい』。例えば『好きな人のために咲き誇りたい』。例えば『惚れた馬鹿の為に燃え上がりた』」

真後ろから語られる言葉は驚くほど落ちついていた。

語られるのは、誰かの願い。何故か、ギンガが、カイトが、すずかが、アリサが思い浮かぶ。

「こうあつてほしい、こうありたい。そういうこと。餓えて、飽いて、心が祈り、願い、希う。外向きか内向きか、世界を変えたいのか、自分を変えたいのか。そういうベクトルの差はあつても、結局は一緒なんだよ。つまり——現実を否定するほどの祈りだよ」

「現実を——」

「そう。僕の場合は……『大切な人の道を切り開きたい』」
道。

その単語は、なぜかフェイトの胸に響いた。

「ね、オリジナル。君はなんだい？」

「わた、し、は……」

口は動かなかつた。

私の、フェイト・T・ハラオウンの渴望とはなんだろう。現実を否定するほど一体なにを願っているというのか。

「はは……まあ、いきなり言われても困るよね。だから考えて、思い出してよ」

背後、わずかに苦笑した気配。

だが、なにを思い出せというのか。その答えは、

「*****」

告げられた呪に隠されていた。

*1

「あ、あ、あ……!?!」

ソレを聞いた瞬間に、精神が無茶苦茶になった。脳みそを直接火かき棒で掻きまわされたかのような衝撃。

前後不覚なるほどの精神ショック。空中で棒立ちになるが、

「ホラホラ、言っただでしょコッチで語るって」

レヴィが刃を振う。

それは先ほどまでのサイスフォームではなく、バルデイツシユのフルドライブであるライオットザンバーと呼ばれる片刃二刀だ。

水色の雷が帯電している、振り向きざまの刃は音を超えて、フェイトへと振られる。

「っー！」

精神が瓦解しながらでも、迫る雷刃を避けなければならない。効果が半分薄れてきたが、それでもなんとか飛行魔法で回避する。落ちていると言ってもいい動きだった。

それでも、奇跡的に回避した。だが、そんなものは二度も続かない。

落ちたその先に、既にレヴィは回りこんでいた。

「そおーいー！」

雷光の刃が奔る。両手が霞み、スパークが弾けた。

「っ、あ、あああああああー！」

切り刻まれる。交叉は一瞬でも、叩き込まれた斬撃は百にも届く。一閃すらフェイトには反応できない。高レベルの防刃効果のあるバリアジャケットも意味はない。斬撃痕は細かいはそれだけ数は膨大だ。

しかし、

「なん、で……！」

斬撃は薄皮一枚のみを斬るだけで留まっていた。

「だから頑張って手加減してらだっー。思いつきりやったらオリジナル死んじやうじゃんか」

レヴィの言葉に悔しきで唇を噛みしめるが、言い返せない。最早天地ほどある実力差は明らかなのだ。

「ていうかさ、なにも思い出せない？」

「……」

思い出せ。

海鳴の時もそう言っていた。

さつき脳髓に叩きこまれた理解不能な言語。言葉という概念そのものが自分の知っているものとは異なっているとしか思えない。

それでも、とてつもなく重要な名前だというのを理解できる。

「——え？」

ちよつと待て。今おかしかった。自分の思考が明らかに不鮮明だった。

——何故名前だと思った？

おかしい。レヴィが放った言葉はフェイトには理解できなかつた。それは間違いない。言語体系所か発声の仕方さえ違うだろう。掛け値なしに理解不能であり、聞いているだけで不快感極まりない。

そんな謎の音の羅列であるにも関わらず、フェイトはソレが名前だと理解していた。

「う、あ、あ……」

なんだこれは、気持ち悪い。吐き気がする。知るはずの無いことを知っている。

「おーい、オリジナル大丈夫？ んー……いまいちだなあ、こういうと気どーすればいいんだっけ……ああ、そうか」

混乱の境地の最中のフェイトに、レヴィは朗らかに言う。

「あんまりチンタラしていると君の周囲殺しちゃうよ？」

*2

刹那、今度こそフェイトの世界から音が消え去る。今度はなまじ理解できたから。

その言葉が到底認められるものでは無かったから。

今、殺すと言ったのか？

フェイト・T・ハラオウンの周囲を？

それはつまり。高町なのはを、八神はやてを、月村すずかを、アリサ・バニングスを、シグナムを、ヴィータを、ザフィーラを、エリオ・モンディアルを、キャロ・ル・ルシ

エを、スバル・ナカジマを、ティアナ・ランスターを、シャリオ・フィニーノを、クロノ・ハラオウンを、リンディ・ハラオウンを、エイミー・ハラオウンを、アルフを、ユーノ・スクライアを？

自分の周囲を殺すだと？

「ふぎ、ける、な」

「おっ」

しほり出た声は自分でも驚くほど低い。

そんなこと、認められない。

かつて、彼女は母を見殺しにした。

見殺し、というのは違ったかもしれない。少なくとも周囲はそう思っていないだろうし、公的な記録でもそうだ。

それでもフェイトは自分が見殺しにしたと思っていた。

あの時、もう少し自分が早ければ、瓦壊する足場から零れ落ちる母親に間に合えば。僅かでも延命できたかもしれない。姉の、オリジナルであるアリシアもちゃんと埋葬できたかもしれない。

でも、現実には自分の手は届かなかった。

どれだけ後悔したのか覚えていない。

んだ。

叫びと共に魂から渴望が溢れだし――

『*****』

既知世界、先代黒円卓において最も美しく、鮮烈であつた戦乙女が舞い降りる。



『*****』

*****』

謳われた詠唱は瞬時に完成していた。

フェイト自身、自分が何を言っているのかまったく理解していない。だがそれでも込められた祈りは知っていた。

戦場を照らす閃光になりたい。

なんて美しく、穢れない祈り。鉄風雷火の三千世界、その中で血と死に酔う事が無いように。地獄の果てまで行軍したとしても騎士としての誇りを失わぬように。戦友たちの道を照らせる閃光になりたいのだ。

その祈りを今、フエイト・T・ハラオウンは思い出していた——否、祈りの下に***

彼女の周囲に雷光が弾ける。

身体が、腕が、足が、髪が、瞳が。全身至るところが雷光へと変生していく。

魔力変換などという生易しいものではない。

雷という自然現象、それも魔術的、概念的となったソレへの変生だ。ありとあらゆる物理法則から解放され、雷速という境地へと辿りついていった。

「——私は死人でできた道なんか照らしたくない！」

その言葉こそが彼女の騎士としての誓い。血で鍔ついた大切な人の剣に再び輝きを取り戻せるように。

獣の爪牙であるのにも関わらず獣に牙を剥いた戦乙女の宣誓だ。

叫びと共に疾走する。手に握ったザンバーモードのバルディッシュは持ち主から送られる膨大な魔力に自壊寸前だ。大剣という形状を保っているのは、単純に彼女の魂が自らの武器として剣の形を求めていたからにすぎない。

今彼女は掛け値なしに次元世界最速だ。創造発同時のレヴィも、黒円卓の幻想たちも、他の何もかも。相手によって相対的に速度が変わるエリオヤそもその存在が違う翡翠を例外とすれば、真に最速。そこまでの祈り。

「はああああああああああああああああああああーッッッ!!」

戦乙女の雷速剣舞。 エイソフエリア ヴァアルハラ 英雄を地獄へと誘う死の舞踏。 トードンタンツ

「ああ……なるほど。これは確かに凄いや。綺麗だね」

雷速の刃は感嘆するレヴィへと叩き込まれ――、

「――でもそれは君の渴望じゃない」

雷速を遥かに超える速度にて振われたレヴィの二刀がバルデツシユの刀身とフェイトの肩を切り裂いていた。

第二十六章 愛されているから

『滅却幻想・災厄の杖』

M u s p e l l z h e i m r L · v a t e i n n

覇道の完成の瞬間より、世界の変化は劇的だった。

シユテルから溢れだす渴望が現実を否定し、今ここに限定的な異界を生みだしていた。

まず、視界に存在する建物が尽くが消え去った。別世界に飲み込まれたから弾きだされた、等では無い。

単純に覇道に飲み込まれた瞬間に燃え尽きたのだ。

街一つを一瞬でも燃やし尽くせるほどの焦熱。

「先代の赤騎士^{ルペド}は、無限に広がる爆心、そして相手を砲身そのもの取り込む事で絶対命中を可能にしたそうですが……私の場合は、もつと単純です」

そう、告げられた音の羅列はかつての赤騎士、シユテルの先代のもと同じだ。

だが、そこに込められた渴望は、愛は——違う。

永劫を黄金に焼かれることを望み、忠誠^{アイ}を誓った彼女。そして生み出されたのは、荘

敵なるヴァルハラを燃やし尽くす、逃げ場無き焰の世界。

だが、それと彼女は違う。確かに同じく五色の赤化を司るものであり、彼に抱かれ焼かれるのも悪くないと思うけど、

「愛しい人の前に立ちふさがる障害を燃やし尽くしたい——」

それこそ彼女の渴望だ。

水銀に、彼の近衛として生み出され、その渴望も愛も、アレに誘導されている。所詮はこの身は予備なのだ。回帰が滞った場合に使われるためだけの存在だったのだ。

でもだからこそ、自分たちの前に立ちふさがる何もかもを燃やし尽くす。

『星光の殲滅者』。

その魔名の下に星々の煌めきすら、滅ぼしてくれよう。

「単純ですよ。私の霸道に取り込まれ、触れた瞬間から——燃え尽きるまで燃え続けるだけのこと。当たりも外れもない。絶対命中にして絶対不可避、私なりに体現できていると思うのですがね」

例外はない。彼女に縁が深く愛している存在ならばともかく、それ以外は何もできずに燃やしつくされるだけだ。目に見える攻撃とはわけが違うのだ。存在するだけで滅却の霸道に触れる以上回避は不可能だ。

彼女の霸道を塗りつぶし返すか、己の求道で弾くしか方法はない。

故に、

『——っあ、ぐ、あ』

今のなのには何もできない。

彼女から溢れだす不動縛の影は完全には消え去っていないが、それだけ。シユテルへと伸ばそうとしても、一瞥されればそれだけで概念ごと蒸発する。

なのは自身の身も無事ではない。影を自分の周囲に展開させ滅却の霸道に抵抗しているが、無意味だ。魔力任せの治癒も追いついていない。

膝下まではずでに炭化し、両腕両足は重度の火傷を被っている。原型を留めているのが奇跡だ。

『ああ……』

だがその目は未だ死んでいない。いや、そうではなく

シユテルの炎に、渴望に羨望を抱いているだけだ。

『なによ、見下して……ふざけないでよお……！ 高みから、見降ろしてんじゃ、ないわよ……！』

発せられた声は掠れている。いや、重なっているのだ。

誰か、なのはの肉声とは違い、もつと幼いソレだ。まるで別人の声にも関わらず——その声はなのはと同じ人物だと、理解させられる。

「ならばあなたが高みに来ればいい。翼を焼かれる覚悟があるならば」

『うるさい……うるさいのよお……！　ふざけんな……ふざけんな……ふざけんなあー！』

絶叫はすなわち渴望の強化。一秒毎、なのはがシュテルの覇道に抗えば抗うほど回帰は進んでいく。

高速で地を這う影はまさしく竜の首だ。数十条にまで分岐した鎌首は滅却に抗いながら、シュテルへと牙をむく。

『アンタ、うっとうしいのよ！　この前から訳の分んないこと勝手に言っつて！　思い出せ？　知らないよ、ちゃんと説明してよ！　自己完結して、思わせぶりなこと言わないで！』

口調すらも乱れ、なのはは叫ぶ。

最早魂は半分以上■■■■に回帰しかけている。アグスタ時のエリオすら上回る勢いだ。

いや、回帰が進んでいなければとうの昔に死んでいる。

「子供ですか？　知らないから自分は悪くない？　ええ、そうですね、無知は罪ではではありません。無知を恥じないことが、なにも知ろうとしないことが罪なのです。地で這いつくばる事を良しとすることもまた然り」

『違う……！ 私は、違うの……！ そんなんじゃない……！』

滅却の霸道が除々になのはの影と拮抗していく。抗いは勢いを増しあと僅か数歩分までの距離だ。

『私は、もう違う……！ 這い蹲っているだけの地星じゃない！ 高みに手を伸ばして
いるだけじゃないから……！』

▼ 私、私は——！』

▼ 「——シユテル」

● 「ヤヴォール・マインヘル」

指を鳴らした。

シユテルの動きはそれだけだ。叫びの瞬間に到達した影による束縛を弾きながら行

われた動きであり、あまりにもあっけなく、当り前のような動作。

一瞥以外に始めてシユテルが取った動作で、

——なのはの足元から巨大な火柱が生じた。

』

直径十数メートル、高さに至つては端が中々見えないほどの巨大な円柱。焰の温度は数千度にまで届くであろう炎をもろになのはは飲み込まれた。

それで終わり。

「……まったく面倒をかけさせる」

創造を解きながら、戦意も殺意も解いて崩れ落ちたなのはへと近寄るうつ伏せにぶつ倒れた彼女を蹴って、仰向けにさせる。

「ふん……」

四肢は完全に炭化していた。顔も半分以上が焼け焦げている。半死半生どころかほぼ死んでいる。

かろうじて、生きているというレベルであり、回帰が進んでいるから、魔力で半自動的に治癒が施されているからにすぎない。

「……までもしても、死なないのですね」

シユテルは九割殺しに行っていたのだ。創造位階で超強化される魔導は使っていない

し、手加減はしていたし、全力は欠片も出していなかったが、それでも殺意はあった。だが、死んでいない。

こんなところでは死なないのだ。神に愛されているから。理屈ではなくそういう風にできている。

「同情しますよ心から」

そして——心から羨望するのだ。

*

『先駆幻想・迅雷の剣』。

Ginnugagap:Notung!

レヴィ・ザ・スラツシャーの創造位階。『大切な人の道を切り開きたい』。その渴望の下に現れる効果は斬撃毎の速度強化。

端的に言って、斬れば斬るほど速度が上がるのだ。

渴望によって加速度は増していく。そして上昇するのは速度だけではなく、刀剣としての切れ味もまた同じだ。単純に硬度や耐久力が上がるのではなく、内抱された斬撃と

いう概念を強化していく。

だが、それでは、それだけでは五色の一角を担う白化^{アルペド}にはふさわしくないだろう。

先代の白騎士《アルペド》の真骨頂は、相手よりも必ず一步先を行くという絶対先制だった。誰よりも早く駆け抜ける凶獣。停滞する疾走すらも寄せ付けない最速のスピードスター。絶対先制と絶対回避。

凶悪なまでに強力だった。

故に、現代の白騎士^{アルペド}であるレヴィもまた。それに匹敵あるいは追従する領域までに行かねばならない。

『雷刃の襲撃者』、その真骨頂は、

——その加速に限界がないということだ。

「110回だ」

創造を発動してから、レヴィがフェイトを斬った回数が110回である。僅かの交叉において、レヴィはそれだけ加速している。

そしてそれだけ加速すれば、

「だから！ 遅いんだよ、オリジナル！」

『あああああああああああ——————！』

雷速剣舞の戦乙女を容易く超越する。

まるで、話にならない。確かに今のフェイトは速い。雷速は伊達では無く、弾ける閃光となつて疾走する。だからフェイトが遅いのではない。

レヴィが早すぎるのだ。現時点で、雷速の十数倍。

「さあ！ いいのかい!? そんなに遅くて！ また！ 何にも届かない！」

『黙れ——！』

叫ぶフェイトの声は二重に響く。彼女とは別人の声であり、同一人物の声。

速度では圧倒的にフェイトが劣っている。だが、それでも彼女は止まらない。

『私は、私は……ただ道を照らせる閃光に……！』

「違うだろ！ それは彼女の色だ！」

金と水色の斬撃が交わり——水色が圧倒する。文字通り桁が違う。速度も斬撃の質もなにもかも。

フェイトが一閃すれば、レヴィは二十、三十と斬撃を放つ。そしてその度にレヴィの速度は上がっているのだ。

絶対的にフェイトの方が遅く、劣っている。

だが、それでも、

『っ……！』

フェイトは止まらない。自分の身に何が起きているのかも、今何を口に出しているのか

も、レヴィの言葉の意味も理解できてなくとも。それでも、フェイトは剣を引かない。それが誰の意思か、フェイト自身のソレか、それとも ■■■■■・■■■■のソレか。

魔力を絞り、自壊寸前のバルディッシュの負荷を無視して魔力刃を研ぎ澄ませ、大剣だったそれよりもかなり細身になっている。右手に握った柄を顔の前まで運び、地面と平行に構える。左手は力まずに泳がせる。大剣の構えではなく。細剣の構えだ。――フェイトのものではない。

「このツ―」

『はああああああー！』

愚直なまでに迫るフェイトに内心のレヴィは焦る。回帰がかなり進んでいて。自分が促したこととはいえ、予想以上だ。正直どうすればいいのか迷う。このまま進めればいいのか、止めればいいのか。

この辺りがよくわからないところが、馬鹿だなあと自分でも思う。

これがシュテルだったらどれだけ脳みそ沸騰していてもある程度見極められるはずだ、多分。そのはず。何気に沸点低いから怪しくなってきた。こういうのは案外ディアーチェが見極めが上手いのだ。あの王様は尊大な態度しているくせに妙に家庭的というか過保護なのだ。レヴィから見れば頭もいいし。学校とかの宿題もちよこちよこ

やってくれる王様だ。料理もうまい。ビバ王様。おいしいって褒めるとノリノリでフルコースとか満漢全席とかだしてくれるし。

一応臣下である自分の存在意義があやしくなってきたけどまあ良しとする。今はそういうの形だけだし。

「……」

眼下の廃都市群、その跡地というべきものがある。シユテルとディアーチエの創造の余波で片方は燃え尽きているし、もう片方は建物が全てひしゃげ潰れたり、風化している。廃都市群の名残は最早なく、ただの荒地地しか残っていない。さらに言えば、廃都市群跡地のさらに地下、下水路か何かだろう所にも複数の魔力を感じる。

覚えがあるのは、

「……一つ？」

地上のシユテルとディアーチエ、それにギンガはいいとして。

地下には、複数の魔力、それも聖遺物と『エニウイヒカイト永劫破壊』のソレも多い。その中で——同胞は一つ分。それも、いるだろうと予想していたものではなく、なんでそこにいるんだと思わざるを得ない。

「まったく……」

どうしてこう、自分の知り合いはキチガイが多いのか。自分のことは馬鹿だと自覚は

あるが、あそこまで脳みそイカれてない。

馬鹿とキチガイは違う。全く違う。キチガイで常識人ぽいのと馬鹿でも常識人とは違うのだ。

だからまあ、常識人は常識人らしく、

「できることをしようか！」

することは馬鹿だから一つ——加速だ。

『!?』

飛行魔法ではなく、大気を音速超過で踏みしめることで大気の壁を蹴り加速する。この程度今のレヴィの速度なら余裕すぎる。雷速で移動するフェイトへと接近し、

そのまま右剣の腹をフェイトへと叩きつける。

『ガハッ!』

「まだだ！」

二刀の刃を亜光速で叩き込む。水色の光速剣舞。一息分を叩きこみ、駆け抜けてターン。さらに再びの剣舞瀑布をぶちまける。それを——繰り返す。空間跳躍を連発し、交際の連撃を叩きこむ。

「でやあああああッ——!」

それまでの紙一重の斬撃や薄皮一枚とは違い、一閃一閃が必殺だ。瞬く間にフェイト

が斬痕と鮮血に染まり、血は噴き出したそばから雷光で蒸発していく。

『ツツ……ツツ……ア！』

全身に走る雷閃にフェイトは為すすべもなく蹂躪される。今や傷ないところは欠片もない。回帰していなければ、その身に『永劫破壊』を宿していなければ出血死かシヨック死だ。つまり未だ死んでいない。これだけの光速の乱撃を受けて尚、未だに命を繋いでいるのは、それだけで奇跡に等しい。

そして、それが神に愛されているということだ。

「それに甘えてるようじゃあ、駄目なんだ……！ 君の言葉を聞かせてほしいんだよ……！」

咆え、叫ぶ。雷刃を交叉させ、纏わせる雷光を強め、

「雷光十字衝——！」

水色の十字の雷閃が放たれる。大気を轟かせる轟音すらも置き去りにした光速の斬閃は、

『——』

フェイトの胸に十字を刻み、あまりにもあっけなく彼女を地に墮とした。

第二十七章 相対するのは？

フエイト、はやてがシユテル、レヴィ、デイアーチエに強襲されたのとほぼ同時。僅か数分後には廃都市群ではなく廃都市群跡地になるその地下。地下水路でもまた、別の戦場が発生していた。

薄暗い一本道の地下水路を奔るの黄白の雷光。全身に薄く雷を纏ったエリオだ。ストラーダの形成はなく徒手空拳だが、

ガジエツト相手には十分すぎる。

「オオッー！」

活動位階とはいえ速度に特化したエリオならば亜音速にまで行く。その上で駆け抜けざまに速度任せに一撃を叩きこむ。

ただそれだけの動きでガジエツトは為すすべもなく粉碎される。小型大型関係無い。仮に叩きこんだ一撃が破壊まで至らなくても、雷撃がガジエツトの回路を焼きつくすのだ。AMFの束縛も全て振りきっている。

「スウー」

そしてエリオが激しく駆け抜けるのとは対照的に。

スバルはあくまで静かに疾走していた。

「ハアッ！」

行うことは単純だ。拳を構え、近づき、魔力を纏った拳を叩きこむ。あまりにも単純な基本の動きだ。それゆえに強い。無論未だスバルは未熟であり、隙も大きい。後方からのティアナの狙撃がその隙を埋める。荒削りのスバルの動きもティアナの援護があるからこそ、生きていく。ここ最近——正確に言えば海鳴の一件から——スバルの動きやリズムが変わり続けているが、それで数年来の腐れ縁の二人の連携が崩れることはない。

「キャロ、レリックの位置は？」

「近いです。……多分、この先真っ直ぐの広間」

「了解」

背後でレリックの検索をしていたキャロの言葉を聞き、ティアナは思考を巡らす。

地下水路に現れたガジェットは残らずエリオとスバルがメインで破壊していて、目立った負傷はない。馬鹿げた加速魔法らしきものを使うエリオも自分たちも魔力の消費も少ない。

順調で、間違いないだろう。

「……」

懸念が無いわけでもないが。

分っていたこととはいえエリオが異常に強い。戦闘中一度もデバイスを使用しておらず加速魔法らしき魔法を使い、全身に薄く雷光を纏っているだけだが、異常に強い。連日のカイトとの殺し合い紛いは伊達ではない。元々エリオが身につけていた訓練学校や陸士研修で習うような格闘術だけではなく、喧嘩殺法だが我流だかなんだかよくわからない滅茶苦茶な体術が混ざっていた。

まあ、それはいいのだ。いや、毎日血まみれになってキャロが顔面蒼白だったけど。問題は——やはりスバルなのだ。

動きが変わっている。それは、もう随分前から分っていた。訓練校時代からのシューティングアーツではなくてもっと別のナニカに少しずつ変わっているのだ。

シューティングアーツよりも、もっと実践的で——人を破壊することに特化しているようなソレに。

そのことに少しだけ背筋が凍る思いを感じずにはいられない。普段は何時も通りだから尚更だ。

違和感を感じるのは、カイトと一緒にいる時が多いのも謎だ。

「とかあのチンピラなにしてんのよ……」

こういう荒事以外では役に立たないただのチンピラなんだからこういう時に出てこ

ないとアレの価値が謎だ。ギンガが例の集団の一員だったことも問い詰めたいし。スバルだって非常時でなければ、いや非常時だからこそ姉のことは心配だろう。

まあ、それもレリックを回収してからのだけだ。

「行くわよ、陣形変わらず。エリオとスバルはどっちでもいいからレリック発見次第キャロに渡して封印。封印中はキャロの護衛最優先。完了次第即帰還よ。なにかある？」

「ありません」

「はい」

「オツケー」

エリオ、キャロ、スバルの順に帰ってくる答えに頷きつつ、

「ゴー！」

*

「ツーーー！」

飛び出した瞬間だった。超反応とかいうレベルではなく、脳裏を襲ったノイズのせいだ。戦闘中も休暇中も常に襲っていた既知感^{デジャブ}。それまでを遥かに超える吐き気と不快

とはないと思うが、認めないと殴られるので取り合えず頷いておいたが、結構速いという自負はあった。

その上で、速度を乗せた一閃を支柱ごと、その背後にいるであろう狙撃手へとぶち込んだ。

閃光と共にコンクリートの柱が吹き飛び、

「なるほど速いね」

「……」

赤いコートにフードで顔を隠した男が姿を露わした。長身の男だった。顔は顎までしか露出していないが、それなりに形が整っているのはわかる。その口元が歪み、

左手に握っていた拳銃の銃口が向けられる。

「クッー」

既知感、そしてそれだけではなくエリオ自身の直感で弾丸に当たると拙いのが分る。

避ける、避ける、避ける——！

その思考が前進を支配し、引き金が引かれると同時に、

「あああッー！」

空中を蹴った。音速超過の踏みつけによる空間跳躍。奇しくもこの僅か数分後にレヴィが行ったのと同じ動きだ。それで無理矢理拳銃の射線から外れる。

男の感嘆の口笛が響く。

地面を転がり、跳ね起きる。相手が銃使いならば、いや相手がなんであろうと目前で転がっているのは致命の行為だ。

そしてエリオは悟っていた。

コイツは拙い。カイトやヴェルテルと同じだ。今の自分よりも高みにいる者。人を超えた超越者。魔導を極めた埒外の魔人。キャロやティアナ、スバルでは闘わせてはならない。

だから、

「ストライダー！」

『Explosion!』

カートリッジを消費し、自らの魔力を高め、

「おおおおおー！！！！」

一気呵成に攻める。

それを男は、

「ははは、カッコいいね」

エリオの槍撃を笑みと共に受ける。

「ッ！」

受け止めたのは握っていた拳銃だ。カイトのとよく似た大型口径の自動拳銃。それでエリオの一閃を受け止めていた。当然ながらただの銃が今のエリオの一閃を受けて無事なはずが無い。つまり、この銃もまた埒外の物。エリオの直感は正しく、この男もまたキチガイだ。

槍を再び振う。

「ゼアツ！」

相手は遙か格上であり、初撃はなんとか防いだとはいえ同じように殺意があつた。つまりそれは当り前だが自分たちを殺しに来ている。そして、もし自分が負ければ背後の仲間は殺されてしまう。

だから全力。

未だカイトやヴェルテルのように殺意や殺気を込める事は今のエリオには出来ない。人を傷つけるのは嫌いだし、経験もない。良いことなのか悪いことなのかはともかく、そんな自分が殺意と殺気とか込めるのはお門違いで見当違いも甚だしい。

故に意志を。魂を以って振う。

「なるほど、あの人が入れ込むも分る。でも——」

超高速、それこそ音速を超えて振られていたはずの穂先に銃口が合わされた。

そして、引き金を引く。

「俺は君の担当じゃない」

「なっ——！」

ぶっ飛んだ。馬鹿げた衝撃が両腕を打撃する。驚愕。拳銃にしては異常な衝撃だった。まるで大砲の直撃をモロに受けたかのような衝撃を連続して受ける。馬鹿げてる。いや、違う。こういう連中に常識を持っているほうが悪い。未だ半分程は人間レベルであるエリオオの失策だ。

故に出来ることは、

「弾、絶対避けてください！」

「できるかどうか別だけどね」

男が引き金を引く。吐き出された弾丸はエリオオが確認できるだけで三十を超えていた。最早驚くのも馬鹿らしい。大砲並みの威力かと思えばマシンガンのような速射。カイトが二丁で為すことを一丁でしている。

着弾点であろうキヤロたちに動きはなかった。いや、今のエリオオと男の攻防はホンの数秒間のことだ。彼女たちに知覚できる領域を超えている。

エリオオは未だ衝撃から復帰できず硬直している。例え回復していても届かない。弾丸の速度もまた異常に速かった。

それを——

●
スバルは思う。

たまに自分が自分でなくなることがあると。

始まりは、始めてカイトに出逢った時。初対面であるはずの彼がどうしようもなく不快だった。存在が相いれない。在り方が認められない。同じ空間にいることがどうしても我慢できない。水と油、そんな関係だった。自分らしくないと思っけていても彼を否定することは当然のように思えたのだ。

そして海鳴の時。変化はあれが決定的だった。

何か分らない、でも知っている、よくわからないものが自分の中に芽生えた。未だ消えずに残っている。いや、むしろ大きくなっているだろう。

それは確かに、スバル・ナカジマという存在を变革させている。

表面上は変わらずとも。決定的にスバルは変わって行っている。僅かな動きのリズム、拳の握り方、構え、殴り方。あらゆる所が少しずつ変質していく。

そして今。目の前の暴虐の魔弾の前に——また一つ、歯車が回るかのように、彼女は変質した。

「
迫る弾丸は三十七。通常の弾丸よりも遙かに速度は高く、恐らく威力も同じだろう。さらには吐き気がするほどの魔力。当たれば死ぬ、自分だけではなく一緒にいるティアナとキヤロも。」

だから動いた。

全身の人工筋肉、骨格フレーム、感覚素子をフルに使い、唐突に脳裏に閃いた肉体の動かし方で身体を動かす。自分でも信じられない駆動。戦闘機人という特殊な肉体でなければスバルの身体が自壊していたであろう動き。閃いたというよりも、思いだしたかのような感覚だった。

拳を振う。

その動きは到底十五歳の少女が行える動きではない。極限には程遠いが無駄というものに削られ、拳撃という理を高められていた。

弾丸を打撃する。

両腕を使い、大気をぶち抜く魔弾を殴り——弾き、砕く。射出した拳を引きもどし、同時に裏拳気味に叩き落とす。それまでのスバルの力量を遥かに超えた動き。無論、限界以上の動きをしてスバルの身体に負担が無いわけではない。弾丸を一つ砕く度に身が軋み、内側から砕かれる感覚が得る。

それでも拳を振う。

振わねば、死ぬのだ。親友が死ぬ。仲間が死ぬ。

なにより——こんな所では終わるわけにはいかない。

その思い。渴望とすら言えぬ意地にも似た感覚。漠然とした強迫観念のような思いが湧き上がり、身体を動かす。

そして、

「ハア……ハア……ッ！」

三十七の弾丸を全て打ち砕いた。

息は荒く、脂汗が酷い。腕は無理な動きで筋肉がちぎれたのか、内出血が激しいし、リボルバーナツクルも半壊、両手の骨も砕けている。連続の大衝撃に踏ん張ったマツハキヤリバーに亀裂が入っている。足から力が抜け、汚水で濡れたコンクリートの地面に跪く。

そんな状態のスバルに、乾いた拍手が響く。

「コングラッチュレーション——お見事」

男は感嘆の言葉を述べる。だが、その隠れた視線はスバルを見ておらず、

「でも、悪いけど君の担当は俺じゃないんだ」

指を鳴らした。

刹那、スバルはあらゆる感覚を失い、世界から切り離された。

第二十八章 死獣の遭遇

「なっ——！」

目の前で、スバルが糸が切れたようにぶっ倒れた。ティアナの目には何をしたのか理解できなかつたが、それでもスバルに命を救われたという事は理解できた。何故スバルがそんなことが出来たのかは今も頭から外す。それよりも何故スバルが突然倒れたかが問題だ。弾丸全てを打撃した彼女は確かに疲労困憊だった。それでも今のよう突然に意識を失うのはいくらなんでも不自然だ。

故に考えるべきことは、

「何を——!?!」

「さあて。敵がそんなに簡単に手の内を晒すとも思ふのかい？」

最もだ。だから考える必要があるが、目の前のこの男に対し考える時間があるとは思えない。咄嗟に思いつくのは弾丸の付与効果か何かだろう。どつちにしろ弾丸そのものの威力からして当たればティアナもキャロも終わりだ。

だから、選択できる手段は——、

「ああ、逃げるのかい？ それも悪くない。これもできるかどうかは別だけどね」

手段が封殺されていく。

言外に、逃がさないと云っているのだ。ティアナにはその言葉に抗えない。

「っ……………」

拙い拙いマズイマズイマズイまずいまずいまずい……。敗北以外のヴィジョンが見えない。今のティアナでもキャロでも戦闘になった場合は数秒とて持たない。

「ひっ……………」

思わず喉から引きつった音が漏れ、

「ティアナ」

「……………」

呼ばれた名前に動きが止まる。名前を呼ばれた。そう、それだけのことだ。だけれど、今この男は普通に呼んだのではなかった。まるで親しい友か家族——そう、家族の名前でも呼んだかのような親しみを感じさせられた。

家族。

そんな人は——もういない。なのに——

男がフードを取る。

「……………あ、あ」

茶色の髪に整ったティアナに似た顔立ち。見憶えがあるとかいうレベルではない。

例え六年間直接見なくても、忘れられるわけがないのだ。

「今は魔弾タスラムなんて変な名前で呼ばれてるが……まあ、とりあえず——久しぶりだね」

ティアナ・ランスターとその実兄、ティーダ・ランスターは六年振りの再開を果たした。

ティアナは、自分の人生をそれほど不幸を嘆いたことはなかった。

幼い頃に両親は死なれたが、10年上の兄に育てられながら、二人で懸命に生きてきたつもりだった。

勿論、辛いことがなかったわけではない。両親がおらず、たった二人だけの家族のことをからかってくるような輩も少なからずいた。それが苦にならなかつたというの嘘になるけれど、それでも。

優しい兄と二人で過ごす時間は、なによりも大切な刹那だった。

武装隊に入った兄は心配だったけど、彼に憧れたのもまた事実だ。本人に言ったら、

女の子なんだからもつと安全な夢を見る、と言われたけれど。

ともあれ、ティアナ・ランスターにとつてティード・ランスターは憧れだった。カッコいい兄のようになりたいとも、優しい兄のようになりたいとも思った。

幼い頃、ティアナの原風景。なによりも大切で、かけがえのない宝石のような時間。兄と自分の二人で完結していたけれど、それで十分だった。

大好きな兄とこれからも生きていく。そう、幼いながらに願っていた。

なのに——兄は死に、ティアナの刹那は砕かれた。

武装隊としての職務中に違法魔導師に殺された。

言葉にすれば、たったそれだけのことでティアナの日常は崩壊した。

何が悪かったというのか。確かに文句の付けようのない子供だったとは言えなかっただろう。迷惑を掛けた事も、怒らせた事もあった。でも、家族ってそういうものだろう。迷惑かけたり、かけられたり。怒ったり怒られたり。許したり、許されたり。そういう関係は家族だったら当然のはずだ。

未だに、六年たった今でもあの頃何が悪かったかはわからない。

だから、なにが悪かったという話ではないのだろう。

『いんははずじゃなかった』

そういう風にこの世界ができているというだけなのだ。ただそれだけのこと。

その思いが、ティアナの魂に傷を生む。理不尽な喪失は消えることのない切創として今も尚彼女の胸の中に残っている。

その傷を隠すように。

死して、無能と陥れられた兄の無念を晴らすために。

執務官などという分相応の夢まで願ひ管理局に入ったのだ。

士官学校に入って、スバルと言う腐れ縁やギンガ、なのはやフェイトという尊敬できる人たちとの出会いがあつた。

それは素晴らしいことだけれど。

それでもかつての切創は消えない。無くならない。砕けてしまった宝石は二度と元に戻らないのだ。

未だに、兄を侮辱された怒りも憤りも消えていない。

ランスターの弾丸は全て貫く。

それを証明することが、ティアナ・ランスターの存在理由なのだ。

なのに――

「兄、さん……う？」

「ああ、そうだね。ティード・ランスラー、君の兄だよ。大きくなつたね、ティアナ」
死んだはずの彼はティアナの目の前で、かつてと変わらぬ笑みを浮かべている。六年

も経っているのにまったく変わっていない。ティアナ自身は十年もたつて随分成長したのに。

死んだはずの兄はかつてと全く変わらずに目の前にいた。

「兄さ……ん？ え……なんで、嘘……」

「え、お兄さんて……」

「……っ」

キャロもエリオもティアナの過去の概要は知っている。彼女の兄が十年前に死んでしまったという事も。だからキャロは狼狽し、エリオは愕然とする。キャロはなにをすればいいかわからないし、エリオは未だの腕の衝撃が抜け切れておらず、力が入らない。

「兄さん……兄さん……兄さん……兄さん……兄さん……？」

「ああ、そうだよティアナ」

「あ、あ、あ……」

今日の前にいるのが、誰か、ようやく理解していく。視覚も聴覚も、目の前の青年が自分の兄だということを告げている。それでも頭と感情が付いていかなかつたけれど。

それでも、ようやく実感が追いついてくる。

何よりも愛していた、大切だった人が目の前にいる。

幻覚でも錯覚でもない。現実として、ここにいるのだ。

身体が震え、涙が溢れてくる。

「兄さん——！」

握りしめていたクロスミラージュが地面に落ちて、自動で待機状態になるがそれすらも気付かない。ティードアへと駆け寄り、腕を広げて抱擁しようとする。

どうして、なぜ、なんで、ありえない。そんな思いは全て消え、ただあるはずの無い邂逅に歓喜し——、

「——さあ、構えるんだティアナ」

眼前に突きつけられた銃口という現実を受け入れられなかった。

「え——？」

「俺の担当はお前なんだ」

だから、

「ティアナ、お前の魂を見せてくれ」

*

兄に銃口を突き付けられた。

その事実をティアナの意識は到底受け入れることができなかつた。当然だろう。きちんと葬式まで行い弔つたはずの兄が、今日の前には存在していて、さらには銃口を向けられている。理解しろというのは酷というもだろう。

未だ十六歳の少女に、それら全てを受け入れて平然としているなどと誰が言えるのか。

故にティアナの思考が完全に停止し、

直後、地面から鎖が湧き上がった。

「——!!」

ティアナとティードを別つように真下からだ。咄嗟にティードかティアナの肩を突き飛ばして距離を開ける。

伸びあがる鎖は一本と十数本。一本のは先端に蛇のアギトのような装飾があり、他は通常のソレだ。

蛇顎が兄妹を別ち、それに追従し囲う様にさらに鎖が伸び、

「オオオツツ——!!」

「フハハハ——!!」

二人の青年が崩れた地面から飛び出してきた。

一人は両手の銃剣に紅いコートに黒と白の斑の髪のカイト。

もう一人は——右手には異形の逆手剣、左腕の袖口からは鎖が伸びて、黒いコートに黒い髪、左頬に刺青を持った青年だった。

二人は叫びながら、

「オラア！」

「ハアツ！」

銃剣と逆手剣を激突させる。

その余波で、全く動かないスバルや呆然としていたティアナやキャロは吹き飛ばされ壁に叩きつけられる。エリオやティエダでさえ思わずたたらをふむほどの衝撃。

そして、それすらどうでもよくなるほどの濃密な殺意。

気持ち悪いほどの殺意。吐き気どころか今すぐ胃の中身をぶちまけたくなるようなほどの死の塊。実際にキャロとティエダ、エリオでさえ意志と無関係に胃液を吐き出している。

カイトが獣なら——あれは死神だ。

死と言う概念が人の形をしたのではないかと思わせるほど。

「——ナハト」

ティエダが呟いたそれが死神の名前か。

それに構わずに、

「ふん！」

ナハトがカイトに前蹴りを叩きこむ。それは威力そのものはそれほど高くない。無論常人が当たれば弾けるような威力ではあるが聖遺物の使徒相手では足りない。にもかかわらずその一撃に怖気が走る。命中すれば霊的装甲がぶち破られる確信がある。

それは単純な物理的な威力の問題ではなく、

霊的な質が高められた一撃だった。

それをカイトは受ける。

「がっ、あ……！」

避けずにそのままモロにナハトの蹴りが直撃し、

「ぬ」

カイトに触れた瞬間に威力が失せる。減衰しているかのように、消失しているかのように、或いはそのどれでもなく。ナハトの一撃は威力を失う。それゆえにカイトの肋骨にひびを入れる程度に抑えられ、

「デジャブなんだよ……！」

笑みを飛ばしながら、右手でナハトの足を掴み、左肘を叩きこみ砕きに行く。

「ハッ——！」

ナハトもまた、笑みを浮かべながら動く。数舜後に刃砕かれるであろう膝には目もく

れず、指の動きで鎖を飛ばす。まるでそれ自身が意志を持つているかのように跳ねあがり、カイトの頭部へと喰らいつく。

それを五本も束ねられたカイトの鎖が弾く。その拍子にカイトの意識が僅かに逸れて、ナハトが逆の足で蹴りつけながら距離を取る。

二人は共に空けた穴を間にし、対峙しあい、

「フ、フフ、フハハハハ」

ナハトは変わらず笑い声を上げる。

「ハハハハ——儘ならないな、貴様のような餓狼一匹殺しきれないとは」

「ああ、そうかい」

楽しげなナハトに対し、カイトは煙草を啜えて火をつけながら、

「こつちこそテメエみたいな化け物とつとと退治してえんだよ。なあ、おい。さつさと

死んでくんね？」

「できるものならな」

軽口を叩きつつも、物理的な感触にまで濃縮された殺意は衰えることはない。

獣と死神。

カイトは未だ形成位階であり、ナハトは聖遺物の気配すらない。発せられる魔力自体は管理局の測定器でもギリギリ測れる程度だ。

それでも、極限にまで昇華された殺意がある。どうすればこのレベルの殺意が出せるのか疑問を覚えるほどであり、実際この領域は黒円卓でも双首領を除けばカイトしか至っていない。

そんな二人に、

「おいおい、いきなり出て来て二人だけで盛り上がるの止めてくれない?」

臆することなくティーダは割りこんだ。

「というか、ガウス。何で君がいるんだい? 上の大隊長殿たちがやりすぎないように監視するって聞いてたんだけどな」

「はあ? 俺が何処にいようが勝手だろうが」

「——そっちの人たちをこっそり見守っていたら、ナハトに見つかったんだよね」

「あ?」

「ルーテシア?」

何時の間にか、ティーダの隣にその少女はいた。キャロやエリオとそう変わらぬほどの年齢。紫の長髪に黒のワンピース。

幼い少女だが——見れば分る。この少女もまた人を外れている。

ルーテシアと呼ばれた彼女は無表情でカイトを指さし、

「地下水路走りだしてからずーと追いかけて来てたよね。危なくなったらいつでも飛び

出せるようにして、特にそっちの青髪の人に注意してて」

「……」

「……」

「……」

「……んだよ」

「……君あれかい？ ツンデレってやつ」

「と言うより道化だな」

「やかましい、つかお前ツンデレなんて単語知つてのかよ」

微妙に空気が弛緩し——それでもティアナたちは未だに復帰していない——カイトが髪をくしゃくしゃ掻きながら言う、

「はあ……白けたなおい。悪いけどコレで帰っていいか？ ホラ、そのアホとか回収しないといけないし」

普段の軽薄な気配を取り戻し言うが、

「言っただろう——できるのならば」

「まだなにもしてないしね」

「……」

三人の魔人は許さない。

ルーテシアが黒の手袋に包まれた手を掲げ周囲に薄紫の光弾が生まれ、ティーダは拳銃を構える。

ナハトもまた、異形の逆手剣と蛇顎の鎖を揺らす。逆手剣、それはまさしく処刑の鎌、デスサイズ。殺すことに特化した刃が狼の血を求める。

聖遺物を持たぬ三人だが——別のナニカがある。聖遺物に匹敵、或いは凌駕しかねない。

特に——ナハトは格が違うのが分かる。

それを前にしながらも、

「……」

カイトは相好を崩さない。それを前にしても、既に解いた戦闘状態を戻さない。この三人に対してはそれが致命的だということはカイト自身とて理解している。

それでも、

「……デジャブるなあ……」

煙草を指で挟みながら吐き棄てて、

「とつとと連れてけよ」

「独断専行もほどほどにしなさいよ」

「ほう」

「！」

「あ？ あの砲撃主はどうした？」

「逃がしてあげたわよ、あなたがウチの妹ストーカーしてる間にね」

「うっせ」

突如として現れたギンガは——カイトと軽口を叩いてる間にスバルたち四人を回収し終えていた。

『銀河静寂・光輝変生』の効果にて、零タイムで四人を回収し、

「じゃ。そういうことで」

四人を肩に担ぎ、カイトの背後に現れて背に触れる。最早誰の制止も間に合わない。

しかしそれでもナハトは歯をむき出しに口元を歪ませ、

「貴様は俺だ——その傲慢を見せてみる」

魔刃^{ペリアル}は告げ、

「アフヴィーターゼーエン——潰れちまえ」

灰色狼は応えずに転移し、

残された三人は突如として通常の数百倍にまで強められた重力の“闇”が地下水路ごと押しつぶした。

第二十九章 安らかな闇

ディアーチエが戦闘開始共に展開した結界の中で、それらの光景は映されていた。

高町なのははシユテル・ザ・デストラクターの炎柱に飲み込まれ、フェイト・T・ハラオウンはレヴィ・ザ・スラツシャーの乱斬撃に落とされる。

地下ではスバルは糸が切れたように力が抜け、ティアナは呆然自失の上で眼前に銃口を突きつけられている。

「ま、この程度であろう」

ディアーチエはそれらの光景をウィンドウ越しに見せつけ、消す。

見せつけられたのは――

「――あ、う……」

例によつて満身創痍であり、身動きすら碌にできぬ八神はやてだ。

その身が傷だらけの血まみれなのは言うに及ばず、十字杖シユベルトクロイツは半ばから折れて、尖端の装飾は碎けている。帽子はいつの間にか無くなっているし、騎士甲冑の上着も使いものにならず、ただの襦袢にすぎない。

瞳の意識は薄く、全身にも力はない。

僅か数メートル先にいるディアーチエに跪くように、傳くように、ひれ伏すように倒れている。まるで見えない力に押し潰されているように。

周囲はすでに荒廃した都市群の中で、

「どうだ鴉。理解したか？ 己の無力さを」

構わずディアーチエは語りかける。戦意は、最早ない。これ以上彼女を痛めつける理由はなく、それよりもすべきことが在るからだ。

はやての前で膝を突き、彼女の顎に手を添え、

「結局この程度なのだよ、お前たちは。わかるか？ 足りぬよ、何もかも。——愛も狂気も意志も渴望も」

告げられる言葉にはやては何も言えない。

そんなことないと、叫びたいがそれでも現実として自分たちは無様を晒している。意識は朦朧としつつもそれくらいはわきまえている。

「なあ、鴉よ。我は貴様たちが哀れで仕方が無いよ」

「どう、いう——」

「理解できぬから——哀れだよ」

そして羨ましいと、ディアーチエは言う。

「意味が、分らん……なにが目的なんや……それに」

そう、それに。

彼女たちは彼の部下ではなかったのか。なのはどうして。

記憶がよみがえる。それは海鳴の教会で彼に言われたこと。

なにがあつても、自分たちの味方でいてくれるとそう言っていたのに。

なのはどうして――

「ああ、それは駄目だ」

「ガッ……!」

思つた瞬間、はやての身体が地面に押し付けられる。大地への戒めが、それまでの数十倍になつたように。いや、これは、

「重力、魔法……!」

ミッド式でもベルカ式でも、超高難易度に分類される魔法だ。発動までに複雑な式が必要であるし、よつぽどのマルチタスクが無ければ実践では使えない。実際重力魔法の使い手はレアスキル持ちがほとんどだが、

ディアーチエは手の振りだけで発動していた。

「ああ、それは許せんぞ鴉。この我とてそれだけは許容できない――あやつの愛を、よりにもよつて貴様が疑うなど」

自分の為したことが埒外の所業であることに彼女は構わず、瞳には激情のみが宿っていた。大地にめり込んだはやての胸倉を掴み、持ち上げ、

「ふざけるな。なぜ護れていることに疑問を覚えぬのに、愛を疑う？ あ馬鹿が、一度とて貴様の、貴様らの味方でなかったことがあつたか？ 敵であつたことがあつたのか？ 貴様たちのために馬車馬の如く。表舞台で貴様らが輝くならと。そう、思い穴倉のような場所にこもっていたのは、誰のためだ」

「訂正しろ、でなければ自分を押しさえられている自身がない。思い知れ鴉、未だに己の翼で羽ばたくことのできない雛鳥が。それは侮辱だ。あやつへの、我らへの。何もしていない貴様らが脳裏に浮かべることすら許さん」

「——あ、あ」

「そうだ、何もしていない。」

八神はやてが彼になにをしたのか。

夜天の書の真実は彼がいなかったら辿りつくことができなかつた。

ラインフォースの後継たるラインフォース・ツヴァイの誕生は彼無くしてはあり得なかつた。

日々の捜査や職務にも彼の力は借り続けて、資格試験等にも彼に教えを請いたのは一

度や二度じゃない。

大きなことから些細なことまで、彼に支え続けられてきて、今の自分はあるのだ。ならば——八神はやては彼に何ができたのか。

何も——していない。

まるでそれが当然のようになっていた。彼が自分の、自分たちの背を支えてくれることが。

護られる事が当り前だと、いつのまにか、そういう風になっていたのだ。

おかしいだろう、それは。護れて当り前とか、支えられて当然だとか。なんだそれは。滑稽にもほどがある。

「うち、は——うちらは——」

「そうだ、貴様らは所詮神の玩具だ。恥を知れ——どれだけアレを嗤わせれば気が済むのだ」

「——」

なにも言い返せない。言い返す言葉がない。何と言えればいいのだ。何を言えば許されるのだ。彼に会ったら何を言えればいいのだ。どんな顔をすればいいのだ。分らない、解らない。

はやての胸の中で、どうしようもできない想いは駆け廻り、涙と共に出てきた言葉が

一つだけで、

「——ゴメンサイ」

「戯け、赦さんよ」

刹那、闇統べる王の覇道が真の姿として創造されていく。

『この神聖な広間には、復讐などは縁がない』

In diesen heil'gen Hallen,
Kennnt man die Rache nicht.

結界のように見えたこの暗闇では決してそんなモノではない。外装のみのディア―チエの覇道だ。

滲みでた彼女の渴望が場を創っていただけに過ぎない。

『よしや、その人つまずけば、義務へとみちびく、その愛は

Und ist ein Mensch gefallen;
Führt Lie be ihn zur Pflicht.

友誼の手を見出して、さても楽しく、ほがらかに、より良き国に至るのだ』

Dann wandelt er an Freundschaft,
Vergn ·gt und froh ins bes're Land.

薄暗かった世界が、さらに暗く染まっていく。視界が悪くなるわけではないが、周囲

が闇に包まれていくのが明確に理解できる。祝詞が進めば進むほど重圧が増し、周囲の建物が音を立てて押し潰されるように崩壊していく。

『この神聖な城内は、人と人が愛し合う』

In diesen heiligen Mauern
Wo Menschen
den Menschen lieben,

裏切り者は、あり得ぬ。ここでは敵も赦すのだ

Kann kein Verräther lauern,
Weil man
dem Feind vergiebt.

教えを受け入れない者は、人間の名に値せぬから』

Wen solche Lehren nicht erfreuen,
Verdiene nicht ein Mensch zu seyn.

生まれ行くのは——闇だ。黒く、暗く、静かな闇。静寂の世界。

『創造』

Briah

『深淵幻想・紫天の女王』

Helheim: Zauberkraft

ここに聖槍十三騎士団黒円卓第八位、大隊長深淵の黒騎士^{ニグレド}『闇統べる王』ロード・デイ

アーチエの覇道が完成した。

*

覇道の完成の瞬間、はやてが感じたのは痛みでも苦しみでも重圧でもなかった。力が入らなくなったそれは、脱力というよりも、

「ねむ、け……？」

眠気だ。強烈なまでの睡魔。目を開けるのも口を開くのも言葉を紡ぐのも億劫になるほどの眠気。意味がわからない。どうしてこんなタイミンで眠くなるのか。いや、これが今の詠唱の効果だとしても、眠くなるなどおかしい。

「貴様には理解できんよ。夜天の主、月無き空で浮かぶ叢雲の王よ」

「っ……」

聞こえる声にすら——力が抜ける。単純な脱力でも、どこかに吸収させているという感覚ではない。

やはり眠気だ。それが一番当てはまる表現だ。

「——求めたのは安息なのだ。臣下と、永劫安らかに眠っていられば我はそれで満足

だった。星と雷、王たる我、そして……闇。無限の暗闇の中、巡り揺蕩い共に在れば、それでよかつたのだ」

紡がれたディアーチェの言葉は、はやてに語りかけるといふよりも己自身で嘯みしめるようだった。意識は加速度的に薄れるが、それでも聞かなければならないと感じた。「別に、今こうしてここにいる事に文句があるわけではない。このような世界を放つてはおけんし……」

それに、

「……この胸に宿る想いも、悪くはなからう」

僅かに照れるように、頬を染める。その顔だけは、はやては知っている。ディアーチェの言葉はほとんど理解できないものばかりだけど、その仕草だけはわかつてしまった。

はやても、同じだから。

「なあ、鴉よ。己の過ちに気付け。我のオリジナルだろう？ ならば愚かでも、塵ではないはずだ。ああ、正直言えば今の貴様たちには腸が煮えくりかえるよ。今すぐ殺してしまつても構わんくらいにはな」

「なら——」

なぜしないのだ。彼女たちの力なら容易いだろう。それこそ、虫けらを踏みつぶす感

覚で自分たちを殺せるはずなのに。それをしないでいい。

シユテルもレヴィも一撃で殺せるはずなのに、なのはもフェイトも死んでいなかった。思えば海鳴の時だって、あからさまに手加減していた。あの時だって、すぐに終わらせただろうに。アリサやすずかの登場を待つかのようになるのはたち手加減していた。

アグスタの時も同じ様だった。エリオはあの騎士にとんでもなく手加減されていると言っていた。

なんだそれは、明らかにおかしいだろう。なんの茶番だ。まるで演劇かなにかか。

自分たちを見定めるように、見極めるかのように。この黒衣の騎士たちは自分たちを糾弾するのだ。

「フツ……。さて、な。正確に言えば殺さないのではなく殺せんのだが……まあ、貴様に教える義理はない。それは己で見つけろ」

そして、デアーチエはどこからともなく取り出した本を開く。夜天の書に酷似したそれは、

『紫天の書』。貴様が己の在り方に疑問を持つのなら覚えておけ。知ったところでどうこうなるとは言わんが、切っ掛け程度にはなろう」

静かに彼女の魔力が高まる。

あまりにも安らかで、優しい魔力だった。何故ならばそういう渴望だから。

『闇統べる王』。

その剣呑な魔名に対し、彼女の渴望は、

『愛しき者と共に安らかな闇に沈みたい』。

そんな、優しく、穏やかな、安らかな祈りだ。

だからこの霸道は静寂に包まれている。重力操作はあくまでも二次的効果に過ぎない。彼女の十字槍に集う闇は安息の結晶だ。

つまりはやてが感じる眠気はそういうこと。

『深淵幻想・紫天の女王』。

その真価は、

ありとあらゆる力の沈静に他ならない。

力は力が抜ける。魔法は術式が解かれる。覇気は色を失い、渴望すらも埋没していく。

絶対的な安息にして静寂。

かつての黒騎士^{ニップレド}が唯一の終焉を望んだように。

今代の黒騎士^{ニップレド}である彼女は永劫たる安息を求めなのだ。

生みだされたのは幕引きの一撃では、水銀が欲した^{デウス・エクス・マキナ}都合主義ではないけれど、デイ

アーチェはこの力に誇りを抱いている。

「ダイアー、……チェ……あんたは……」

何を言えればいいか、はやてには解らなかつた。

それをダイアーチェが察したわけではないだろう。それでもはやての言葉に被せるように、壮絶な笑みを浮かべながら、

「さあ——闇に吞まれろ」

引導を渡すかの如く。十字槍を振りおろし。

はやてにそれまで数十倍、数百倍の加重と安息の深淵が放たれる。

余波により周囲のビルが崩壊し、自身の遙か真下の地下水路ごと押し潰される中、感じたのはやはり痛みでも苦しみでもなく、

——どうしようもなく優しい安息だった。

「さあ、これでどうかな我が友よ。楔は撃ち込ませてもらった。これで友として義理は果たしたことにしておらおう。お前がどれだけ愛していたとしても、私としては芥とそう変わらんのだよ。忘れないでほしい友よ、この身が求めるのはかつての絆レギオンなのだから。ああ、そして灰色狼ガウス。アレの保留もいい加減よかろう。その為に異界の王を呼び出したのだから——」

第三十章 多くの不理解

白い部屋だった。

無機質な白というわけではなく、清潔感のある白だ。広めの部屋に幾つものベッドが並び、最新の機器らしきものが各ベッドの横にある。壁に一面が大きなガラスの窓があり、室内と室外を見れるようになっていた。どのベッドも埋まっておらず、簡素な手術着らしきものを来た人々が横たわっていた。部屋は静かで、連続する電子音のみがある。

病室だ。それも集中治療室。

聖王教会の付属の最新設備が整った病院であり、管理局とも連携を取っており、ミツトチルダ、クラナガン周辺での負傷者や病人はここに送られる。そして、実際に今ここで治療を受けているのはほとんどが管理局員だった。

そして今最も重症なのが二人。

高町なのはとフエイト・T・ハラオウン。

全身の重度の火傷をと裂傷を負った二人。数日前の廃都市群における戦闘において瀕死の重体の状態で運ばれた二人だ。未だ意識も無い。それでも、外傷のみは既に完治していた。

「なのはちゃんもフェイトちゃんもどういうわけか運び込まれてから一晩で外傷のみ完治。それでも未だ意識は戻らないので現在集中治療室で治療中よ」

「命に、別状はないんやな？」

「ええ、それは大丈夫。念のために集中治療室にいるけど、今日明日には一般病棟に移してもいいと思うわ」

「そう、か」

脱力しながらはやては身体をベッドに沈めた。個室の部屋でベッドは一つだ。その主は八神はやて。可愛らしい白と青の寝巻きだが、服の下にはいたるところに痛々しく包帯が巻かれていた。ベッドの脇には陸士部隊の制服に白衣のシヤマル。手元には数枚の診断書があった。

廃都市群での戦闘から数日が経っていた。

端的に言つて最悪の結果だった。

廃都市群一帯は完全に崩壊、半分は跡形もなく焼け焦げ、もう半分は超大型地震でも起こったように建物がひしゃげ、地下水道まで崩壊している。廃都市群だから住人はお

らず、一般人に死者が出なかったのは不幸中の幸いだっただろう。

それでも、最悪だった。

部隊長の重傷、分隊長二人の重体。他の隊員は軽傷だったが無事でない者いるのだ。それにも関わらず犯人は全員が逃走、追跡もできずに終わった。レリックだけはなんとか保護したが。それでも褒められた結果ではない。各方面からバッシングを受けていてもおかしくないし、実際に地上本部から始末書や詳細報告の請求が来ているだろう。いくらなんでもこれでお咎めなしというのは考えにくい。部隊のトップ三人が復帰していないから、差し止められているのかもしれないが、三人のうち誰かが復帰すればすぐに本局か本部に出頭命令がでるだろう。そして、三人の中で一番早く復帰するのは間違いない自分だ。

はやては他の二人に比べて比較的軽症だった。あくまで比較的であり、全身の骨折と魔力障害と抜けない脱力があつたが全身火傷に裂傷のなのはやフェイトに比べればましだろう。

自分だけは意識があるし。謎の異常な回復力を発揮したわけではなく、怪我が治りきつたわけではないがそれでも、

「ウチがやらなアカン事や……」

シャマルに聞こえないくらいの小さな声で呟く。今の自分は部隊長だ。十九歳の小

娘とはいえ、一つの隊の長である以上は責任がある。だからこそ、立場故に前線に出ることが少ない自分が面倒事を引き受けるべきだ。それに面倒事はそれだけではなく。

『——さあ、闇に吞まれる』

ロード・ディアーチェ

闇統べる王。自分のそっくりの、しかしはやてとは隔絶した力を持つ彼女。彼女を含む黒衣の騎士たち。聖槍十三騎士団。今知る限りはシュテル、レヴィ、ディアーチェ、アリサ、すずか、カイト、ギンガそしてユーノの八人。十三騎士団ということはまだ五人はいるのだろう。Sランクオーバーの自分たちをもとめない超越者。

どういうわけか、この連中に関しては映像の記録がどれていないのも謎だ。

さらにはヴェルテルに今回の一件で新たに現れた三人。召喚士の少女、ナハトという男、そして、

「ティエダ・ランスター……」

十年前に管理局に任務において死亡したティアナに実兄。死んだはずの彼が現れ、妹に敵対した。

「ティアナは軽傷だけど……やっぱり心のダメージが大きいわ。今は薬で眠ってる」「無理もないわ。死んだはずの兄に銃口を突き付けられるなんてな」

自分だったら。もしリインフォースが復活して敵になったら。どうなるか想像がつかないし考えたくもない。

「当分は戦線離脱ね。医者として、彼女の落ちつくまで訓練も許可できないわ」
「……しゃあないな」

頭が痛い。

絶対的な戦力不足だ。今機動六課でまともに戦えるのは僅か四人だ。カイト、エリオ、シグナム、ヴィータ。魔人の領域に踏み込んでいるのは四人だけ。他の面子は重傷か力不足。いや、怪我なく、万全だとしても相手にならない。

どうすればいいのか解らない。

第一敵か味方かも謎だ。

確かにディアーチエたちには多大な被害をあわされたが、それでも、

「なんか、違う」

敵とか味方とか、そういう次元じゃない気がする。もっと大きくて、先を見据えているとでもいうのか。解らない。自分たちを糾弾した彼女たちの言葉にはたしかな重みがあったのだから。あれを単純に敵味方で考えることはどうしても無理だ。

「……………」

何をすべきか。

ディアーチエは言った。気付けと。

己の過ちに、無力さに、在り方に——愛されているという事実。

「……なあ」

「はい?」

「……ユーノくんは」

彼は、

「……いや、なんでもない」

「そ、そうですか」

聞けなかった。聞くべきことがなんなのかわからない。何か聞かなければならないのに、その何かがわからない。わからないことが多すぎる。

彼女たちは彼の部下らしい、つまり彼女たちはある意味彼の端末なのだ。ならば彼女たちの意思は彼の意味。ならば――、

「御免、シャマル。少し寝るわ」

「あ、わかった。じゃあ、なにかあったら、ナースコールか念話でお願いね」

「うん」

シャマルが部屋から出れば、自分一人だ。あとには静けさだけで、

「あー」

身体から力を抜き、右腕で眼を被う。それくらいが出来るには回復してる。

「……わからんなあ。どないすりゃあいいねん」

「ディアーチエの言葉を思い出す、思い返す。頭の中で反芻させ、絶望と痛みすらも思い返すことになるが、それでも、そんなことはどうでもよく彼女の言葉を思い返す。」

それでも、

「……ゆーの、くん」

なにも、解らない。



場所は変わる。聖王病院のはやてとは別の個室だ。ベッドに横たわるのはティアナ。オレンジの髪はほどかれ、同じ色の寝巻き。目は閉じられ、涙の痕や隈があり、肌に張りツヤはない。一目見て憔悴しているとわかる状況だった。

「……ティア」

そんな痛ましい彼女はスバルは見つめる。彼女にも普段から元気は無い。ティアナやスバルは比較的軽症だった。ティアナ自身に大きな怪我は無く、スバルは両の拳が砕けていたがスバル自身に体質としては治癒にそれほど時間はかからないし、既に回復している。だから二人の身体の傷は大したことない。

傷が大きかったのは心だ。

ティード・ランスター。ティアナの実兄。死んだはずの兄。

ティアナの親友として、彼女が殉職した兄が無能となじられたことにどれだけの怒りを抱いていたかを知っている。どれだけ彼女が兄を好きだったのかも。

だから、今のティアナの状況も無理が無いとスバルは思う。

起きていれば、泣き叫ぶか周囲か自分を傷つけるかの状態だとしても。精神崩壊しなかつただけマシだったと言える。

「よお、調子はどうよ」

「っ……カイ、ト」

「ああ、そうだけ」

振り返れば、病室の扉にはカイトがいた。白と黒の斑髪。針金を束ねたようでも筋肉を絞った肉體。病室だから煙草を吸わない程度の常識はあったらしい。片手にはビニール袋があつて、

「ホラ、土産だけ。まあ、食べるかどうかは別としてだが」

果物や菓子などが入っている。

「……」

「……ま、冷蔵庫入れておくぜ」

スバルの反対側に回り、ビニール袋の中身を冷蔵庫に入れていく。

「ねえ……」

「あん？」

「教えて」

「なにをだよ」

「……とぼけないでよ」

絞り出すような声で、

「だから、なにが」

「全部だよ！　なんで、ティアナのお兄さんが、それにギン姉だつて、なんで！」

声は大きくくない。それでも悲痛な叫びだ。治ったばかりの拳が真っ白になるほど膝の上で握りしめられている。

「おかしいじゃん……！　あの格好、カイトたちの仲間でしょ!?　なんで、なんで……ギ

ン姉が……っ」

「……」

「答えてよ……!」

スバルの様子にカイトは目を細め、小さく舌打ちし、言う。

「無理だ」

「!」

「別にいじわるとかじゃなくてよ、答え持つてねえんだよ俺も」

「そんなの……!」

信じられない、とスバルは言おうとする。無理もない。カイト自身、自分だったら信じないだろう。髪をくしやくしやと掻き、どう答えるべきか考える、

「少なくとも、ティアナの兄貴についてちやあ俺は知らねえ。ギンガは」

「ギン姉は、何」

「アイツの選んだ道だぜ、本人に聞くのが一番だろうが」

「……!」

「したのかよ」

「して、ない……というか、繋がらない」

戦闘のすぐ後にギンガに連絡はしたのだ。それでも通じず、父に聞いても数日前に有給をとってクラナガンから離れているという。連絡先も聞いていないらしい。放任主義にも程がある。ギンガが割り込んできた記録がないから危機感とか薄いのだろうか、いや、ギンガ自身は敵の攻撃を防いで輸送ヘリを守っただけだからむしろ真つ当なことをしているからか。

スバルとしては、そんな簡単なものではない。

「……」

意気消沈するスバルにカイトは言葉に詰まる。何を言うべきか迷い、髪をまたかき回して、

「おこ」

「……なにさ」

「まあ、アレだ。アイツだつて考えてることあるだろ。今度会った時に直接聞けばいいじゃねえか」

「……うん。それしか、ないよね」

「……んじや、俺行くわ。また今度ティアアナが復活したらくるぜ」

「べつにいい……」

ちよつと酷いこと言われた気がしたが気にしない。



「……」

部屋を出て、病院の廊下を進む。他の入院患者や看護師たちを通り過ぎ、エントランスの端にある喫煙室に。煙草を啜えて火を付ける。

「あー」

煙を灰で満たし、大きく吐き出す。幸い自分以外に人はいなかった。

「……なんかなあ」

微妙に自分のキヤラがおかしい。キヤラブレというかなんというか。アレにあれだけ元気なくされるのは困る。困るといふかなんか嫌だ。いや別に何度も言うけどそういうのじゃないから。マジで。

「……誰に言ってるんだ俺は……」

胸の中に胡坐かいてるアイツか。馬鹿笑いしてるのが聞こえてきそうで腹が立つ。非常にウザい。

「はあ……そろそろケリつけなきゃならんなあ」

いろいろと、この中途半端な状況に。そろそろいろいろ動くだろうし、実際に連中や自分たちの動きも本格化してきた。六課面子の覚醒も進んでいる。だからこそ、半端なままの状況は駄目だ。

まあ、なにはともあれ、

「ギンガめ……海鳴か？ 連絡くらい出ろっつうの」

携帯を取り出して、ギンガへと電話を掛ける。いや、別に他意はないんだ。うん。アイツは関係ない。マジで。

第三十一章 騎士たちの省み

海鳴の教会、聖槍十三騎士団暫定地球本部。孤児院としての顔を持つ傍ら、魔人たちの巢窟として存在する神の家は、

「反省会をするわ」

真昼間からそう告げるアリサの前にはシユテル、ディアーチェが顔を青くして床に正座をし、隣でレヴィが胡坐をかいていた。テーブルではニヤニヤとした笑みを浮かべたはずかもいた。五人とも私服である。アリサはへそ出しの赤のシャツに白のジャケットトに赤のミニスカート。すずかは黒のジャケットトにジーンズ。シユテルは黒の半そでシャツの下に白の長そでのシャツを着て膝上までのスカート。レヴィは黒のブラウスにミニスカート。スウディアーチェは黒と紫のワンピースだった。

かつてユーノとはやてが語り合ったのと同じ部屋だ。実は防音仕様の部屋だからよつほどの大きな音を立てなければ外の子供たちの迷惑をかけることは無い。アリサたちの聴力だと防音仕様は関係から、外の音も聞こえるが、そっちにも仲間はいるので問題ない。

問題なく反省できる。

正座を組むシユテルたちの前で椅子に座り、足を組むアリサが呟く。

「さて」

「っ！」

ビクウツ、とシユテルとデイアーチエが反応する。が、アリサの視線は二人ではなく、一人胡坐をかいて座っているレヴィへと向けられる。

「レヴィ」

「なんだー?」

冷や汗を流す二人とは対照的にいつも通り、能天気とさえ言つていい笑顔だ。立ち上がったアリサはレヴィの前に立ち、

「文句無し。頑張ったわね」

「おーありがとー!!」

にこやかな笑顔と共にレヴィの頭を優しくなでる。一応現役中学三年生なのだが、子供みtainな少女である。

「じゃ、あつちでずかとお菓子でも食べてきなさい」

「チョコとかあるよー!!」

「食べるー食べるー!!」

ずすが掲げたバケツトにはチョコだけでなくクッキーやビスケット、ポテトチップ

スのようなお菓子の類がたくさんあった。どれもがレヴィのが好物だ。立ち上がり、諸手を上げながら駆けていく。子供らしい、そしてだからこそほほえましい光景にアリサもうんうん、と頷きながら笑みを浮かべ、

「さて」

「っ！」

先ほどとまったく同じ様にアリサが声をかけ、シユテルたちが反応する。冷や汗は増えていた。

「さて……まずはディアーチエ」

「う、うむ」

名前を呼ばれたディアーチエがビシツと背筋を伸ばす。

「さること数日前ねえ。アンタ達三人がああ馬鹿から勅命受けてミッド行ったわけよね」

「そ、そうだな」

「それで、向こう連中の動きに乗じてアンタははやてにちよつかいかけに行つたわけよね？ 知ってもらうために」

「……うむ」

数日前のことだった。

今アリスの言った通り、黒田卓首領である彼からの勅命を以て、シユテル、レヴィ、ディアーチエの三騎士はミッドチルダへと赴き、なのはやフェイト、はやてと戦闘を行つた。いや、戦闘などと言えるようなものではなかつただろう。彼女たち三人は聖遺物の使徒として、創造位階の三騎士としての力の一端を振つた。勿論それは全力とは程遠い力であつたが、それでも今の所ただの人間であるのはたちを相手にするには十分すぎるどころか過剰過ぎる力だ。実際戦つた三人は傷一つなかつた。

「そ・れ・で？　成果は？」

「……えつと、その、それは、の？」

「はい正直に」

「——なにもできんかつた」

「よろしい」

ディアーチエの場合。

最初は順調だつた。はやてにダメージを少しずつ与え、彼女の魂を浮き彫りにしかけて、

「しかけて、そこまでだつたわけね」

「うむ……」

ダメージを与えて、八神はやてという存在にほころびを生じさせ、伝えるべきことを

伝えなければならなかった。

なのに、伝えなかった。

「……私の不手際としか言いようがない」

感傷的になった。八神はやてが彼の愛を疑ったことを許せなかった。大局を見据えればあそこで感情のままに動くべきではなかったのだ。それでも、思わず逆上し創造を使い叩き潰した。

それはデИАーチエとして、黒円卓の騎士としてはあるまじき失態だった。

「……ま、わかっているならいいわよ。感傷的という意味なら問題はシユテル、アンタの方だしね?」

「……はい」

シユテルが静かに答える。顔が青いのも冷や汗も消えたわけではないが、それでも視線から震えは消える。

「私も王と同様です。感情的になり、やりすぎました。彼の制止がなければ……殺していたかもしれません」

いや、殺気だけなら全開だった。デИАーチエ以上に感情に任せて魔導を振った。

帰帰しかけた彼女に創造を使い、感情の赴くままに滅却の炎を放った。なのはの、いや彼女の影を焼きつくし、焦がし、消し去った。

「ま、回帰させたつて事考えれば役目は果たしたけどね。それでも限度がある」
「は、い」

勿論。アリサたちは解つてる。

例え、どれだけ殺意と殺気を、全身と全霊を以ても彼女たちは死なない。死ぬことは出来ない。万に一つの奇跡が起こり、九死に一生を得て、起死回生を以て切りぬける。こういう風にできているのがこの世界だ。

それでも、心構えの問題だ。

どうせ死なないから好きにやってもいいなんて事はあつてはならないし、赦される事は無い。だから足りなかつたのなら反省して、自らを戒める必要がある。けじめ、といえは解りやすいだろう。

「反省してる?」

「うむ」

「は、い」

「よし」

じゃあ、

「お茶にしましょうか」

「大変だねえ、先輩役は」

「こら同い年。アンタも仕事しなさいよ」

「アリサちゃんは怒る役。私は甘やかす役。親友同士、役割分担、完璧ッ」

「私に汚れ役押し付けてるだけじゃないー!」

「あははははは!」

「笑ってんじゃないわよ!」

アリサがさすがの胸倉を掴みながら前後に思いきり振るがさすがは笑みのままだつた。今のアリサでも常人なら即ブラックアウトが起きてもおかしくないが、ここらへんは素の状態でも身体能力が矢鱈滅多らに高い夜の一族である所以である。

シユテル達には年長者として振る舞うが、さすがが相手ではむしろアリサはいじられる方だった。

「はあ……王で在りながら情けない」

「ははっ、気にすんよ王様!」

「ええ、そうですよ王よ。むしろ失敗の罰を理由にして彼にお仕置きという名の耽美な時間を……」

「反省しろ！」

「あいたっ」

すずかから手を離れたアリサがどこからともなく取りだしたハリセンでシュテルの頭を叩く。

魔導とか関係ないツツコミスキルであった。貴重であった。

先ほどの反省会の時のシリアスな空気はすでに霧散していた。はじめとして行ったもの、基本的には彼女たちは中がいいのだ。仲良しグループと言っても、ある意味では正しい。

「おや、反省会は終わったのか？」

「おつかれさまですー」

談話室の扉が開き、シスター服の女性と少女が入ってくる。

銀髪赤眼の女だった。アンダーフレームの黒のメガネに起伏に富んだ体型の女だ。

もう一人は金髪金眼の少女。女性ほどではないがディアーチエやシュテルよりも胸の膨らみは大きい。

女性はクッキーやビスケットの入った新しいバケットを抱えていた。かぐわしい香りがあり、焼き立てであることがうかがえる。少女はお盆にポットや人数分のカップが載っていた。

「おお、来たか」

「遅かったですね」

「いい匂いだー！ 美味しそー」

「ああ、もう涎拭きなさいよレヴィ」

「あはは、まあ見ての通り終わってるから。お茶にしよう？ ——アインス、ユーリ」

「ええ」

「はいー！」

祝福の風——リインフォース・アインスと碎け得ぬ闇——ユーリ・エーベルヴァインの二人は笑みを浮かべて頷いた。



「これ、薔薇のお茶なんですよ。桃子さんに貰ったんで、淹れてみました」

「おお、これはいい香りだな。礼を言うぞユーリ」

「えへへ」

薔薇の香りを漂わるティーポットで人数分のカップにお茶を入れるユーリが褒められて頬を染めながらはにかむ。それでも当然視線は手元に。ここで零しては話になら

ないし、彼女自身そういうことがないわけではないと解っていた。少しドジな少女であつたのだ。

そして芳しい香りを漂わせるのはアインスが抱えていたバケツトの中のクッキーやビスケットだ。焼き立てのいい香りが残っており、手に取ればほのかに温かい。

「これもクロハネが作ったのー？」

「ああそうだよ。お前たちが反省会すると言っていたからな。気分転換と思つて、な」
「ありがとうございます、アインス」

「気にするな。料理と子供の世話以外やることがないのだから」

レヴィが一人でほとんど食べてほぼ空になつていたスナック菓子のバケツトの残りを自分が持つてきたのに加えて、バケツトを重ねる。

アインスとユーリは主にこの教会兼孤児院で子供たちの世話が日々の役目だった。もつともユーリは普段はシュテルたちと共に学校に行つてゐるし、シュテルたちやアリスにすずかもまた子供たちの世話をしている。それでも黒円卓としてミッドや管理外世界に赴くことの多い彼女達に対して、二人はここを動くことは無い。

戦鬪行為は二人の役目ではないのだ。

だからこの二人は表向きは教会のシスター兼孤児院職員とシスター見習いとして海鳴の街に溶け込んでいた。アインスなどは忍や美由紀たちと仲がいい。すでに五年近

い仲だ。勿論アインス自身が気を付けているが、忍も美由紀もまさかアインスが消滅したはずの八神はやての融合器であるなんて想像がつくはずもなく。普通に友人として接していた。外国人が多い海鳴ならではだし、彼女たちはここ数年海鳴に帰ってくるのは数えるほどしかなく、だから存在が知られるようなこともなかった。

ふと、さすががドアへと視線を向けた。

「ん？ なんか外……」

うるさくない？ と彼女は口に出そうとして。

「だーかーら！ なんてがそういうことというわけ!! ……ええ、悪いわよ！ というか気持ち悪い！ ほんと、やめてよ？ マジで？ 嫌よ？ 私あなたのこと弟なんて呼びたく………ホントに？ 大丈夫よね？ ……ええならいいのよ。……ああ、解ったから。スバルにはちゃんと連絡入れるから。……はいはい、じゃあね……」

入って来たのはギンガだった。彼女も私服で、シンプルな長そでのシャツにジーンズ。ギンガらしく活動的な格好だったが、

「ああ……」

かなりぐったりしていた。というより、精神的に疲れているように見えた。

「だ、大丈夫ですか？」

「ああ、ありがとユーリ……」

駆け寄ったユーリがギンガの手を取りなが空いていた椅子へと先導する。椅子に付いて、お茶を貰ってもその様子に変わりなく、机に突つ伏す。

「どうしたのだ、ギンガよ。なにやら騒がしかったようだが……」

「……それが、ね」

ギンガは伏せた顔を上げながら、他の者は彼女の言葉を待ち、一人電話の向こうの様子が完全に聞き取れていたはずかは苦笑し、

「どこぞのチンピラがウチの妹にフラグ立ててると言うか、惚れてる……っぼいんだけど……」

即座に全員が視線を逸らした。

「……義姉とか呼ばれたくない……」

ギンガ・ナカジマ。

実に切実な願いだった。

第三十二章 見上げた先

『空つて遠いなあ』

初めてそう思ったのはいつのころだろう。

昔から高町なのはは取り柄のない子供だった。家族は御神流とかいうどう見ても人間から外れているようにしか見えないふざけた剣法の使い手で父も兄も姉も日々剣の道にて歩んでいた。彼女自身まったくそれらに触れなかったわけではない。幼いころ、父たちと一緒に木刀を振り回したことは何度かあったのを覚えている。と言つても、幼いころの運動神経は酷いもので歩けば転ぶ、木刀を振るえばすっぽ抜ける。その後の鍛錬次第によつては改善されたのかもしれないがそんな機会はなかった。父、高町士郎がボデイガードの職務中、爆破に巻き込まれて重体を負つたから。

それは最早語られていることであり、周知の事実であろう。それにより始まつた孤独と劣等感。いい子でいることへの強迫観念。なにもかもが届かない己の手のひら。一度折れた翼。周囲への浅ましい羨望。それがかつてから今に至る高町なのはの全て――というわけでもなかった。

憧れた、嫉妬した、足を引きたくなつた。そんな中、どうしようもない醜い感情に走つ

たとき、彼女は決まって空を見上げていた。

真つ青な空を。

『飛んでみたいなあ』

魔法を知らなかった時も、不可能であると解つていても願わずにはいられなかった。公園とか、家族の繋がりを見せつけられる場所は嫌いだったから、一人で当てもなくさまよつて港まで行き着いて、意味もなく絶叫したことだつてある。

そのころから燻っていた。

『もつと、飛びたいなあ』

彼にであつて魔法を覚えた。そして実際に空を飛んで魅せられた。その想いは強くなつていくばかりだった。その蒼い空をいつまでも飛翔し続けたいといつだつて思っていた。

『空が似合うつて、言つてくれたから』

好きな男の子がそう言つてくれた。自分の好きなことをしている姿が似合うつて。恥ずかしくて口に出すのは難しいけれど、凄く嬉しかった。その言葉はなののがなによりも欲しかった言葉の一つだったのだから。

『飛びたい。どこまでも』

子供染みた夢だ。他人に言つたらもう飛んでいるだろ、つて突つ込まれるに違いな

い。むしろそう願って、実現できた分だけ、自分は恵まれているのだらうと思う。魔法という力が泣ければ人間に空を飛ぶのは不可能なのだから。

『でも……私は』

魔法という力を得てもその想いは消えなかった。一度墮ちても諦められなくて、仲間たちに嫉妬するくらいに。

『私は綺麗なものが好きだったのよね』

そういうことだ。空は綺麗だから。

だから、

『私は手を伸ばした』

届かなくても、それでも手を伸ばしたのだ。

ずっと昔から、そういう風に彼女は出来ていたのだ。

*

「ん……」

目を開けたそこは自分が入院している病院の中庭だった。

夢を見ていた気がする。よく覚えていないけど。昔の夢か、それとも益体の無い夢か

は覚えていないけれど、夢なんていうのは大体そういうものだから気にしない。寧ろよく覚えていない分、いい夢を見たと思っておくのが吉というものだろう。

「ふわあ……」

あくびをかみ殺す。

入院中の身で、教導も戦闘訓練もできない身としては特にやることはない。体に負担を掛けることはシャマルに全て禁止されている。テレビを見る気分でもないし、本を読むのもあまり趣味ではない。同室のフェイトとも少し喋る気になれない。それは彼女も同じだった。

だから結果として散歩するしかない。

病室用の寝間着にカーディガンという人目に付くのはどうかと思う恰好だが、幸い病院だからこういう服装でも違和感はない。それでも正直十九にもなってピンク色のパジャマというのはどうかと思うが、イメーヅカラーというのは仕方ない。買い物に行ってもフェイトもはやてもそういう色ばかり進めてくるのがいけないのだ。代わりフェイトにはやたら露出の多い下着もどきだったり、はやてにはたぬきの着ぐるみっぽいパジャマとか押し付けるけど。

カーディガンは茶色系だから問題ないだろう。

お嫁に行けない恰好というわけでもないし、お嫁の貰い手なんて一人しか考えていな

い。

「……」

結局そこに行き着くのだ。

彼はいつたいい何を考えているのか。自分たち誰も考え、しかし答えの出ない問い。口に出すことはないけれど、皆一様に戸惑いながら考えている。

彼が自分たちの敵であるなんて思っていない。

確かにシユテルたちは自分たちに立ち塞がったが、彼女たちは単なる敵味方という区別で測れないということは明白だ。直接対峙したからこそ分かる。

そういう次元ではない。

どういう次元か問われれば困るけど。

「あの」

「……？」

出口の見えない思考を働かしていたら声をかけられた。なんとなく聞き覚えのあるその声は、

「あ、君は……」

「こっつ、^{オッドアイ}こんにち、わ」

金髪に緑目赤目、五、六歳程度の幼女。自分と同じような寝間着のような恰好。先日

の一件でキャロが発見し、保護した彼女。人造魔導士らしいが、魔力量も平均を少し上回る程度で行き場もなくしてこの病院に保護されていたはず。

「こんにちは。はじめまして、だね」

とりあえず声をかける。いくら弱つていてもこれくらいは大人の余裕だ。社会人としての常識である。いやまあ中卒ですけど。

「高町なのは、だよ。……お名前を聞いてもいいかな？」

「あ……ヴィヴィ、オです」

「そっかよろしくね」

「はい……」

会話が途切れた。

この子などで自分に話しかけてきたのか激しく疑問だったが、それでも大人の余裕を総動員して、

「……とりあえず座る？ お話しよっか？」

「は、はい」



眼下にて、ぎこちないながらも話し始めるのはとヴィヴィオをカイトは例によってタバコをふかしながら眺めていた。病院の中庭が見ることのできる屋上だ。

「仲良きことは美しき哉……つてな」

彼にしては珍しい皮肉や茶化し抜き言葉だった。

はたから見れば姉妹にも親子にも見える二人に彼なりに思うことがあるのだろう。フェンスにもたれかかって、特に何かするわけでもなく眺めている。

ただ会話が進むにつれて少しずつ打ち解け合う二人に視線を送るだけのカイトに、

「何の用だよ、ティアアナ」

「……」

背後からティアアナがクロスミラージュの銃口をカイトの後頭部に突き付けながら現れた。

一目見て体調がすぐれないのが解った。

頬は痩せこけ、肌や髪に艶は張りもない。目の下には濃い隈すらもある。簡素な寝間着から伸びる手首もやせ細るとは言いすぎにしてもやつれているのは確かだった。今こうして銃を構えて立っただけでも全身は重く気だるい。

それでも、その瞳だけはギラリと輝いていた。

「……物騒なのどけろよ。あぶねえだろが、怪我するぜ？」

「……」

「つかお前何時目覚めんだよ。俺のどこ来ないでシャマル先生なり、スバルなりに会いに行つてやれよ心配してたぜ？」

「うるさい黙れ」

ティアナはカイトの銃口に付き合うことはせずに銃口を押し付けを強める。

「……なんなのよ、一体」

「なにがだよ」

「っ、そんなの……！」

奥歯が噛み砕かれぬほどの歯ぎしり共に吐き出されるのは絶叫染みた問いかけだ。

「なんで、兄さんがあんな風に……！」

言うまでもなく。今の彼女の問いかけがそれ以外にあるわけもない。カイトだつて解つていた。それでもあえて問い返したんのは、

「なんで生きてるか、か？ ……それともなんであんなのに、か？」

「……っ」

押し付けられた銃口が揺らぐ。

凶星だった。

カイトの言う通り、なぜティアナの兄ティード・ランスターは生きているのか。そし

てなぜあんな様になってしまったのか。そういう意味の問いだ。死んだはずの兄が生きていて、さらにはふぎけた魔人になって妹である自分に銃口を向けた。なんだそれは意味が解らない。あの時はなにかも放棄して駆け寄ったが、冷静なればおかしい。

死んだ人間が帰ってくるわけがないのだ。

なのに、確かにティイダ・ランスターは存在していた。

「……」

ガリツと、奥歯が砕けた。

行き場のない激情が全身を駆け巡り、引き金に掛けた指に力が入って、

「……お前さ、」

「なによ」

「——悪い夢でも見たか？」

「……」

思わず引き金を引いていた。

クロスミラーージュのカートリッジから魔力が放出されて、銃身内で魔力弾を形成。半ば条件反射でティアナの脳内で魔力処理の演算が行われ、射出し、

「ホントに撃つかよー！」

直前で回避行動をとったカイトの頬を掠めて外れて霧散していった。

「痛ってなあおい」

カイトを傷つけるのは永劫破壊エイグイヒカイトがなければ不可能だ。霊的装甲。これがある限り、それ相応の量か質の魂を内包した攻撃でなければ天地がひっくり返してもありえない。それはどうしようもなくひっくり返すことのできない絶対法則だ。今のカイトは活動すら発動しておらず、その特異性を発揮していないが永劫破壊保有者としての無敵性は保持している。

「あ……」

だからこそ、カイトの頬に傷がついたのはそういうことである。

「やれやれ……」

振り返った先には自分が為した結果に茫然として腰を抜かしていたティアナ。

「大丈夫かよお前」

「う、うっさい」

立ち上がる。

「……なによこれ」

「自覚したか？」

「……」

ティアナは答えない。ただ自分の手のひらを見つめ、

「なによこれ」

もう一度同じことを言う。その要素をいつも通りの軽薄な笑みを浮かべたカイトが新しいタバコに火をつけながら、

「人外の仲間入りの証だよ」

「……」

露骨に嫌そうに顔をしかめる。

そして、

「……悪夢？ そんなもんじゃないでしょ、あんなの」

「はっ、違うない」

ティアナは膝を抱えてうつむき、カイトはタバコをふかしながら空を見上げる。

「意味が解らない……何もかも、全部」

「俺だってそんな変わんねえよ。全部理解している奴なんて……まあいることはいるだろうけど俺らとは別格だ。考えるだけ無駄だぜ」

「……それで、コレも説明は？」

「とりあえず解ることあるだろ」

「……」

言われて立ち上がったティアナの姿はそれまでと一変していた。先ほどまではまさ

しく病人染みた姿だったが、最早そんな名残りはない。血色はよくなり、肌や髪の毛の艶張りも戻っている。全身にあつた気だるさも消えている。

有体に言つてベストコンディションだった。

「……いろいろ馬鹿にしてるわね」

「いやお前さん理解よすぎだぜ」

健康状態の調整等はオートだがそれにしたつて即座の変化だった。自動ではなく
マニュアル任意によるものだ。自覚して数瞬後にこれは色々とおかしい。

「兄さんもこんな体つてわけ？」

「厳密に言えば違うだろうが、大体一緒だな」

「そう」

数度手のひらを握つたり開いたりして、感触を確かめる。なるほどこれは人外物だと
 ティアナは理解する。成り立ての自分でさえ知覚範囲が病院を完全に覆っている。

「一つ……二つ……うん。それくらいならいけそうね」

「……ま、使えることに越したことないけどよ」

カイトですら軽く引く理解力だ。こんな凡人がいるわけがない。何が悪いってティ
 アナ自身自らの理解の早さに気付いていないことだろう。なのはたちのように才能が
 特化していないだけで、優秀さというならば彼女が頭飛びぬけているだろう。これで全

方面に鍛え上げられたら正直ゾツとする。

「一つだけ答えなさい」

「なんだ？」

「兄さんは私の担当って言ったわ。それって」

「俺らのオーディションの試験官ってことだよ。神様の舞台上に上がる資格があるかどうかのな。エリオならあのおっさん、なのはさんたちはシュテルたち。お前は兄貴ってことだよ」

「……そう」

納得したわけではない。それでも今ここでカイトに問いだしても求める答えがないのは解った。知りたいことはたくさんあるけど、だからこそ次に戦場で兄に相見えた時に直接問いかければいいのか。

「ちなみに」

「あん？」

「あんたの試験官とやらは誰なのよ」

「ああ」

軽く笑って、加えていたタバコをもみ消しながらカイトは言う。

「地獄の魔王さまだよ」

第三十三章 迷いのそれから

地上本部における公開意見陳述会が間近に迫っていた。

地上本部のレジアス・ゲイズ中將が主導の非魔法戦力、つまりは質量兵器を用いた地上防衛を主題にした意見交換の場だ。基本的に管理局は質量兵器は全面的に禁止しているが、それでもミッド地上の人手不足の問題は深刻だった。基本的に魔法適正の高い魔導士は本局勤務になることが多いので地上本部では質と量のどちらもが足りない。

だからこそそのレジアス中將の計画だった。

質量兵器とは即ち科学の力だ。つまりそれは誰にでも、ある程度の修練を積み重ねる程度の成果を発揮できるということだ。確かに彼の姿勢そのものは強硬的であり、悪い目で見られたりよくない噂を立てられたりすることも多かった。

それでも彼の考え自体は間違いではない。それは意見会が開催されることから考えても相違ないだろう。

意見会に機動六課が警備を任されることを考えてもそういうことなのだろう。

まあ今、その機動六課の隊長陣は全員が療養中なのだが。

だから最早それまでの教導は行われていなかった。教導官のなのはや資格のない

フェイトはおらず、副隊長陣は部隊長のいない今の状況では他の部署との連携で忙しい。

だからフオワードメンバー四人への教導行為は行われておらず、

「ハッハー！」

「ゼアツ！」

「シッ！」

「——」

カイト、エリオ、ティアナ、スバルによる模擬戦が最近の常になっていた。

いや、これは模擬戦なんて甘いものではない。

殺し合いだ。

カイトが笑いながら銃剣を振るう。エリオが雷光となって駆け抜ける。ティアナの銃口が火を噴く。スバルの拳撃がぶち込まれる。それらは当然のように非殺傷指定は解除され、内包された魔力から考えれば直撃すれば死ぬのは間違いない。あらゆる攻撃防衛を無効化する銃剣。音をはるかに置き去りにした閃光。臨機応変に姿を変える光弾。ぞつとするほど冷静な打撃。どれをとつても既存の魔導を超越しており、新人なんと言葉は最早彼方へと消え去っている。高ランクの魔導士だって数秒と生きていられないだろう。

見ているだけで頭がおかしくなりそうな光景だった。

笑いながら銃剣や鎖を振るうカイトは今更だ。こんな状況でありながら笑みを絶やさず、余裕を残したまままで立ち回っている。エリオも最早言うまでもない。全身に雷光を宿し、どんな加速魔法を使うよりも早い。周囲に衝撃波をまき散らしながら疾走する姿は文字通りの閃光だった。

明らかに人外の類。

そしてスバルもまた。

これまで彼女に目立った変化はなかった。誰かが思う度に気のせいかと思ひ直し目に止まらなかつた彼女の変化が如実に現れていた。きつかけは先日的一件で魔弾を迎撃したあの瞬間。あの時動き出した歯車は止まることなく彼女を作り替えていく。ただ会話するだけならこれまで通りの天真爛漫な笑顔の似合う女の子だ。それでもふとした瞬間や、今のような戦闘に於いては、

「――」

機械のように静かに、眼を鋭く細めて拳を振るう。それまでの激しい動きとは対照的にマツハキヤリバーやウイングロードを使わずに、四人の中では遅いといつてもいいほどの速度。しかし代わりに近接における格闘技能は極めて高かった。疾走するエリオをとらえ、カイトすら回避を余儀なくさせる驚異的な武威。拳を振るうごとに彼女のそ

れは高まっていく。

そしてだからこそ、ティアナの存在の特異さが浮き彫りになっていた。

カイトほどトリッキーではない。エリオほどの速度があるわけでもない。スバルのような一撃があるわけでもない。どの能力値を数字化してもどれかで誰かに劣っている。

それにも関わらず彼女は堕ちない。

その場その場で最適の行動を取って敗北から遠ざかっていく。カイトを前にすれば破壊力を重視した弾丸で足場や周囲の建物を破壊して行動を阻害し、エリオに対しては数撃てば当たると言わんばかりに数重視の弾丸をばらまき、スバルには彼女の拳に迎撃された時に魔力弾を炸裂させることで時間を稼いで距離を取る。

一体この前まで凡人だとかほざいていた彼女はどこにいったのだろうか。

凡人という言葉を一度無間書庫あたりで研究してほしいものだ。
詰まる所、彼ら四人は人間を止めていたのだった。



「はあ……」

そんな人外連中を眺めながら、ぼんやりとキャロはため息を吐いていた。演習場から隊舎の中ほどに置かれたベンチで。遠く元模擬戦用フィールド現お試し戦場とつかえ装置を眺めながらだ。

今の彼女にはそれくらいしかすることがない。これまでエリオとカイトで行われていたことがティアナとスバルも参加することになって完全やるものがなくなっていた。なにせ、どれだけ傷を負っても勝手に回復していく。やることがあるわけがない。回復要因なんて必要ないのだ。

「なんだかなあ……」

眼下で行われる殺し合いを平然と眺めている自分がいる。慣れとかそういう話じゃなくてこんなものを、

心のどこかでこの光景が至極まっとうであると感じているのだ。

「……………」

思わず体を抱きしめる。闘争への嫌悪感と恐怖。そして——ほんのわずかに混じる高揚感。あの空間に飛び込んで己も死なないという不確かな自信がある。おかしい、そんなはずがない。キャロは肉体面でいえば六課でもほぼ最弱だ。完全遠距離特化や広範囲殲滅に長けたなのはやはやては槍術や杖術による近接戦闘スキルも収めているらしいが、キャロは今だにそこまで言っていない。それでも。漠然と生き残る自信ある。

あつてしまう。少なくともエリオと二人であるなら負けはないし、むしろ他の三人すらも打倒できそうだというか想いもある。

気持ち悪い。

反吐が出るというのはこういうことなのかキャロは理解する。

根拠のない自信というものがここまで不愉快だとはキャロは知らなかった。

どうにも気分が悪い。

だから、少しでも気を紛らわせるために空を見上げて、

「はあい」

「うわあー！」

「うひゃ!？」

上げた先にシャマルの顔があつた。

驚いて叫んで、シャマルも叫んで。

「ちよ、驚かせないでくださいよ」

「ご、ごめんね。シャマル先生もびっくりだわ……。うん、ごめんねー。あ、はいこれ差し入れ」

「……ありがとうございます」

半目を向けたら缶ジュースを差し出された。このドジっ子系先生はともかくジュー

スに罪はないから受け取っておく。プルタブを開けて冷たい液体を喉に流し込んで初めて自分の喉が乾いていたのに気付く。半分ほどを一気に流し込みんで、

「ふう」

少しだけ悪かった気分が治ったと感じる。

それでも、視線を彼らに戻せばまた気分が悪くなるのだけど。

「キャラはやっぱり、ああいうの嫌い？」

「……それはまあ」

言うまでもない。言うまでもないのにほんのわずかに言いよどむ自分に愕然とする。

「そう」

それに気づいたのか気づかなかったのかシャルマルはキャラの隣に座る。

それから彼女自身も今行われている殺し合いを視界に入れて、

「私としてはどうしても懐かしい、なんて思っちゃうのよね」

そんなことを言う。

「……」

もちろんキャラは闇の書の守護騎士であった『叢雲の騎士《ヴォルケンリッター》』の経緯はある程度は知っている。八神はやてが彼女の主になって夜天の王として覚醒するまで、誇り高き守護騎士たちが誇りなき、どころか血も涙もない殺戮マシンのよう

な、言ってしまうえば闇の書の為に魔力を集める殺人集団であったということ。はやてが主の間は不殺を誓いリンカーコアから魔力を蒐集していただけだが、無限書庫や管理局の記録を漁れば『闇の書の守護騎士』の被害が残されている。

だからその感想はそれほど意外でもなかった。

「ねえキャロ」

「はい」

「なんで私が医者とかやってると思う？」

「……えっと」

唐突な問いだったけど、それでも眼前に広がる光景から目をそらすために丁度いい思考だった。

医者。医療。医術。それは即ち誰かの傷や病を治すことだ。戦闘行為をともなく武装局員も言うまでもなく、日常生活を送るのにも必要不可欠な立場だ。目の前に医者要らずな連中がいるとはいえ、アレらは例外だろう。

ともあれ医者という役割になる理由で真っ先に思いつくのは、

「誰かのためになりたいとか、誰かの病気を治したい、じゃないんですか？」

「それもないこともないけどね。違うわ」

キャロの答えに苦笑して、

「……罪滅ぼし、なのよね」

そんなことを言う。

思わずキヤロは息をのみ、シャマルは苦笑を崩さず、視線を遠くへと飛ばして、
「私たちはまあ、許されない、許されちゃいけないことをたくさんしてきたからね。過ぎ
去った過去はどうしたって変わることはない、これからなにをしても、なにを思っても、
ね」

「……」

キヤロは何も言えない。身長差でシャマルの顔は見えなくて、まだ十歳のキヤロには
想像すらできなかった。

「私はあんまり割り切れないからね。シグナムは騎士であることをなによりも誇りに
思ってるし、ヴィータちゃんはずっと自虐的過ぎるけど今を守るために必死だし、ザ
フィーラなんかはかなり極端だし。私の仲間たちはなにむかしから闇といま夜天で区切りをつ
けるのよね」

でも、

「私はどうにもいろいろ考えちゃうのよ」

どうすれば背負った罪が軽くなるのかを。

無論、先に言ったようにそんな方法はない。過去は、起こってしまったことはどうし

ようもないのだから。それはシャマルの理性だつてよくわかっている。それでも彼女の感情はそう割り切れなかったのだろう。

だからこそ、

「医者になつて誰かを救えればとか、思つたことがないなんて言つたら嘘になるわよね……ようは偽善者なのよ」

嘘でないどころか、そういうことをシャマルはよく考えるのだろう。考えて、考えて、罪滅ぼしのように彼女は医者という立場にあるのだ。

それが悪いことなのかいいことなのか、聞いているだけのキャロには解らない。それでも、

「……それでも、シャマル先生が助けた人がいるのは本当だと思います」

「……ありがとう」

二人でジューズの残りを流し込む。

「それで、どういう話なんですか？」

「う、えつとね？」

ただの暴露話だつたら恥ずかしすぎる。葛藤そのものは尊い物だとしてもタイミングがタイミングでカイトあたりに聞かれていたらネタにされることは間違いない。

「まあ、あれよ。シャマル先生みたいな大人でもいろいろ迷つてるんだから、キャロみた

いな女の子は子供らしく、ものすつーい迷っていいってこと」

「……」

「あ、あれ？　ここは感動してシャマル先生で尊敬の抱擁に行くところだと思っただけど……」

「……その言葉がなかったら尊敬の抱擁でしたね」

「あつれー!？」

何がいけなかったんだろうと頭を抱えるシャマルは置いておいて。

「迷ってもいい、か」

どうにも自分には難しい話だ。でもそれも当然だろう。自分はまだ十歳で、碌に世界も知らないのだから。これから知っていこうと思っただけから。よくわからないけど、わくわくならないまま抱えて、いつか答えを出せればいいのだ。カイトもエリオも、多分スバルやティアナも。もう迷わない答えを得ているのだろう。シグナムやヴィータやザフィーラも。

だつたら自分は迷おう。迷いながら進もう。

そうすればきつと、

——もう、自分の祈りを気づかないなんてことはないのだから。

第三十四章 開幕の宣言

公開意見陳述会はクラナガンの地上本部で行われる。

高層ビルが並ぶクラナガン中心部でも一際高くそびえ立つビルだ。周囲には管理局と提携している企業やそれに務める社員の寮や飲食店が並んでおり、そのさらに外周部には住宅街も広がっている。街の随所には市民の憩いの場として、緑多い公園なども多い。質量兵器を全面的に禁止、クリーンな力と謳っている分、地球の都市部よりも自然は多い。

普段ならば地上本部ごく周辺でなければ次元世界の中心としてそれ相応に賑わっている辺りだ。

それでも今日は訳が違った。

地上本部周辺は言うまでもなく周辺数キロ単位で地上本部所属の武装局員たちによつて厳重に警備されていた。魔力稼働の装甲車や武装ヘリが随所に多数配備されている。

そしてそれらは機動六課とて例外ではなかった。寧ろ少数精鋭の彼女たちこそが本命である。少くない費用と豊富な人材によつて作られたのだから、このような有事の

際に重要視されているのは当然だ。Sランクオーバーの隊長陣が負傷中だとしてもニアSランクの副隊長陣や急成長の著しい新人たちの存在は大きい。

警備に配置されている多くの武装局員たちは彼女たちの存在を大きく頼りにしていた。していた、が。

「そんなことは全部忘れろ。てめえのことだけ考えろ」

「ちよ、ヴィータ副隊長そういうことは小さい声でっ」

地上本部武装局員からの信頼を集める一角、機動六課副隊長八神ヴィータは自分の前に整列する成長著しい新人四人に向けてそう言った。

「ああ？　気にすんなよ。いいんだって」

「よくない、よくないですから！　ほら、なんか近くの局員の人たちがすごい目で見てますから！」

ティアナが周囲へと愛想笑い浮かべてごまかす。ついでにエリオたちに視線を送るも、

「いえ、僕は元から自分とキャロのことしか考えてません」

「エリオ君……！」

思わず唾を吐きたくなったティアナは悪くない。このリア充め。十歳の癖にこれだ。自分は十六にもなつて碌に出会いもないというのに。先が思いやられる。とりあえず

爆発しろと願おう。いやよく考えればティアナの周囲は色ボケばかりだけど。

「そういえばカイトはいないのかなあ？」

「ペツ」

思いつきり唾を吐いた。

「ちよ、汚いよティアア！」

「いいわよねーアンタたちは。あつちでいちゃいちゃ、こつちでいちゃいちゃ。どつち向いても色ボケばつかで嫌になるわよホントにさあ」

「お前最近柄悪いな……」

最近ろくなことがないのだからしょうがない。結構本気で思う。

「あーともあれだ。いいか？ 今回は、というか今回も、絶対何かある。何もなんてとぼけたことまさか思っちゃいねえだろうな？」

問いかけに全員が緊張をはらんで頷く。

言うまでもない。この期に及んで今回のようなイベントに何も起きないんてはずがないのだ。海鳴でアグスタで廃都市で、それぞれ馬鹿みたいな配役と絶望と希望入り混じった喜劇染みた進行だったのだ。疑うまでもなく裏で糸を引いている存在がいる。ソレがどういふ存在なのかは理解できなくとも、存在していることは明白だ。

だから今日のようなイベント事にそれが何もしないわけがない。

「なのに、困ったことにアタシは万全じゃあない。万全だったとしてもどうにかなるかって聞かれたら困るけどまあ、それは仕方ねえ。とにかくアタシたち六課は人員不足ってことだ」

ヴィータは努めて無表情で、しかし心の内面では言い難い感情を潜ませながら、

「はやて部隊長はなんとか歩けるくらいには回復して、今日の陳述会には出席してる。シグナム副隊長はその護衛だ。はやて部隊長も回復したとはいえ歩行でやっと、戦闘はもちろん激しい行動は厳禁だ。だからシグナム副隊長ははやて部隊長に付きつきりになる。ついでに中の要人警護も担当。ここまではいいな？」

四人とも頷く。既に数日前から聞かされていることであり、今のこれは確認作業なのだから戸惑われては困る。

「六課の守備はザフィーラとシャマルに任せてる。つーわけで外の私等は外敵の迎撃なわけだが……」

一息入れる。

「連中が来た場合についてだ」

ここからが本番。

連中とは即ち、黒田卓やナハトたちのような魔人たちのこと。今のヴィータたちの実力をはるかに上回る魔人たち。まともに戦えば勝つことどころか生き残ることさえも

困難。

なのだが、

今回は黒円卓の騎士たちが介入するとは誰も思っていなかった。

誰に聞いたわけでもなく、誰が言ったわけでもなく、明確な根拠や理由もなく、あつたとしてもそれは気休めや推測程度でしかない。勘、といえばそういうこと。これまで場合に依じて配役されてきた彼女たちだが、今回はその配役がないと感じていた。

あるいは既に知っていたのか。

そういう訳で彼女たちは黒円卓の騎士たちの介入は視野に入れていなかった。

だから視野に入れているのは、

「ヴェルテルさんは僕が」

「兄さんは私がやります。他に渡しません。……ああ、ナハトとかいう黒いのはカイトが相手するつもりらしいです」

「……好きにしろ、どうせ相手取れるのはアタシたちくらいだからな。無茶すんななんて言わないけど、死に行くのはやめろよ」

「はい」

二人が領いたのを確認し、

「あとは……戦闘機人か」

「この前の戦闘でギン姉と交戦した人たちですよね」

戦闘機人、プロジェクトF・A・T・Eのような人造魔導士の派生系であり魔力量ではない先天性スキルの習得をメインにして全身を機械に入れ替えられながら生まれた存在たちだ。

「……そつちも多分来ます」

「だろうな、私だつてそう思う。戦力に関しては未知数だ。数もな。だから最初の話に戻るんだよ」

そう彼女が言いたかったのは、

「てめえのことだけ考えろ」

最初に言ったことをもう一度言う。

「これは局員とか副隊長とか関係ねえ。ヴォルケンリッター、鉄槌の騎士ヴィータからの言葉だ」

いいか、

「躊躇うな。動きを止めるな。考えを止めるな。何するにしたつて、進むか引くか、生死を分けるのはそんなこと所だ。……まあ馬鹿みたいに力量差があつたらどーしようもねえつてのはあるけどそれにしたつて、判断は大事だ。撤退も重要だしな。要は自棄になつて特攻して虫けらみたいに死ぬのはあつちやあいけないって話だ」

そしてなにより、とヴィータは四人へと言う。

「自分にとつての大事なものを間違えるなよ。……私から言えるのはそれだけだ」

かつての闇の書の騎士ヴィータとしての言葉だ。つい最近、命を懸ける程度のことを覚えたエリオたちにはない言葉の重み。機動六課に在籍する中ではそこまでの領域はヴォルケンリッターとカイトの五人しかおらず、他の者には想像すら絶する思考だ。夜の守護騎士として存在する今、かつての記憶は無意識的にロックしていたが、最近はその籠が外れてきている。外すを得なくなってきたのだ。

それだけ今の状況は管理内世界からの常識から外れていた。

そのヴィータの言葉を受け止め四人とも確りと胸に刻む。

そしてヴィータは微妙に照れながら、

「……マジでやばくなったらちゃんとお助け求めろよ？ さつきということ変わるけどお前ら一人じゃねえんだから、さ」

そんなことをいうヴィータに四人は四人とも苦笑して、ティアナが少しだけ意地悪そうに笑って、

「ヴィータ副隊長ってツンデレですね、かわいいです」

「……お前最近カイトに似てきたな」

「……」

「大丈夫ですか主」

「ああ、ええそんなに心配せんでも、歩くくらいなら問題ない」

陳述会が始まる十数分前。はやてとシグナムは管理局や方々の重鎮たちが集う会議室にいた。別にはやての地位がそこまで高いわけでもない。十九歳で二等陸佐というのは破格の地位だがそれでも、各方面の責任者ほどの重要度はない。だから今回彼女がいるのは地上警護の一部隊として一応の提携のためだ。いなくてもいいというのが正直な所。視線はわずかばかり集めるが、それはあくまでも好機の視線や所々にまかれた包帯の下にある傷への同情、そしてかつての闇の書の主への嫌悪感。

まあはやてからすれば慣れたものだ。見世物のような扱いは十年前のほうが酷かった。だからそれらの視線を気にせずにシグナムと時間を潰しながら世間話でもしようかなと思つたら、

「久しぶりね、はやて、シグナム」

「カリム？」

カリム・グラシアがはやてに声をかけてきた。聖王教会に修道服ではなく、管理局の

将校としての衣装だ。彼女もまた今回の公開意見陳述会には聖王教会の代表として出席していたのだが、

「わたしらに話しかけててええん？ 他のお偉いさん方とか」

「いいのよ、そんなのよりも妹分の女の子と久しぶりの会話をする方がずっと有意義だわ」

あけすけにすごいことを言う。今の言葉が周囲の何人かの耳に入って睨まれるがカリムは全く気にせず、

「久しぶりね、はやて、シグナム」

「……はあ、そうやね。ひさしぶりや、カリム」

「お久しぶりです騎士カリム」

根負けしたようにはやてが言っ、シグナムがそれに続く。そんな二人にっこりと笑みを浮かべていた。

「随分大変な目に合ったって聞いたから随分心配したけど、無事そうで何よりよ」

「無事、っていうと嘘やけどな。ここだけの話ポロポロや。……まあそれは話したってどうしようもない」

苦虫を噛み潰したように言うはやてに肩を竦め、カリムも話の内容を変える。

「あの子、ヴィヴィオって言ったからしら。今は六課に？」

「ああうん。なのはちやんとフェイトちゃんに随分懐いたからなあ。二人の退院と一緒に六課にいるで。二人にべったりや。今は……えっと」

「おそらくテストタロツサの検診について行っているのかと。一昨日の高町の時にもついでいったので」

「そうそう、もうえらい元気やで」

「それはよかったわ」

微笑する。つられてはやてにも笑顔が浮かび、シグナムもはやての背後で控えながら口の端に笑みが浮かんでいた。だから、

「彼、一度しか会いに行っていないし。それもなのはさんと会せるように誘導したとか……まったく、不器用にもほどがあるわ。彼、いえ彼女が可哀想よ」

極々小さな声でほんの僅かの憤りを込めたカリムの呟きには気づかなかつた。

「まあいいわ。あ、そろそろ始まるわね。世間話はまた今度ね。じゃ」

「あ、ああうん」

「失礼します」

そうして、ミッドチルダ地上本部公開意見陳述会は始まり、

「——さあ、咎人の宴を始めよう」

ここに罪悪の王が宴の開催を宣言する。

第三十五章 忌避すべき穢れ

「はああああアアツツー！ー！」

「フツー！ー！」

閃光と疾風が中空で交叉する。閃光は槍を構えたエリオであり、疾風は双刃の少女。地面や建造物、さらには大気すらも疾走の足場として駆け巡る。ソニックブームの轟音と衝撃波を周囲にまき散らしながら槍と双刃を激突させる。刃というよりは巨大なブーメラン、三日月型の割碎武装だ。全身にピツタリと張り付くようなボディスーツにヘッドギア。桃色の無表情の速度はエリオとほぼ同速だった。

「おおおおりやあああああああああ!!」

「っ……い！」

大地にては同じような恰好をした赤髪の少女が大地を爆走する。その足にはスバルのマツハキヤリバーと似たようなローラーブレード。魔力によって稼働するその性能を余すことなく発揮し大地を縦横無尽に駆け巡る。疾走によって生み出された超加速。そして放たれる轟脚、つま先が音の壁を容易く粉碎しスバルへと叩き込まれる。スバルが防御をするが、衝撃で吹き飛ばされる。体制を立て直しても、

「おらアッー！」

ローラーブレードを使った追撃の一撃が放たれる。

そしてそれらの激突の間を縫うように橙色と桜色の光弾が飛び交っていた。交叉し合う四つの影の動きを読み切り、邪魔をせず、時に援護する弾丸を放つ射手は、

「クッー」

「はははははは！ 行くっスよー！」

他の二人と同じようなボディスーツに身の丈もあるような大きなプレート型の銃を軽々と振り回しながら魔力弾を放っていた。明らかに精密射撃や細かい動作はできなさそうな愚鈍な形状だが、軽量なのか少女の膂力の問題なのかは解らないが恐ろしいまでに正確な狙撃をしてくる。狙撃だけではなく時に砲撃や周囲に多数展開した魔力弾の一斉射撃など動きのバリエーションが豊富だった。

「くそ、面倒な……！」

「ティアナさん！」

「下がってなさいキャロ！ 前二人のブーストに集中！」

「は、はいー！」

直接戦闘させるには危険なキャロは背後に隠れさせてエリオとスバルの回復と補助に回させる。フリードもいるが、相手が相手だから迂闊に出すことはできない。

思わず舌打ち。

陳述会の開始と共にまさしく順当に彼女たちは現れた。地上本部全体を覆うほどの巨大なAMFと多数のガジェットが建物や他の局員へと襲う中で、彼女たちは一直線にティアナたちへと迫っていた。というよりほかの彼女たちに向かっていた局員は鎧袖一触の如く蹴散らされていたのだ。たまた単純に強いというだけではない。

ティアナもエリオもスバルも。痛みを痛みと認識していた。

「靈的装甲とか言ってたわね」

通常の攻撃、正確には靈的な質を用いない一切の攻撃を遮断する『永劫破壊』^{エイウイヒカイト}とかいうとんでも術法の恩恵の一つとやら。それがあるかぎりたどえSランクの魔導士や騎士の攻撃も通じないという卑怯振り。にも関わらず痛みがある。つまりそれは彼女たちには『永劫破壊』^{エイウイヒカイト}かそれに近い何かがあるということだ。

少なくともかつての自分たちでは為す術もなく殺されていただろう。物理的な破壊力だけならSランク魔導士だって優に超えているのだから。

『……ナ、……テ……アナ！』

「っ！」

『ティアナ返事しろ！』

『ヴィータ副隊長！ ティアナです！』

念話だ。AMFの発動で先ほどからヴィータへと交信していたが、ようやく向こうから連絡が来た。赤髪の少女がスバルへと撃った光弾を撃ち落としながら、

『よし、報告』

『現在戦闘機人三人と交戦中、近接二、射撃一です』

『どうだ？』

『予想通りです』

『そうかよ、……つとお』

一瞬だけ念話が途切れた。

『ヴィータ副隊長？』

『わりい、こつちも戦闘中だ。戦闘機人二人、どつちも近接型と中距離型だ。めんどくせえ』

『こつちも大概ですよ……つと！』

途中からは口に出して、エリオとスバルが同時に後退した瞬間を狙って飽和射撃。威力と数重視、碌に狙いをつけていない連射。空いた空間を埋めるように、近接型の二人の少女へと迫るが迎撃される。

『おーい大丈夫か？』

『ええ、まあ。ヴィータ副隊長こそそのんきに念話していいんですか？』

『あほ、マルチタスクなめんな。お前らとは年期がちげえよ。つて、そうじゃね。戦況はどうだよ』

『五十歩百歩というか千日手というか……拮抗してますね。こつちもあつちも本気じゃなさそうとはいえ』

『応援いるか?』

『大丈夫です、ヴィータ副隊長こそいららないんですか?』

『いらねーよ』

少しばかりの笑みを交えた会話の間も戦闘は続行中だ。針の穴を通すように、激突する四人へと弾丸を打ちまくる。それぞれの動きを予測し、フレンドリーファイアもためらわずに引き金を引く。当たらないと信じている。ちゃんと予測しているし。当たったら謝ろう。

『んじゃ、そつちは任せた』

『はい』

念話を切る。

「ふうー」

息を吐いて、吸う。身体は闘争の為に動かしながら、しかし思考を他のことに巡らせる。確かに自分たちの状況は拮抗していた。だが、それはあくまでこの場の戦闘に限つ

てのこと。少し視線をずらせばガジェットとAMFに苦戦する他の局員の姿がある。つまり全体的に見れば劣勢だった。

どうにかしてこの三人を捕縛するなり打倒するになりしなければならぬ。なるべく早く、可及的速やかに。

この後に起こる戦いに巻き込まれてはならないという思いがどうしようもなくティアナの中に存在していた。

「……」

だから。

「行くわよ」

ティアナは、

「形成——幻影の射手」
クロスミラーージュ

Yetzirah——

単なるデバイスとしての展開ではなく『永劫破壊《エイヴィヒカイト》』第二位階として形を成し、

「——」

さらにその先へと進んだ。

*

それは驚愕すべきことだった。前提としてティアナ・ランスターは前世を継承していないし解脱をしたわけでもない。特別に翡翠や水銀の加護を受けたということもなく、寧ろ関係性としては誰よりも縁が薄かっただろう。それぞれ個別に配役がある中、重要度をつけるとしたら現在のティアナはそれほど高くなかった。確かにティアナは卒がなくオールマイティに物事を熟し、それがティアナの特性というのは言うまでもないが、逆にいえば目立ったところはないのも確かだ。加えて、前世にしてもかつての歌劇への関係性は薄く、今生に関しても兄と死に別れた程度のもでしかない。

にもかかわらず。あるいはだからこそか、彼女は己の前世に触れ、その存在を感じ取っていた。そしてさらに驚くべきことに、

『ソノナクサマハゴザンノゴトクアラブルカミヲモサバヘノゴトク』

かつての己の力の断片を引き上げ、使用を可能にしていた。

紡がれたのは祝詞は拙い、その意味も理解できていない音の羅列に近い。実際にティアナは己が何を言っているかは理解できていなかった。

それでも、何の思いがあるのはおぼろげにだが理解していた。

それは忌避。

私は逃げる。私は自由だ。嫌だ、見たくない。触れたくない。近づきたくない。私はこんなものを欲していない。こんなものを望んでいない。これに飲まれるくらいなら死んだ方が——。

「ぎ、ぐ、あ……！」

その渴望に触れるのと同時に己の存在が曖昧になる。かつての己が、今の己に触れ、溶け合い交じりつながっていく。彼女の渴望が理解できて、共感してしまう。いや、そういうえば私はそんなことを思っていたなあ、とか思い出してしまふのだ。それはすなわちティアナ・ランスターが■■■■に塗りつぶされていることに他ならない。

自我が崩壊していくが、しかしティアナの残った思考は動いている。現状を打破してどうにかしなければ確実にまずい。だから、使うのだ、それがどんなものであろうとも。『ヨロズノワザハヒゼニオコリキ』

銃口に集つたのは——腐臭だ。いや、単なる匂いではなく腐食の穢れ。怨念が怨嗟が憎悪が絶望が。ティアナがかつて受け継いだあらゆる負の感情がクロスミラージュの銃口に集つていく。発動前の余波でさえ胃の中をぶちまけたくなるような汚臭。目をそむけたくなるような瘴気。

こんなものを存在を認めてはならないと思う一方で、こんなものを使わなければならぬ現実がある。闘ぎ合う二つの魂。それは片方が断片だからこそ勝敗は呆気なくも

決し、

『カムヤラヒニヤラヒタマヒキ』

遍く穢れを他者に押し付けようとした渴望がここに具現する。

「な——っ!?!」

驚愕は敵味方入り乱れ。そしてその瞬間をティアナは見逃さない。

「——!」

放つ。もとより擦り付けることを目的とした祈り。腐食の霸道は嬉々として銃口から放たれ、

「クツ……!」

三人の戦闘機人たちへと襲う。迫る腐食の弾丸に反応したのはさすがというべきだった。防御をすることはなく、全力で回避を選択し、過剰と言わんばかりの跳躍も正しい。

しかし遅かった。

「つ——!?!」

「がああああああああああああああああ!?!」

「つううううううううううううううううう!?!」

三者三様に絶叫。直撃を避けたが、しかし完全に避けたわけではない。掠っただけだ

が、それで十分だった。右足が、左腕が、プレートごと右腕が、わずかに触れただけで腐り落ちる。言葉で言い表すことのできない激痛。生きながら身体が腐り落ちるということなんてあつてはならない。例え戦闘機人でもそれは重傷だった。

「く……はあ……はあ……っ」

ティアナもまた消耗が激しい。無理やり過去を引き出して、その上で能力を抽出して使うなど無茶が過ぎる。今はまだこの程度だが、さらに威力を出そうと思えばそれだけティアナの魂が削れていくということ。必要だからやったとはいえ肝が冷える。消費した大量の魔力と精神力。崩れ落ちるようにティアナは膝をつき、

「後は……決めさない」

「——ヤヴオール」

そんな短くも、静かな応えを返し、誰よりも早く動いたのはスバルだ。マツハキヤリバーの加速を最大限に使い、同時に達人めいた歩方を用いて一瞬で激痛に苛む赤髪の戦闘機人の前に。

拳を叩き込み、

「ガァー！」

ぶっ飛ばす。飛ばした先はプレートを持っていた少女。激闘すると同時に、

「チィー……！」

「ッ！」

双刃の少女をエリオが弾いて同じように飛ばして三人一まとめにする。その上で、

「鍊鉄召喚、アルケミック・チェーン！」

周囲の桃色の魔法陣から出現した鎖が三人を絡めとって捕縛する。三人とも鎖を破壊しようとするが、腐食によつて負つたダメージとほかの二人と密着しているからこそ動きが制限されて砕くことができなかつた。

その上で、

「サンダー——」

「ディバイン——」

エリオのストラダーダに雷光が。スバルのリボルバーナックルに蒼光が。エリオもスバルも形成を用いた上での魔導行使。それまで素面の二人とは隔絶した威力を保有し、家の一つや二つならば容易く灰燼に帰すだけの一撃。

「——レイジ！」

「——バスターツ」

為す術もなく三人の少女が白黄と蒼の閃光に飲み込まれた。

第三十六章 守護の鉄槌

「おりゃあー！」

ヴィータがグラブファイゼンを振るう。豪風を纏い、大気の壁を粉碎する鋼鉄の一撃。こと一点集中の突破力に関しては抜きんできているのが彼女であり、『永劫破壊』エイウエイヒカイトを手に入れた上でその力はより高まっている。既存の魔道など言うまでもなく、単純な形成位階であっても威力に関しては、彼女の渴望も相まって六課内でもトップクラスと言える。

だが、

「フッ！」

相対者はその一撃を容易く回避する。

長身の女だ。紫の短髪に全身に張り付くような青いボディスーツ。黒のジャケットを羽織っているとはいえ下半身のラインは隠せるものではなくモデルのように、あるいは戦闘者であるが故に引き締まった脚線美を惜しげもなく晒している。顔立ちも整っているが若干険が強い。シグナムみたいな女だ、とヴィータは思った。

だが、

「速えなクソ……！」

近接、それも高速機動型だ。ヴィータの一撃を戦闘が開始してから一度もクリーンヒットを許さず全て回避している。驚くべきことに形成位階のエリオの基本速度と同等。ヴィータでも気配や殺気で動きを予測できるとはいえ、完全に目視するのは不可能だ。

「はあー！」

「くっ……！」

加えて格闘型。高速機動はともかく、これだけ早くて近距離どころか零距离での戦闘を行う者はあまりいない。ミッドの魔導士は言うまでもなく、ベルカの騎士でも稀だ。当然速いということは一撃一撃は重い。動きは極めて無駄がなく、機械のように。接近して、相手の攻撃を回避して、攻撃という教科書通りのお手本を、しかし実現困難な動きを当たり前のようにしてくる。

それでも、それだけならヴィータには十分対応できた。

闇の、夜天の守護騎士としての経験値は伊達ではない。高速機動の格闘型というのは珍しいが、それでもかつての旅路に於いては幾度となく戦ってきている。例えば、相手が自分よりも格上だろうが、勝機を見出し主に献上するのが騎士の役目だ。

「ハッー！」

故に問題なのはもう一人、ヴィータの行動の随所を邪魔する少女に他ならない。

銀の長髪に右目の眼帯。小さな体をすっぽりと覆う灰色のコートを纏っている。ヴィータと同じくらいの体型の少女だ。つまり十歳前後の少女であるが、見た目通りの年齢ということはないだろう。

短い声と共にヴィータへと投擲するのはスローイングナイフ。少女の小さな指でも五指全てに挟めるような小型のもので、一度に八本は当然として、時にそれ以上を放っている。

「くっ……！」

それらは刃物としても当然鋭いが、威力そのものは大したものではない。問題なのは、一々ヴィータの動きを邪魔してくることだ。投刃としては極めて小さく、見極め辛い。戦場となっているのは地上本部のビルの周囲、大体ティアナたちの反対方向となっていて、見通しそのものは悪くない。それでも極限状態では見失い兼ねない。もつと言えば見失わなくても、反応できないタイミングで投擲してくるのだ。

ヴィータの動きを阻害するには絶妙なタイミングで。

技後硬直や攻撃の直前。動作動作の動きのつなぎ目のタイミングでほんの僅かに動きが停滞するように。機械のように正確に一瞬の空白をヴィータに与える。

そしてもう一人の女はその一瞬を逃さない。

「はああああああ！」

「っ、アイゼン！」

『Panzer Schild』

女へと放たれた一撃。それを回避された直後のヴィータへと放たれたナイフが動きを一瞬奪い、女の蹴りが叩き込まれる。着弾点の脇腹にとつきに衝撃を張って防ぐが、それでも衝撃は完全に防ぎきれない。数メートル吹き飛び、なんとか体制を立て直す。

「めんどくせえ……」

思わず悪態。一人ずつなら十分ヴィータでも渡り合える。単純な身体能力は女の方が上だし、細かい技能は少女には劣る。それでも自分なら打倒できるという自負がある。ヴォルケンリッターにおいては唯一、機動六課内でも数少ないオールラウンダーがヴィータだ。突破力に特化しているとはいえ、全体的なバランスの良さはティアナに次ぐ。近距離は主としながら、中遠距離、あるいはある程度の補佐もできる。だから相手がどういふ類であろうと一人だったら十分対処できた。

しかし現実相手は二人組で、おまけに連携の練度もかなり高い。情報の共有しているのか思わず目を見張るほど。

だから、今ヴィータはかなり劣勢だった。細かい傷は多く、衝撃を多く受けたから体力の消耗が激しい。対して相手の二人は極めて軽傷だ。先ほどはティアナの手前余裕

ぶったが、案外余裕なかったりする。

それでもなんとか意志を奮起し、

「……………この程度か」

「あん？」

戦闘行為ではなく会話だった。女は構えは解かず、しかし言葉を発し、

「すでに決まったからどれほどのものかと思ったが所詮は火事場の馬鹿力か？ 鉄槌の」

「あ？ んだよてめえ、いきなり喋りだして。お喋りしたいならちゃんど名乗りやがれってんだ」

「トーレ。それに後ろのはチンクだ」

「……………」

意外にも普通に名乗った。

「こっちは名乗ったんだ。お前も名乗れ」

「鉄槌の騎士、ヴィータだ」

「知っている」

「……………」

ちよつとヴィータはイラついた。

「悪いな、こういうやつなのだ」

「……そーかよ」

気の抜けたやり取りだが、それでも戦いの意志は消えていない。

「んで、なんだつて？」

「期待外れだ。鉄槌、まさかこの程度で全力などというわけではあるまい」

「……？」

全力かどうかと問われれば否だが、しかし違和感を感じる。この言い方ではヴィータがより戦闘力が高いことを期待しているような言い方だ。

それはおかしいだろう。

現状を見ればこの戦闘機人たちはテロリストだ。こういう大きな管理局の会見や意見会には決まって出てくる輩で、ヴィータ自身の要人護衛の折に戦ったことは何度もある。年々その規模を広めていく管理局はそれだけ反勢力も多い。だから今回の襲撃が起きたことはなんら不思議ではなく、最近のレリック事件から考えれば当然だった。

そして同時に。

ここ最近の出来事から何かあるのは襲撃前でティアナたちと話した通り。だから、眼前の戦闘機人たちが通常の魔導士を遥かに超える力を保有しているのもおかしくはなかった。全力を期待するというのはどういうことだ。単なる戦闘狂か、明確な目的があ

るのか。少なくともこの二人からは黒円卓の連中のような理不尽な強さは感じられない。一応は互角に戦っているのが証拠。秘めたるものがあってもそれは自分も同じこととでそこまでの差ではない。

だから解らない。

「何が目的だ。お前ら」

「蹴落としたいのだよ、お前たちを」

トーレは言う。

「私は別に構わんが、だが妹たちは違う。貴様らのスピアで終わらせるものか」

「――」

背筋が訳もなく凍る。おぞましいほどの吐き気。視界を覆う砂嵐。脳裏に浮かぶ誰かの詐欺師めいた微笑。血管に直接水銀を流し込まれたような怖気。

「おま――」

思わず戦闘中であることも忘れて、手を伸ばした。そしてそれは致命的な隙であり、

「アクセス――『高速機動』」
ライドインパルス

瞬間、トーレが視界から消えた。



「ガッー!?!」

気づいたときは首にトーレの蹴撃が叩き込まれていた。同時に足首に出現したエネルギー刃がヴィータの首の骨に亀裂を生じさせ、

「チンクー！」

刃が放たれる。それまでと同じように放たれ、しかしヴィータは為す術もなくその刃を受けた。そしてさらに、

「アクセス——『刃舞う爆撃手』」

ランブルデトネイター

「——!」

指を鳴らし、スローイングナイフが爆散した。爆炎と衝撃波、そして粉碎されたナイフの破片がヴィータの体を蹂躪する。霊的装甲を容易くぶち抜き、命に至る傷を容易く生じされていた。形成位階、いやそれよりも先。単なる攻撃ではない攻撃を二人は体現していた。それまでなかった魔力も爆発的に発生した。それまでは戦闘機人としての超強化された身体能力や技術で戦闘を行っていたにも関わらず。高速機動やナイフの爆散はわかる。

IS、すなわち先天性技能だ。インヒューレントスキルだがそれはあくまでも外付けの特殊能力でしかないはず。それにも関わらず、今の二人は基礎能力から爆発的に戦闘能力を向上させてい

た。単なる特殊能力の発動では片づけられない。

まるでそれは、どこかに繋がってそれから力を得たかのようなだった。

「この程度か。だったら、譲れない」

もろに攻撃を受けたヴィータは満身創痕となって大地を転がって、瓦礫に激突したことで止まる。だが、血に塗れた彼女は動かない。

それでも、もう一度トーレは言う。

そしてチンクもまた、

「同意だ。アレに認められたというその気概、見せてみる」

そして再び、

『『高速機動』！』
ライドインバルス
ランブルデトネイター

『『刃舞う爆撃手！』』

神速の連撃と爆炎の炸裂刃がヴィータへとぶちまけられ、

『急襲せよ 引きちぎりそして荒れ狂え 不幸の嵐よ』

St・rmt, rei・t und rast, ihr Ungl・ckswind
 e, zeigt eure ganze Tyrannie,』



「なッー!?」

「これは!?!」

驚愕するトーレとチンク。今自分たちが叩き込んだ攻撃が悉くが拉げて潰れた。爆炎も爆風も爆散した刃も叩き込んだ連撃も、みな一様に潰えていく。トーレは四肢の痛みに思わず呻いて、後退し自己修復機能に自らのリソースを回す。その間にも紡がれる言葉は続いていく。

『我が心はあらゆる金剛にも 私の精神はあらゆる檜の木にも劣りはしない』

Mein Herz gibt keinem Diamanten, mein Geist der Eiche wenig nach;

もし大地と天が私を追放しても 私はなおその災厄に抵抗する

sotrotz, ich doch dem Unge mach; weicht, falsche Freunde,

逃げるがよい、偽りの友たちよ 来るがいい、潰えぬ怨敵たちよ

schlagt, bitt, re Feinde, mein Heldenmut

我が英雄の精神は損なわれはしない それゆえに私は戦う

ist nicht zu dmpfen; drum will ich k m

p f e n

そして見るのだ 忍耐が奇跡を起こすのを

u n d s e h n , w a s d i e G e d u l d f · r W u n d e r t u
t.』

八神ヴィータは■■■■より解脫を果たした。彼のようにかけがえのない大切な人たちを守るためにあらゆる穢れを引き受けるのではなく、ヴィータはあらゆる穢れを殴打することを願った。防衛に対する闘争。それは真逆であるが故の解脫だった。

それでも大切な人の救済を願うのは変わらない。戦うと引き受けようと愛する者たちを想うのは変わらない。

かつてとの同調率は極めて高く、テイアナのように無理やり断片を使用するとは隔絶した完成度。

『愛は黄金の杯より注ぐ 私に勇気の美酒を

D i e L i e b e s c h e n k t a u s g o l d n e n S c h a l e n .
m i r e i n e n W e i n z u r T a p f e r k e i t ,

そして良い報酬を約束し私を戦場へと導く

u n d f · h r t m i c h m u t i g i n d e n S t r e i t ; d a
w i l l i c h s i e g e n ,

ここで私は手に入れたい 緑の地が わが盾に使われることを

hier will ich kriegen; ein gr·nes Feld.
di ent mein em Schilde.』

真正正銘、真正の『永劫破壊』エイウヰヒカイト第三位階。

その祈りは愛する者のためにあらゆる穢れを粉碎すること。

それまで受けたあらゆる傷は修復され、バリアジャケットもまた完全状態。聖遺物にしてデバイス『グラーフアイゼン鋼鉄の伯爵』はフルドライブのギガントフォーム。

『創造——毆殺せし守護戦鎧』

Briah——Das Wappenschild: Mjolnir』

紅の鉄騎、八神ヴィータは立ち上がる。溢れんばかりの覇気をトーレとチンクにぶつけ圧しながら、自嘲気味に口を開く。

「あたしの魂なんて碌なもんじゃねえよ」

言いながら、しかし口元をきつく結び眼光は鋭い。見た目は幼い少女だが、発せられる気配は尋常ならざる物。直視するだけで押し潰されそうになる重圧。

「でも……ああ、いいぜ。見せてやるよ。代わりに覚悟しろ。悪いは加減はできねえ」

だつて、

「私は叩き潰すしかできないんだからなあ！」

第三十七章 始まりは密やかに

双方向から迫る白黄の雷撃と蒼の砲撃。それぞれが形成位階として十分に高められている一撃。規模はともかく恐るべきはその深度。単純な破壊行為ならば通常の魔導士でもそれほど変わらない規模の攻撃を行うことは可能だ。それでも、エリオとスバルの一撃には霊的な性質を内包していた。それを受ければティアナの腐敗の弾丸を受けた戦闘機人三人が受ければ致命的な一撃だった。

それら二つに挟撃されながら、

「アクセス——『空の殲滅者』」

眩き、同時に欠損を回復させたヘッドギアの少女——セツテが手にしていた二枚刃が双撃をぶち抜いた。

「な——!?!」

「……………」

それらを放った二人が目を見開く中、それ自体が独自に動く双刃は迫る一撃を破碎し、しかし止まることなく三人を繋ぐ召喚鎖を砕く。そしてそれだけで止まることはなく、

「アクセス！ 『破壊する突撃者』！」

「アクセス——『守護する滑空者』！」

残りの二人——ノーヴェとウエンデイも欠損を全回復させ全身から魔力を溢れ出す。ほぼ全壊していたライディングボードも完全な形で修復される。それまで以上の魔力を保有し、そして各々の固有スキルを発揮し発揮しながら瞬発する。

「行くつスよオー——！」

ライディングボードを構え魔力弾を放つ。数は十七。桜色で輝くそれらはそれまでよりも遥かに複雑怪奇な軌道を描いてティアナたち四人に飛来する。

「く、そ……！」

毒づきながらも、クロスミラージユを構え引き金を引く。直前に無理にかつてから力を引き出して消耗が激しい。それでも己を叱咤する。ティアナが放った弾丸は流石というべきかうエンデイの魔力弾を打ち抜き、

「遅いっすね——」

目前にライディングボードに立ち乗りしたウエンデイが出現した。

「っ——」

ボードが回転する。ティアナの認識を超える超速度で鉄の塊、いやそれ以上の強度を持つ何かが振るわれればそれはまさしく必殺に等しい。とつさにクロスミラージユを

交叉させ、瞬間的に可能な限りの魔力を用いて障壁を張る、が、
「あ、がああああああ！」

元々防御力の低いティアナには防げなかった。障壁が破碎され十字に交差した腕ごと衝撃が突き抜け体が吹き飛ぶ。

「砕けるお！」

「っ!？」

ノーヴェの蹴撃、それまでと動きは変わらずしかし隔絶した威力を誇っている。それをスバルは受けず回避した。勘と言える行為だった。スバルの場合、無自覚とはいえない成位階に準ずる強度を保有する以上は尋常ならざる防御力ではない。むしろその頑強さにおいては六課内でもトップだ。

その彼女がなによりも回避を選択した。

そしてそれは正しかった。

飛び退いたスバルの背後にあった瓦礫、

それらが完全に粉碎された。

「な、あ……!？」

風と衝撃波の塊が直径数メートル程度の風穴が瓦礫の群れに空ける。只の蹴りに見えた。スバルが避けたのはあくまでも勘に過ぎない。魔力は上がっていたが、それでも

ここまで威力をもたらすということは、

「インヒューレントスキル……!」

「お前だつて持つているだろうが!」

「っ……!」

持つている。持つているが、それはこれまでほとんど使ったことがないスバルの禁忌。仲間内ではティアナにしか言っていないこと。実際には隊長陣は知っているがそれでもまず口にしらない。ISというものは確かにレアスキルに近いものではあるが、それでもスバルのそれは剣呑すぎる。仮に今のスバルがそれを使えばアレと相まって文字通りの一撃必殺になる。

それを手にかけるにはスバルには何もかも足りなかった。意志も覚悟も渴望も。

彼の求道は遙か彼方。

何も定めることができぬ彼女には使えない。使つてはならないとスバルの理性が無意識に鍵をかける。

だがしかし、ならばどうすればいいのか。今の三人は間違いなく自分たちよりは強い。ティアナは消耗が激しく、エリオもセツテ相手にジリ貧。キャロを前に出すわけもいかない。

ならば、そう。体の中に活路見出せる可能性を持つスバルがどうにかするしかないの

ではないか。それを使ったら、この三人程度なら一瞬で終わらせるほどの力があるのだ。使うか、使わないか。その選択肢はないに等しい。今のこの状況では使わなければ死ぬ。殺される。

スバル・ナカジマの生が終わってしまう。

「私、は……」

気づけば言葉がこぼれていた。自分がどうしてそんなことを強く思うのかも理解できず、しかし口は動き、

「こんな所で終われない……!」

スバルの瞳が金色に輝き、足元にテンプレートテンプレートが生じ、

背後、地上本部が吹き飛んだ。

「……!?!」

吹き飛んだというのは正確ではなかった。こんな巨大な建造物が一気に吹き飛ばすなんてことは早々ない。だから、実際に起きたのはもつと小規模。

今スバルたちがいた所から誰かが対角線上にビルをぶち抜いてきたというだけ。

誰か、なんていうのは言うまでもない。こんなことができるのはこの場には一人きりだ。

土煙の中から足音があった。それはゆつくりとした足取りで間隔が短いことはかなり小さいということ。

「いよお、そつちはどうだ?」

気軽気に現れたのはやはりヴィータだ。グラーフアイゼンを肩に背負う彼女は自然なほどに無傷。土煙で汚れた様子もまったくない。

周囲を軽く見まわして、

「結構大変そうだなおい」

「チンク姉はどうした!？」

「それにトーレ姉さまは」

「ああ、もう潰した」

「ことも何気にそう言った。」

「テメエエエエエエエエエエエ!!」

「——!」

それにノーヴェは激しくセツテは静かに激怒する。互いに目前にいたスバルとエリオを意識には外してヴィータへと迫る。ノーヴェの足元から一本のラインが生じる。

それは爆発的な加速でヴィータへと駆け、

「つのおおおおらああああああああああああ!!」

それをレールにしてノーヴェは突進する。速い。ぎゅるぎゅるというエンジン音が響きヴィータに迫る。同時にセツテも無言で双刃を飛ばす。指運にて駆動する一對のブーメランの速度はそれまでの比ではない。二枚刃が螺旋を描きながらノーヴェを追うように飛翔する。

直撃すれば相応の威力を生む一撃は、

「あん?」

直撃し、

「がああああああああ!!」

「——!?!」

ノーヴェの絶叫とセツテの驚愕。いや、驚愕は二人だけではなく見ているだけの他の者たちも同じだ。

「あ、が、ぐつ……!」

蹴りを叩き込み、確かに直撃した。先ほどは瓦礫の群れを根こそぎ吹き飛ばした一撃だった。

それが接触の瞬間、膝下まで拉げてぶつ潰れた。セツテの双刃も同じ結末を迎えてい

た。寧ろ振りぬいたから膝下までで済んだノーヴェより、完全に粉碎されている分被害は大きい。

「今アタシに触るとそうなるんだよ」

「な、に……」

「創造、つて言つてたなあいつは。発動すると人間大の異界になれるとかなんとか……。まあ、とりあえず」

一度区切り、グラーフアイゼンを振りかぶる。

「潰されたくなかったら、投降しろ。今のアタシは非殺傷指定で気絶、なんて細かいことできないからな」

求道型の創造位階、『毆殺せし守護戦鎧』。その能力は自分の体を毆殺という概念の塊にすることだ。海鳴でも、先のチンクヤトーレの攻撃も彼女に触れた瞬間に潰された。攻防一体であり、触れれば問答無用で発動する。だからこそ手加減が難しい。

下手をすれば簡単に殺せる。

「別にあつちの二人も死んでねえ。つか逃げられた」

「え」

思わずティアナが呆けた声を出した。

「ヴィータ副隊長？」

「あ、いや。ほんと潰したんだぜ？ 八割くらい殺してたらいきなり消えてなあ。普通にアタシとアイゼンのサーチからも引つかからねえし。幻惑系の仲間でもいるのかよ。まあそこら辺は尋問なりなんなりするから、とつととお縄に着け。ほら、そつちのもちゃんと逃がすなよ、つと」

言葉と共にヴィータが三人に向けてバインドを張る。むろんそれも創造位階での魔道行使であるが為に、

「動けば、ぐしやっだぜ」

「くそっ……！」

「これは……詰んだっすねえ」

ノーヴェは毒づき、ウエンディは冷や汗を流す。セツテは無表情のままに動かない。「ほら、お前から立てよ。中のはやてたちもシグナムが先導して、もうすぐ下来るらしい。スバルとアタシがこいつらの連行で、他ははやてや一緒についてきたお偉いさん方の先導頼むぞ」

ぎこちないながらも、ティアナたちが領いたのを確認してから、右手を耳に当てて六課にロングアーチに念話を繋げようとして、

繋がるよりも前にロングアーチ側から緊急通信が入った。

地上本部最上部のさらに上の無人のヘリポート。ヘリコプター自体も眼下で行われるテロ行為への対処や上層部にいた局員たちの避難に全てが使われていた。

その屋上の外周部、フェンスすらない所にはカイトはいた。例によってタバコを加えながら足を中空に投げ出して、直下の戦闘を眺めていた。

「つたく、あいつどうにも危なっかしいなあ」

それから視線を動かし、向けた先は遙か遠く海沿いにある六課隊舎だ。その現状に一瞥し沈み始めた太陽に視線を移しながら、

「やれやれ、面倒なことしれくれるなあ」

「俺の知ったことではない」

いつの間に背後にナハトがいた。黒髪黒目、頬に刺青を刻んだ彼はカイトの背後十数メートルの場所に立っていた。

それに驚くことはなく、しかしやはり面倒そうに髪をくしゃくしゃと掻いて立ち上がる。同時に双刃銃を形成して両手に握る。向かい合ったナハトもすでにデスサイスト

鎖を手にしていた。臨戦態勢、というにべきだろうが、しかし二人はあまりにも自然体過ぎた。当然ながらそれ相応の魔力や殺気、殺意はある。常人がいれば卒倒するレベルである。

それでも、

「なあおい、アンタさあ。今のこの世界どう思うよ」

「さて、な。俺はこんな体に繋ぎ止められている現状から脱したいだけだ。そのためには貴様と戦うのが一番早い」

「そうかい」

場違いにも空を見上げて、

「くそつたれ……デジャヴるなあ」

そして灰色狼と罪悪の王の宴が幕を開ける。

第三十八章 過ちは繰り返さぬからこそ

機動六課隊舎は火に包まれていた。数時間前までは最新式の設備が備えられ、精神上の為に数多くあつた観葉植物や隊舎周辺も自然に囲まれていたが最早それらの面影はない。太陽が沈み、暗くなつていく中で真つ赤な炎が暗い黄昏を染める。

ガジェットは数十体も蔓延り、建物を破壊していく。襲撃が始まつて小一時間。たったそれだけの間で隊舎は崩壊寸前だった。

それでもいまだ完全には落ちていない。

「ぬ、ぐ……う！」

「ザファイラー！」

防衛のために残されたザファイラーとシャマルがいたからだ。彼ら二人がいたからこそ、背後の隊舎は炎上しながらも、侵入を許していない。それでも二人の負傷は激しい。如何に守護に特化したザファイラーと補助に長けたシャマルの二人が防衛に専念したとはいえ広い隊舎を完全守れるわけがない。二人とも傷だらけであり、特にザファイラーの消耗は激しい。狼の姿の特徴的な青い毛並も血で赤く染まつている。

それでも、

「IS——『光渦の風』」

「ガアアアアアアアアア！」

降り注ぐ緑の閃光を彼は迎え撃つ。十数本からなる光の柱、それらをザフィーラは足元から魔力の壁を生み出し受け止めるが片端か盾が崩れていく。

「ツクラルルヴィント！」

シャマルが盾を補強し、ザフィーラへの補助魔法を送る。それでなんとかしのぎ切るが、

「IS——『双剣』」

「ぐあッ」

二刀を叩き込まれ吹き飛ばされる。

二刀の主は戦闘機人の少女だ。茶色の長髪にカチューシャ。豊満な肢体に張り付く様なボディスーツは地上本部を襲撃した他の戦闘機人たちと同じ物だ。そしてもう一人。同じ色の短髪に無表情の中世的な少女だ。ボディスーツだけでなくズボンとジャケットも着てる。先の緑の閃光は彼女によるもの。

二人の戦闘機人——デイドとオットー戦闘開始してから無表情で、

「……しっしん」

わずかに面倒そうに顔をしかめる。六課襲撃はこの二人こそが最大戦力であり、所詮

ガジェットはおまけだ。主力級のほとんどは地上本部であり、『エースオブエース』も『閃光』も先日の一件のせいであまりまだ戦闘行為は禁じられている。例えその二人が出てきたとしても対処できる自信があった。故にこの襲撃はこれほど手間取る予定はなかった。広範囲殲滅型のオットーのISを用いれば、それこそ一瞬で終わるはずだったのだ。それにも関わらず今だ六課を落とす切れていない。元々感情の振幅小さい二人だが、流石に倦怠を感じている。

本命がいないと解つていればなおさらだ。

「どうする、オットー。向こうはもう始まつてるようだけれど」

「それでも僕たちの任務はここを落とすことだ。投げ出せないよ」

言葉を交わしあう二人から戦意は消えない。姉妹の中でも感情が希薄な二人だ。僅かな倦怠はあれど、それで動きが鈍るということはない。デイドの言葉はただ単にオットーを気遣っただけのもの。

だからこそ、二人はさらに自らのISを起動する。

それでも、

「……させん」

ザフィーラは立ち塞がる。満身創痍という言葉も生易しい。オットーの閃光もデイドの二刀も形成位階に等しい。単純な肉体やリンカーコアにダメージを与える

のではなく魂にまで刻まれる攻撃だ。そんなものを喰らい続ければとつくの昔に死んでいてもおかしくない。それにも関わらず彼は立つ。

彼の横に付き添うシャマルもまた。

彼我の戦力差は明白だ。『永劫破壊』エイサイヒカイを持たず、水銀の薰陶を受けているわけでもない。ならば、

「翡翠の加護、ということかな」

彼の愛か。なるほど目の前の守護獣は文字通り守護に特化した存在だ。彼との相性もいだろうし、癒し手というのも遠からず。そういう意味では尋常ならざる耐久力も頷ける。

だが、なぜだろう。そう考えるのが妥当であると思いつつながら、しかしそれだけではないと二人は感じていた。

「一つ聞きたい」

「あなたたちはなぜそこまでする？」

だからだろう。この二人には珍しく自発的に他人に話しかけていた。他の姉妹たちが見れば驚愕するだろう。自ら話しかけることさえも稀なのに、それが姉妹以外の他人であるなどと。オットーとデイードの双子同士ならばともかく滅多にないことだ。

「愚問だな」

唐突な問いにザフィーラは揺らがない。傷だらけの現状を感じさせないはつきりとした声で彼は答えていた。

「俺は盾の守護獣だ。その名に偽りはない。相手がなんだろうと、降りかかる火の粉から守るのみだ。それ以外の理由などない」

「だが、貴方たちの主は八神はやてだろう。彼女はここにはいない、なのに何故？」

一度沈黙する。しかしそれは言葉に詰まったわけではなく、その質問になにか思うことがあつたようだった。一度目を伏せ、

「知れたことだ——真に立ち向かうべきものも、俺自身が守りたいと思うも、今この瞬間解り安すぎるほどに明確なのだから」

言う。

「つまらない問いだ。主を守ることは即ちただ傍にいればいいというわけではない。主の近衛は我らが将が担っている。故に俺は主たちが帰るべき場所を護るのだ」

そう、かつてはそんなことさえもできなかったから。

真に立ち向かうべきものから目を背け、本当に大事なものを見失つて。大切なものを取りこぼして、殻に籠り続けてきたのだ。そして失ってしまったものがある。

だからこそ、

「ああそうだ。俺は、俺自身はよいのだ。救いなどいらぬ。祝福は主たちの下へ。戦友と共にどこまでも、守り続けるのだ——永遠に」

そう、それこそが彼の願いに他ならない。かつて誤つたからこそもう二度と違えない、自分の身がどうなろうとも愛する者たちに祝福が訪れればそれでいいという殉教者染みた祈り。哀しく、しかし愛に満ちた渴望。

それはきつと救いようがなく、鍍金のようで、だからこそ美しい。

そして彼の願いを横で聞き、シャマルは苦笑しながらも、

「まあ、私はこの人ほど行き着いていないけど……。そうね、私はただの偽善者だし」

ザフィーラのように断固たる宣誓ではなかった。それよりもずっとか弱く、夢い物言い。それでも真つ直ぐに、視線をオットーとデイドから外さずに言う。

「それでも——偽善者には偽善者なりの意地があるの。教え子が、娘みたいなたちが頑張っている。だったら、こんなところでへこたれてなんかいられないのよ」

血に濡れた髪をかき上げながらシャマルは告げる。二人に放つというよりも自分に言い聞かせるように、そしてそれに納得したように、我が子を誇り守ろうとする母親のように。

ザフィーラもシャマルも同じだ。

自分の存在を度外視している。

自分はどうなつてもいいから大切な人は祝福されてほしい。

自分の大切な子らが頑張っているのだからそれ以上に自分が頑張らなきや。

そう思う彼らは自分よりも他者に重きを置いている。

「だから、俺は」

「だから、私は」

「——もう間違えなどせぬ！」

「——もう間違えたりなんかしない！」

叫び、自らを鼓舞して、防衛のために魔力を猛らせる。狂信染みた祈りが彼らを突き動かす。魔力的にも肉体的も限界を超えているはずなのに精神がそれらを凌駕しているのだ。リンカーコアが悲鳴をあげてるのにも、まったく構わずに魔力をひねり出す。その姿はどうしようもなく痛々しい。しかしそれと同時に尊い輝きだとオットーもデイドも感じていた。

だから、だろう。

「デイド」

「ええ、オットー」

自然二人は戦意を収めていた。訝しむ二人に彼女たちはもはや武装を構えることは

ない。

「僕たちに足りないものを見せてもらいましたから」

「魂……なるほど、聞くのと感じるのは別だわ。私たち人形風情にはないものね」

自虐気味に眩き、二人は背を向ける。本当に二人は引くつもりなのだ。ガジェットII型を呼び出してオットーはそれに乗り、デイドは飛行して飛び去っていく。

「——どつちにしろ目的は達せられた」

去り際にそんな言葉を残しながら。

*

『呪いの笛に誘われて 虚ろな戦士に導かれて 人おらぬ街から 赤い目の魔法使いの言うように』

終わりを告げる鐘が鳴る 夜明けを教える鐘が鳴る ひびき とどき きこえてく

創造——妖精郷の餓え飽く灰色狼』

B r i a h ——

『アクセス——我がシン』

無頼のクウインテセンス

肉を裂き骨を焼き、霊の一片までも腐り落として蹂躪せしめよ

死を喰らえ——無価値の炎 』

激突の直前、カイトとナハトは迷うことなくそれぞれの異能を全開に発動する。ナハトとという存在を目前にし眼下に彼女がいるからこそ高まるカイトの渴望は詠唱を短縮し即座に創造を発動し、ナハトもまた己の罪を覚醒させてデスサイスと鎖に黒炎を纏う。

「おおおおおおおオオツッ————！」

その二つの強度は先に発動されたヴィータのソレも、他の黒田卓の騎士すらも及ばない。単純な能力として二人は凶悪すぎるのだ。

「腐滅しろ——」

黒炎が燃え盛る。振るわれるデスサイスと鎖に追従してまき散らされる炎はありとあらゆるものを腐滅させる地獄の業火。ナハトの魂は水銀が用意した単なる肉の器に宿っているから本来の数十、数百分の一でしかないとはいえその効果は絶大だ。どれだけ弱体化されていてもその滅炎から逃れられるものはこの世に存在しない。実際飛び散ったほんの小さな火の粉に接触したコンクリートは瞬く間に腐敗していく。

「うぜえ邪魔だ」

だからこそカイトは条理に反している。腐滅の炎を纏ったデスサイスと自らの銃剣をぶつけ合わせるが、カイトは腐らないし、燃えない。それは触れればどうしようもないはずで、人器融合型である以上は聖遺物である双刃銃が傷つけばカイトへのダメージも免れない。

それにも関わらず、寧ろ刃を振るい、引き金を引く。

それでもナハトは不思議に思うことはせず、

「くははー!」

鎖を振るう。獣の頭を持つそれはそれ自体が意志があるかのように這い回る。当然無価値の炎は付与されておりヘリポートは一瞬で腐敗し、形を亡くす。

「オラッア!」

足場が崩壊し、態勢を崩しながらも自らの鎖を伸ばす。じゃらじゃらと音を鳴らしながら中空を疾走しナハトの鎖に巻き付く。しかしそれでもカイトの鎖は健在だ。どころか、接触し合っている部分の無価値の炎の勢いが減っている。

「なるほど、おもしろい渴望だ」

「かつこいいだろう?」

二種の鎖同士で引き合いながら一つ下の階に落下する。

「万象燃やし腐らせる無価値の炎?　なんだそりゃ、下らねえどうでもいい眼中ねえん

だよ。魔王様はとつとお家へ帰って薪でも燃やしてろ」

「抜かせよ不感症。惚れた女ができたらもう自分のものと勘違いしているのか？ 相手にもされない貴様の一人遊びは滑稽だぞ」

互いに笑つて

「……………」

灰色狼の爪牙と死神の鎌が激突する。

交叉する刃とデスサイス、弾丸と鎖。どちらも直撃すれば互いに必殺の特性を内包しているからこそ互い全て対処していく。単純な物理的威力もけた外れだからこそ、

地上本部をぶち抜きながら二人の魔人は落下していく。

当然それで動きが鈍ることはない。カイトは曲芸染みだ、それこそ勘でしかないような動きで時に鎖を用いて縦横無尽に駆け巡る。速度は決して速くないが、トリッキーな動きは予測を困難とさせる。

「ふんっ……………」

それでもナハトは迷わない。動きそのものは少いが長身の体と自由に動き回る獣鎖を用いてカイトの動きを阻害し、デスサイスの一撃を見舞う。

元々無人であった地上本部のビルの最上層部は内側から焼けただれて広範囲に異臭をもたらしている。外側からでも今の二人の戦闘行為はうかがえるだろう。それらが

どれだけ人間を逸脱しているのかを。

それでも関わらず二人の体に今だに傷はない。

無価値の炎は全てを腐滅させる攻防一体の術でありカイトの創造も同じ類のもの。同種の能力に同程度の強度。さらに技量そのものも方向性の違いはあれどどちらかが戦局を決定するほど上回っているわけでもない。

「ハッ、ああどうにもならんなあ。貴様程度にこれだけ手古摺るとは酷い肉体だ」

忌々しげにナハトは言う。カイトと互角であることがあり得ないとでもいうような物言いだ、

「解っているのか。俺がここで貴様と戦っているのも俺が呼び出されたのも」

「俺の為だったか？ 黙れよ、そんなこと頼んじやいねえ」

「頼まれてやるわけがないだろう」

そう、本来ならばナハトが本体を別の次元に在り、自らの適合者でもない肉体に陥れられて今カイトと戦うわけがない。彼はとうの昔に役割を終えたはずなのだから。それなのに、今彼らは戦っている。

ナハトが動きを止める。釣られてカイトも止まった。どちらも攻撃することなく刹那目が合い、

「結局貴様は所詮神の玩具だ」

「——解ってるんだよそんなことは
既知感は、なくならない。」

第三十九章 開き至る門

司法の塔が腐敗していく。二人の魔人がぶつかり合うことで破壊がまき散らさせていき外壁も虫食いだらけになっていた。地上本部長半分は既に炎上し倒壊寸前だ。

それでも、カイトとナハトは止まることはない

『汝は出て行け 我は彼らを識りたい

ツイエム・エレヌ ヴェネドウアー・オタム

我は汝を召還す——闇の焰王 悪辣の主よ

デイエスミス・イエスケツト・ボエネド——エセフ・ドウヴェマー・エニテマウス

無価値なるもの 無頼なるもの 邪悪なるもの 不正の器——敵意の天使 焰の王
よ 出で参れ』

ナハトの詠唱と共に無価値の炎が激しさを増す。溢れる黒炎はそれまでとは桁違い。発動の瞬間に発生したそれは一瞬で塔の最上十階分を一瞬で燃やし尽くした。デスサイスに纏わりついた腐炎は形を持ち長大な剣となる。一瞬に数十メートルにまで伸び

る腐劍が大氣を腐らせ、燃やしながら振るわれれば、

『バルーフ
羽根』

カイトの動きが変わる。呟いた瞬間に双刃銃の刃部分が伸び二振りの長劍となる。それでも刃渡り一メートル程度でナハトの腐劍に比べれば頼りない。それはカイトも解っていた。

だからこそ迫る腐劍を回避する。

音もなく中空を蹴り腐劍の範囲から脱出し、

「——！」

駆ける。

中空や崩れ落ちる破片を蹴って縦横無尽に駆け巡る。それまでのような獣じみた勘任せのような動きとは違う。体重が消え去り、まるで羽毛のように身軽な動きだ。劍の太刀筋すら変わり、銃としてではなく完全に双劍として機能していた。

「シッ——！」

「はっ——！」

二人の影が交叉する。

放たれた斬撃はカイトの方が圧倒的に多かった。一瞬の交叉、ナハトがデスサイズで腐炎を纏わせた一閃を放つ間に十数もの斬撃を放っていた。羽根でも鋼鉄の羽根だ。

動きの速度に関してはナハトを完全に超越していた。

「軽いな」

「うっせえのろまが」

十数放たれながらナハトに届いた一閃は一つだけ。残りは全てナハトの一閃に潰されていく。だからこそナハトの斬撃もまた威力を減らしながらカイトに届くも決定的な一撃とはならない。互いに肩の斬痕が刻まれ、

即座にカイトが跳ねる。速いというよりも素早い。

「フン……」

鎖を振るう。獣頭は牙を？きナハトの周囲を螺旋状に蠢く。即席の防御壁が生まれた。当然ながら無価値の炎が宿されていて攻防一体であるからこそ突っ込めば被害は免れない。それは腐炎への対抗策を持つカイトでも同じだ。

『イククサ虚戦』

眩きと共にカイトから表情が抜け落ち、

腐滅の炎壁すり抜ける。

「なに——!?!」

見れば剣が変わっている。灰色だった刀身が黒く染まり、呪詛のような文様が浮かんでいく。右は青で、左は白。ナハトですら眉を潜める不気味な刃。まるで幾千幾万もの

怨恨を込めて打たれたような死神の一刀。

「トーテンタンツ……!」

「ああそうだ!」

そしてそれはナハトも同じだ。彼もまた幾千幾万の死の上に立つ罪惡の王。積み上げてきた死でいうならばカイトですら遠く及ばない死神。

鎖の壁の中という超至近距離で二人はにらみ合い。

「!!」

斬撃が交叉する。

先ほどと同じ構図だが、カイトは己の魔術行使によって動きがまた変わっている。それまでの体重が消え去った鋼鉄の羽根のような動きではない。

ゆらりゆらり。

亡靈の如く。剣速は神速。動きは不鮮明。不規則であるが故に動きを先読みすることは困難だ。それらの死の風が心臓に、首に、両手首に、胸の中央に。凡そ人間の急所にほぼ同時に刃が奔る。

同時にナハトの一閃。速度としてはカイトに劣るが威力は桁違いだ。逆袈裟に放たれる剣撃は属性は変わらず、それでも強度は一瞬一瞬に高まっている。

それらが激突する。

カイトの双閃がナハトの首を挟み込み。

ナハトの一閃がカイトの脇腹に食い込む。

それでも、

「ただだけカルシウム取ってんだお前。実は小魚とか好きなのか？」

「人言えたことか」

双閃はナハトの首を薄皮一枚で切り裂き、一閃は脇腹にわずか食い込むだけで止まっている。どちらも血がにじんでいるが、致命傷には程遠い。

互いの特性が必殺になるはずの一撃を止めたのだ。互いに蹴りつけ距離を取る。

「ああ、訂正しよう。面白い渴望どころではない馬鹿げた渴望だよ。貴様、顔に合わずどれだけロマンチストだ」

「はっ、夢とロマンはいい男の条件の一つだぜ」

交わされる言葉の内容は言うまでもなくカイトの特性。

彼の能力は明らかにおかしいのだ。弱体化したとはい魔刃の権能すら無効化する創造位階。ナハトの炎の本質は、その一歩上であるからこそ弱体化していようとも本来ならば創造位階であろうとも

も抗えない。

零秒で転移するギンガも、燃やし尽くすシユテルも、闇に鎮めるディアーチェも、雷

で切り開くレヴィも、闇と血を纏うすずかも、燃え上がるアリサも。他の黒円卓の騎士すらも防げない。一時的に同胞であるティーダやゼストでも同じだ。

無価値の炎はこの世のありとあらゆるものを蹂躪し、腐滅させ——魂まで塵とする負の奔流だ。

それは絶対だ。単純な物理法則を超越した一つ上の法則だからこそ、物質界の存在はそれを否定できない。故に防ぐにはそれ自体が法則である流出位階でなければならぬのだ。そして今この天にその資格を持つのは僅か数人のみ。

そしてそれにカイトは含まれていない。

彼が自力でその高みに行くのも不可能だ。

それでもカイトがナハトの腐炎を防ぐのは、

「俺が欲しいのはたった一つだ。言っただろ、なにが無価値の炎無価値の炎だ、中二病が。痛々しいんだよ、下らねえ」

つまりは——そういうことだ。

カイト・クオルトリーズがずっと求めてきたこと。たった一つ唯一無二が欲しい。それさえあれば他はどうでもいい。要らない下らないどうでもいい。有象無象だつたら俺の轍になれ。

彼はそう願ひ、その渴望は彼にとって唯一無二でないもの全てを無価値と食い散らか

す。

彼女を除く存在のあらゆる異能の完全無効。

『永劫破壊《エイヴィヒカイト》』だろうと魔導だろうと、それ以外のなんだろうと関係ない。一切合切、今のカイトにはどうでもいいのだから。

ナハトの言う通り。馬鹿みたいな、夢見る子供のような渴望。独善的と利己的と罵られても仕方のないからもしれない。

それでも。

「ああ、知るかよ。もうあつたんだ。見つけたんだよ俺は、一番大事なたった一つかけがえのないものを——」

額にある小さな傷こそがその証。黒と白の斑髪に隠れているそれは目立たないがそれでも確かにある。

それこそが証だ。

否定すればいい。貶せばいい。笑えばいいさ。

それでも俺の感じた輝きは本物だから。

「俺は負けねえ。地獄の魔王だか罪悪だが知らねえけど、俺のたつた一つにくらべれば糞見てえなもんだ。ぶつちやけ天がどうか神がどうか俺的にはどうでもいいしな」

傲岸不遜、目の前にいるナハトに世界すらも下らないと言い切るカイトにしかし、

「は、は、くははは」

ナハトは笑う。

「魔刃^{オレ}も世界よりも女のほうが大事だと？」

「女と世界で女選べない男なんて糞だろうが」

「あなるほど——傲慢だな貴様」

「大事なもん間違えないだけだ」

答えにナハトは苦笑する。まるで誰かをカイトに重ねているよぬ目を細め、

「ならば見せろよ新鋭、俺もお前もどうせ本命の前座だ。道化らしく派手にやれよ」

「馬鹿が。俺の物語の主人公は俺だぜ、そんなんだから大事な所奪われるんだ」

言葉と共に二人は再びぶつかる。

無価値の炎と餓狼の食い散らかしが互いを消滅し合っていく。

状況は先ほどと変わらない。互いの能力は同一で強度も現段階では同じだ。いや、正確に言えばナハトのほうが圧倒的に上でもカイトの性質がその差異を無視している。

故に互角。

一時間に満たぬ戦いでありながらもその密度は他に類を見ない。

刃も鎖も銃弾もデスサイズも獣鎖も体術も。単純な物理衝撃ですら消し去る二人で

あるから勝負を付けるだけの手傷を負うことはない。少しずつ、それぞれの認識を超えて抜けるがそれも軽微なものだ。

既に日は暮れて辺りは暗く、最早地上本部の半分以上は腐り燃えて崩壊しているが、それを構う二人ではない。崩れゆく瓦礫を足場とすることを当然として何度も交叉する。

「オラアツ！」

「ハアツ！」

何回目か、何十回目か、あるいは何百にまで交叉は繰り返される。それでも激突は激しさを増すばかり。並の人間が間に入れば一瞬で魂ごと消え去る攻防である。

「それでも、足りん」

ナハトは言う。

「座に、神に挑むのだろう。再び怒りの日を迎えるために、翡翠の幻想として世界を変えようと謳うのだろうか——ならば足りない」

彼は知っているのだ。彼もまたかつて世の興亡を担った者一人だから、その時の戦いを知っているのだ。それを省みてナハトは言っていたのだ。

「なにが言いてえんだ」

「ああ、つまり」

——空気が変わった。

「……」

カイトが咄嗟に距離を取りながら食い散らかしの魔弾を可能な限りばらまくが、

「そのままではただの塵で終わるといふことだ」

触れる前に溢れる黒炎が弾丸を消滅させた

そして世界に穴が開く。

『——主に大いなる祈禱を捧ぐ』

ヘメンエタンツ

エルアテイ・テイエイブ・アジア・ハイン・テウ・ミノセル・アカドン

ヴァイヴァー・エイエ・エクセ・エルアー・ハイヴァー・カヴァフオット

アクセス——我がシン

アツシャー・イエツラー・ブリアー・アティルト——開けジュデツカ』

黒炎が爆発的に勢いを増した。一瞬にて数千メートルにまで高く伸びあがる炎の壁。

眼下の街でそれを見た常人はそれだけで魂が消し飛ばされ、魔力を持った者も再起不能になる。『永劫破壊』^{エイヴェヒカイト}を保有する者でも意識を保つのがやつとの神気。

「つおおおおおおおおおおおおおお！」

叫びカイトは引き金を可能な限り引きまくる。一瞬にて百にまで届く銃弾の壁で変

わらず食い散らかしの特性を宿している。

「無駄だ」

それでもナハトが纏う黒炎に容易く腐り消える。もはや先ほどまでの拮抗は完全に崩れ、天秤はどうしようもないほどナハトに傾いていた。

ジュデツカ——それに接続したことでナハトは存在の根底から書き換えられていた。

水銀に用意された肉の器は水銀の薫陶を掻き消しナハトの神気によつて作り替えられて腐滅の炎に完全に対応している。新生した強度はカイトの創造を完全に無価値とする強度。

求道の流出位階のソレに等しい。

存在そのもののレベルが違う。

求道神に等しいだけの魔格ベリアルはそれだけで一つの宇宙であり、完成し完結している。自分以外の存在に左右されることはなくその性質は永遠に変わらない。単純な強度では覇道の流出を平均的に上回っている。

故に創造位階以下を無効化するカイトの創造では最早通用しない。

「だから、どうしたああああ!!」

それでもカイトは怯まない。引き金を引き、魔術を使い、斬撃を叩き込む。

それでも何もかもが届かない。全て触れる前にあふれる無価値の炎に滅ぼされる。

「ああ……」

最早ナハトはカイトの攻撃に構わなかった。カイト自身を意識から外したわけではない。それでも、接続した場所から流れ込む力を受け取りそれがどういふものかを認識し、

「なるほど、これは嗤える。滑稽だよ貴様らは、喝采してやろうその生き様を」

デスサイズを振るった。

「う、おおおおおおおおおおおおおお!!」

回避行動を取った。それでも追いつかず、

右腕が消し飛んだ。

それだけでなく軌道上数千メートルが吹き飛ぶ。

「ぐ、ぎ、あ……い……」

右腕は文字通り吹き飛んだ瞬間に腐炎に包まれて消滅する。そしてそれだけで当然終わらない。残った体にも無価値の炎が残されていて今にもカイトを燃やし尽くそうとしている。もしカイトの特性が無ければ一瞬で消え去っていた。それでも生まれた猶予はたった数秒でしかない。数秒後には全身を、魂までを燃やし尽くす。

腕をなくし、胸の辺りに足までも腐り燃えていく。立つことはもうできるはずもなく崩れ落ち、

「あ……」

落ちる。崩落した塔を灰色狼は堕ちていく。そうして瞳から光を失い、数秒で死ぬしかない灰色狼へ魔刃は言う。

「貴様も男ならば血反吐履いて結果を出してみろ」

第四十章 消えぬ絆

カイト・クオルトリーズの生まれはくそつたれだった。

とある管理内世界で生まれた彼だったが、管理世界でもピンキリだ。クラナガンのように極めて発展した地もあれば魔法文化も科学文化も地球の中世欧州レベルのところもある。治安も世界によって良し悪しの差はあるし、世界内でも地域による。

カイトが育ったのはそれらでも最底辺の世界だった。

スラム、なんて生易しい場所ではない。行き場所を失ったどうしようもない者たちが集まっているのだ。無法地帯なのは当然で、ろくでなしばかり集まるのも必然だった。そうして集まったくそつたれたちがくそみたいな生活を送っているのだからくそみたいな町が生まれるのは極々真つ当だったろう。

そこにあるのは『弱肉強食』の四文字。

弱い物から死んでいく。ある程度の魔法文化は存在していたから、例え年少者でも魔法や魔力、レアスキルの創意工夫で力を得ていた。人が死ぬのが当たり前。人を殺すのも当たり前。そうやって大人から子供まで争いの中にあつたからこれもまた必然的に曲者揃いだ。

戦闘能力・能容姿精神、誰もがそれぞれ突出した個我を持った狂人ばかりの街が生まれた。

言うまでもなくそんな街に常人が住みつけるわけでもなく、行き場を失った者や自殺志願以外からは完全に隔離された世界が生まれた。

管理局でも手を焼くような場所だったが、基本的に彼らは外界のことに興味などなく放つておいてもらえれば管理局と争うこともなかった。それだから何時しか干渉となつて、その街は世界から隔離されていったのだ。

そんな街でカイトは生まれ育つた。

父親は彼が生まれた時は既に死んでいた。残されたのは生活に困るか困らないか微妙な程度の金と遺伝の黒と白の斑髪、それに父が使っていた魔力伝導率の高い双刃銃だけだった。

母はいたが病弱でカイトが物心ついて少ししてから死んだ。病弱というにはあまりにも快活で、芯の強い女だった。それでも死んだ。

そうして順当にカイトは天涯孤獨の身となった。

悲しくなかつたといえれば嘘になる。このくそつたれの街の中で、死にゆく身でありながらそれらを笑い飛ばせる母は純粹に好きだったし、顔も知らない父親だつて別に恨みがあつたわけでもない。それでも感傷に浸つて生きていけるような世界ではなかつた。

この時カイトは八歳。

時空管理局でも最年少の類だった高町なのはたちよりもなお幼い。いや、殺戮の場自体には物心ついた瞬間からいたのだから比べることが間違っているだろう。

そうしてカイト・クオルトリーズのくそつたれな生は続いていく。

無論、簡単に生きていけたわけでもない。例えどれだけ小さいころから子守唄代わりに『灰色狼』と呼ばれていた父の殺戮ならぬ食い散らかしの技巧を知り、両親譲りの糞度胸があつて、少なくとも魔力があつても。それだけでは生きていくのは難しい。

身体に銃弾をばらまかれたことがある。

腕がぶつ飛んだことがある。

致死性の猛毒によって体を蝕まれたことがある。

数百メートルの高さから叩き落とされたことがある。

超一流の達人と戦うことになったことがある。

一歩間違えれば即座に死ぬということがあまりにも当然のようであった。

——それでも彼は死ななかつた。

体をぶち抜いた銃弾は偶然大事な器官から外れていた。

ぶつ飛んだ腕は腕を吹き飛ばした奴を殺して偶然通りかかった医者に繋げてもらつた。

致死性の猛毒は偶然近くにあったいくつかの薬草を飲み込んだら死ぬことはなかった。

数百メートルから落ちたら偶然上昇気流が発生し、尚且つ高層建築の壁を何度も蹴りつけることで一命をとりとめた。

超一流の達人と相対したときは偶然現れた別の達人に仕向けることができた。

そういうことがなんどもあった。

どころかただなんとなく、勘で動いたらそれが生存に繋がったということが当然のようであったのだ。

それに疑問を持ちながら、それでも確たる理由もない以上どうしようもなく、その勘で生き続けた。

それが何だったのかを知るのかは彼が天涯孤独の身となつてから凡そ四年後のこと。

彼が隔離された街の中でも屈指の実力者となり『灰色狼』などと呼ばれ始めたあたりのこと。興味本位で街から出て、

カイト・クオルトリーズは己の真実の断片を知ることになるのだ。

新月。

翡翠。

水銀。

■

■——そして自滅因子。

種明かしをしてしまえば自分の人生は至極わかりやすくできていて、実に起伏に富んでいた。ライトノベルにでもすれば過去に影がある系主人公という中二病なのがすぐに出来る。

そんなものが彼の人生なのだ。

勘でも運でも偶然でも必然でもない。

カイト・クオルトリーズがこれまで死ななかつたのは運命なのだ。彼がああ街で死ぬことなどあつてはならないし、在りえない。死ぬことすら許されないのだ。死にたくても死ねない。自分が死ぬべき時はもつと別にあるという確固たる確信があるのだ。

そこから彼の地獄は始まる。翡翠だけではなく水銀ともであつた為に既知感の呪いを受けた。脳裏に吹き荒れる砂嵐、ありとあらゆるものへのデジャブ。用意され、繰り返し続ける恐怖劇。神様の操り人形マリオネット。

カイトは■に最も近い存在であるからこそ決して舞台から降ろされることはない。永劫を回帰してもそれらの呪いからは決して逃げられないのだ。

だからこそ彼は欲しただ。

カイト自身こそが求める魂の唯一無二を。

かつてと変わらず誰よりも神の玩具であるという自覚があつたからこそ。かけがえない、なによりも尊い刹那を求めた。それ以外がどうなつてもいいと思えるくらいの閃光を欲したのだ。

そして見つけた。

彼女はかつてとは随分様変わりしたが、それでも■■■に近しいことには変わりない。彼女もまた歌劇から逃れられない。

自分の宝石を後生大事に抱えていく翡翠も。

未練たらしくかつてへ回帰し続ける水銀も。

彼らは憤怒に塗れているからこそ決して諦めない。もとよりそういう次元の話ではないのだ。アレらは悲願を達成するまでその在り方を絶対に変えない。

未だ巡り会えぬアイツらは言うまでもない。

だから解っていないんだ。

今のまま行つたつてどうしようもない。どいつもこいつも先を見ていないんだ。そういうところばつかり変わっていない。大事なものを愛でてるばかり。

そうじゃないだろうと思うのだ。

だからここで終わるわけにはいかない。

落下していく身は今にも消滅寸前だ。右腕と下肢は腐滅している。特に右腕と共に

消え去った右の双刃銃の消滅によるダメージは甚大だ。今の自分は文字通り魂を半分滅ぼされている。放っておけば消滅は当然だ。聖遺物の使徒は聖遺物を破壊されることよって死ぬ。それは変わらない法則。そして広がりゆく黒炎はすぐにでももう片方の双刃銃を滅ぼし、頭部に至って塵ひとつ残さない。

なまじこの状態をどうにかしてもナハトそのものへの対抗策がない。

頭上のナハトの背に闇の翼が生まれる。それ自体が神気の塊であり、一度羽ばたけば周囲に爆風と破壊を生む。比喻でもなんでもなく彼が羽ばたいただけで地上は完全に滅びるだろう。

いや、それ以上にあの翼が生み出されたということはナハト——ベリアルが完全に接続しているということ。

それはすなわち完全にこの世の法則から外れ神格の領域へと至ったのだ。カイトを一蹴に伏したのは所詮は発動時の余波でしかない。

これこそがベリアルダストエンジェルの真の姿。闇の翼を担う反天使。無頼なる罪惡の王。どうしたって、カイト単体ではベリアルに対抗しきれない。

例えばカイトが魔人としてはほぼ極領域だとしても絶対に勝てはしない。神格の壁とはそれほどに厳然であり明確なのだ。

それでも挑まなければならない。

それでも勝たなければならない。

「俺が狙ってるのは何時だつて勝ちだ」

だからこそ——

「ああ……デジャブるなあ」

あらゆる感覚に既知感が襲い、

——推奨BGM：Gregorio——

『アセトアミノフェン アルガトロバン アレビアチン エビリファイ クラビット

クラリシッド グルコバイ』

カイトの口から紡がれるはずのない言葉が発せられた。

「なに……!?!」

それを聞いた瞬間にナハトに驚愕が生まれた。今展開したばかりの『式』の構成が崩れていたので。腐滅の黒炎が揺らいでいく。神すら殺すことのできる魔刃の真価が砂上の楼閣の如く儂く消え去っていく。

『ザイロリック ジエイゾロフト セフゾン テオドール テガフルル テグレット
ル

デパス デパケン トレドミン ニューロタン ノルバスク』

消え去っていた肉体が再生する。消滅したはずの双刃銃もまた。それまでとなんら

遜色なく、寧ろそれまでを圧倒的に超過する魔力を以て。

『レンドルミン リピトール リウマトレック エリテマトーデス

ファルマナント ヘパタイティス パルマナリー ファイブロシス オートイ
ミューン デイズイーズ

アクワイアド インミューノー デフィシエンシー シンドローム』

消える、滅びる、無くなっていく。ベリアル『式』が根こそぎ消滅していく。まるで『式』そのものが自壊するような病毒にも侵されたように。

在りえない。

神格は神格でなければ殺せない。ナハトは厳密に言えば神格ではないとはいえ強度は同格であるからその法則は当てはまる。それにも関わらずナハトの神威が揺らいでいるのが現実だ。

ならば——同格が現れたのか。否だ。魔群も魔鏡も適正の合わない存在に無理やり型にはめられているからこそ、自分のように門を開くことはできない。また水銀と翡翠も不干渉のはずだ。そうだから、ナハトはカイトと戦ったのだ。

ならばなに原因あるのか。

問うまでもない。

『マリグナント・チューマー・アポトーシスツッ!!』

「貴様かぁー!!」

復活したカイトへと、いや彼の魂の奥底に存在する彼へと叫ぶ。同時、地上本部、そして存在していたすべての黒炎が消滅、否自壊する。それだけではない。ありとあらゆる魔術、魔法、レアスキル。およそ異能に分類される全てがその宣言と共に消え去った。

「くは、ははは！ ははははははははは！ 久しいなあ——兄弟！」

「誰が兄弟だ、ふざけやがって。俺の兄弟はハーレム気質な兄貴だけだ」

「魂の系譜というものだ。ああ本当に、お前たちは相変わらずだよ」

全身に血に塗れながらそれでも五体満足で健在であるカイトにナハトは嗤う。先の宣言と共に地上全ての腐炎を消え去った病毒の覇道は最早ない。

それは■■■と同格以下を完全に自壊させるとはいえ今の彼らでは継続展開は難しい。だからこそ、放っておけば永遠に消えない無価値の炎を完全に消し飛ばしたのだ。

——よって状況は振出に戻る。

異能殺しの力を求道にて発現するカイトと黒翼を担い無価値の炎をたぎらせるナハト。

強度に隔絶の違いはあれど、構図は同じだ。ナハトの『式』は大陸に亀裂を入れるほどの威力があり、カイトは最早それらを問答無用で消滅させる。

だからこそ構図は全く同じでも——結果は決まっている。

『ヘメンエタン・エルアティ・ティエイプ・アジア・ハイン・テウ・ミノセル・アカドン

ヴァイヴァー・エイエ・エクセ・エルアー・ハイヴァー・カヴァフオット』

ナハトの詠唱と共にデスサイスに膨大な量の腐炎が集う。それは瞬く間に巨大化し剣というにはおこがましいほどに長大な柱となる。天を貫く黒い柱、先端部分が果てしなく遠く肉眼では全く見えない。神の炎すらも両断する腐敗の概念。

「——腐滅しろ」

その一言に振り下ろされ、

「魔劍——青の断絶」

カイトは言葉と共に腕を振り上げ引き金を引く。右の銃口から放たれたのは青い弾丸。迫る大剣の前ではあまりにもか弱い。

上昇する青の弾丸と振り下ろされる腐剣。それらが激突し、

弾丸が巨大な膜となって黒炎の悉くを消滅させた。

「は——！」

巨大といっても腐剣からみればあまりにも小さい。精々が十数メートルという程度だ。

それにも関わらず炎剣を構成していた全ての無価値の炎は青い膜に吸収され消滅す

る。それにナハトは構わない。カイトもまた当然ように。

そう、今のナハトとカイトは先ほどと実力差が逆転している。

ただの魔人であつたカイトには、求道流出並のナハトには絶対に叶わない。

それでも今は違うのだ。

共に接続している存在がいる。ナハトは門を開けることでその力を得て完結した。

そしてカイト——■■■■——は■■■■何よりも愛しい宝石として愛されている。

その差異。だからこそそれは決定的だ。

自滅因子である以上カイトの上限値は■■■■依存であるからそれ以下のナハトにはどうしたつて覆せない。だからカイトは笑みを浮かべず。ナハトは笑う。

『ああ 正義と不法にどんな関わりがあるだろう

光と闇に何の繋がりがあるだろう

彼と我に如何なる調和が許されるのか

是総て否

無価値なり——

相容れず反発し侵し合い喰らい合う殺し合う以外に途などない

嗚呼汝

我が半身よ

泣けるものなら泣いてやりたい

愛があるなら愛してやりたい』

自らの敗北が決定しているというのにも関わらずナハトに迷いはない。まるでこうなることを初めから狙っていたように。詠唱と共に発せられたのは殺意だ。殺すという念。死ぬという命令。ただひたすらに収斂された究極系。それがナハトの全身から放たれる。

『されどまた 是も否——絶対の否定こそが我が本質である故に

この身に涙などなく

この魂に愛など無い

彼我の溝は絶望なれば 絶死をもって告げるまで

来たれ獣・我が爪牙よ (S A M E C H ・ V A U ・ R E S C H ・ T A U)』

それは究極の霊子兵器。ただの人間ならばにらまれただけで粉微塵であり、カイトの足元と背後、視界に入ったというだけで無機物であるはずの建物、そしてさらには空間さえも腐っていく。そしてそれはカイトへ迫り、

「魔劍——赤の光波」
イニシャルイズ デリリーター

右の銃口からぶっ放された赤い閃光に喰い散らかされる。それはいわゆる収束砲。それまでのナハトとカイトの戦闘、さらには地上で行われていた全ての戦闘で消費され

空气中に漂っていた魔力、さらには先の異能殺しで消え去った異能も、青の断絶で消された腐剣の神気も余すことなく内包した極光。掛け値なしに神格すらも滅ぼすことのできる赤き破壊。

それは殺意の霊子兵器を粉碎し、

「――」

ナハトの黒炎を全て吹き飛ばし、さらには亀裂を入れ、黒翼と両腕両足を完全に粉碎する。奇妙な喝采音と共に碎け散った己に苦笑し、

「悪くない傲慢だ。お前が決めろ、そういう役割のが貴様の役割のはずだろう」

「ああ言われなくてもやってやるよ。あばよデーモン、地獄でポップコーン喰いながら観戦してな」

言葉と共に左の銃口から先と同じ分だけの極光が放たれナハトは完全に消滅した。

第四十一章 曇りの中の誓い

公開意見陳述会が始まる直前、フェイトはヴィヴィオを載せてミッド市街地を車で走っていた。先日の戦闘での経過観察の為だった。あの時の傷は不自然なまで急速で回復したが、不自然過ぎるからと退院した後も過度な訓練や勤務は控えて病院通いを続けていた。

異常はないが——ないということが異常だろうとフェイトは感じていた。

「けれど現実的日常生活には問題ない。少なくとも車を運転するくらいには。その運転もバルディッシュによる自律走行で病院から六課隊舎までの道のりを任せきりにしている。だから運転手と言ってもフェイトに負担は少なく、

「フェイトママもなのはママも歌が上手だね！」

「ふふ、ありがとうヴィヴィオ」

車の中でヴィヴィオに歌を聞かせていた。

歌は密かなフェイトの特技だ。本格的に習ったわけでもないし、特にこだわりがあるわけでもないが鼻歌程度ならばよく歌うことがある。エリオやキャロが小さかった頃

は子守唄としてよく歌っていた。だから彼女にも同じように。自分を母と慕ってくれる彼女にもまたフェイトは歌を聞かせていた。朝から病院で待たせていたので疲れていると思っただからだっただけけれど、逆にヴィヴィオはテンションを上げてしまったらしい。

「どーやったらママたちみたいにお歌が上手になれるの？」

「あはは、どうか。自分で意識したことはないけど……やっぱり聞いてくれる人のことを想うことかな」

「聞いてくれる人？」

「そう。今はヴィヴィオだね」

「ありがとうフェイトママ！」

「くすつ、どういたしまして」

元気だなあと思う。保護した直後はかなり警戒されていたけれどここ最近はかなり打ち解けていた。人造魔導士という生まれ故に他者との繋がりのない彼女をなののが保護責任者となり自分は後見人になった。それでまさかママと呼ばれることになるとは思わなかったけれど。

子供が好きなフェイトからすれば大歓迎だ。

母の愛というものには複雑な想いがあっても。

ちなみに父親梓は絶対的にユーノであり、なのはどちらが妻梓を担うかは未だに決まっていない。

それはまあそのうち決めるとして。

『サー、まもなく始まります』

『ん。ありがとうバルディツシュ』

念話で愛機が教えてくれたのは今日行われる公開意見陳述会の開始。本来ならばフェイトも警備に参加するべきだったがシャマルになのは共々禁止された。なのはは隊舎にて待機し、自分はこうして検査だ。現場にいないというのは落ち着かないがそれでも、こうしてヴィヴィオとの時間があるというのは素直に嬉しい。少なくとも戦闘行為を禁じられたフェイトに今できることは現場に出ている仲間の無事を願うだけだ。

「フェイトママ！ 他の歌も歌って！」

「うん、いいよ」

頷いて、何を歌うかを考える。レパトリィはそれほど多いわけではない。ここ最近のミッドの音楽事情は仕事の忙しさのあまりについていけないので、子供時代に地球で見たテレビ番組の主題歌等くらいが主なものだ。数年前の記憶を掘り起し、ヴィヴィオに利かせるのがなにかいいかと選んで、

『S i r r i ！』

「!？」

車が爆散した。



『Protection&Holding Net』

突然爆発し、運転席から投げ出されたフェイトを護るように反応したのはバルディツシュだった。爆心から生まれた炎や衝撃を自己判断によつて発動した防御魔法と衝撃吸収魔法。防御魔法のほうは衝撃を受け止めた瞬間に亀裂が入り、吹き飛ばされながら砕けていったがフェイト自身へのダメージは免れていた。吹き飛びコンクリートの道路に勢いよく激突しそうになったもののその衝撃も魔力の網が緩和した。幾らかの火傷があつたが問題があるレベルではない。

「っ……」

理解が追い付かず、うつぶせに倒れていた体を起こして見た愛車は炎に包まれていた。咄嗟に口から洩れた絶叫は後部座席にいたはずの少女の名前。

「ヴィヴィオツツ……!」

「安心しなよ、彼女は無事さ」

真横から声があつた。

振り向き、

「——!?!」

「邪魔、捕縛する」

フェイトの身体を光の鎖が巻き付いた。バインドのようであり——違う。自動でバルディツシユがプログラムの読み取りと破壊を行おうとしたが結果は不可^{エラー}。現時点でも最高水準を誇るインテリジェントデバイスである彼ですら僅かすら読み取りができない束縛。

そして身動き取れない体の中で唯一動く頭を上げ、

「貴方は……!?!」

「初めましてフェイト・T・ハラウン執務官。妹が世話になっています」

赤いコートの茶髪の男。フードから覗く顔はティアナによく似ている。ティーダ・ランスター。死んだはずのティアナの兄。自分がレヴィに蹂躪されていた時にティアナに銃口を向けていた男だ。そしてそれだけではない。

「……ティーダ」

見えはなしはない。けれど気配はある。無視できない異質な、レヴィのような圧倒的な

存在感。背後にそんな絶対的な存在がいると無理やり悟らされる。声からすれば幼い少女だが感情が欠片も感じられず不気味なことこの上ない。おそらく今自分を取り押さえているのはこの少女の力。レヴィたちのそれとは別の感覚ではあるが、今の自分に対象不可能なのは変わらない。

「早く終わらせよう」

「解ってるよ。というか、いちいち車爆発させる必要あったのかい？　六課についてからナンバーズの娘たちと一緒に捕まえれば」

「ナハトに巻き込まれるのは御免」

「ごもつとも。じゃあどうぞ」

「ん」

背後少女が頷き風切り音。腕を振った音だった。直後に眼前にて炎上していた車の炎が晴れ、

虹色を纏うヴィヴィオが無傷で気を失っていた。

「――」

理解が追い付かない。あれだけの爆散。勢いよく炎が上がっていたのにも関わらずヴィヴィオも、さらには彼女の周囲すらも損傷は一つもない。在りえないと思いつつも原因は明らかだ。

「虹色の、魔力光……？」

——虹色。

そのの意味がなんであるかはフェイトも知っている。だが過った考えを理性は否定する。あるはずがない。碌に知識もない自分がふと思ったことなどあるはずがない。

ああ、だから自分が考えたことは夢物語で——

「流石の血、ということかな」

「——ッ」

乖離した意識はテイーダの眩きで引き戻された。彼の言葉の意味は理解できない。けれど彼らの目標がヴィヴィオであることは言うまでもなかった。

「させる、訳が……！」

『Sirr!』

バルディツシュの制止の声は聞こえなかった。彼が自分の身体のことを考えてくれていることは解っていた。けれどそんなことはどうでもいい。今使わないでいつ使うというのか。誰かを護るために、誰かの力になりたいからこそフェイトは魔法を覚えた。

プレシアの悲願に応えるために。

リニスの教えをまっとうするために。

なのはやユーノと出会い力を合わせるために。

そして今では——教え子や子供のような子らのために。

だから己を母と呼ぶ少女の助けられずして自分が存在する意味がどこにあるというのだ。

鎖は砕けない。自分の力では全く足りない。

「——」

だから手を伸ばす。負荷を省みずにリンカーコアを稼働させて魔力を精製する。リミッターは先日の一件から作用せず、生み出せる魔力は常に不安定だった。それはなのも同じでありだからこそその謹慎だ。精製する魔力の大小差が激しければそれだけ肉体への負荷が大きいのだから。

けれど今そんなことはどうでもいいことだ。

自分の身を犠牲にする程度でヴィヴィオを救えるのならそれでいい。

だから——、

「はい、ごめんねー。今君はお呼びじゃない」

決死の覚悟はしかし頭に走った衝撃で霧散する。

「——」

彼女が覚えていたのはそこまでだった。

●
それがあの日のフェイト・T・ハラオウンの総てだった。

「……無様な」

目が覚めた時なにもかも終わっていた。

自分は病院のベッドの上。そして聞かされた公開意見陳述会の顛末。崩落した地上本部とクラナガン都市部。多大量の死者行方不明者。単に死んだり行方しれずなだけではなく、四肢の欠損や後遺症を濃く残した者も数えきれないほどいる。

口伝えに聞いただけで、実際に記録を見ればもつと細かく惨劇の事情が知ることができらるだろう。

機動六課もまた。

隊舎の防衛を担ったシャマルやザファイラの重体と戦闘機人と交戦したフォワード陣の軽傷。

そして、

カイト・S・クオルトリーズの戦闘^M中行方不明^A。

地上本部の屋上にてナハトという名の魔人と戦い始めたところまでは解っている。けれどそこまで。屋上部をぶち抜いてから先は完全に記録に残っていない。結果的に見れば司法の塔が崩れ落ち、腐滅の炎が街を蹂躪した。不可解なのは黒炎が街に生じた直後に消滅したこと。いや黒炎だけでなく、一切の魔力魔法レアスキルが一瞬使用不可能になった。広範囲における魔力消失現象。あのタイミングで自然現象なわけがなく、人為的なものであるはずだが原因は一切解明されていない。

未曾有の災害とも言える被害である、最悪なことに主犯すら解っていないのだ。テレビを付ければ管理局へのバッシングが嫌になるほど見れる。

「……」

けれど今のフェイトにはそんなことはどうでもいいことだった。

勿論話を聞いた時は驚いたし、胸を痛めた。けれどフェイトにとってどうしようもなく胸を締め付けたのは、

「——ヴィヴィオ」

護れなかった少女のことに他ならない。

死んでもいいと思った。彼女を護れるならば自分の命すら構わなかった。発した魔力は生涯において最大規模。

それにも関わらずあんな軽い言葉と共に自分の決死は砕かれた。

「……」

壁に拳を叩き付ける。

病院の屋上。周囲に人の気配はない。あの時殴られたのか銃で撃たれたのかは定かではないが、頭部に傷があった。下手をすれば頭部破砕で死んでもおかしくなかったが今のフェイトではあれくらいでは死なない。

生かさされただけだろうけど。

護れず。

殺されもされず。

敵として相手にされることもなかった。

「無様だ」

繰り返す。そうとしか言いようがない。それ以外にあの時の自分を表す言葉は存在しなかった。

叩き付けた拳に滲んでいたはずの血はいつの間にか止まっていた。いや、血が止まったどころではなく傷が消え去っていた。

「……」

そのの意味は——最早語るまでもない。フェイトだつて自己の改変に気付いている。既にエリオアやティアナたちに見られていたものだし、自分やなのは表面化していな

かつただけで廃都市での戦いのからそうだった。

目を背けていただけで、自覚すればあとは一瞬だ。

決していいものではない、というより都合が良すぎる。これだけの力量の上昇など本来あるはずがないのだ。

それでも、

「私は」

間に合わなかった。

「だから、何に頼っても——」

今度こそ。

「手を届かせてみせる」

それがフェイト・T・ハラオウンの誓いだった。